

# 久宝寺遺跡第34次発掘調査報告書

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会



# 久宝寺遺跡第34次発掘調査報告書

2007年

財団法人 八尾市文化財調査研究会

## はしがき

今回報告書を刊行するに至った久宝寺遺跡は、大阪府八尾市南西部の久宝寺、西久宝寺、南久宝寺、北久宝寺、亀井、北亀井、渋川を中心に広がる縄文時代後期～近世の複合遺跡であります。

この久宝寺遺跡の南部では、遺跡を横断するかたちで昭和59年まで「旧国鉄竜華操車場」が占地していました。

同跡地については、昭和61年7月に八尾市から「竜華操車場跡地の基本構想」が発表され再開発が具体化したこと、昭和63年と平成8年に八尾市教育委員会、平成7年に(財)大阪府文化財調査研究センターにより遺構確認調査が実施されています。

これらの遺構確認調査を経て平成9～17年度にかけて、当調査研究会と大阪府文化財センターにより道路部分を中心とした基盤整備ならびに主要建物を対象とした発掘調査が継続的に実施され、縄文時代晩期～近代に至る遺構・遺物が検出される等の多大な調査成果が得られています。

なかでも、古墳時代初頭から古墳時代前期においては、集落を構成する居住域・生産域・墓域の配置が明確にされており、当該時期の集落形成を考えるうえで貴重な資料を提供しています。また、約80基の墓を検出した久宝寺墳墓群のなかで割竹形木棺を持つ「久宝寺1号墳」の存在は、中河内地域における古墳文化の受容時期を考えるうえで示唆に富む内容を提供しています。

今回、平成12年度に実施しました第34次調査の整理が完了しましたので、報告書として刊行する運びとなりました。第34次調査地は、久宝寺墳墓群の南に隣接する地点にあたります。調査では、弥生時代末期から古墳時代前期前半の居住域を構成した遺構が数多く検出されており、久宝寺墳墓群の形成に関わりを持つ集団の居住域であったことが明らかとなりました。

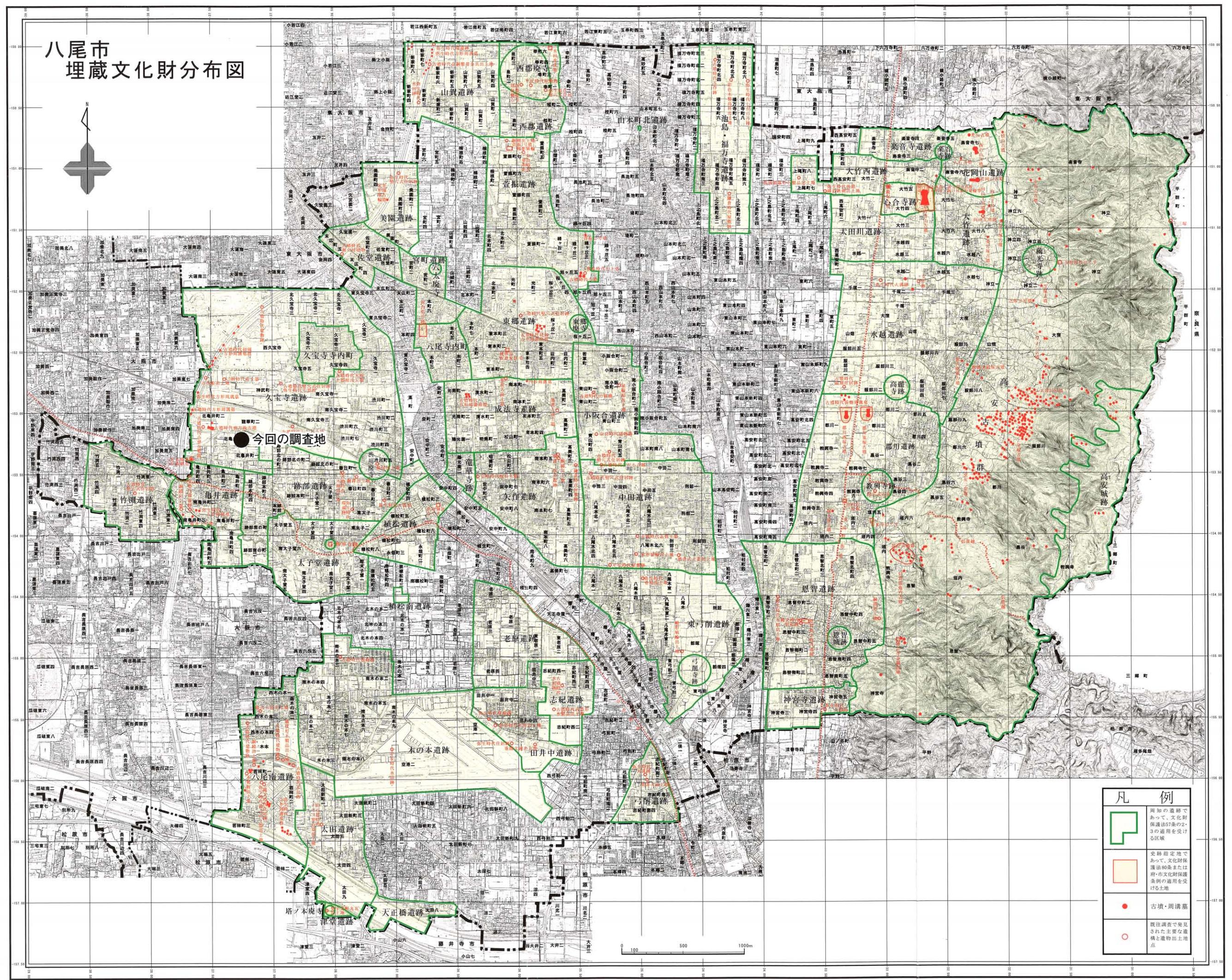
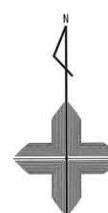
本書が地域の歴史を解明していく資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護・普及のため広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、一連の発掘調査に対して御協力いただきました関係諸機関の皆様に深謝すると共に、発掘調査や整理作業に専念された多くの方々に心から厚く御礼申し上げます。

平成19年3月

財団法人 八尾市文化財調査研究会  
理事長 岩崎健二

# 八尾市 埋蔵文化財分布図



## 例　　言

1. 本書は、大阪府八尾市北龜井町3丁目41で実施した工場建設に伴う発掘調査報告書である。
1. 本書で報告する久宝寺遺跡第34次調査(KH2000-34)の発掘調査業務は、八尾市教育委員会の埋蔵文化財調査指示書に基づき、財団法人八尾市文化財調査研究会がシャープ(株)から委託を受けて実施したものである。
1. 現地調査は平成12年7月18日～11月25日(実働63日)にかけて清　斎(現八尾市教育委員会)が担当した。調査面積は1501m<sup>2</sup>である。
1. 現地調査においては、荒川和哉・飯塚直世・伊藤静江・市森千恵子・加茂靖通・國津れいこ・奥村　崇・垣内洋平・川村一吉・加藤邦枝・竹田貴子・田島宣子・永井律子・村井俊子・村田知子・横山妙子・吉川一栄が参加した。
1. 整理業務は、随時実施し平成18年12月に完了した。
1. 本書作成に関わる業務は、遺物実測－市森・伊藤・岩沢玲子・加藤・北原清子・竹田・田島・永井・中村百合・村井・村田・山内千恵子・吉川・若林久美子、遺構・遺物図面レイアウト－原田昌則、遺構・遺物図面トレース－北原・山内、遺物写真撮影－垣内・原田、遺物写真図版レイアウト－徳谷尚子が行った。
1. 本書の執筆は、調査終了報告書および調査担当者との検討を基にして原田昌則が行ったが、第2節基本層序は荒川和哉、第3章まとめは清　斎が行った。

## 凡　　例

1. 本書掲載の地図は、大阪府八尾市発行の1/2500の地形図(昭和61年測量・平成6年修正・平成8年7月編纂)、八尾市教育委員会発行の『八尾市埋蔵文化財分布図』(平成18年6月改定版)を使用した。
1. 本書で用いた標高の基準はT.P.(東京湾標準潮位)である。
1. 本書で用いた方位は、国土座標第VI系〔日本測地系〕の座標北である。
1. 土色は、小山正忠・竹原秀雄編1997年後期版『新版　標準土色帖』農林水産省農林水産技術会議事務局　監修・財団法人日本色彩研究所　色票監修に準拠した。
1. 遺構は下記の略号で示した。  
    豊穴住居－S I　　掘立柱建物－S B　　井戸－S E　　土坑－S K　　溝－S D  
    小穴・柱穴－S P　　落ち込み－S O　　土器集積－S W　　自然河川－N R
1. 遺構図面の縮尺には、平面全図1/20・1/40・1/50・1/100・1/1000、断面全図1/20・1/400がある。
1. 遺物図面の縮尺は、一部の1/8を除き1/4に統一した。断面については、弥生土器・土師器は白、石器・土製品は斜線を用いた。
1. 本書で記述した古墳時代初頭～前期の土器形式と時期概念は、古墳時代初頭前半・後半(庄内

式－古相・新相)、古墳時代前期前半～後半(布留式－古相・中相・新相)に区別した。当該期の土器形式分類および土器編年は(財)八尾市文化財調査研究会報告37(原田1993)に従った。

1. 土器の形式・編年および検出遺構で参考とした文献については、p 83に提示した。

## 本文目次

### はしがき

### 八尾市埋蔵文化財分布図

### 例言

### 凡例

第1章 調査に至る経過 .....	(原田) 1
第2章 調査概要.....	7
第1節 調査の方法と経過 .....	(原田) 7
第2節 基本層序.....	(荒川) 7
第3節 検出遺構と出土遺物.....	(原田)13
1) 各調査区の概要.....	(〃)13
第3章 まとめ.....	(道)84

## 挿図目次

第1図 調査地位置図.....	1
第2図 調査区設定図および地区割図.....	2
第3図 調査地周辺の発掘調査位置図.....	3
第4図 第4区北壁断面図.....	9
第5図 検出遺構平面図.....	11-12
第6図 S K214平断面図.....	14
第7図 S K214出土遺物実測図.....	14
第8図 S K216平断面図.....	15
第9図 S K216出土遺物実測図.....	15
第10図 S K218平断面図.....	16
第11図 S K218出土遺物実測図.....	16
第12図 S D217出土遺物実測図.....	17
第13図 S D217平断面図.....	18
第14図 S K1・202平断面図.....	21
第15図 S K1・202出土遺物実測図－1 .....	22
第16図 S K1・202出土遺物実測図－2 .....	23

第17図	S K301平断面図	24
第18図	S K301出土遺物実測図	25
第19図	S K302出土遺物実測図	26
第20図	S K302平断面図	26
第21図	S K304平断面図	27
第22図	S K304出土遺物実測図	27
第23図	S D304、S D305出土遺物実測図	28
第24図	S K420平断面図	31
第25図	S K420出土遺物実測図	31
第26図	S K424平断面図	32
第27図	S K424出土遺物実測図－1	33
第28図	S K424出土遺物実測図－2	34
第29図	S K501平断面図	37
第30図	S K501出土遺物実測図	38
第31図	S K502平断面図	39
第32図	S K502出土遺物実測図－1	41
第33図	S K502出土遺物実測図－2	42
第34図	S K502出土遺物実測図－3	43
第35図	S K502出土遺物実測図－4	44
第36図	S K502出土遺物実測図－5	45
第37図	S K502出土遺物実測図－6	46
第38図	S K506、S K509出土遺物実測図	47
第39図	S K506平断面図	47
第40図	S K509平断面図	48
第41図	S K510平断面図	48
第42図	S K510出土遺物実測図－1	51
第43図	S K510出土遺物実測図－2	52
第44図	S K510出土遺物実測図－3	53
第45図	S K510出土遺物実測図－4	54
第46図	S K510出土遺物実測図－5	55
第47図	S K518出土遺物実測図	56
第48図	S K519出土遺物実測図	57
第49図	S D501出土遺物実測図	58
第50図	S O501出土遺物実測図	60
第51図	S O501平断面図	60
第52図	S I601平断面図	61
第53図	S I601出土遺物実測図	61
第54図	S K605、S K612、S K617、S K620、S K621平断面図	63

第55図	S K605、S K612、S K617、S K620、S K621出土遺物実測図	64
第56図	S K623出土遺物実測図	65
第57図	S K623、S K625、S D618、S D619平断面図	66
第58図	S D618出土遺物実測図	67
第59図	S I 701平断面図	69
第60図	S I 702平断面図	69
第61図	S I 702出土遺物実測図	70
第62図	S K704、S K709、S K710、S K712平断面図	71
第63図	S K704、S K709、S K710、S K712出土遺物実測図	71
第64図	S K6・701平断面図	73
第65図	S K6・701出土遺物実測図	73
第66図	S D6・701平断面図	75
第67図	S D6・701出土遺物実測図－1	77
第68図	S D6・701出土遺物実測図－2	78
第69図	S D6・701出土遺物実測図－3	79
第70図	S D6・701出土遺物実測図－4	80
第71図	S D6・702、S D6・703出土遺物実測図	82

## 写 真 目 次

写真 1	調査風景	2
写真 2	第3区 S O301検出状況	29
写真 3	第3区 S O302検出状況	29
写真 4	第3区拡張区 S E301検出状況	29
写真 5	第4区 S O403他検出状況	36
写真 6	第5区 S K518検出状況	55
写真 7	第5区 S K519検出状況	57

## 表 目 次

第1表	調査区周辺の発掘調査一覧表	4-6
第2表	第1区 溝(S D)法量表	13
第3表	第2区 土坑(S K)法量表	17
第4表	第2区 溝(S D)法量表	19
第5表	第2区 小穴(S P)法量表	19
第6表	第3区 土坑(S K)法量表	27

第7表	第3区 溝(S D)法量表	28
第8表	第3区 小穴(S P)法量表	28
第9表	第4区 土坑(S K)法量表	35
第10表	第4区 溝(S D)法量表	35
第11表	第4区 小穴(S P)法量表	36
第12表	第4区 落ち込み(S O)法量表	36
第13表	第5区 土坑(S K)法量表	57
第14表	第5区 溝(S D)法量表	59
第15表	第5区 小穴(S P)法量表	59
第16表	第6区 土坑法量表	65
第17表	第6区 溝(S D)法量表	68
第18表	第6区 小穴(S P)法量表	68
第19表	第7区 土坑(S K)法量表	72
第20表	第7区 溝(S D)法量表	72
第21表	第7区 小穴(S P)法量表	72
第22表	第6・7区 土坑(S K)法量表	82

## 図版目次

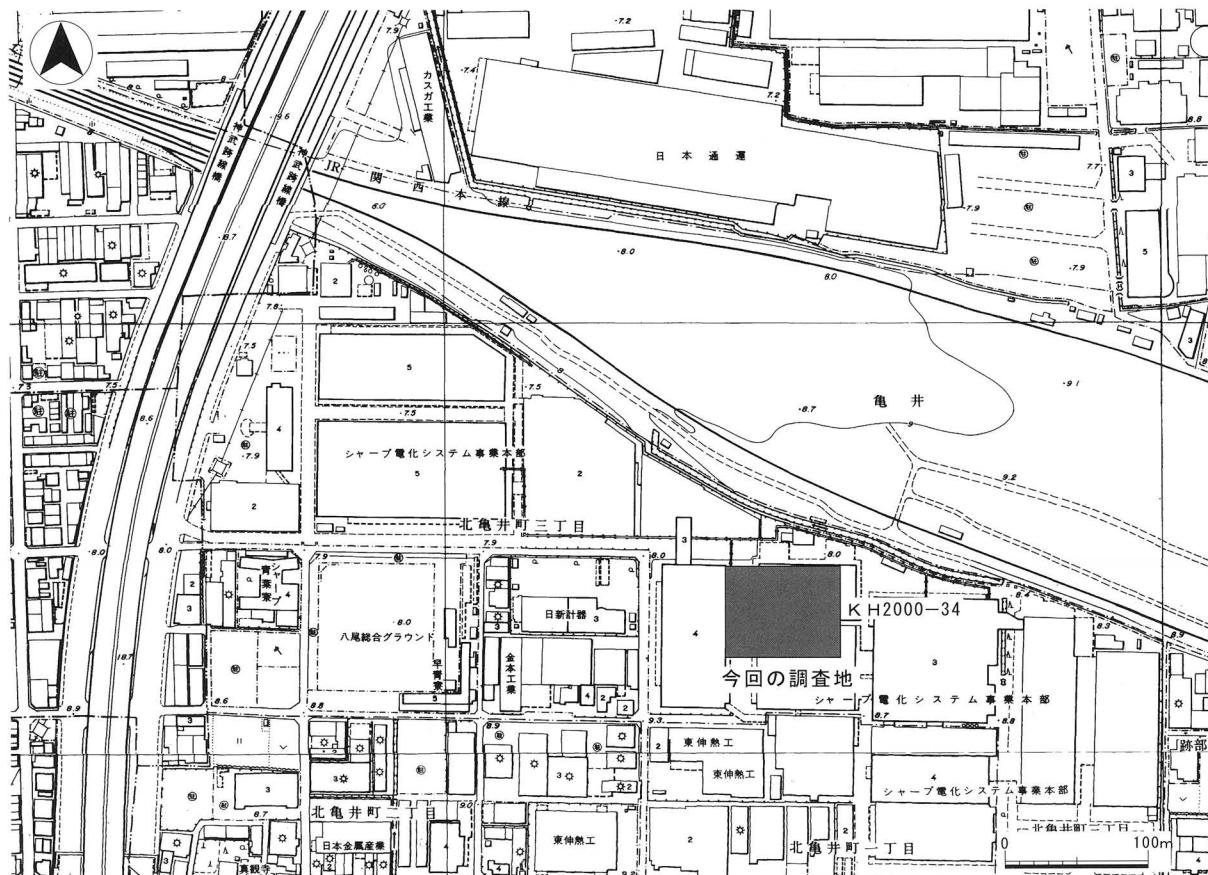
図版一	第1・2区 全景	図版一〇	第4区 S K420遺構検出状況	
図版二	第1・2区 拡張区遺構検出状況		第4区 S K424遺構検出状況	
	第1・2区 S K1・202検出状況	図版一一	第5区 全景	
図版三	第1区 S D112検出状況	図版一二	第5区 西部遺構検出状況	
	第2区 S K216、S K217、S D		第5区 東部遺構検出状況	
	218、S D219検出状況	図版一三	第5区 遺構検出状況	
図版四	第2区 S K216検出状況		第5区 西部遺構検出状況	
	第2区 S D217検出状況	図版一四	第5区 S K501他検出状況	
図版五	第3区 全景		第5区 S K502他検出状況	
図版六	第3区 西部遺構検出状況	図版一五	第5区 S K502検出状況	
	第3区 東部遺構検出状況		第5区 S K502遺物出土状況	
図版七	第3区 S D312～314検出状況	図版一六	第5区 S E501、S K510、S K	
	第3区 S E301、S O303検出状況		511他検出状況	
	況		第5区 S K510、S E501検出状況	
図版八	第4区 全景	図版一七	第6・7区 全景	
図版九	第4区 西部遺構検出状況		図版一八	第6・7区 東部遺構検出状況
	第4区 中央部遺構検出状況			

- 第6・7区 拡張区全景
- 図版一九 第6区 S I 601検出状況  
第7区 S I 701検出状況  
第7区 S I 702検出状況
- 図版二〇 第6区 S K605検出状況  
第6区 S K620検出状況  
第6・7区 S K6・702、S K6・703他検出状況
- 図版二一 第6・7区 上 S D6・701検出状況  
下 同上 断面
- 図版二二 S K214、S K216、S K218、S D217出土遺物
- 図版二三 S D217、S K1・202出土遺物
- 図版二四 S K1・202出土遺物
- 図版二五 S K1・202、S K420、S K424出土遺物
- 図版二六 S K424出土遺物
- 図版二七 S K424、S K501出土遺物
- 図版二八 S K502出土遺物
- 図版二九 S K502出土遺物
- 図版三〇 S K502出土遺物
- 図版三一 S K502出土遺物
- 図版三二 S K502出土遺物
- 図版三三 S K502出土遺物
- 図版三四 S K506、S K509、S K510出土遺物
- 図版三五 S K510出土遺物
- 図版三六 S K510出土遺物
- 図版三七 S K510出土遺物
- 図版三八 S K510出土遺物
- 図版三九 S K518、S K519、S D501、S K620、S K623出土遺物
- 図版四〇 S I 601、S D618、S I 702、S K709出土遺物
- 図版四一 S D6・701出土遺物
- 図版四二 S D6・701出土遺物
- 図版四三 S D6・701出土遺物
- 図版四四 S D6・701出土遺物
- 図版四五 S D6・701、S D6・703出土遺物

# 第1章 調査に至る経過

久宝寺遺跡は八尾市の南西部から、隣接する東大阪市域に広がっている。その範囲は、八尾市久宝寺1～6丁目、西久宝寺、南久宝寺1～3丁目、北久宝寺1～3丁目、神武町、龍華町1・2丁目、北龜井町1～3丁目、渋川町1～7丁目および東大阪市大蓮東5丁目、大蓮南2丁目一帯の東西1.7km、南北1.8kmにおよぶ。隣接する龜井北遺跡と大阪市側の加美遺跡との関連性が指摘されている。

遺跡発見の端緒は1938年の道路工事の際に弥生土器片、土師器片、須恵器片と共に船材等が発見されたことによる。この後、1973年に遺跡を南北に貫く近畿自動車道建設に伴う発掘調査において飛躍的な情報が得られ、縄文時代～近世におよぶ遺跡であることが判明している。遺跡内には、中世に成立した久宝寺寺内町を包蔵しており、縄文時代後期～近世に至る複合遺跡となっている。本調査以降においても、北接する竜華操車場跡地の再開発に伴う発掘調査が当調査研究会ならびに(財)大阪府文化財センターにより継続して実施されている。これら一連の発掘調査では、縄文時代晚期から近世に至る遺構・遺物が随所で多量に検出されている。なかでも、古墳時代初頭から前期の集落については、居住域・生産域・墓域の配置が明確にされており、当該期の集落形成の実体を推定するうえで貴重な資料を提供している。また墓域からは、約80基に及ぶ墳墓が



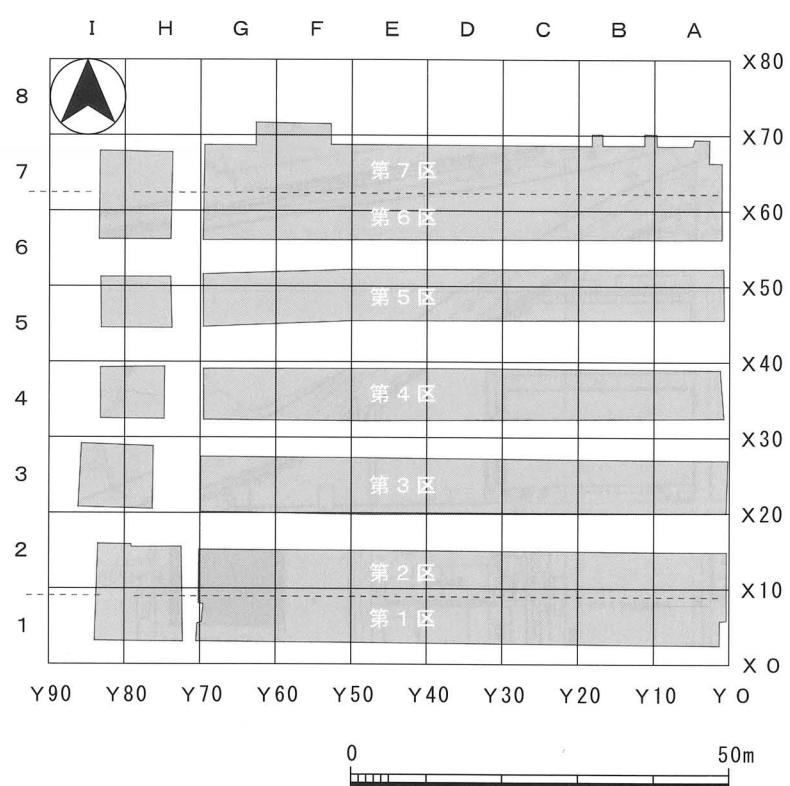
第1図 調査地位置図(S=1/5000)

検出されている。なかでも、割竹形木棺の使用や墳丘四隅の大形直口壺の配置をみた「久宝寺1号墳」の存在は、周溝墓から古墳への墓制変化が中河内地域においては、古墳時代前期前半(布留式古相)にあったことを可視的に示す資料として位置付けられている。なお、久宝寺遺跡周辺の地理・歴史的環境については、既刊の発掘調査報告書を参照していただきたい。

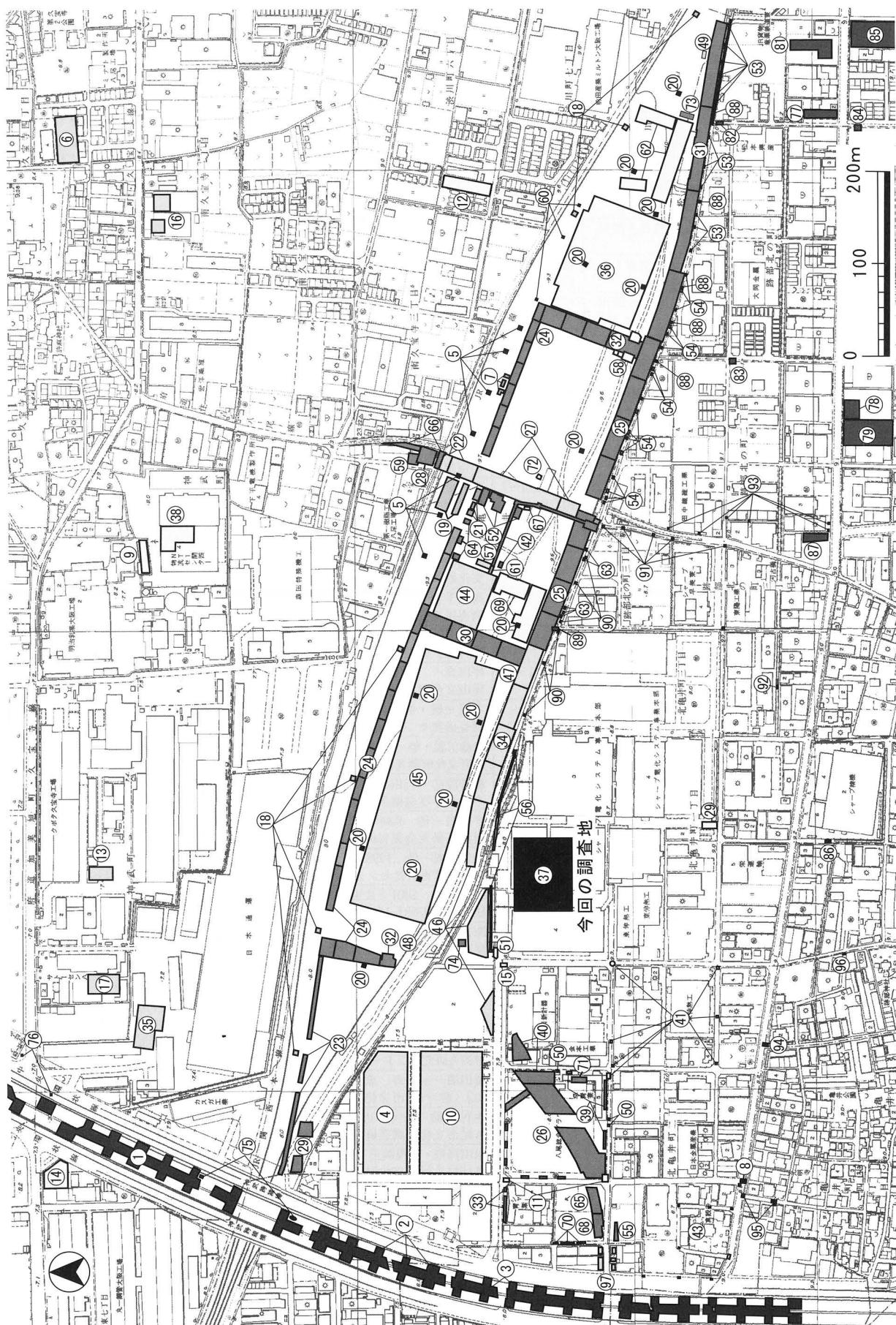
シャープ(株)は八尾市北龜井町3丁目41で八尾工場の一部建て替えを計画し、八尾市教育委員会に文化財保護法に基づく届出を行った。当該地内では、これまでにも建物の建て替えや下水道工事に係る発掘調査が実施されており、古墳時代前期の重圏文鏡や素文鏡が出土した竪穴住居を中心とする居住域や前方後方墳である「久宝寺古墳」を含む墓域が確認されている。市教育委員会では遺構確認調査を行い、地表下1.8~2.1mで古墳時代初頭(庄内式期)~古墳時代前期(布留式期)の遺物を包蔵する地層を確認したため、事業者に対して建て替えによって破壊される部分の約1501m<sup>2</sup>について発掘調査を行うよう指示がなされた。そして、(財)八尾市文化財調査研究会は事業者から委託を受け、八尾市教育委員会、事業者との三者協定を結び発掘調査を実施するに至った。実働調査日数は63日間で、平成12年7月18日~11月25日まで現地調査を実施した。



写真1 調査風景(東から)



第2図 調査区設定図および地区割図( $S=1/1000$ )



第3図 調査地周辺の発掘調査位置図 ( $S=1/6000$ )

第1表 調査地周辺の発掘調査一覧表

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 献
1	久宝寺南 (その2)	府教委 大文セ	神武町	S57/7/5～ S60/6/30	赤木克視・一瀬和夫 1987『久宝寺南(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪府文化財センター
2	亀井北 (その1)	"	大阪市平野区加美南2	S59/3/1～ S61/3/31	小野久隆・服部文章 1985.3『亀井北(その1)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
3	亀井北 (その2)	"	大阪市平野区加美4	S59/3/10～ S61/1/16	奥 和之・山上 弘 1986『亀井北(その2)』大阪府教育委員会・(財)大阪文化財センター
4	久宝寺1次 (KH84-1)	八文研	北亀井3-1	S59/4/2～ 5/26	原田昌則 1993「Ⅱ 久宝寺遺跡第1次調査(KH84-1)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会
5	久宝寺遺跡 (63-269)	市教委	亀井・渋川	S63/8/30、 11/25～12/1	近江俊秀 1989「4. 久宝寺遺跡(63-269)の調査」『八尾市内遺跡昭和63年度発掘調査報告書II』昭和63年度公事業 八尾市文化財報告20』八尾市教育委員会
6	久宝寺3次 (KH88-3)	八文研	久宝寺4	S63/12/5～ 12/28	西村公助 1989「6 久宝寺遺跡(第3次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』(財)八尾市文化財調査報告25』財團法人八尾市文化財調査研究会
7	久宝寺4次 (KH90-4)	"	亀井・渋川	H2/4/2～ 6/12	坪田真一 1993「1 久宝寺遺跡第4次調査(KH90-4)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査報告41』(財)八尾市文化財調査研究会
8	久宝寺5次 (KH90-5)	"	北亀井2	H2/4/15～ 4/22	高萩千秋 1991「1 久宝寺遺跡(KH90-5)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告32』(財)八尾市文化財調査研究会
9	久宝寺6次 (KH90-6)	"	神武町17・ 20～27・38	H2/9/3～ 10/12	原田昌則 1993「3 久宝寺遺跡第6次調査(KH90-6)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査報告37』(財)八尾市文化財調査研究会
10	久宝寺9次 (KH91-9)	"	北亀井3-1 -72	H3/8/1～ 12/3	成海佳子 1992「13. 久宝寺遺跡第9次調査(KH91-9)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
11	久宝寺10次 (KH91-10)	"	北亀井2・3	H3/10/2～ 10/22	原田昌則 1992「1 久宝寺遺跡第10次調査(KH91-10)」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査報告34』(財)八尾市文化財調査研究会
12	久宝寺11次 (KH91-11)	"	渋川町6- 34.35	H3/10/7～ 10/18	西村公助 1992「Ⅱ 久宝寺遺跡第11次調査(KH91-11)」(財)八尾市文化財調査研究会報告34』(財)八尾市文化財調査研究会
13	久宝寺13次 (KH91-13)	"	神武町2-35	H3/12/16～ H4/1/23	西村公助 1992「17. 久宝寺遺跡第13次調査(KH91-13)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
14	久宝寺14次 (KH92-14)	"	神武町190-1	H4/5/26～ 8/10	坪田真一 1993「10. 久宝寺14次調査(KH92-14)」『平成4年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
15	久宝寺16次 (KH93-16)	"	北亀井3	H5/5/31～ 6/8	高萩千秋 1994「IV 久宝寺遺跡第16次調査(KH93-16)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
16	久宝寺17次 (KH93-17)	"	久宝寺1-40	H5/7/19～ 7/30	岡田清一 1997「Ⅱ 久宝寺遺跡(第17次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告55』(財)八尾市文化財調査研究会
17	久宝寺18次 (KH94-18)	"	神武町143～ 146他	H6/9/1～ 10/12	坪田真一 1995「8. 久宝寺遺跡第18次調査(KH94-18)」『平成6年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
18	久宝寺 (95-1～7)	大文研セ	亀井・渋川	H7/5/24～ 12/20	本間元樹・他 1996.3「久宝寺遺跡・竜華地区試掘調査」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第5集』(財)大阪府文化財調査研究センター
19	久宝寺 (95-8・9)	"	亀井	H7/5/23～ 12/20	後藤信義・他 1996.3「久宝寺遺跡・竜華地区(その1)発掘調査報告書」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第6集』(財)大阪府文化財調査研究センター
20	久宝寺 (95-565)	市教委	渋川・亀井	H8/1/9～ 7/12	藤井淳弘・吉田珠巳 1997「7. 久宝寺遺跡(95-565)の調査」『八尾市内遺跡平成8年度発掘調査報告II』八尾市文化財調査報告37』八尾市教育委員会
21	久宝寺20次 (KH96-20)	八文研	渋川	H8/9/24～ 11/14	坪田真一他 2000「Ⅲ 久宝寺遺跡第20次調査(KH96-20)」(財)八尾市文化財調査研究会報告66
22	久宝寺 (96-1・97-1)	大文研セ	渋川	H8/2/1～ H10/3/31	後藤信義・他 1998.3「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書II」『(財)大阪府文化財調査研究センター報告書 第26集』(財)大阪府文化財調査研究センター
23	久宝寺22次 (KH97-22)	八文研	亀井	H9/10/22～ H10/1/13	原田昌則 2001「久宝寺遺跡第22次発掘調査報告書」『(財)八尾市文化財調査研究会報告68』(財)八尾市文化財調査研究会
24	久宝寺23次 (KH97-23)	"	亀井・渋川	H9/10/23～ H10/6/30	原田昌則・二宮満夫 2006「1 久宝寺遺跡第23次調査(KH97-23)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
25	久宝寺24次 (KH98-24)	"	亀井・渋川	H10/2/10～ H11/2/20	原田昌則 2001「久宝寺遺跡第24次発掘調査報告書」『(財)八尾市文化財調査研究会報告69』(財)八尾市文化財調査研究会
26	久宝寺25次 (KH98-25)	"	北亀井3	H11/1/29～ 7/15	坪田真一・原田昌則 2006「Ⅰ 久宝寺遺跡第25次調査(KH98-25)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
27	久宝寺 (98-1・98-2)	大文研セ	渋川	H10/3/1～ H11/1/14	赤木克視・他 2001「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書III」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第60集』(財)大阪府文化財調査研究センター
28	久宝寺26次 (KH99-26)	八文研	神武町93-1	H11/3/23～ 8/20	岡田清一・磯口 薫 2002「久宝寺遺跡」『(財)八尾市文化財調査研究会報告70』(財)八尾市文化財調査研究会
29	久宝寺27次 (KH99-27)	"	北亀井3-1	H11/5/17～ -72	西村公助 2000「10. 久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
30	久宝寺28次 (KH99-28)	"	亀井	H11/9/30～ H12/2/1	原田昌則・金親満夫 2004「I 久宝寺遺跡第28次調査(KH99-28)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
31	久宝寺29次 (KH99-29)	"	渋川	H11/9/1～ H12/11/30	原田昌則・他 2003「久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書」『(財)八尾市文化財調査研究会報告74』(財)八尾市文化財調査研究会
32	久宝寺30次 (KH99-30)	"	亀井・渋川	H12/1/20～ 3/7	荒川和哉 2006「Ⅱ 久宝寺遺跡第30次調査(KH99-30)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
33	久宝寺31次 (KH99-31)	"	北亀井3	H12/2/1～ 3/30	坪田真一 2006「Ⅲ 久宝寺遺跡第31次調査(KH99-31)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
34	久宝寺 (竜華東西線)	大文研セ	亀井	H11/2/2～ H12/2/29	西村 歩・奥村茂輝 2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第118集』(財)大阪府文化財センター

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 献
35	久宝寺32次 (K H99-32)	八文研	神武町168他	H12/3/13~ 6/8	森本めぐみ 2000「15. 久宝寺遺跡第32次調査(K H99-32)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
36	久宝寺33次 (K H2000-33)	〃	渋川	H12/3/31~ H13/2/28	成海佳子・樋口 薫・金親満夫 2001「4. 久宝寺遺跡第33次調査(K H2000-33)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
37	久宝寺34次 (K H2000-34)	〃	亀井 3-41	H12/7/18~ 11/25	本章掲載
38	久宝寺35次 (K H2000-35)	〃	神武町1番 79	H12/10/16~ 11/14	森本めぐみ 2001「6. 久宝寺遺跡第35次調査(K H2000-35)」『平成12年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
39	久宝寺36次 (K H2000-36)	〃	北亀井町	H13/2/5~ 3/20	原田昌則・金親満夫 2004「II 久宝寺遺跡第36次調査(K H2000-36)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
40	久宝寺37次 (K H2001-37)	〃	亀井	H13/9/13~ 11/16	原田昌則・金親満夫 2004「III 久宝寺遺跡第37次調査(K H2001-37)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告77』(財)八尾市文化財調査研究会
41	久宝寺38次 (K H2001-38)	〃	北亀井町 2・3	H14/1/9~ 10/10	高萩千秋 2003「X II 久宝寺遺跡第38次調査(K H2001-38)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
42	久宝寺39次 (K H2001-39)	〃	亀井	H14/2/19~ 9/26	原田昌則 2006「III 久宝寺遺跡第39次調査(K H2001-39)、第51次調査(K H2003-51)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
43	久宝寺40次 (K H2001-40)	〃	北亀井 2	H13/2/19~ 7/29	森本めぐみ・坪田真一 2003「X III 久宝寺遺跡第40次調査(K H2001-40)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
44	多目的広場	大文研七	亀井	H13/2/27~ H14/2/28	西村 歩・南條直子 2003「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書V」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第103集』(財)大阪府文化財センター
45	水処理施設 (その1~3)	〃	亀井	H13/4/20~ H16/2/27	未報告
46	竜華東西線 (その2)	〃	亀井	H14/1/22~ 8/31	西村 歩・奥村茂輝 2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI」『(財)大阪府文化財センター調査報告書第118集』(財)大阪府文化財センター
47	小阪合発進立 杭(02-2)	大府文セ	亀井	H15/3/1~ 9/30	2003「平成14年度 年報」(財)大阪府文化財センター
48	長吉立杭	〃	亀井	H13/4/20~ H14/3/29	2002「平成13年度 年報」(財)大阪府文化財センター
49	小阪合立杭		渋川	H13/4/20~ H14/3/29	〃
50	久宝寺41次 (K H2002-41)	八文研	北亀井町 2	H14/7/29~ 8/19	西村公助 2003「X IV 久宝寺遺跡第41次調査(K H2002-41)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
51	久宝寺42次 (K H2002-42)	〃	北亀井町 3-41	H14/9/30~ 10/24	樋口 薫 2003「19. 久宝寺遺跡第42次調査(K H2002-42)」『平成14年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
52	久宝寺43次 (K H2002-43)	〃	渋川	H14/10/8~ 11/8	坪田真一・金親満夫 2005「I 久宝寺遺跡第43次調査(K H2002-43)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
53	久宝寺44次 (K H2002-44)	〃	渋川他	H14/11/26~ 12/13	岡田清一 2003「IV 久宝寺遺跡第44次調査(K H2002-44)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告76』(財)八尾市文化財調査研究会
54	久宝寺45次 (K H2002-45)	〃	跡部北の町 1・2・渋川	H14/11/29~ 12/20	成海佳子 2003「V 久宝寺遺跡第45次調査(K H2002-45)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告76』(財)八尾市文化財調査研究会
55	久宝寺46次 (K H2002-46)	〃	亀井・北亀井 3	H15/1/28~ 3/10	坪田真一 2006「III 久宝寺遺跡第46次調査(K H2002-46)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
56	久宝寺47次 (K H2002-47)	〃	北亀井 2・3	H15/2/28~ 7/2	成海佳子 2004「V 久宝寺遺跡第47次調査(K H2002-47)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告78』(財)八尾市文化財調査研究会
57	駅前広場防火 水槽(02-3)	大文研七	亀井	H15/3/3~ 4/30	金光正裕 2003「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書IV」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第102集』(財)大阪府文化財センター
58	久宝寺48次 (K H2002-48)	八文研	渋川	H15/3/10~ 4/7	坪田真一 2005「II 久宝寺遺跡第48次調査(K H2002-48)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
59	久宝寺49次 (K H2003-49)	〃	神武町93-1・4	H15/6/11~ 8/26	坪田真一・高萩千秋 2005「III 久宝寺遺跡第49次調査(K H2003-49)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
60	久宝寺50次 (K H2003-50)	〃	渋川他	H15/6/3~ 6/5	原田昌則 2006「IV 久宝寺遺跡第50次調査(K H2003-50)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
61	久宝寺51次 (K H2003-51)	〃	亀井	H15/6/10~ 7/31	原田昌則 2006「III 久宝寺遺跡第59次調査(K H2001-39)、第51次調査(K H2003-51)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
62	久宝寺52次 (K H2003-52)	〃	渋川	H15/9/8~ H16/4/13	樋口 薫 2004「13. 久宝寺遺跡第52次調査(K H2003-52)」『平成15年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
63	久宝寺53次 (K H2003-53)	〃	跡部北の町 2・3・亀井	H15/10/3~ 10/9	成海佳子 2005「IV 久宝寺遺跡第53次調査(K H2003-53)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
64	久宝寺54次 (K H2003-54)	〃	渋川	H15/11/26~ 12/16	成海佳子 2005「V 久宝寺遺跡第54次調査(K H2003-54)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
65	久宝寺55次 (K H2003-55)	〃	北亀井 3	H16/1/19~ 2/20	坪田真一 2006「IV 久宝寺遺跡第55次調査(K H2003-55)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
66	久宝寺56次 (K H2004-56)	〃	神武町93-1・4	H16/7/1~ 9/3	原田昌則 2005「VI 久宝寺遺跡第56次調査(K H2004-56)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
67	久宝寺57次 (K H2004-57)	〃	龍華町 2	H16/7/5~ 7/7	樋口 薫 2005「VII 久宝寺遺跡第57次調査(K H2004-57)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
68	久宝寺58次 (K H2004-58)	〃	北亀井 3	H16/5/31~ 9/30	坪田真一 2006「V 久宝寺遺跡第58次調査(K H2004-58)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
69	久宝寺59次 (K H2004-59)	〃	亀井	H16/8/5~ 11/30	西村公助 2005「13. 久宝寺遺跡第59次調査(K H2004-59)」『平成16年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

番号	調査名(略号)	調査主体	所在地	調査期間	文 献
70	久宝寺60次 (K H2004-60)	八文研	北龜井3	H16/10/7～ 10/21	荒川和哉 2006「VI久宝寺遺跡第60次調査(K H2004-60)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
71	久宝寺61次 (K H2004-61)	〃	北龜井3	H16/11/9～ 12/15	荒川和哉 2006「VII久宝寺遺跡第61次調査(K H2004-61)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告88』(財)八尾市文化財調査研究会
72	久宝寺62次 (K H2004-62)	〃	龍華町1	H17/5/10～ 7/7	荒川和哉 2005「VIII久宝寺遺跡第62次調査(K H2004-62)」『久宝寺遺跡(財)八尾市文化財調査研究会報告83』(財)八尾市文化財調査研究会
73	久宝寺63次 (K H2005-63)	〃	龍華町1	H17/1/20～ 1/25	荒川和哉 2006「V久宝寺遺跡第63次調査(K H2005-63)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
74	久宝寺65次 (K H2005-65)	〃	龍華町2	H17/7/27～ 10/27	荒川和哉 2006「VI久宝寺遺跡第65次調査(K H2005-65)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告89』(財)八尾市文化財調査研究会
75	久宝寺66次 (K H2005-66)	〃	神武町他	H17/9/1～ H18/3/20	坪田真一 2006「13.久宝寺遺跡第66次調査(K H2005-66)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
76	久宝寺67次 (K H2005-67)	〃	神武町他	H17/9/1～ H18/3/31	樋口 薫・荒川和哉 2006「14.久宝寺遺跡第67次調査(K H2005-67)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
77	跡部 (S 56調査)	市教委	春日町1-57	S 56/11/9～ 11/19	高木真光 1983.3「第6章 跡部遺跡発掘調査概要報告」『八尾市埋蔵文化財発掘調査概報1980・1981』八尾市教育委員会
78	跡部1次 (A T 82-1)	八文研	跡部本町1-3	S 57/10/1～ 10/5	西村公助 1983「11.跡部遺跡」『昭和57年度における埋蔵文化財発掘調査 その成果と概要』八尾市教育委員会
79	跡部4次 (A T 88-4)	〃	跡部本町1-4-1	S 63/10/1～ 10/22	西村公助 1989「19跡部遺跡(第4次調査)」『八尾市文化財調査研究会年報昭和63年度』(財)八尾市文化財調査研究会報告25
80	跡部5次 (A T 89-5)	〃	春日町1-45-1	H1/10/17～ 11/30	安井良三・成海佳子 1991「跡部遺跡発掘調査報告－大阪府八尾市春日町1丁目出土銅鐸－」(財)八尾市文化財調査研究会報告31
81	跡部7次 (A T 92-7)	〃	春日町1-47・48	H4/7/9～ 8/10	原田昌則 1993「I跡部遺跡(A T 92-7)第7次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39
82	跡部9次 (A T 92-9)	〃	春日町1	H4/10/7～ 10/13	原田昌則 1993「II跡部遺跡(A T 92-9)第9次調査」『八尾市埋蔵文化財発掘調査報告』(財)八尾市文化財調査研究会報告39
83	跡部14次 (A T 93-14)	〃	跡部北の町1丁目	H5/11/29～ 12/10	高萩千秋 1994「I跡部遺跡第14次調査(A T 93-14)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告42』(財)八尾市文化財調査研究会
84	跡部17次 (A T 94-17)	〃	太子堂1	H6/9/16～ 11/18	成海佳子 1997「V跡部遺跡第17次調査(A T 94-17)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告58』(財)八尾市文化財調査研究会
85	跡部23次 (A T 96-23)	〃	春日町4-4	H9/2/21～ 3/31	原田昌則 2004「II跡部遺跡第23次調査(A T 96-23)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告81』(財)八尾市文化財調査研究会
86	跡部28次 (A T 98-28)	〃	跡部本町4	H10/6/29～ 7/6	森本めぐみ 2000「I跡部遺跡第28次調査(A T 98-28)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告65』(財)八尾市文化財調査研究会
87	跡部	府教委	跡部北の町2	H13/10/9～ H14/3/29	小林義孝 2002「跡部遺跡」『大阪府埋蔵文化財調査報告2001-6』大阪府教育委員会
88	跡部33次 (A T 2002-33)	八文研	跡部北の町1・2、春日町1	H14/5/16～ 9/9	成海佳子・他 2003「I跡部遺跡第33次調査(A T 2002-33)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
89	跡部34次 (A T 2002-34)	〃	跡部北の町3	H14/9/2～ 9/11	坪田真一 2003「II跡部遺跡第34次調査(A T 2002-34)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
90	跡部35次 (A T 2002-35)	〃	跡部北の町3	H14/12/9～ H15/1/14	金親満夫 2003「III跡部遺跡第35次調査(A T 2002-35)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告75』(財)八尾市文化財調査研究会
91	跡部36次 (A T 2003-36)	〃	跡部北の町3	H15/11/7～ 11/15	成海佳子 2005「I跡部遺跡第36次調査(A T 2003-36)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告82』(財)八尾市文化財調査研究会
92	跡部39次 (A T 2005-39)	〃	北龜井町3	H17/5/25～ 8/12	岡田清一 2006「I.跡部遺跡第39次(A T 2005-39)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
93	跡部40次 (A T 2005-40)	〃	跡部北の町2・3	H17/8/1～ H18/2/28	原田昌則 2006「2.跡部遺跡第40次(A T 2005-40)」『平成17年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会
94	龜井4次 (KM96-4)	〃	龜井町1・2	H6/2/17～ 2/21	古川晴久 1998「V龜井遺跡 第4次調査(K H96-4)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告60』(財)八尾市文化財調査研究会
95	龜井9次 (KM99-9)	〃	龜井町4	H11/12/6～ 12/20	成海佳子 2001「V龜井遺跡(第9次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
96	龜井10次 (KM99-10)	〃	龜井町1・2	H12/3/6～ 3/31	成海佳子 2001「VI龜井遺跡(第10次調査)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告67』(財)八尾市文化財調査研究会
97	龜井北 (KK01-2、 02-1、03-1)	大市協	大阪市平野区加美4	H14/2～3 H15/3・H 15/7～8	辻美紀 2004「龜井北遺跡発掘調査報告」(財)大阪市文化財協会

凡例 大阪府教育委員会[府教委] 八尾市教育委員会[市教委] (財)大阪文化財センター[大文セ]

(財)大阪府文化財調査研究センター[大文研セ] (財)大阪府文化財センター[大府文セ]

(財)八尾市文化財調査研究会[八文研] (財)大阪市文化財協会[大市協]

## 第2章 調査概要

### 第1節 調査の方法と経過

今回の調査は、当調査研究会が久宝寺遺跡内で実施する第34次調査(KH2000-34)にあたる。調査対象地は、新工場の東西方向の基礎部分と消化用水槽部分である。基礎部分は東西約82mであるが、南北方向の排水管が埋設されていた約10mを除いた72mを調査トレンチの長さとし、7本のトレンチを設定した。トレンチは南から第1～7区と呼称し、排水管より西は第1～7区西拡張区とした。トレンチ幅は第1区と第7区は約2m、それ以外は約2.8mである。また、第1区と第2区の間に1ヶ所(8×5.5m)、第6区と第7区の間に2ヶ所(9×10m・8×11m)の消化用水槽埋設部分が設けられており、本文で第1・2区、第6・7区としたものがこの部分にあたる。総調査面積は約1501m<sup>2</sup>を測る。

調査区の地区画割りは、南東隅の地点をY0・X0とし、東西90m(Y0～Y90)、南北80m(X0～X80)を10m単位に区画した。地区の呼称については、東西方向はアルファベット(東からA～I)、南北方向は算用数字(南から1～8)で示し、1A～8I地区と表記した。遺構の表記については、遺構略号の後に調査区名を付け3桁数字で示した〔凡例SK101〕。

調査方法は、地表下約1.8～2.1mにある盛土および堆積土層を機械によって除去した後に、人力掘削を約0.3mの深さで実施し、遺構・遺物の検出に努めた。また各トレンチの調査終了後に調査以前の環境復元の資料を得るために下層確認を行った。

調査の結果、各調査区の第IX層上面(T.P.+5.9～6.7m)で、弥生時代末期～古墳時代前期前半(布留式古相)、近世に比定される遺構・遺物を検出した。各調査区で検出した遺構の総計は、堅穴住居4棟、井戸2基、土坑141基、溝109条、小穴27個、落ち込み10箇所で、近世時期の井戸2基を除けば、弥生時代末期～古墳時代前期前半(布留式古相)に限定される。出土遺物については、弥生時代末期～古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される弥生土器・古式土師器・石器類があり、古式土師器の中には、在地系の他、讃岐・西部瀬戸内・北陸などの他地域産のものが含まれている。総量はコンテナ62箱を数える。

### 第2節 基本層序(第4図)

今回の調査地は、東西約80m・南北約70mと広範囲なため、場所により地層の堆積に若干の違いが見られる。さらに、東側を南東から北西に流れていた弥生時代後期の河川が形成した自然堤防があり、東部が高く西に行くにつれて低くなる旧地形となっていることから、その上位の地層の堆積に若干の影響を与えている。ここでは、調査地で確認した各单層を堆積相などから分類し基本層序とした。第4図は、調査地の中央部であり、かつ、調査地で確認した層序が多く残る第4区の北壁断面に基づき作成した基本層序の模式的な断面図である。

第I層：コンクリート碎片・黒褐色砂質シルトを主体とする既存建物撤去時以降の整地層・搅乱埋土であるI-1層と、黄色砂質シルトを主体とする既存建物建設時の客土・盛土層であるI-2層からなる。上面である現地表の標高はT.P.+8.5～8.0mで、調査地南部が高い。層厚は0.6～1.2mを測る。

## 第Ⅱ層：近代以降既存建物建設時以前の旧水田耕作土

調査地のほぼ全域に見られる。グライ化の著しいオリーブ黒色・灰色を基調とするシルト～粘土質シルトの単層で、細粒の中礫以細の砂礫を含む。上面の標高はT.P.+7.6～7.2mで、層厚は0.1～0.2mを測る。各調査区の壁断面に第Ⅱ層下面に切込みが見られる溝状の遺構が確認できる。この溝状の遺構は、明治初期に作成された地籍図に見られる調査地の中央部東寄りを南北に伸びる用水路に当たる。

## 第Ⅲ層：島畑構築以降の近世から近代にかけての水田耕作土・耕盤

第Ⅳ層が見られる部分以外の全域で見られる。グライ化の著しいオリーブ灰色・灰オリーブ色を基調とするシルト～粘土質シルトを主体とする1～2層の単層からなる。中粒の中礫以細の砂礫を含む。第2区から第6区にかけて、下部に灰オリーブ色・オリーブ灰色を呈する極細粒砂混じるシルト(粗粒の中礫以細の砂礫を含む)が見られる。酸化鉄・酸化マンガン斑の沈着が見られ、上部の水田耕作土に対する耕盤であったと考えられる。上面の標高は、T.P.+7.4～7.0mで、層厚は0.1～0.4mを測る。

## 第Ⅳ層：近世から近代にかけての島畑の盛土・耕作土

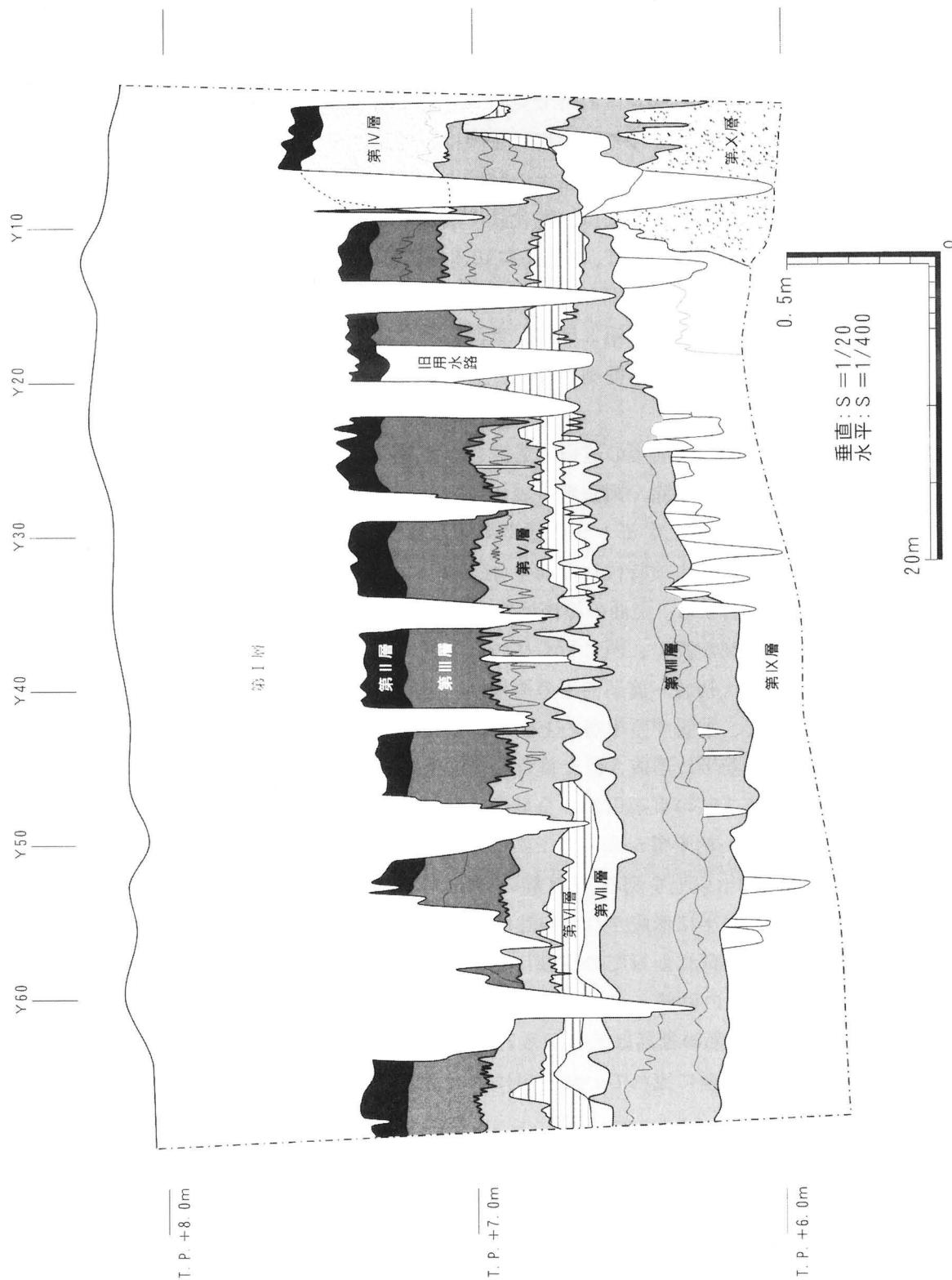
第3区から第5区の東部・第6区の西部に見られる。にぶい黄色～オリーブ褐色を呈するシルト質極細粒砂～粘土質シルトを主体とする1～数層の単層からなる。粗粒の中礫以細の砂礫を含み、所により、ブロック土を含む。酸化マンガン斑の沈着が著しい。上面の標高はT.P.+7.6～7.3mで、層厚は0.4～0.6mを測る。明治初期に作成された地籍図に、東西方向に伸びる矩形の島畑が数基見られ、そのいずれかに当たる。昭和23(1948)年に米軍により撮影された航空写真には、調査地付近に島畑が見られないことから、それまでの間に近世的な田畠混在の土地利用から近現代的な水田主体の土地利用へとその形態が変わったことが窺える。

## 第Ⅴ層：島畑構築以前の耕作土

第1・2区では、殆ど見られない。第3区西部と第5区東部では、他の部分を切るより粗粒で、酸化マンガン斑の沈着が全体的に顕著な部分が見られることから、これをV-1層とし、他の部分をV-2層とする。上面の標高はT.P.+7.2～6.8mで、層厚は0.1～0.7mを測る。調査地の北西部で最も厚い。V-1層は、にぶい黄褐色～オリーブ褐色～灰オリーブ色を呈するシルト～粘土質シルトを主体とする数層の単層からなる。細礫以細の砂礫を含み、所により、下位層のブロックを含む。酸化マンガン斑の沈着が顕著で、一部、酸化鉄が沈着する。畑耕作土と見られる。V-2層は、灰色・灰オリーブ色を基調とするシルト質粘土～粘土を主体とする数層の単層からなる。所により、極粗粒砂以細の砂を含む。水田耕作土と見られる。下部層は赤褐色を呈し、酸化マンガン斑・酸化鉄の沈着が著しく、上部の水田耕作土に対する耕盤であったと考えられる。

## 第VI層：洪水堆積層

第1～5区で見られるが、第5区では殆ど見られない。灰白色～灰オリーブ色を呈する粘土質シルト～シルト質粘土と細粒砂～極細粒砂の互層を主体とし、一部に粗粒の中礫・粘質土の偽礫を含む間層を挟む。酸化鉄分が沈着している部分では明褐色・褐色を呈する。水平葉理が見られ、洪水による堆積物と考えられる。層中の出土遺物はなく、



第4図 第4区北壁断面図

時期は不明である。上面の標高はT.P.+7.0~6.6mで、層厚は最大0.5mを測る。

**第VII層**：第VI層と第VIII層の間に見られる層を、第VII層とした。第1~3区と第4・5区の西部で見られるが、第1~第3区が厚く、第4区以北では薄く断続的に見られる。第3区では、他の調査区とは異なる堆積層であるが、他の調査区の当該層との切り合いが不明なため、第VII層に包括した。第3区以外で見られる当該層を第VII-1層とし、第3区で見られる当該層を第VII-2層とする。第VII-1層は、褐灰色~灰色を基調とする極細粒砂質シルト・粘土質シルト・シルト質粘土の数層の単層からなる。所により、極粗粒砂・シルトのブロックを含む。上部には、酸化鉄・酸化マンガン斑の沈着が見られる。遺構検出面で検出した遺構の一部には、本層中に切込みが確認できるもの(SD206)がある。第VII-2層は、オリーブ黒色を呈する粘土・シルトの2層の単層からなる。植物遺体を含む。調査地は、南北方向では第3区が、東西方向では西側が、地形的に低くなっている部分に堆積した堆積物と推測される。上面の標高はT.P.+7.0~6.3mで、層厚は最大0.5mを測る。

**第VIII層**：古墳時代初頭～前期前半の遺物・遺構を含む層

第1・2区の一部を除く調査地全域に見られる。オリーブ黒色を基調とするシルト～粘土質シルトを主体とする1~数層の単層からなる。細礫・炭化物を含み、所によりブロック土を含む。古墳時代初頭前半(庄内式古相)から古墳時代前期前半(布留式古相)までの遺物を包含する。上面の標高はT.P.+6.8~5.9mで、層厚は0.1~0.5mを測る。旧地形の影響で東部が高く、西に行くにつれて低い。今回の調査で検出された弥生時代後期後半・古墳時代初頭～前期前半の遺構は、本層の上面から下面にかけての任意の面で検出したもので、本層中の単層の上面ないし第IX上面に帰属する。

**第IX層**：弥生時代後期前半に形成された後背湿地堆積物

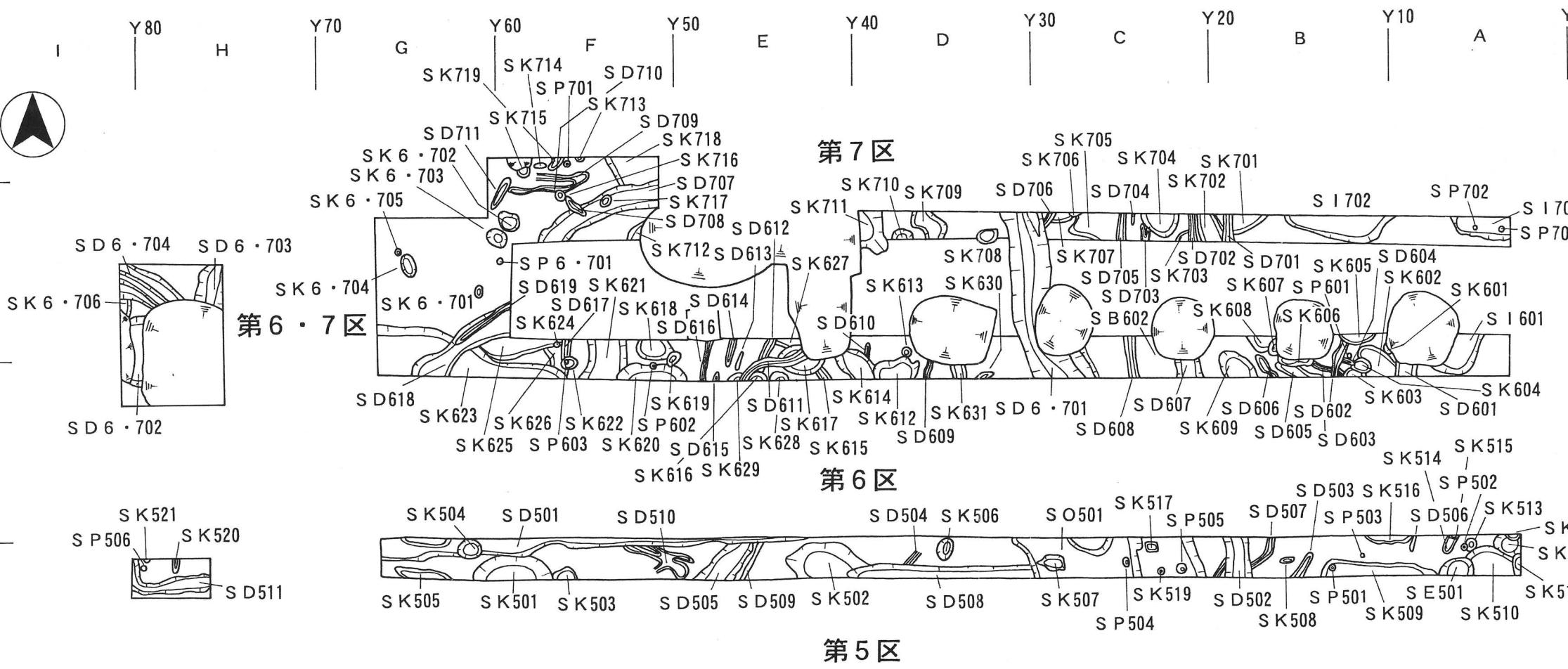
第4区から第7区の東部以外の全域に見られる。オリーブ灰色～暗緑灰色を呈する極細粒砂質シルト～粘土質シルト。上部は土壤化している。上面の標高はT.P.+6.7~5.9mで、層厚は0.3m以上を測る。第X層の自然堤防に対する後背湿地に堆積したものである。

**第X層**：弥生時代後期前半に形成された自然堤防堆積物

第4区から第7区にかけての東部に見られるもので、灰色を基調とする粗粒の中礫以細(径2cmまで)の砂礫・泥質の細粒砂・粗粒砂以細の砂からなる。第V様式の土器が出土している。上面の標高はT.P.+6.7~6.1mで、層厚は0.55m以上を測る。調査地の北東部を南東から北西に流れていた河川による自然堤防堆積物である。



I Y 80 H Y 70 G Y 60 F Y 50 E Y 40 D Y 30 C Y 20 B Y 10 A Y 0



8 — X 70  
7 — X 60  
6 — X 50  
5 — X 40  
4 — X 30  
3 — X 20  
2 — X 10  
1 — X 0

0 20m  
S = 1 / 300

### 第3節 検出遺構と出土遺物

#### 1)各調査区の概要

調査区毎に遺構・遺物の概要について述べていくが、遺物が出土した主要な遺構を中心に詳述し、その他については一覧表にまとめた。遺構番号はそれぞれ3桁の数字で表記しており、その内、頭の数字は調査区名を表している。

#### 第1区(第5図、図版一～三)

第1区では、現地表下2.1～2.3m(T.P.+5.6～6.3m)の第IX層上面で、土坑1基(S K101)、溝12条(S D101～S D112)、小穴1個(S P101)、落ち込み1基(S O101)を検出した。

#### 土坑(S K)

##### S K101

第1区東部の1B地区で検出した。楕円形を呈するとみられるが、南部が調査区外に伸びるため全容は不明である。東西長0.67m、南北長0.43m、深さ0.13mを測る。埋土は2層に分けられ、上層が2.5GY2/1黒色粘土、下層が10Y4/1灰色粘土である。遺物は庄内式甕や古式土師器壺等の破片が極少量出土しているが、図化し得たものは無い。

#### 溝(S D)

第1区全域に亘って検出した。総数で12条(S D101～S D112)を検出したが、方向的には北西～南東に伸びるものが多い。調査区西部で検出したS D107・S D108・S D110については、埋土がシルトと粘土質シルトを主体としていることから、落ち込みのような性格を帯びた遺構であることが推定される。遺物はS D105以外では出土していない。

第2表 第1区 溝(S D)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S D101	1 A	北東～南西	1.92	1.62	0.08	
S D102	〃	北西～南東	1.68	0.26	0.09	
S D103	〃	北東～南西	1.24	0.42	0.06	S D104に切られる。
S D104	1 A B	北西～南東	3.50	2.25	0.31	
S D105	1 C	北～南	1.30	0.47	0.31	古式土師器片
S D106	〃	北～南～西	10.0	2.15	0.23	
S D107	1 D	北西～南東	1.65	3.10	0.14	最下層に植物遺体がみられる。
S D108	1 D E	〃	1.40	6.00	0.24	
S D109	1 E F	北～南	1.50	4.30	0.24	埋土はシルトと細砂の互層堆積。
S D110	1 F G	西北～東南	4.50	3.20	0.17	
S D111	1 G	〃	3.50	0.20	0.06	埋土は暗緑灰色微砂
S D112	1 H	北～南	0.06	1.34	0.29	図版三

#### 小穴(S P)

##### S P101

第1区東部の1A地区で検出した。S D102に一部切られ、北側が区外に伸びる。東西長0.42m、南北長0.26m、深さ0.07mを測る。埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

## 落ち込み(SO)

### SO101

第1区東部の1B・C地区で検出した。溝状に広範囲に伸びるもので、東部はSD104に切られている。東西長9.5m、南北長3.1m、深さ0.14mを測る。埋土は5GY2/1オリーブ黒色シルト質粘土に暗オリーブ灰色粘土質シルトのブロックが混じっている。古墳時代初頭(庄内式期)の古式土師器の破片が出土したが図化し得たものは無い。

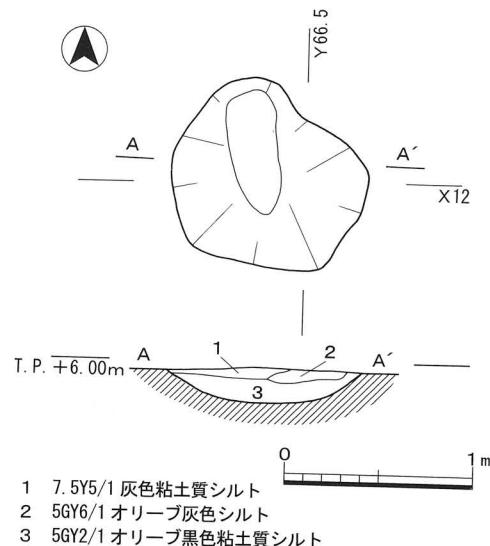
## 第2区(第5図、図版一~四)

第2区では、現地表下2.0~2.3m(T.P.+6.0m~6.3m)付近に存在する第IX層上面で、土坑18基(SK201~SK218)、溝20条(SD201~SD220)、小穴4個(SP201~SP204)、落ち込み2基(SO201・SO202)を検出した。

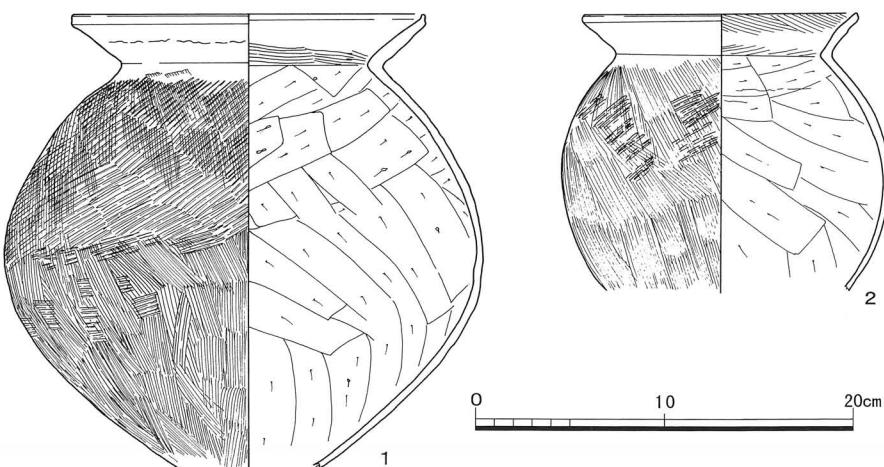
### 土坑(SK)

#### SK214(第6・7図、図版二二)

第2区西部の2G地区で検出した。不定形を呈するもので、東西幅1.05m、南北幅1.0m、深さ0.18mを測る。埋土はシルト~粘土質シルトを主体とする3層から成る。遺物は古墳時代初頭前半(庄内式古相)の古式土師器が少量出土している。2点(1・2)を図化した。1は球形の体部に「く」の字に屈曲する口縁部が付く庄内式甕(甕B<sub>2</sub>)である。口径18.5cm、体部最大径25.0cmを測る。体部外面は右上がりの細筋タタキの後、縦位のハケ調整を行う。体部内面はケズリ。2は小形の庄内式甕で体部外面の器面調整は1次調整のタタキをタテハケにより消している。1・2共に色調は褐灰色。生駒西麓産である。庄内II期に比定される。



第6図 SK214平面面図



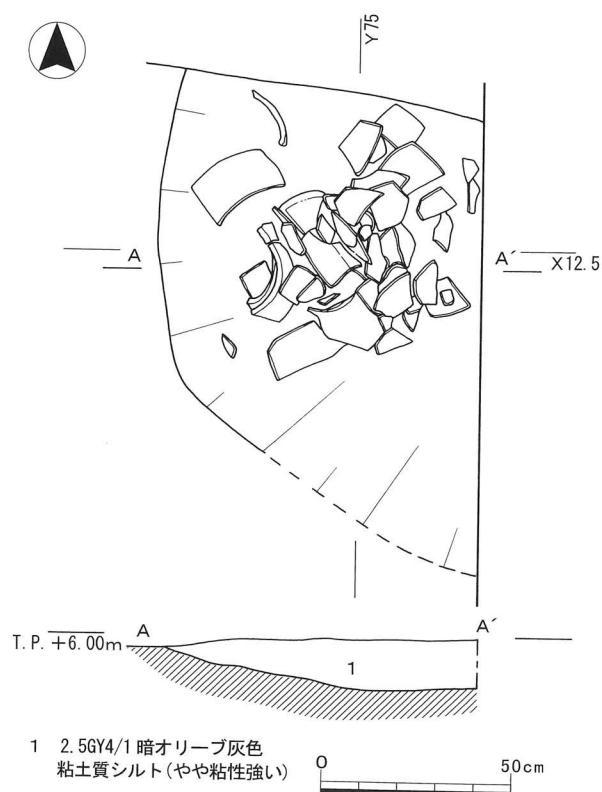
第7図 SK214出土遺物実測図

S K216(第8・9図、図版三・四・二二)

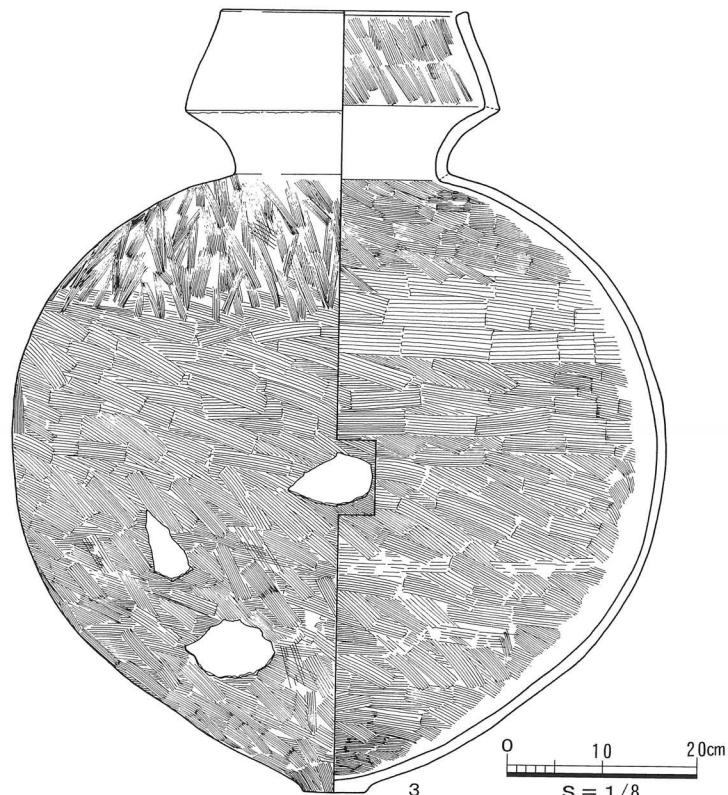
第2区西拡張区の2H地区で検出した。北部と東部が調査区外に至るため平面形状は明確ではない。検出部分で東西幅0.83m、南北幅1.28m、深さ0.13mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色粘土質シルトの単一層である。出土遺物はほぼ1個体分の大形複合口縁壺と庄内式甕の小片が集中して出土しているが深度が浅いため、一部の土器片は埋土から突出した形で出土している。大形複合口縁壺(3)の出土状況からみて、所謂、埋葬施設である土器棺に使用されたものではなく、破損した後に一括して破棄されたものと推定される。3は讃岐系大形複合口縁壺(複合口縁壺E')で、口縁部および体部の一部を欠く以外はほぼ完形に復元が可能である。口径25.4cm、器高82.6cm、底部径6.4cm、体部最大径68.8cmを測る。外反して伸びる頸部から内傾して幅広の口縁部を作るもので、体部は最大径を中位に持つ球形で、小さく突出する平底の底部が付く。器面調整は口縁部外面ナデ、内面タテハケ、頸部内外面ナデ、体部内外面は縦位ないしは横位に密なハケが施されている。口頸部内面に黒色の顔料が塗布されている。色調は褐灰色。胎土中に角閃石の含有が認められる。生駒西麓産である。遺構の帰属時期は、古墳時代初頭後半(庄内式新相)が推定される。

S K218(第10・11図、図版二二)

第2区西拡張区の2I地区で検出した。東部および北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.3m、南北幅2.03m、深さ0.15mを測る。埋土

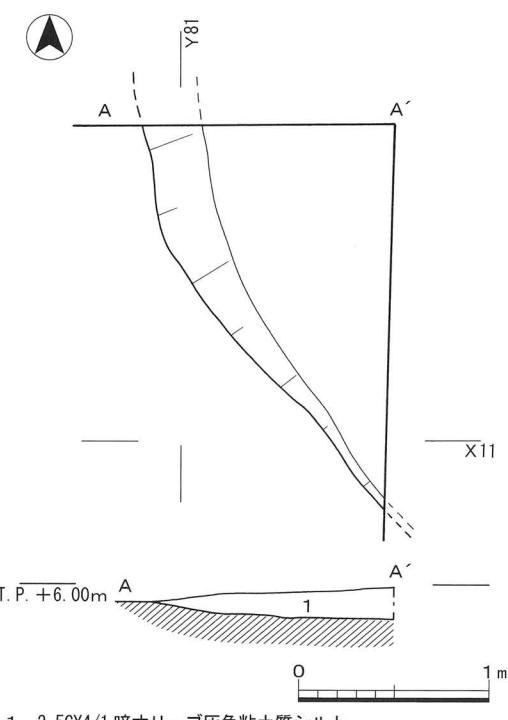


第8図 S K216平断面図



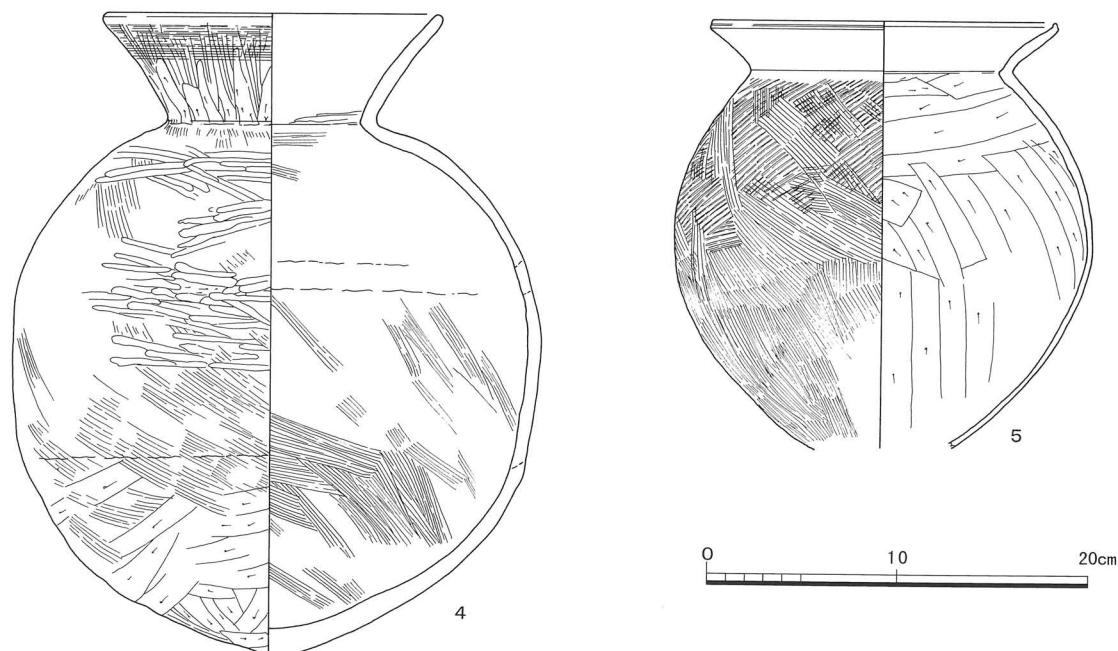
第9図 S K216出土遺物実測図

は2.5GY4/1灰オリーブ色粘土質シルトである。古墳時代初頭後半(庄内式新相)の古式土師器類が少量出土している。2点(4・5)を図化した。4は倒卵形の体部に斜上方に直線的に伸びる口頸部が付く、大形壺(短頸壺A)である。底部は尖り底で安定感が無く自立できない。口径17.5cm、器高33.8cm、体部最大径27.8cmを測る。器面調整は体部外面が上位から中位にかけて左上がりのハケおよび横位のヘラミガキ、下位は右上がりのヘラケズリ、底部は放射状にヘラケズリが行われている。口頸部外面は上位がヨコナデ、以下は縦位のハケおよびヘラケズリを施す。体部内面はハケおよびナデを施す。胎土中に2mm以下の長石が散見される他、実体鏡で角閃石の含有が認められる。色調は淡赤褐色。5は庄内式壺で、底部を欠く。復元口径17.7cmを測る。器形および体部内外面の器面調整は当該期に通有のもので、その特徴から古墳時代初頭後半(庄内式新相)に盛行する庄内式壺(壺B<sub>3</sub>)に分類される。色調は褐灰色。胎土中に角閃石の含有を認める生駒西麓産である。出土遺物から遺構の帰属時期は庄内Ⅲ期に比定される。



1 2.5GY4/1 暗オリーブ灰色粘土質シルト

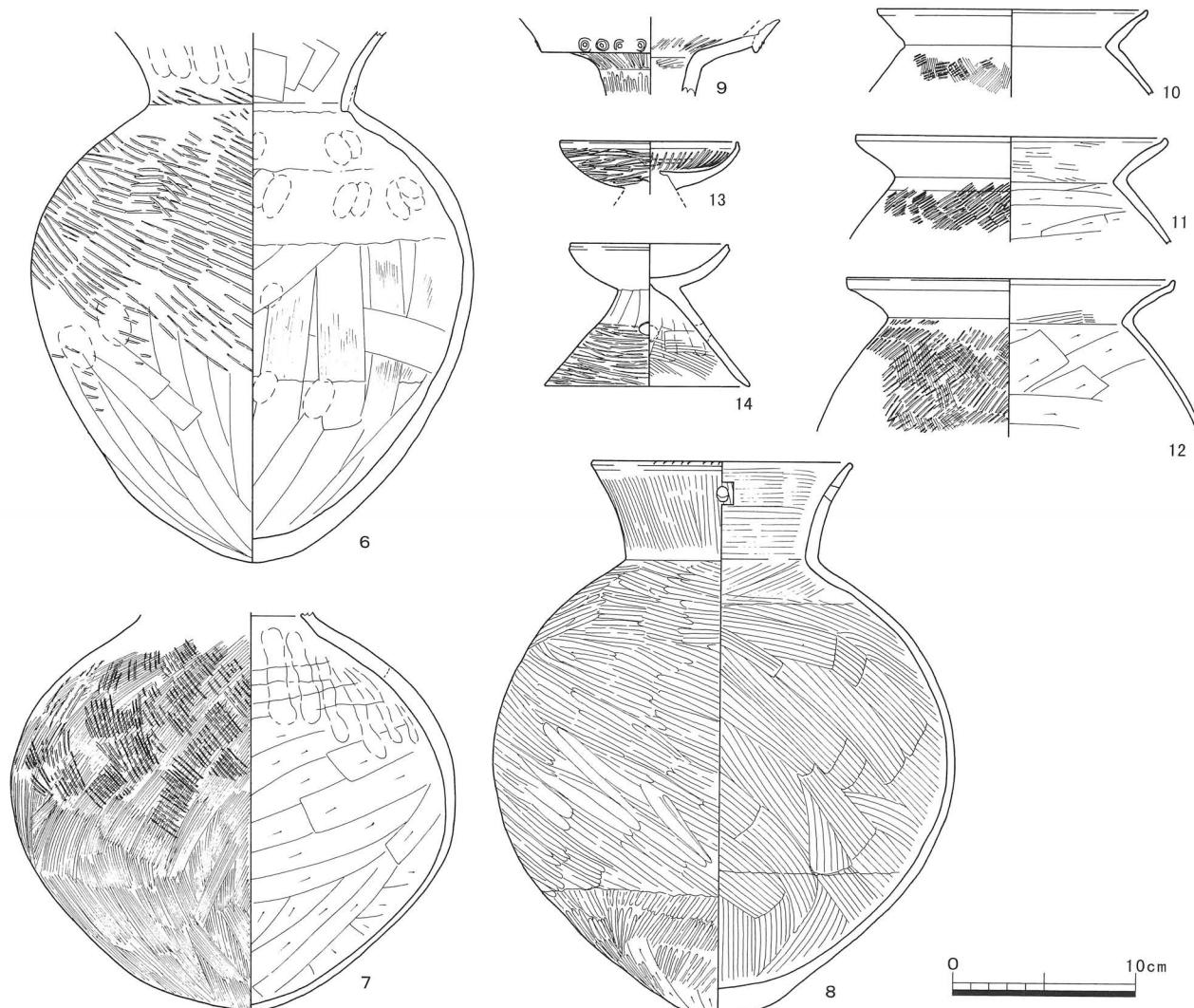
第10図 SK 218平面面図



第11図 SK 218出土遺物実測図

第3表 第2区 土坑(S K)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S K201	2 A	不定形	1.86	0.98	0.16	古式土師器片
S K202	"	楕円形	0.77	0.40	0.11	
S K203	2 B	円形?	1.52	1.50	0.07	S D205に切られる。
S K204	"	不明	1.52	0.74	0.10	S D206に切られる。古式土師器片
S K205	"	不定形	0.85	0.80	0.07	S D207を切る。庄内式甕片
S K206	2 C	楕円形?	0.64	0.60	0.05	S K1・202に切られる。庄内式甕片
S K207	"	"	1.77	1.22	0.08	
S K208	"	"	1.90	1.22	0.11	S D208・S D209を切る。
S K209	"	不定形	3.38	1.60	0.09	S K210・S P202に切られる。庄内式甕片
S K210	"	楕円形?	0.52	0.37	0.11	S K209を切る。
S K211	2 D	不定形	3.19	0.62	0.11	S P204に切られる。
S K212	2 E	"	2.25	0.27	0.09	
S K213	2 F G	不明	2.25	0.27	0.09	S D217に切られる。
S K215	2 G	不定形	2.00	0.28	0.04	古式土師器片
S K217	2 H	"	1.58	0.42	0.14	

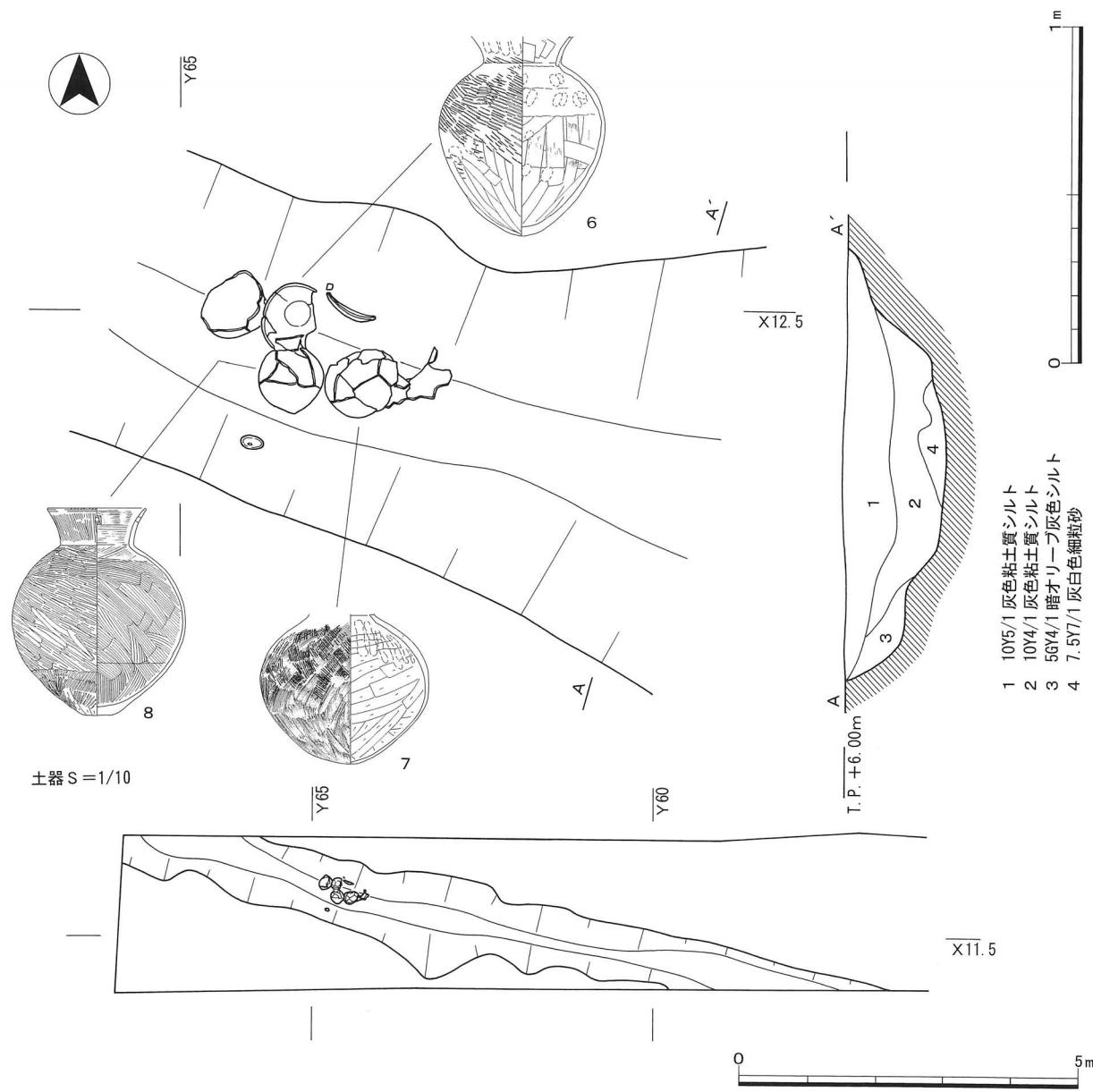


第12図 S D217出土遺物実測図

## 溝(S D)

### S D217(第12・13図、図版四・二二・二三)

第2区西部の2FG地区で検出した。東-西に伸びる溝である。検出長約8.6m、幅0.9~1.5m、深さ0.31mを測る。埋土は大きくは上層と下層に分けられ、上層は10Y5/1灰色粘土質シルト、下層は10Y4/1灰色シルト質粘土である。砂層の堆積が皆無で、下層を中心に植物遺体を多く含むことから、長期間に亘って閉塞された環境で、滞水状態が保たれていたものと推定される。南側の第1区で検出した溝の中で、S D217に継続した可能性のある溝としては、埋土が最も近似しているS D108が推定される。遺物は古墳時代初頭後半(庄内式新相)を中心とする短頸直口壺数個体と小形器台などが、一箇所に集中して出土している。9点(6~14)を図化した。壺は4点(6~9)図化した。6・8は短頸直口壺(短頸壺A)である。体部形態は6が倒卵形で尖底、8が球形で平底である。6は口縁部を欠く以外は完存している。体部外面の上位から中位にかけて左上がりの



第13図 S D217平面面図

タタキ調整が行われている。色調は褐灰色。生駒西麓産。8はほぼ完形で口径14.3cm、器高30.7cm、体部最大径25.6cm、底径4.0cmを測る。8の口頸部上位に径0.8cmを測る焼成前に穿たれた穿孔が1個存在する。口縁部端面に刻み目を持つ。器面調整は体部外面が丁寧なヘラミガキ、体部内面は左上がりのハケ調整を多用している。色調は淡灰褐色。在地産。7は広口ないしは大形直口壺と推定されるが口頸部を欠くため器種名は不明である。色調は褐灰色。生駒西麓産。9は複合口縁壺(複合口縁壺A<sub>2</sub>)の口縁部片である。口縁部外面に竹管押圧円形浮文が施文されている。色調は淡橙色。10~12は庄内式壺の小片である。3点共に体部外面のタタキ調整は右上がりの細筋タタキで、10・12については二次調整とし行われるハケが体部上位におよんでいる。器面調整等の特徴から庄内式壺(壺B<sub>3</sub>)に分類される。3点共に色調は褐灰色で生駒西麓産。13・14は精製品の小形器台(小形器台B<sub>3</sub>)である。13は脚部を欠く。14は口径8.5cm、器高7.7cm、脚部径11.2cmを測る。13の杯部外面は横位のヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキの後、放射状にヘラミガキを施す。色調は13が淡灰褐色、14が浅黄橙色。出土遺物から遺構の帰属時期は庄内Ⅲ期に比定される。

第4表 第2区 溝(S D)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S D 201	2 A	北東-南西	1.32	0.60	0.17	S O 201を切る。古式土師器片
S D 202	"	"	2.50	0.27	0.06	"
S D 203	"	"	1.23	0.29	0.03	S D 204と合流。
S D 204	"	南-北西	2.70	0.37	0.05	S D 205と合流。古式土師器片
S D 205	2 A B	南西-北東	2.70	0.92	0.08	S K 203を切る。古式土師器片
S D 206	2 C	北西-南東	2.60	2.25	0.29	S K 204を切る。
S D 207	"	"	3.10	0.24	0.09	S K 205に切られる。古式土師器片
S D 208	"	北-南	1.10	0.20	0.04	S K 208に切られる。
S D 209	"	"	0.90	0.73	0.05	"
S D 210	2 D F	北西-南東	2.40	1.96	0.31	
S D 211	2 F	北東-南西	3.00	0.75	0.09	
S D 212	"	"	2.60	1.28	0.18	
S D 213	"	"	2.36	0.84	0.11	
S D 214	2 E F	"	2.14	1.06	0.08	
S D 215	2 F	"	2.30	0.52	0.12	
S D 216	"	北-南	2.20	0.30	0.09	
S D 218	2 H	東-西	1.70	0.45	0.07	図版三
S D 219	"	"	2.00	0.38	0.11	図版三
S D 220	2 I	"	2.30	0.42	0.08	

### 小穴(S P)

第2区では、小穴4個(S P 201~S P 204)を検出した。いずれも散発的な分布で、建物を構成した柱穴と認められたものはない。出土遺物が皆無であるため、時期は明確ではないが周辺の遺構から古墳時代初頭(庄内式期)~前期前半(布留式古相)頃のものと推定される。

第5表 第2区 小穴(S P)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P 201	2 A	円形	0.26	0.25	0.12	
S P 202	2 C	楕円形	0.36	0.25	0.07	
S P 203	2 D	円形	0.32	0.27	0.12	
S P 204	"	楕円形	0.32	0.23	0.10	

## 落ち込み(SO)

### SO201

第2区東端の2A地区で検出した。不定形で東端はSD201、西端はSD202に切られている。検出部分で東西幅2.15m、南北幅1.42m、深さ0.13mを測る。埋土は砂質シルト～粘土質シルトの3層が堆積している。遺物は出土していない。

### SO202

第2区東部の2B～2D地区の広範囲に広がっている。不定形で北部および南西部は調査区外に至る。検出部分で東西幅17.45m、南北幅3.0m、深さ0.1mを測る。埋土は10Y2/1黒色粘土質シルト中に植物が炭化したものが多く含まれ、10Y4/1灰色シルトが混じる。埋土中から古式土師器類の破片が出土している。遺構の全容は明確ではないが形態は不定形であり、性格が明瞭ではないので落ち込みと判断した。

## 第1・2区(第5図、図版一)

第1区と第2区の2B～2C地区にかけて消化用水槽埋設のため両者を繋ぐ形で拡張部分が設けられた。この拡張部分に対して第1・2区と呼称し、遺構名についても遺構略号の後に1・2を冠した遺構番号で示した。

第1・2区では、現地表下1.8m(T.P.+6.3～6.4m)に存在する第IX層上面で土坑2基(SK1・201、SK1・202)と溝1条(SD1・201)を検出した。

## 土坑(SK)

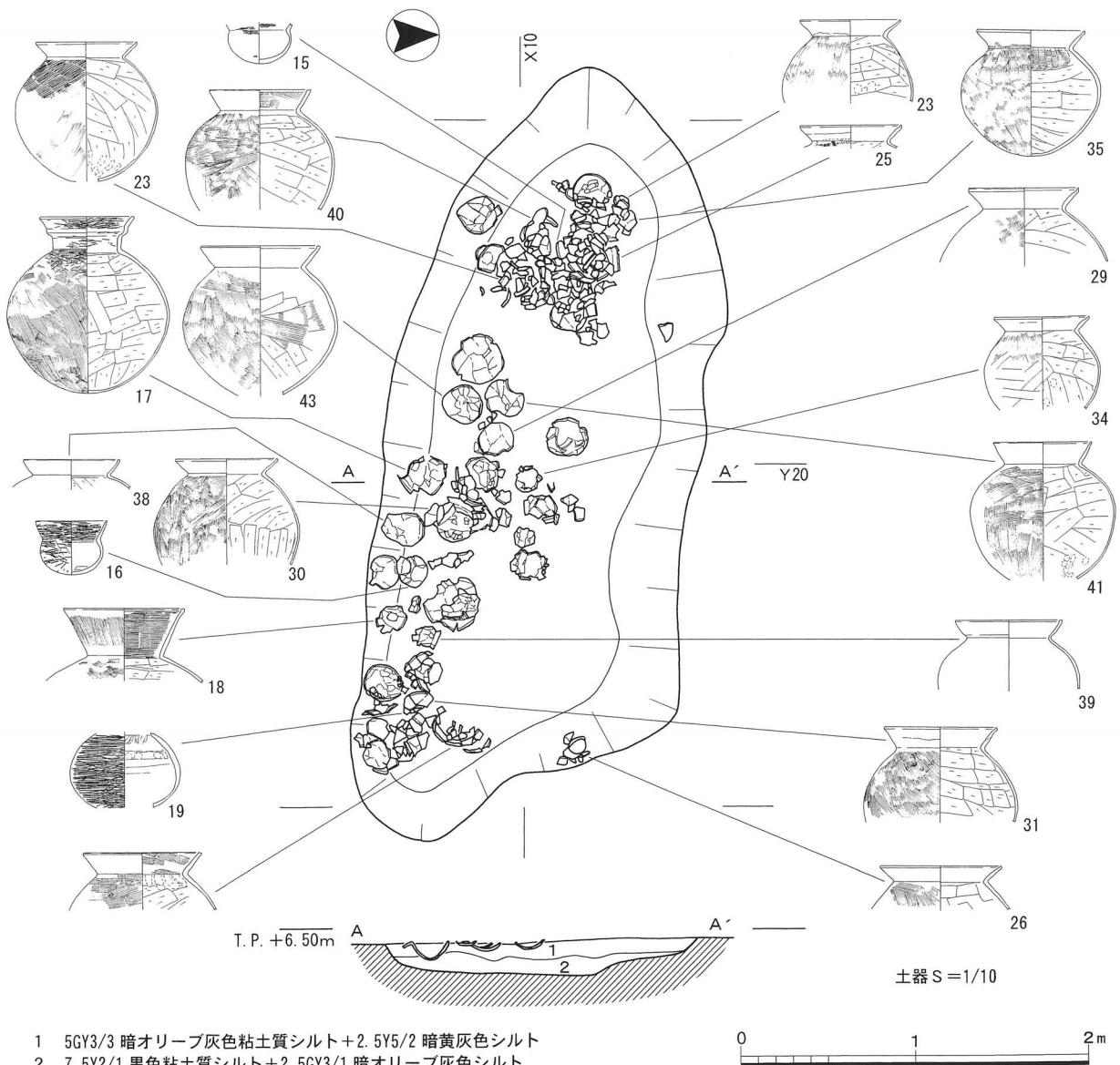
### SK1・201

1BC地区で検出した。SD106を切っている。隅丸方形を呈するもので、東西幅0.78m、南北幅0.62m、深さ0.1mを測る。埋土は10GY5/1緑灰色粘土質シルトである。遺物は出土していない。

### SK1・202(第14～16図、図版二・二三～二五)

1BC地区で検出した。東西方向に長い不整の楕円形を呈する。東西長4.65m、南北長1.74mを測る。検出レベルがT.P.+6.48～6.4mで、第1区、第2区で検出した他の遺構に比して高位であったため遺構の上部を若干削平してしまった。このため本来の遺構の深さは不明であるが検出時点では0.22mを測った。埋土は上部が5G3/3暗オリーブ灰色粘土質シルトに2.5Y5/2暗灰黄色シルトが混じり、下部は7.5Y2/1黒色粘土質シルトに2.5G3/1暗オリーブ色シルトが混じる土層である。遺物は上部層に集中しており、古式土師器の甕、壺などがおよそ40～50個体出土している。土坑内の遺物の位置については2つのブロックに分けることができる。すなわち西側では15～20個体の土器が1×0.8mの範囲に重複的に集中したブロックを形成しているのに対し、東側では20ないし30個が2.5×1.3mの範囲に個体別に独立して散乱した状況を呈している。これは土坑内における土器集積の時間的な差異を示すものと考えられる。土器類の帰属時期は古墳時代前期前半(布留式古相)が中心で、他地域のものとしては山陰地域産のものがある。

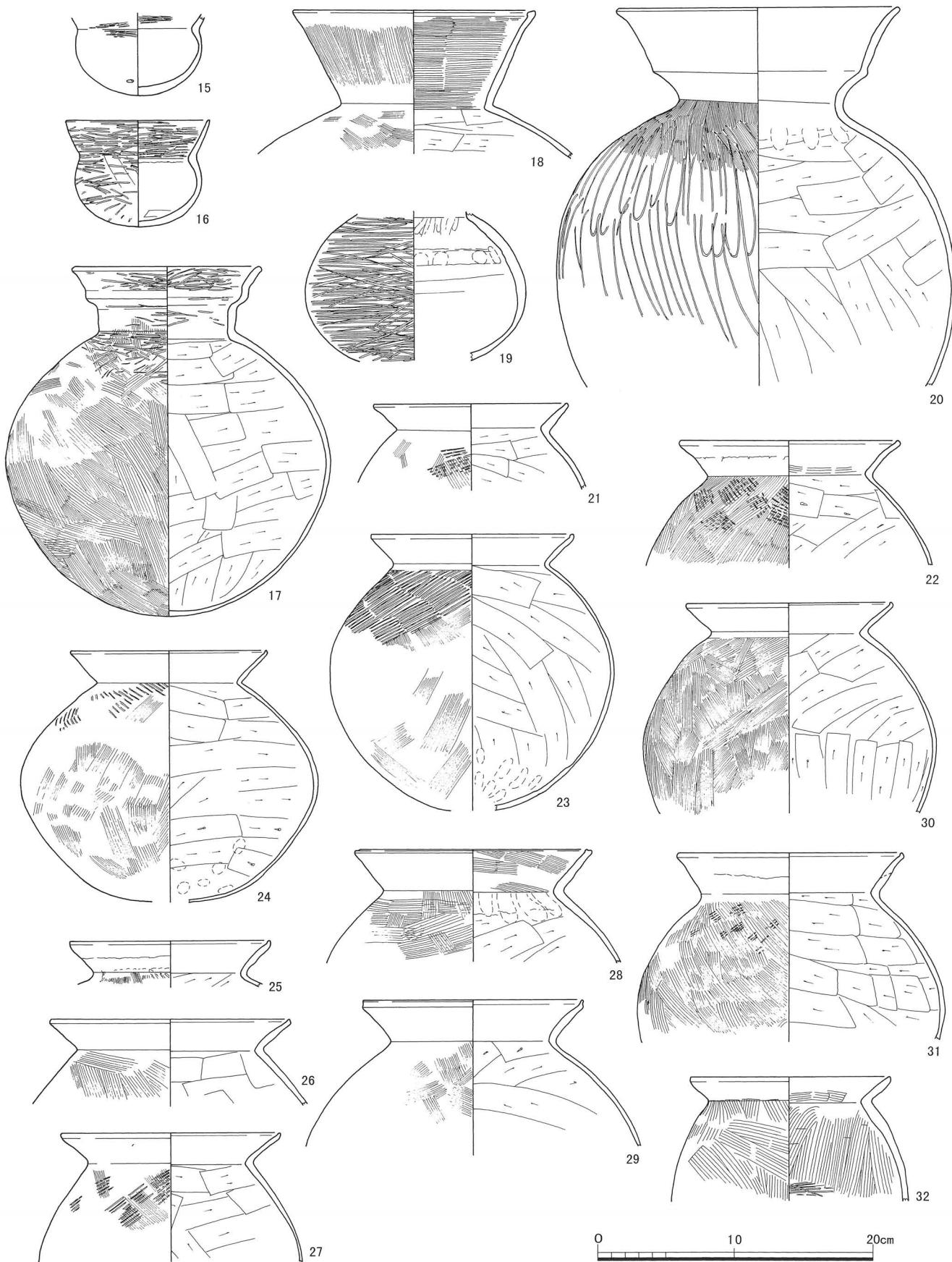
29点(15～43)を図化した。15～20は壺類である。15・16は精製品の小形丸底壺である。15は口縁上部を欠くが共に口径が体部最大径を凌駕する形態の(小形壺B<sub>2</sub>)に分類される。17は球形の体部に二重口縁が付く壺で、全体の1/2が残存している。通有のものに比して頸部が太い特徴を持つ



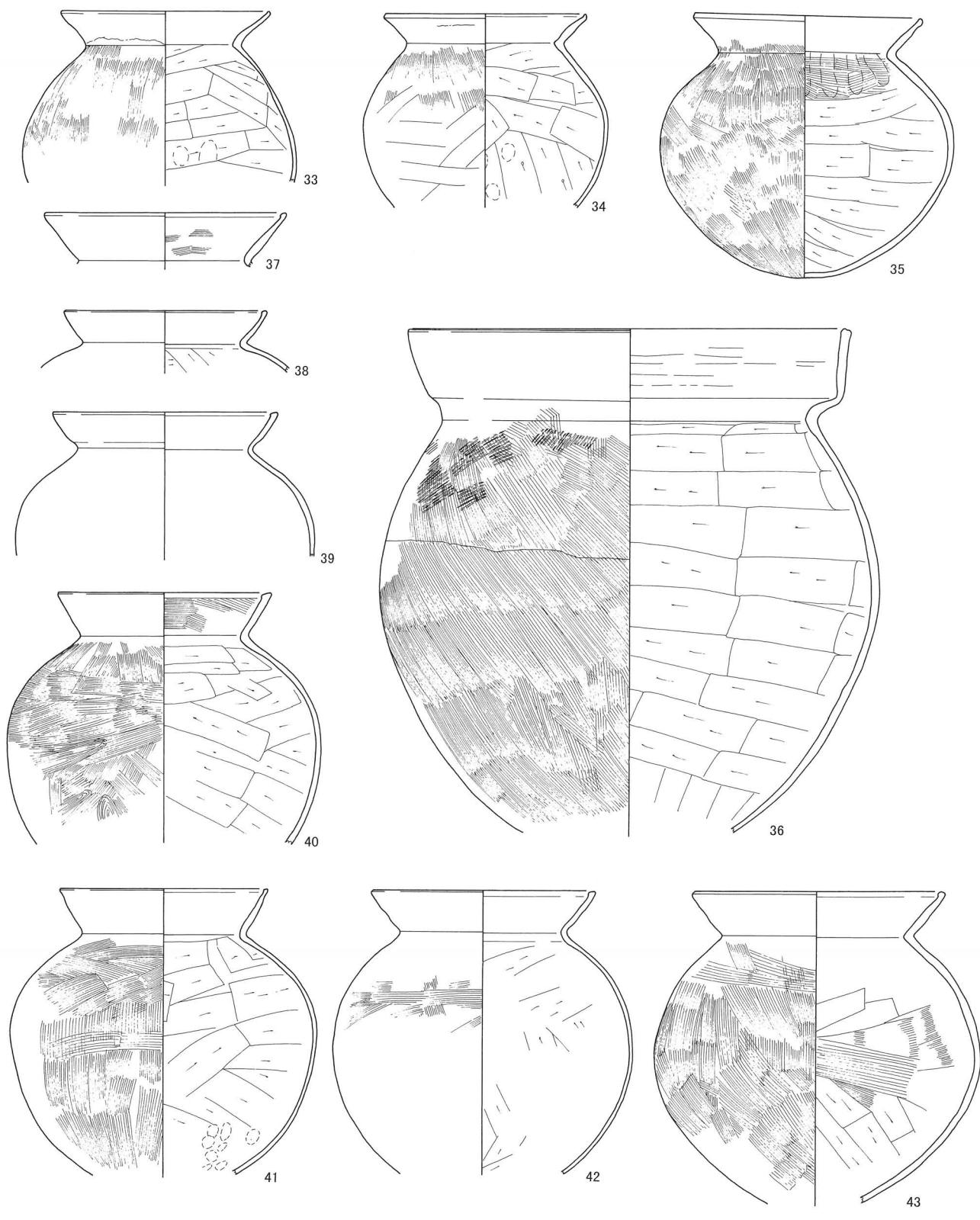
第14図 SK1・202平面面図

ている。口径13.4cm、器高25.6cm、体部最大径23.4cmを測る。色調は浅黄橙色。18は大形直口壺Aである。口縁部は完存しており口径17.4cmを測る。河内型庄内式甕と同様の胎土を使用するもので、本例のように、布留式古相のものは、口縁端部が布留式甕と同様に肥厚するものが多い。19は口頸部を欠くが、精製の直口壺と推定される。20は山陰系の大形壺で体部中位以下を欠く。口径20.2cmを測る。色調は灰白色。胎土中に2mm以下の長石・石英を多く含む。

甕類は23点(21~43)図化した。21~24は庄内式甕である、体部外面上位に右上がりの極細タタキ、それ以下にハケ調整を行うもので、河内型庄内式甕の最終段階である(甕B<sub>4</sub>)にあたる。全て生駒西麓産。25~35は布留式影響の庄内式甕(甕D)に分類される。形態的には河内型庄内式甕の最終段階の形態である(甕B<sub>4</sub>)と同様であるが体部外面の器面調整がハケのみで行われる甕である。口縁部は鋭く「く」の字に屈曲するもので、端部は丸く終わるもの、つまみ上げ気味のもの、



第15図 SK1・202出土遺物実測図－1



0 10 20cm

第16図 SK1・202出土遺物実測図-2

外傾する面を持つものがある。28以外は生駒西麓産。36は山陰系の甕である。復元口径30.4cmを測る。生駒西麓産。37~43は布留式甕である。口縁屈曲部の湾曲化と口縁端部の内面肥厚、体部外面におけるハケ調整の多用化等の諸属性を備えている。全て生駒西麓産。布留Ⅰ期の良好な資料である。

### 溝(S D)

#### S D1・201

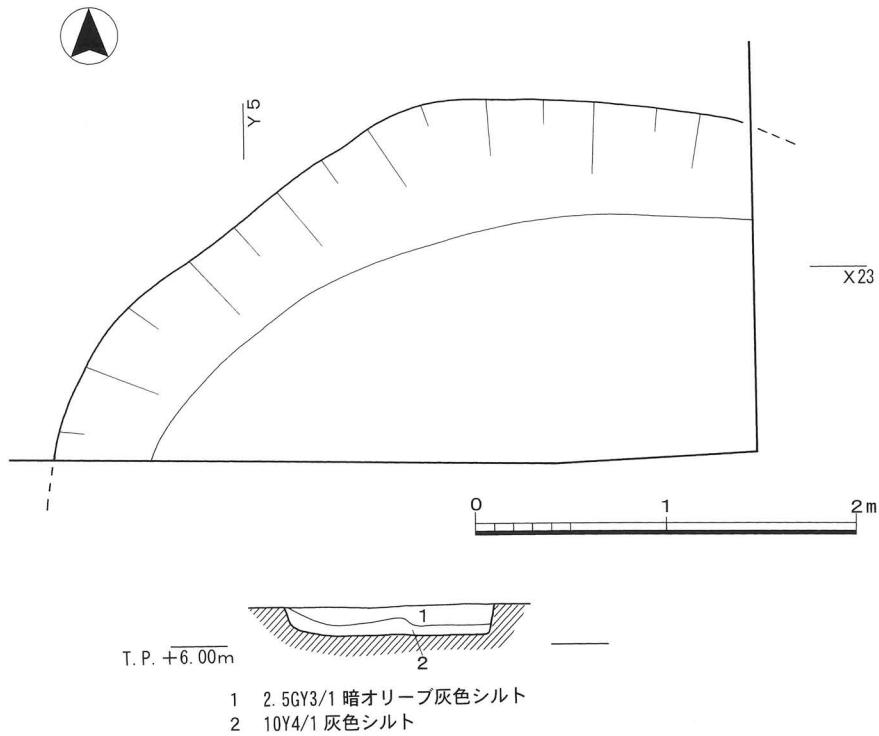
1C地区で検出した。北東-南西方向に直線的に伸びるもので、S D106を切っている。検出長2.58m、幅0.14m、深さ0.04mで、断面形状は皿形を呈する浅い溝である。本来は検出面よりも上位に構築面があったとみられ、耕作に伴う溝と推定される。埋土は10GY4/1暗緑灰色極細粒砂である。遺物が出土していないため、時期は不明だが検出レベルからSK1・201と同じ時期かそれよりも新しいものと考えられる。

### 第3区(第5図、図版五・六)

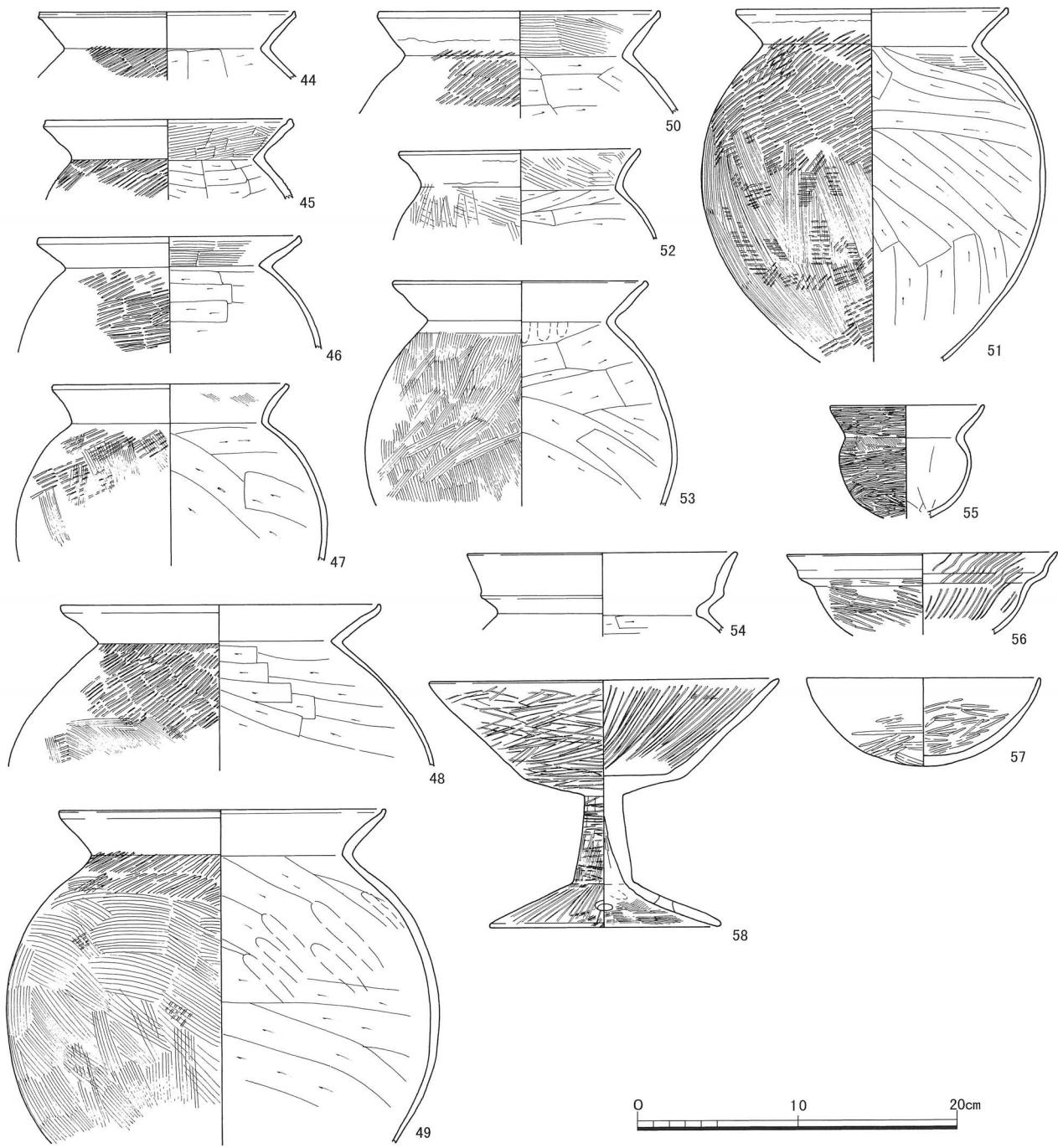
第3区では、既存建物が残存していたため、トレンチを分割して調査を行った。また、東側端についても調査途中で約1m東に伸びる形となったため、本調査区で最も遺物が出土したSK301を側溝で分断する形となり、さらに遺構を切る形で構築されていた溝を断ち割る結果となった。遺構構築面は、現地表下2.1~2.2m(T.P.+5.9~6.15m)に存在する第IX層上面で、土坑19基(SK301~SK319)、溝14条(S D301~SD314)、小穴5個(SP301~SP305)、落ち込み3基(SO301~SO303)と近世の井戸1基(SE301)を検出した。

### 土坑(S K)

第1区、第2区と同様に、土坑はB・C地区に集中するが、各遺構間で有機的な関連をもつと思われるものは少ない。しかし、SK301およびSK302は後の第4区、第5区で検出される土坑と時期的あるいは埋土の状況からみても近似した状況が窺える。しかし、後述するようにその遺物の出土状況については決定的に異なる。



第17図 SK301平面面図



第18図 SK 301出土遺物実測図

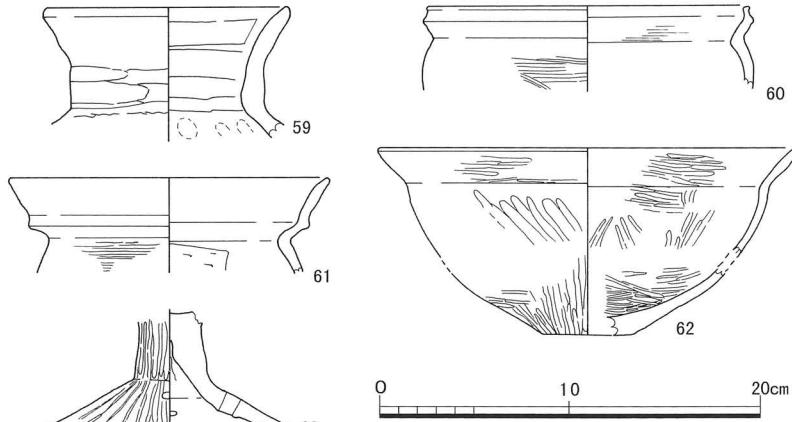
### SK 301(第17・18図)

第3区東端の3A地区で検出した。先述したように調査区の変更によって遺構が分断される形となった。遺構は一部を南北方向の溝に切られ、また、調査区外に伸びるために全容は不明である。検出部分で東西長4.12m、南北長1.95m、深さ0.31mを測る。埋土は2層に分けられ、上部は5GY2/1オリーブ黒色シルト質粘土、下層は5GY3/1暗オリーブ灰色シルトである。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)の土器類が多量に出土したが、個体としての形態を保っているものは少なく、破片が大半を占めていた。こうした状況からみて破損した土器を廃棄した土坑と考えられる。15点(44~58)を図化した。44~51は庄内式甕である。49・51以外は小破片である。51の体部外面

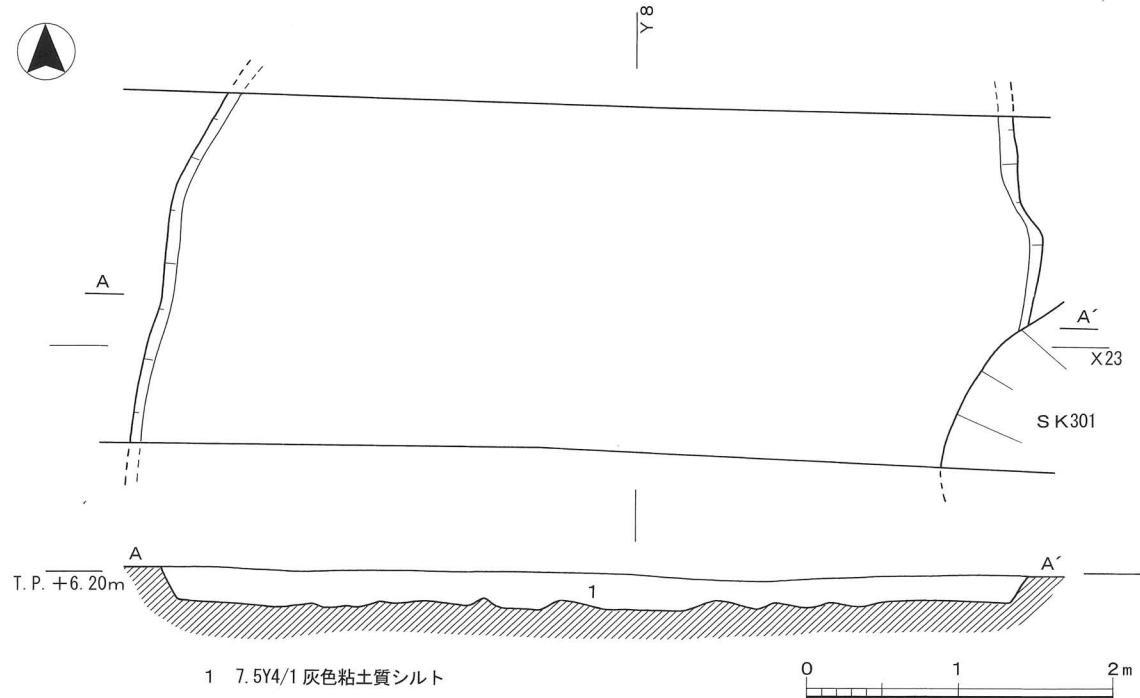
は三分割のタタキ調整後、縦位のハケを行うもので河内型庄内式甕の中でも最古の(甕B<sub>1</sub>)に分類されるが、その他については(甕B<sub>3</sub>)を中心とするため、混入品の可能性がある。全て生駒西麓産。52は体部外面の器面調整にハケを多用する(甕I)に分類される。53は布留式影響の庄内式甕に分類される(甕D)である。生駒西麓産。54は山陰系甕の小片である。復元口径17.0cmを測る。55は小形丸底壺である。口径が体部最大径を凌駕するもので、(小形壺B<sub>1</sub>)にあたる。口径9.5cmを測る。56は半球形の体部に二段に屈曲する口縁部が付く精製の小形鉢(鉢H<sub>2</sub>)である。57は楕円形の形状を呈する(鉢E<sub>1</sub>)である。口径14.6cm、器高5.6cmを測る。58は庄内系の高杯である。精製品で(高杯A<sub>4</sub>)にあたる。口径21.8cm、器高15.6cm、裾径14.4cmを測る。出土遺物には時期幅があるが、最も新しい時期の遺物から見て遺構の廃絶時期は布留Ⅰ期と推定される。

#### S K 302(第19・20図)

第3区東部の3 A・B地区で検出した。東肩はS K 301に切られている。南北が調査区外に伸び、平面形態は不明だが、検出部分で東西幅5.68m、南北幅2.3m、深さ0.28mを測る。埋土は7.5Y4/1灰色粘土質シルトの単一層である。遺物は弥生時代後期後半の土器が多く出土しているが、破片が主体である。5点(59~63)を図化した。59は口頸部が斜上方に長く伸びる広口壺(広口壺C)にあたる。口径12.5cmを測る。色調は灰白色である。60は二段



第19図 S K 302出土遺物実測図



第20図 S K 302平面面図

に屈曲する口縁部を持つもので、吉備系の鉢と推定される。61は山陰系の小形甕の小片である。復元口径16.5cmを測る。62は摺鉢状の体部に小さく外反する口縁部が付く中形鉢〔中形鉢A〕である。復元口径22.0cm、器高9.8cmを測る。63は高杯で杯部を欠く。裾径12.6cmを測る。スカシ孔は4方に穿たれている。弥生時代後期後半(原田2003編年の様相3)にあたる。

#### S K 304(第21・22図)

第3区東部の3B地区で検出した。北部は調査区外に至る他、S D 302およびS K 305を切っている。検出部分で東西幅1.08m、南北幅0.5m、深さ0.13mを測る。埋土はシルトを主体とする2層から成る。古墳時代前期前半(布留式古相)に比定され古式土師器類が少量出土している。庄内式甕1点(64)を図化した。64は庄内式甕の小破片で、復元口径15.8cmを測る。小片ではあるが(甕B<sub>4</sub>)と推定される。色調は褐灰色。生駒西麓産。出土遺物から遺構帰属時期は布留I期に比定される。

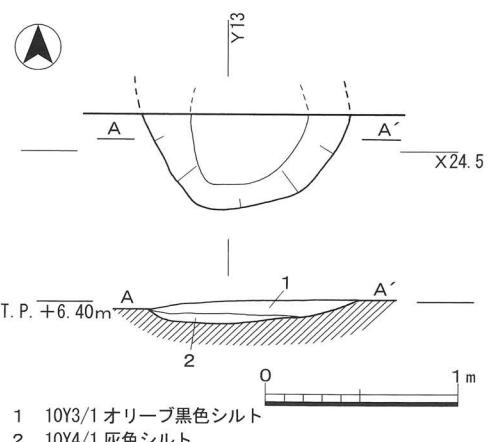
第6表 第3区 土坑(S K)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S K 303	3 B	楕円形	1.90	1.08	0.17	S D 301切る。古式土師器片、弥生土器片
S K 305	"	円形?	0.60	0.42	0.09	S D 302とS K 304に切られる
S K 306	"	円形?	1.20	0.37	0.12	S D 303を切る。弥生土器片、古式土師器片
S K 307	"	楕円形	1.20	0.55	0.11	庄内式甕
S K 308	"	不定形	0.87	0.50	0.11	V様式系甕
S K 309	"	楕円形	0.93	0.41	0.11	
S K 310	3 C	隅丸長方形	0.66	0.62	0.09	S D 304に切られる。
S K 311	"	楕円形	0.53	0.43	0.08	古式土師器片
S K 312	3 D	不定形	0.78	0.49	0.12	
S K 313	"	楕円形	0.43	0.32	0.07	
S K 314	"	円形	0.80	0.75	0.13	
S K 315	"	円形	0.46	0.40	0.05	
S K 316	3 F	不定形	1.00	0.90	0.08	
S K 317	"	円形	0.42	0.40	0.08	
S K 318	3 B	不定形	1.38	0.50	0.10	
S K 319	3 D	楕円形?	0.62	0.40	0.04	S D 311に切られる

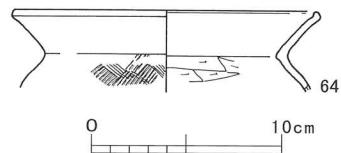
#### 溝(S D)

総数で14条(S D 301～S D 314)を検出した。S D 308を除けば、幅0.32～1.27m、深さ0.07～0.13m程度の小規模なものが大半を占めた。流路方向は北東～南西方向に伸びるものが多く、第2区と同様の傾向を示すが、第2区で検出した溝遺構との連続関係を明確に出来たものは無い。出土遺物は古墳時代初頭(庄内式期)を主体としているが、細片化したものが大半で、量的にも僅少である。そのうち、S D 304・S D 305の出土遺物を図化した。

**S D 304出土遺物** 1点(67)を図化した。67は広口壺(広口壺D)の口頸部の小破片である。復元口径22.4cmを測る。器面調整は内外面共に横位のヘラミガキを多用している。色調は淡灰褐色。非

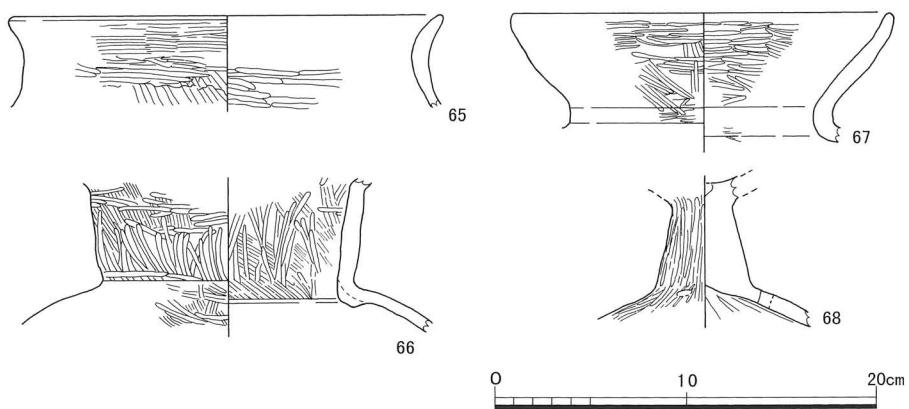


第21図 S K 304平面面図



第22図 S K 304出土遺物実測図

生駒西麓産。庄内 I 期に盛行するものである。S D 305出土遺物 3 点(65・66・68)を図化した。65は広口壺の口縁部と推定される。復元口径22.5cmを測る。66は大形の二重口縁壺(複合口縁壺B<sub>1</sub>)と推定されるもので体部上半から頸部が残存している。



第23図 S D 304(67)、S D 305(65・66・68)出土遺物実測図

頸部はほぼ直上方に直線的に伸びる。器面調整は内外面共に1次調整として左上がりのハケの後、2次調整として縦位のヘラミガキを施す。非生駒西麓産。68は小形の有稜高杯の脚部片である。スカシ孔が3個穿たれている。柱状部は中実である。色調は淡橙色。遺構の帰属時期は庄内 I 期である。

第7表 第3区 溝(S D)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S D 301	3 B	北東-南西	2.25	0.43	0.09	S K 303・304に切られる。庄内甕片、弥生土器片
S D 302	"	"	2.96	0.40	0.09	S K 303・304に切られ、S K 305を切る。庄内甕片
S D 303	"	北-南	0.90	0.32	0.07	S K 306・307に切られる。
S D 304	3 C	東-西	5.65	0.59	0.11	S K 310・S O 301・S D 305を切る。古式土師器片
S D 305	"	北東-南西	1.90	0.58	0.13	S D 304に切られる。古式土師器片
S D 306	3 D	北-南	0.78	0.40	0.07	S D 307に切られる。
S D 307	3 D E	北東-南西	3.25	0.62	0.11	S D 306を切る。
S D 308	3 F	"	2.40	4.30	0.20	弥生土器片
S D 309	3 E F	"	2.32	0.60	0.08	庄内甕片、弥生土器片
S D 310	"	L字形	5.10	0.25	0.07	古式土師器
S D 311	3 D	北東-南	0.92	0.14	0.03	S K 319を切る。
S D 312	3 G	北西-南東	4.25	1.27	0.09	S D 313・314と合流。
S D 313	"	北-南	1.00	0.74	0.12	S D 312・314と合流。
S D 314	"	北東-南西	0.90	0.45	0.10	S D 312と合流。

### 小穴(S P)

第3区からは、総数で5個(S P 301～S P 305)の小穴を検出した。遺構の分布は調査区東部の3 B C 地区と西部の3 F 地区にみられる。上面形状では、円形および橢円形のものに二分される。規模は径0.19～0.51mで、深さは0.08m程度のものが大半であることから、建物を構成した柱穴とは言い難い。埋土は10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト～シルトである。S P 301から古式土師器片が極少量出土している。

第8表 第3区 小穴(S P)法量表(単位m)

遺構番号	地区	上面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P 301	3 B	橢円形	0.51	0.33	0.08	S D 302を切る。古式土師器片
S P 302	3 C	円形	0.23	0.19	0.07	
S P 303	"	橢円形	0.40	0.34	0.08	
S P 304	3 F	円形	0.26	0.25	0.07	
S P 305	"	"	0.32	0.30	0.08	

## 落ち込み(SO)

### SO301

第3区東部の3B地区で検出した。西部でSD304を切り、北部は調査区外に至る。検出部分で東西幅2.58m、南北幅1.8m、深さ0.15mを測る。埋土は2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトの単一層である。遺物は出土していない。

### SO302

第3区西部の3F地区で検出した。西部および南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅3.18m、南北幅1.2m、深さ0.05mを測る。埋土は5Y2/1黒色シルトの単一層である。

### SO303(図版七)

第3区西拡張区の3HI地区で検出した。調査区の北西端で肩の一部が確認できた以外は不明である。広範囲に広がる可能性が高いもので、東部はSE301に切られている。検出部分で東西幅3.7m、南北幅2.37m、深さ0.3mを測る。埋土は7.5Y2/1黒色微砂混粘土質シルトで0.5~1cm大の砂礫を多く含んでいる。遺物は古式土師器の細片が多く出土しているが、図化し得たものは無い。

## 井戸(SE)

### SE301(図版七)

第3区西拡張区東部の3HI地区で検出した。SO303を切っている。大半が調査区外に伸びるため、平面形態は不明だが、検出部分で東西幅2.5m、南北幅1.0m、深さ0.26mを測る。井戸側などは見つかっていないが、埋土(10Y3/1オリーブ黒色粘土)中に細砂や暗青灰色粘土のブロックを含むことから井戸と判断した。北壁断面では遺構の上部は攪乱されており、本来の構築面は明確にはできないが、細砂層のブロックを多く含むことから近世以降の井戸と推定される。

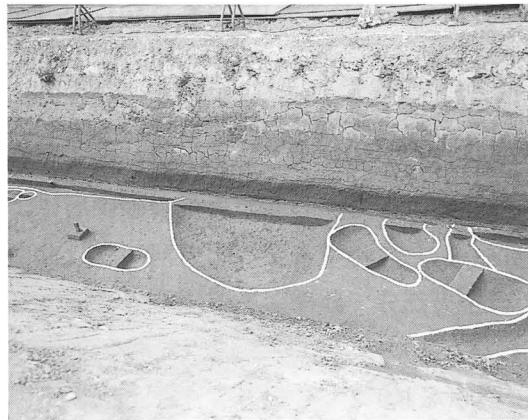


写真2 第3区 SO301検出状況(南から)

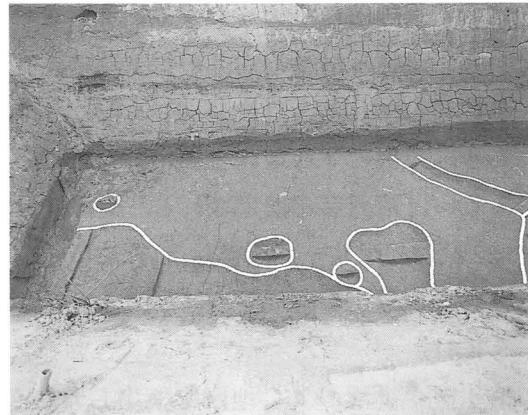


写真3 第3区 SO302検出状況(南から)

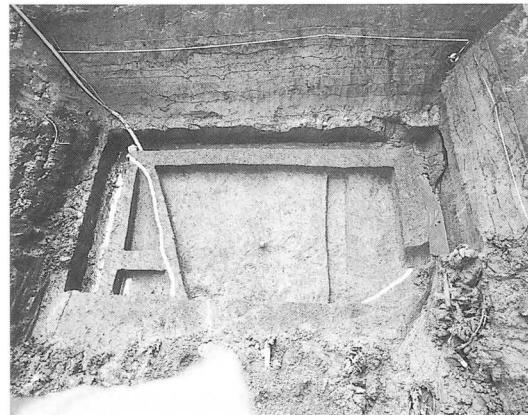


写真4 第3区拡張区 SE301検出状況  
(北から)

#### 第4区(第5図、図版八・九)

遺構構築面は現地表下1.5~2.0m(T.P.+6.6~6.3m)付近に存在する第IX層上面で、土坑24基(S K401~SK424)、溝16条(S D401~SD416)、小穴3基(SP401~SP403)、落ち込み3基(S O401~SO403)を検出した。

本調査区では遺構構築面が第1~3区と比較して明らかに高位置で検出されている。特に調査区東側において顕著である。これはA~B区にかけて弥生時代後期初頭以前に埋没した河川跡があり、これがもたらした大量の砂礫層によって形成された微高地上に居住域を構成する遺構群が設けられたためである。この河川跡は北西から東南に向かって伸びており、第5~7区はトレンチの中央部分で砂礫層を確認している。

#### 土坑(S K)

##### S K401

第4区西端の4G地区で検出した。大半が調査区外にあるため全容は不明である。東西幅1.58m、南北幅1.2m、深さ0.42mを測る。埋土は粘土~粘土質シルトが優勢な3層に分層される。遺物は古式土師器の小破片が少量出土している。図化出来なかったが小形丸底壺の小破片を含むことから、遺構の帰属時期は布留Ⅰ期に比定される。

##### S K402

第4区西部の4G地区で検出した。北部が調査区外に至るが、検出部分からみて平面形態は円形あるいは楕円形と推定される。検出部分で東西幅2.92m、南北幅1.06m、深さ0.15mを測る。埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色粘土質シルトで炭化物がわずかに混じる。遺物は古式土師器が小量出土しているが図化し得たものはない。

##### S K412

第4区中央部の4C地区で検出した。南部が調査区外に至る土坑で、北部ではSD415、SD416を切っている。平面形態は方形に近いと推定されるが、明確ではない。検出部分で東西幅4.05m、南北幅1.94m、深さ0.11mを測る。埋土は、砂礫を含む7.5Y3/1オリーブ黒色シルトで炭化物が多く見られる。この土坑内の西部には底部から切り込むSK420がある。SK420については炉の可能性を持つものであり、両者が有機的な関連を持っていたと考えられる。しかし、本遺構を居住跡とするには平面形態が不定形であることから、焼成土坑の性格を有するSK420に付随した性格の土坑と考えておきたい。遺物は古式土師器片が少量出土しているが、小破片のため時期を明確にし難いがSK420との関係からみて遺構の帰属時期は布留Ⅰ期が考えられる。

##### S K416

第4区中央部の4D地区で検出した。北部が調査区外に広がるため平面形態は不明である。検出部分で東西幅1.0m、南北幅0.52m、深さ0.27mを測る。埋土は2層に分けられ、上部は7.5Y4/1灰色シルトで炭化物が少量混じる、下部は5GY4/1暗緑灰色シルトで底部に炭化物が見られた。遺物は古墳時代初頭後半(庄内式新相)の古式土師器の小破片が出土している。

##### S K417

第4区中央部の5D地区で検出した。北部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.35m、南北幅1.29m、深さ0.17mを測る。埋土は上部が10Y3/1オリーブ黒色シルト、下

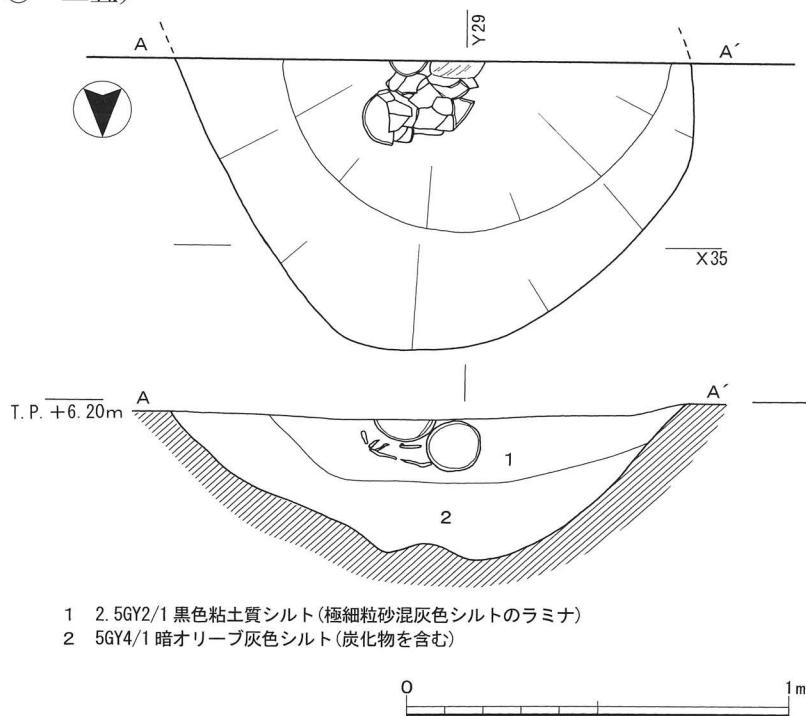
部は10Y4/1灰色シルトである。遺物は小破片のため図化出来なかつたが、布留Ⅰ期に比定される庄内式甕、小形器台、小形丸底壺等の古式土師器が極少量出土している。

### S K419

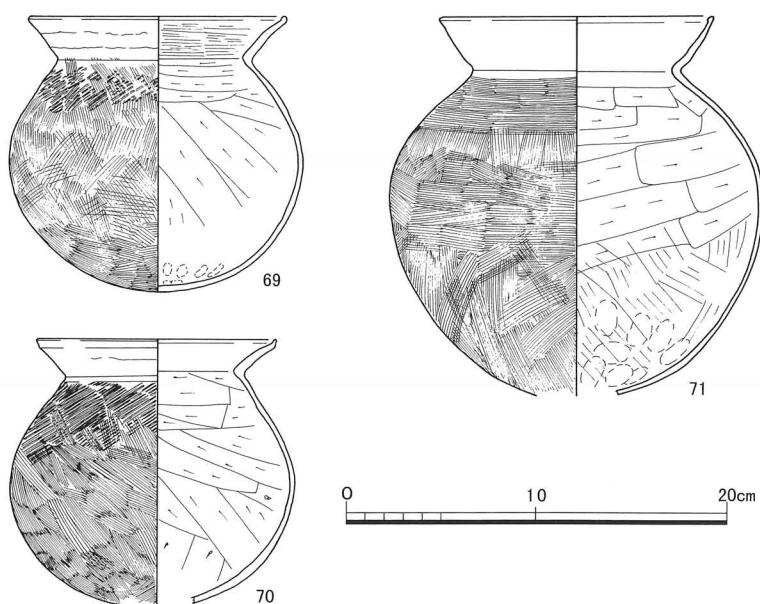
S K417の東に隣接している。北部が調査区外に至るため全容は不明である。中央部分を S D415 に切られている。検出分部で東西幅2.28m、南北幅1.28m、深さ0.12mを測る。埋土は10Y4/1灰色シルトである。遺物は小破片のため図化出来なかつたが、布留Ⅰ期に比定される、庄内式甕等の古式土師器が極少量出土している。

### S K420(第24・25図、図版一〇・二五)

第4区中央部の4C地区で検出したS K412の底部で検出した。南側が調査区外に広がるが、平面形態は円形あるいは橢円形と推定される。検出部分で東西幅1.45m、南北幅0.4m、深さ0.35mを測る。埋土は2層から成る。上層の1層2.5GY2/1黒色粘土質シルトからは、布留式甕が完形で1個体、そしてその下部に潰れた状態で1個体が藁を焼いた炭化物層の上面で出土した。こうしたことから炉跡的な性格を持つものと考えられるが、土器には煮炊による焼成痕や吹きこぼれ痕がなく断定はできない。また、炭化物層は灰白色的粘土質シルトを挟んで2層あることが確認され、さらにこの下層の2層5GY4/1暗オリーブ灰色シルトにも炭化物が少量ではあるが全体に混じったような状況でみられたことから、2度以上の焼成が行われたことが窺える。なお、性格を同じくする遺構は第5区で検出し



第24図 S K420平面面図

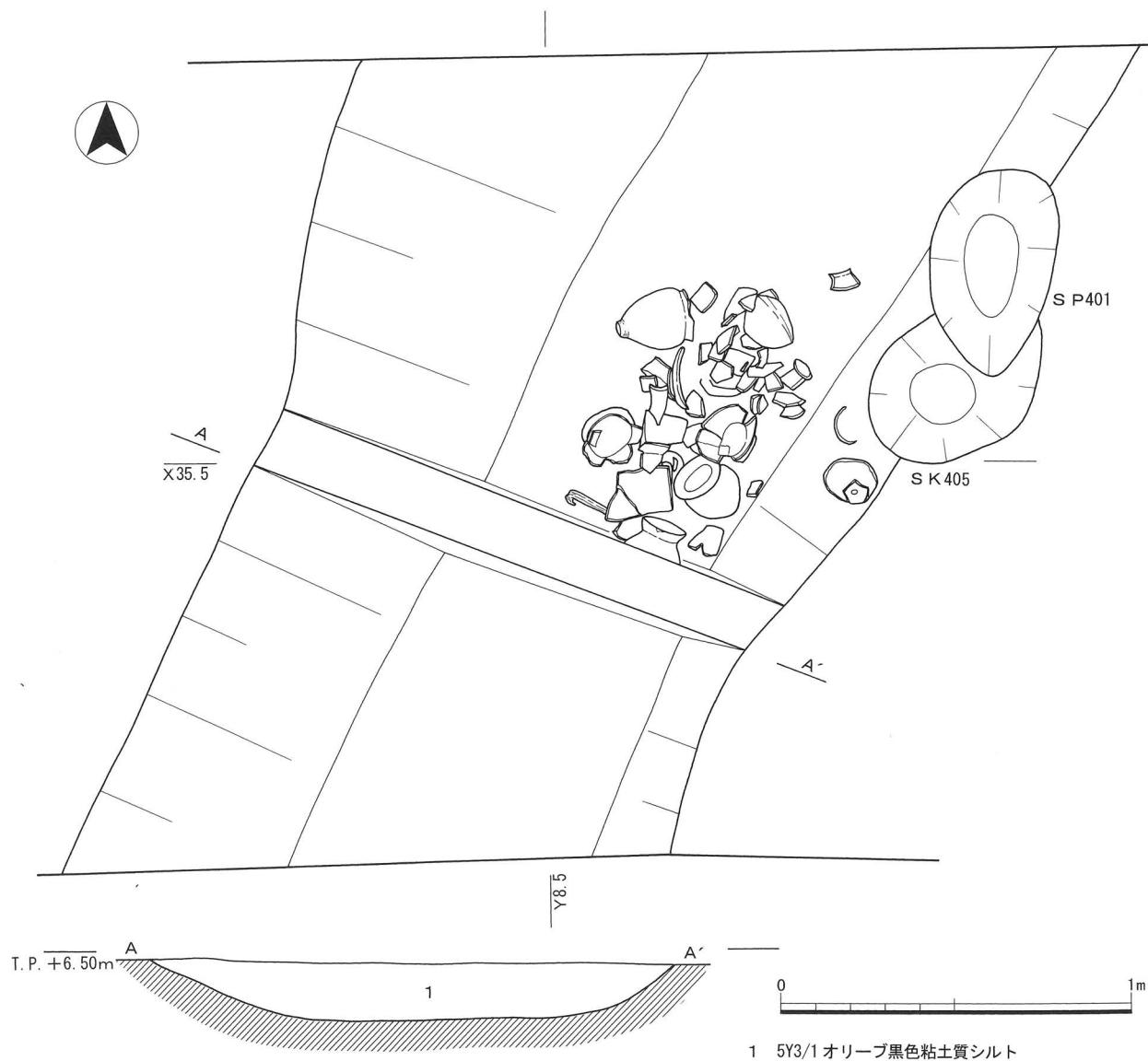


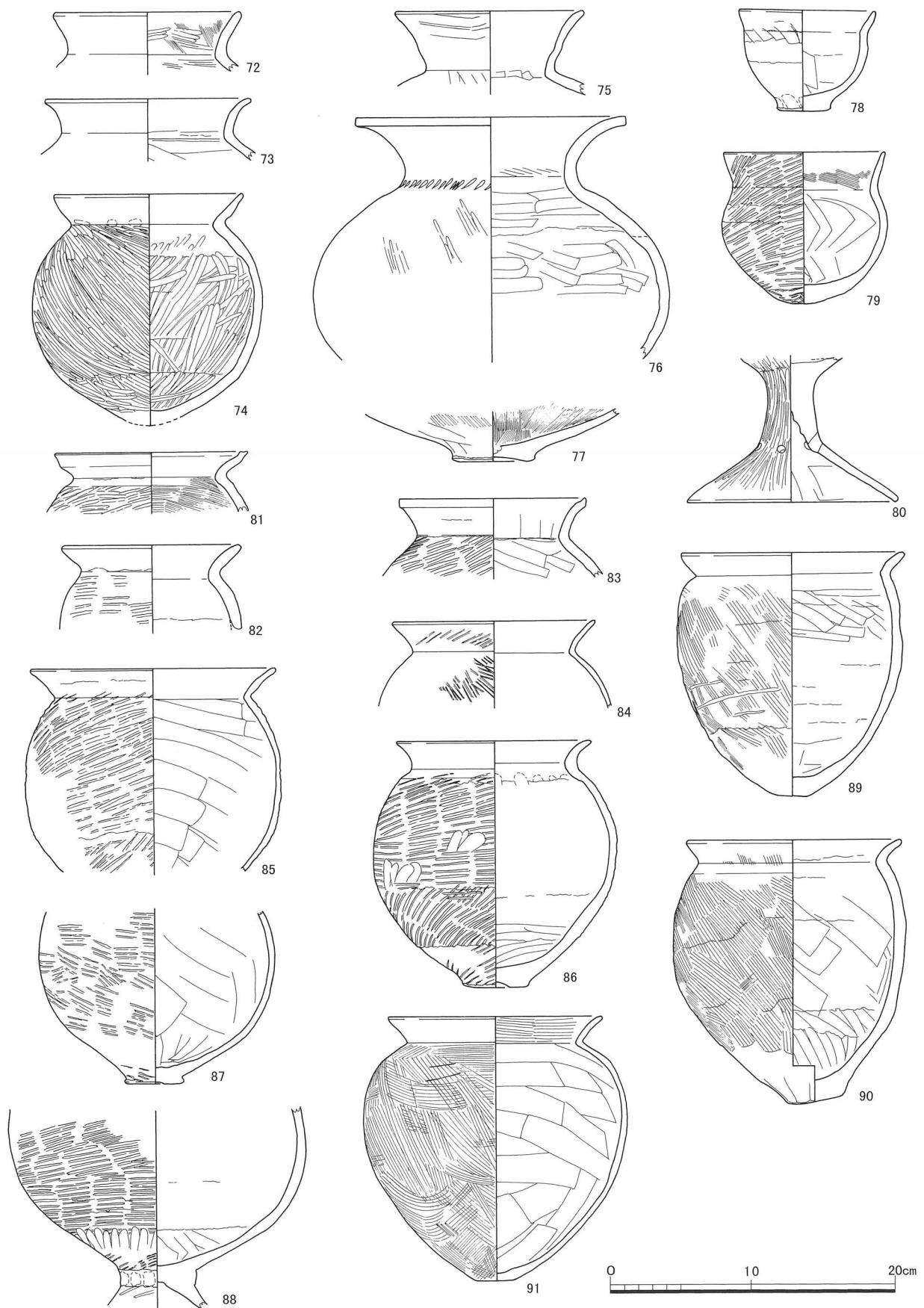
第25図 S K420出土遺物実測図

たSK504がある。遺物は1層から出土している。3点(69~71)を図化した。69・70は小形の庄内式甕である。球形の体部に「く」の字に鋭く屈曲する口縁部が付く。共に体部外面は上位がタタキ、以下はハケによる調整で、体部内面はヘラケズリによる調整が行われている。共に布留式古相段階に存在する河内型庄内式甕の最終段階の甕(甕B<sub>4</sub>)で、69に付いては布留式甕にみられる底部指頭圧痕が見られる。共に生駒西麓産である。71は布留式甕の最古形態を持つ(甕F<sub>1</sub>)に分類される。底部を欠く以外は完存している。口径14.2cm、体部最大径19.6cmを測る。出土遺物から、遺構の帰属時期は布留Ⅰ期に比定される。

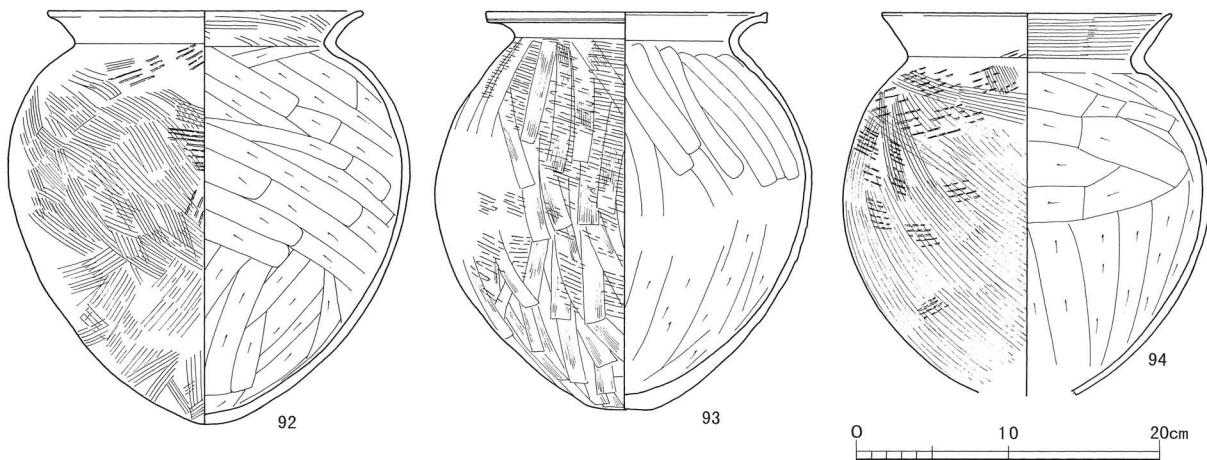
#### SK424(第26~28図、図版一〇・二五~二七)

第4区東部の4A地区で検出した。SD406に切られている。南北端は調査区外に伸びるが、南側は徐々に浅くなっていることから、南部には大きくは広がらないと推定される。検出部分で東西幅1.55m、南北幅2.3m、深さ0.6mを測る。埋土は1層で5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトに7.5Y5/1灰色シルトが混じる。遺構中央部分の約1.0×0.8mの範囲で古式土師器が密集した状態で





第27図 SK 424出土遺物実測図－1



第28図 S K424出土遺物実測図－2

出土した。土器は破片が目立つが完形も数点含まれている。また、加工を施した木板の残片等が出土している。

23点(72~94)を図化した。壺は72~77を図化した。72~74は広口壺である。72~74は口縁部が短く外反する(広口壺A)である。3点とも口縁部の小片である。74は「く」の字に屈曲する口縁部を持つもので、形態的には甕形土器に近いが、肉厚で重厚な作りで体部外面の器面調整にヘラミガキを多用することの他、外面の底体部に煤の付着が無いことから壺形土器に分類した。完形品で口径13.2cm、器高16.4cm、体部最大径16.2cmを測る。75は短頸壺(短頸壺A)にあたる。76は頸部が直上に短く伸びた後、口縁部が大きく外反する(広口壺B)に分類される。体部と頸部の境にヘラ状工具による刺突文が廻る。77は壺の底部である。78・79は小形の鉢(鉢A<sub>2</sub>)である。体部外面の器面調整は78がナデ、79は右上がりのタタキである。底部の形状は78が突出した平底、79が小さな平底で裏面は窪む。80は有稜高杯であるが、杯部を欠く。脚部は完存しており裾部径14.6cmを測る。スカシ孔は裾部上位の5方に穿たれている。81~87はV様式系甕である。86が完形で口径13.6cm、器高17.5cm、体部最大径17.0cmを測る。底部が残存している86・87は共に少し突出した平底で裏面はドーナツ底である。88は高台が付く甕である。89・90は体部外面の器面調整に左上がりのハケを多用する甕である。形態的には、体部最大径が口径を僅かに凌駕する長胴形を呈する。底部の形状は突出平底の90と突出しない平底の89がある。91は体部外面の器面調整にハケを多用する(甕I)に分類される。1/2以上が残存しており、口径15.0cm、器高18.8cm、体部最大径18.5cmを測る。体部は上位に最大径を持つもので、底部は突出しない小さな平底である。非生駒西麓産。92~94は庄内式甕である。3点共に河内型庄内式甕の最古段階のもの(甕B<sub>1</sub>)に比定されるもので、形態や調整等の細部に違いが認められた。口縁部の形態は「く」の字に屈曲する92・94と外反し口縁端部に小さな面を作る93がある。体部形態では体部最大径を上位に持つ92と球形を呈する93・94がある。底部形態では、底部を欠く94以外では平底の93と尖り底の92がある。器面調整は体部外面がタタキの後、ハケ、体部内面はヘラケズリを多用する92・94と体部外面の上位から中位にかけてタタキの後、ナデ、体部内面は上位が指ナデ、中位以下にヘラケズリを行う93がある。92・94が生駒西麓産、93が非生駒西麓産である。遺構の帰属時期は庄内I期に比定される。

第9表 第4区 土坑(S K)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S K403	4 F	不明	1.30	0.4	0.07	
S K404	4 A	"	0.94	0.93	0.41	
S K405	"	楕円形	0.64	0.54	0.06	S P401に切られる。古式土師器
S K406	4 B	不明	0.92	0.36	0.06	
S K407	"	不定形	2.03	0.95	0.13	庄内式甕等の古式土師器
S K408	4 B C	"	2.77	0.65	0.16	S D409に切られる。古式土師器(庄内Ⅲ)
S K409	4 C	円形	0.90	0.65	0.15	S D409を切る。V様式系甕・古式土師器
S K410	"	楕円形	1.59	1.5	0.11	S K421・411、S D410に切られる。V様式系甕、庄内式甕等の古式土師器
S K411	"	"	0.62	0.52	0.08	S D410、S K410を切る。
S K413	4 F	不定形	1.45	0.62	0.12	V様式系甕
S K414	"	長方形	1.22	0.6	0.12	S D411に切られる。
S K415	"	楕円形	0.88	0.76	0.08	
S K418	4 C	円形	0.45	0.37	0.08	庄内式甕等の古式土師器
S K421	"	不明	1.52	0.26		
S K422	4 F	楕円形	0.58	0.49	0.07	
S K423	"	"	0.73	0.43	0.08	

## 溝(S D)

## S D403

第4区西部の4 F G地区で検出した。北西—南東に伸びる溝で、南北に伸びるS D401がこれに合流する他、S D402に切られている。検出長7.5m、幅0.53m、深さ0.07mを測る。断面形状は浅い皿状を呈する。埋土は7.5Y4/1灰色シルトである。V様式系土器片と古式土師器片が少量出土している。図化はしていないが古墳時代初頭後半(庄内式新相)の有稜高杯の脚部片等が含まれていることから、遺構の帰属時期としては庄内Ⅲ期が考えられる。

## S D414

第4区中央部の4 D地区で検出した。北—南東に伸びる溝で、検出長3.9m、幅1.15m、深さ0.17mを測る。断面形状はレンズ状を呈する。埋土は5Y4/1灰色極細粒砂混シルトで、炭化物が含まれていた。溝の性格は明確でないが、遺構が集中する場所に位置することから、取排水に用いられたものと推定される。古式土師器片が少量出土しているが図化し得たものはない。

第10表 第4区 溝(S D)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S D401	4 F	北—南	0.75	0.70	0.06	S D403を切る。古式土師器(庄内Ⅲ)
S D402	"	"	2.30	0.30	0.06	S D403を切る。
S D404	4 A	北東—南西	1.15	0.22	0.05	
S D405	4 A B	"	2.96	0.28	0.06	S D406を切る。古式土師器
S D406	"	"	5.80	0.30	0.06	S K424を切る。
S D407	4 B	北—南	1.48	0.35	0.05	
S D408	"	"	1.65	0.32	0.06	
S D409	4 C	"	2.34	0.68	0.09	S D410から分岐。S K409に切られる。古式土師器
S D410	"	"	2.40	0.80	0.09	S K411に切られ、S K410を切る。
S D411	4 F	"	2.04	0.65	0.12	S K414を切る。庄内式甕
S D412	"	"	2.30	0.25	0.07	
S D413	4 E	"	0.90	0.48	0.10	
S D415	4 C	北西—南東	1.10	0.60	0.08	S K419を切り、S K412に切られる。
S D416	"	"	0.80	0.48	0.10	S K412に切られる。V様式甕・古式土師器

### 小穴(S P)

第4区においては、小穴3個(S P 401～S P 403)を検出した。散発的な分布でまとまりを欠いている。平面形状では円形、橢円形がある。規模は径0.24～0.66m、深さ0.1～0.18mを測る。遺物はS P 401からV様式系土器片と古式土師器片、S P 403から布留式甕片等が極少量出土している。

第11表 第4区 小穴(S P)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P 401	4 A	橢円形	0.66	0.45	0.18	S K 405を切る。V様式系土器、庄内式甕
S P 402	4 C	円形	0.40	0.34	0.15	
S P 403	4 F	〃	0.27	0.24	0.10	布留式甕

### 落ち込み(S O)

落ち込み遺構は、第4区中央部より東部の4B～4D地区にかけて3基(S O 401～S O 403)を検出した。全て南部が調査区外に伸びるため全容は明らかではないが、東西方向に長い橢円形を呈するものと思われる。S O 401・S O 402は埋土中に砂礫が多く含まれている。遺物はS O 401から古墳時代初頭後半(庄内式新相)、S O 402からは古墳時代前期前半(布留式古相)、S O 403からは古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定されるV様式系土器、古式土師器類が少量出土したが図化し得たものはない。



写真5 第4区 S O 403他検出状況(南から)

第12表 第4区 落ち込み(S O)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S O 401	4 B	不明	5.45	1.05	0.19	S D 406を切る。V様式系土器、古式土師器(庄内Ⅲ)
S O 402	4 B C	〃	3.36	0.76	0.08	S D 409に切られる。古式土師器、布留式甕(布留Ⅰ)
S O 403	4 D	〃	0.65	0.81	0.05	V様式系甕、庄内式甕(庄内Ⅰ)

## 第5区(第5図、図版一一～一三)

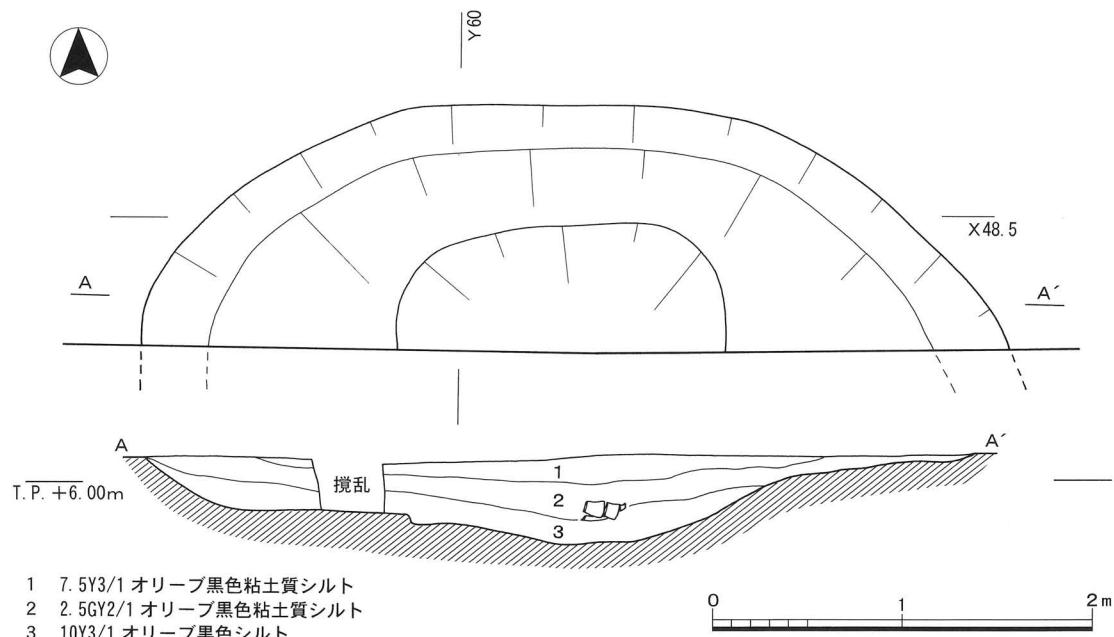
遺構構築面は現地表下1.5～2.0m(T.P.+6.7～6.1m)付近に存在する第IX層上面で、土坑21基(SK501～SK521)、溝11条(SD501～SD511)、小穴6個(SP501～SP506)、落ち込み2基(SO501・SO502)と近世の井戸1基(SE501)を検出した。

本調査区においても高位で遺構が検出されている。第4区で確認した弥生時代後期初頭以前に埋没した河川跡は5A地区～6C地区付近まで広がっている。

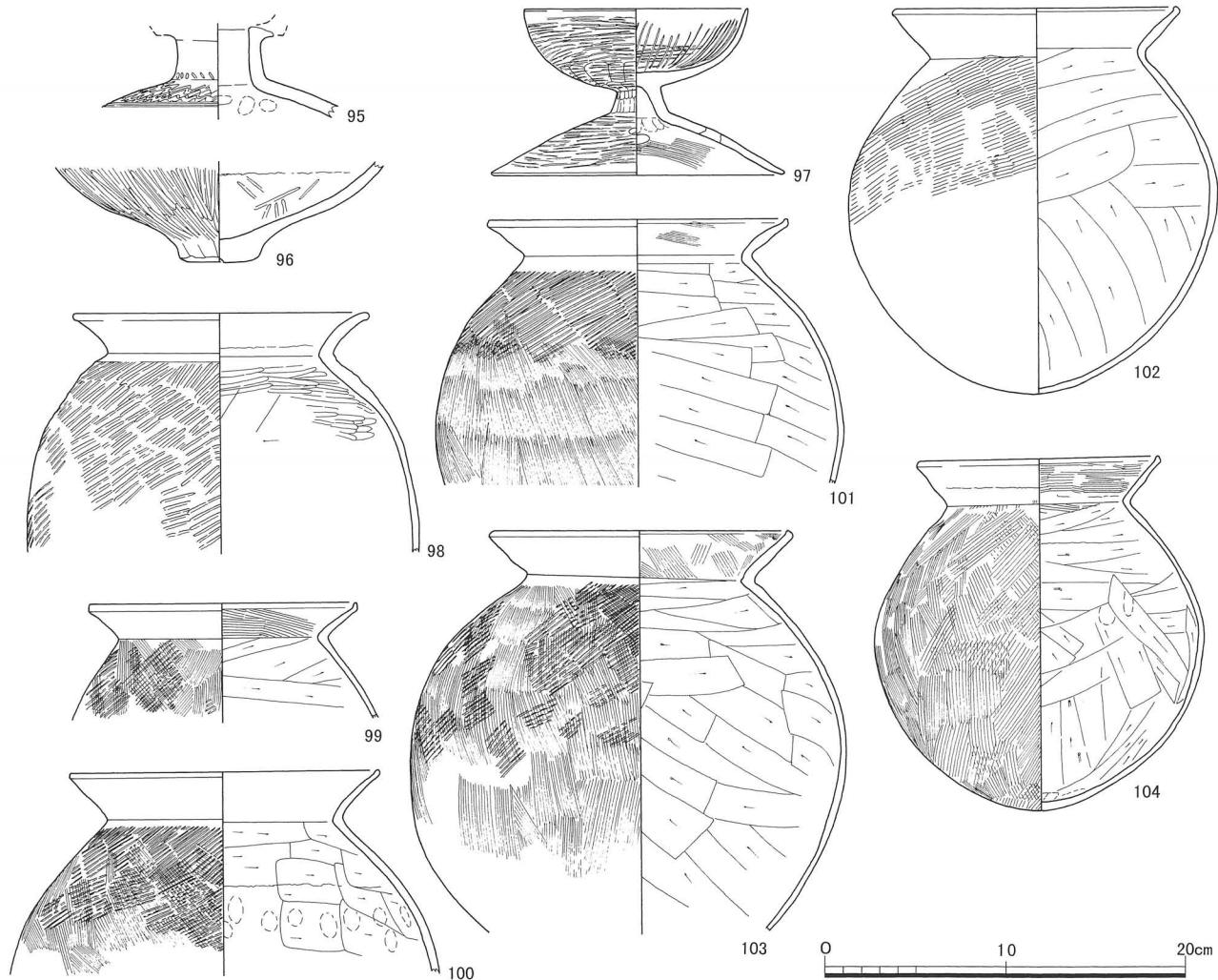
### 土坑(SK)

#### SK501(第29・30図、図版一四・二七)

第5区西部の5FG地区で検出した。南部が調査区外に至るため全容は不明である。平面形態は円形あるいは楕円形を呈するものと見られる。検出部分で東西幅4.55m、南北幅1.3m、深さ0.5mを測る。埋土は3層に分かれる。上部から1層7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト、2層2.5GY2/1黒色粘土質シルト、3層10Y3/1オリーブ黒色シルトである。2、3層から古式土師器が大量に出土したが、土坑の中心部分が調査区の南側に位置したため、大半の遺物が側溝部分および南壁部分から取り上げたものである。古墳時代前期前半(布留式古相)を中心とした土器類で完形品も含まれている。土器以外では、朱が付着し、糸状のものを巻き付きつけた痕跡のある盾の残片が出土している。周辺には同時期の住居跡が認められないことから、日常雑器の廃棄土坑とするよりも祭祀に使用した土器や用材を廃棄した土坑ではないかと推定される。10点(95～104)を図化した。95は加飾の二重口縁壺の小片である。体部上半に波状文、頸部下半にヘラ先による刺突文が施文されている。色調は灰白色。96は壺の底部である。胎土中に角閃石を含む。97は精製の椀形高杯(高杯C<sub>2</sub>)である。図上で完形に復元が可能で口径12.3cm、器高9.4cm、裾部径16.2cmを測る。98はV様式系甕である。99～103は庄内式甕である。102は完形で口径15.2cm、器高21.4cm、



第29図 SK501平面断面図

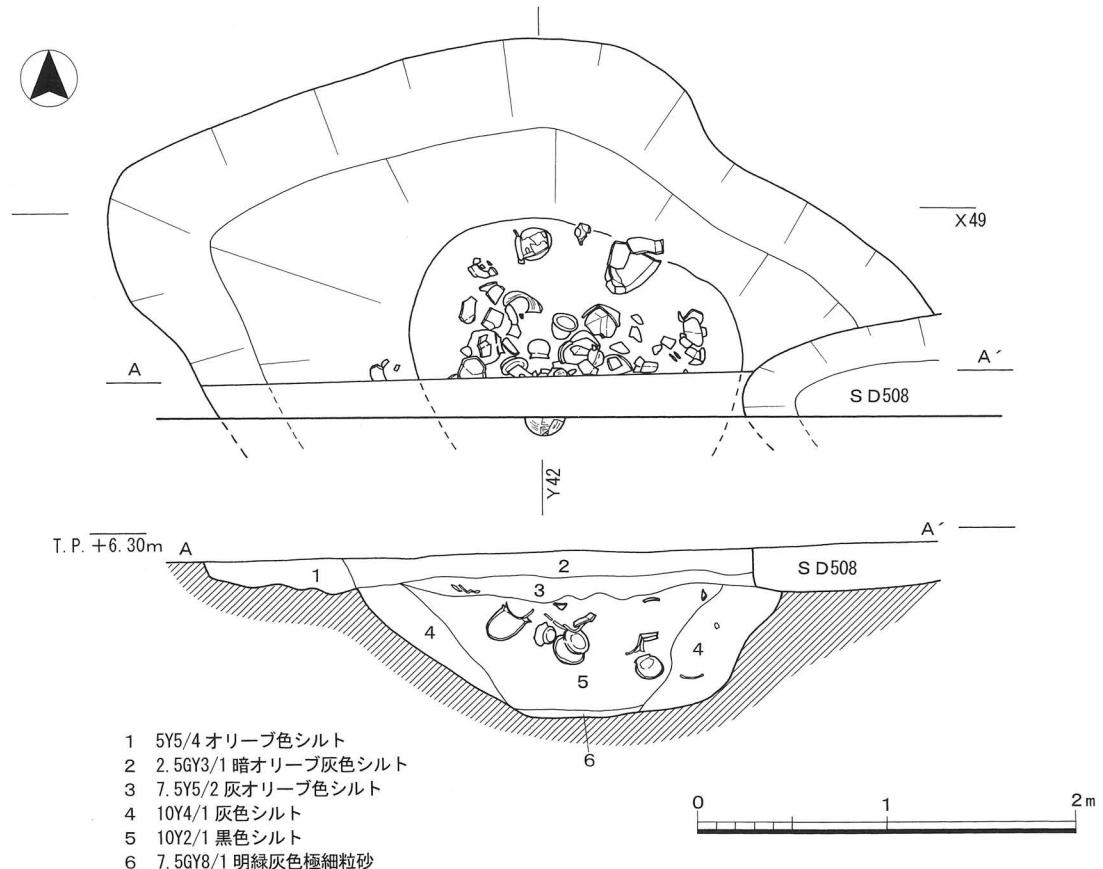


第30図 S K501出土遺物実測図

体部最大径20.4cmを測る。器形の特徴や体部外面の器面調整からみて河内型庄内式甕の最終形態の(甕B<sub>4</sub>)に分類される。103以外は生駒西麓産。104は体部外面の器面調整にハケを多用する甕で、布留式影響の庄内式甕である(甕D)に分類される。生駒西麓産。出土遺物から遺構の帰属時期は布留Ⅰ期に比定される。

#### S K502(第31~37図、図版一四・一五・二八~三三)

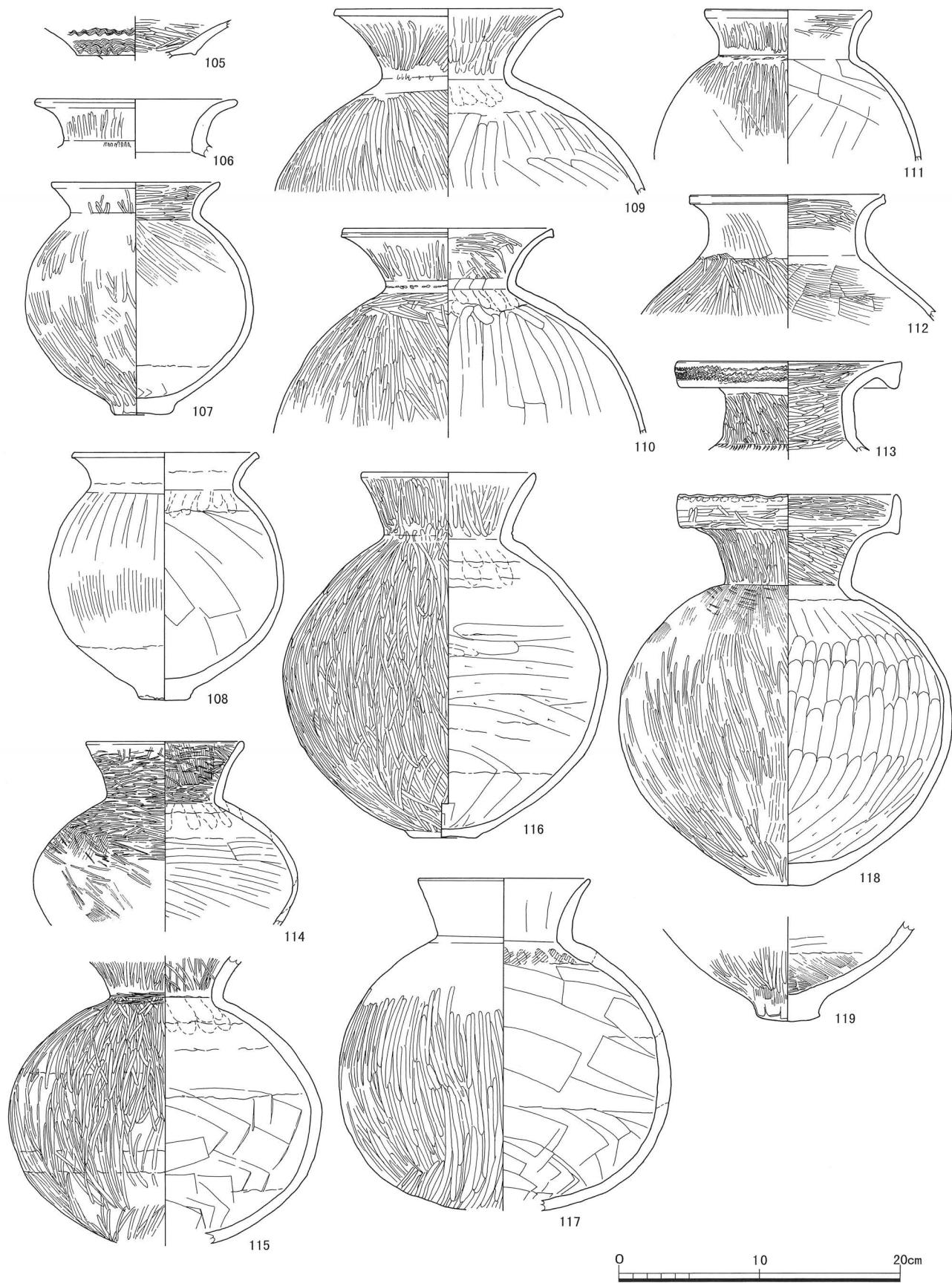
第5区中西部の5 D E区で検出した。南部が調査区外に至る他、東部がS D508に切られている。検出部分から平面形態は橢円形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅3.35m、南北幅1.9m、深さ0.9mを測る。埋土は摺鉢状の断面形状に沿って堆積しており、6層に分層が可能である。そのうち土坑の中心で約0.7mの厚みで堆積している5層10Y2/1黒色シルトからは大量の古式土師器類が積み重なるような状況で出土している。土圧や投棄の際に破損しているものが多いが、一個体として復元できるものが多数を占める良好な資料である。総数で93点(105~197)を図化した。甕類は15点(105~119)である。105は二重口縁甕の小片である。口縁部外側面に波状文が施文されている。色調は灰褐色。106~108は(広口甕A)である。107・108は小形の広口甕で共に完形である。107が口径11.8cm、器高16.6cm、108が口径12.8cm、器高17.6cmを測る。107が生駒西麓産。108が非



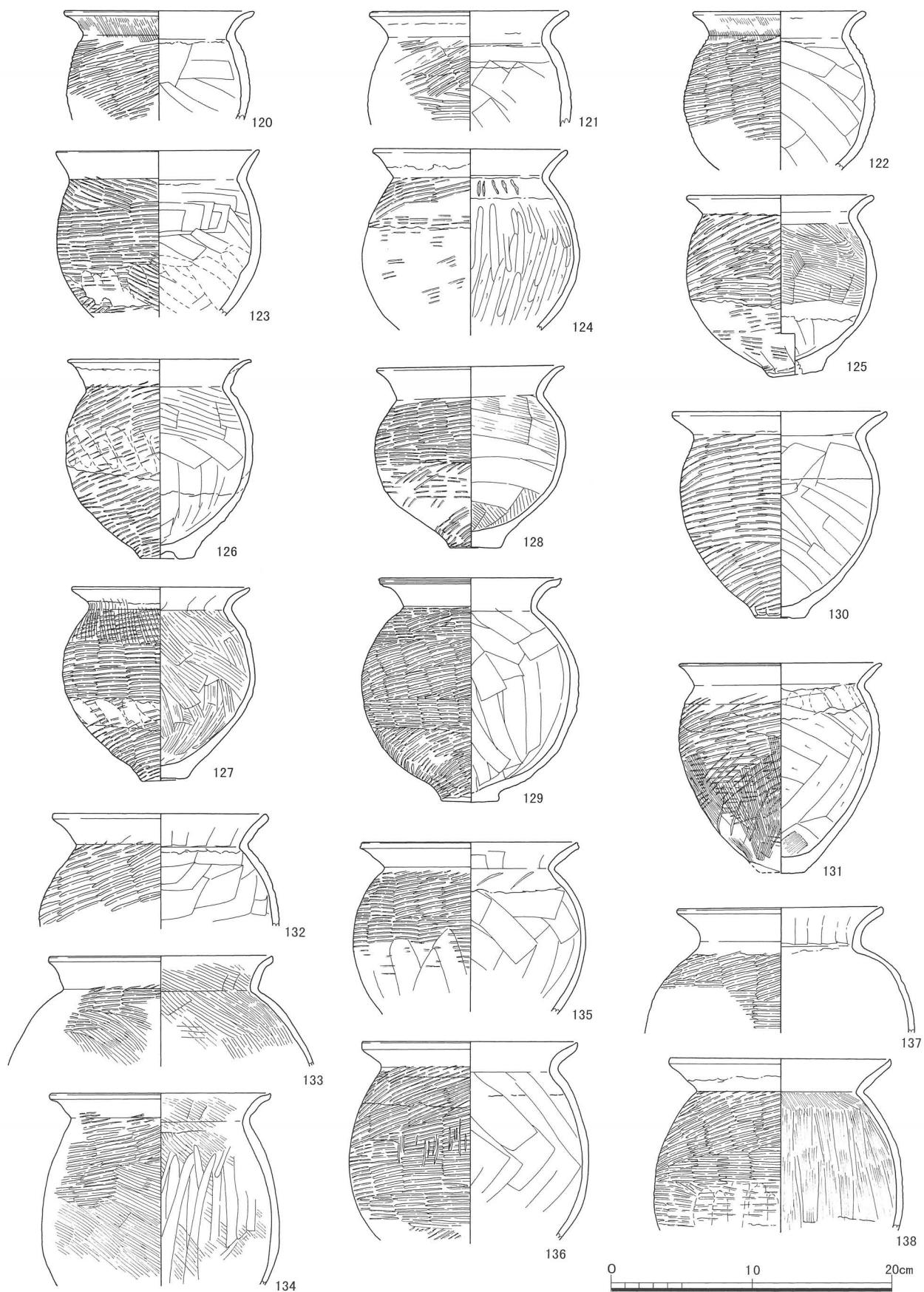
第31図 SK 502平面面図

生駒西麓産。共に体部外面に煤の付着が認められるもので、壺形土器としているが機能的には甕である。109・110は口頸部が大きく外反する口縁部を特徴とする(広口壺B)である。色調は共に淡灰褐色。胎土中に3mm以下の長石・石英・チャートを多く含む。111・112は頸部が直上に短く伸びた後、口縁部が外反して開く形態の口頸部を持つもので、111が(広口壺D<sub>1</sub>)、112が(広口壺D<sub>2</sub>)に分類される。共に非生駒西麓産である。113は口縁端部を垂下させ幅広の端面を作る広口壺である。口縁端面に波状文、頸部下半にヘラ先による刺突文が施文されている。庄内式古相段階においては類例の乏しいもので、弥生時代後期後半期に盛行する器種に近いことから混入品の可能性がある。114～117は(短頸直口壺A<sub>2</sub>)である。114が小形品、115～117が器高26cm前後の中形品。外面の器面調整は縦位にやや太めのヘラミガキを全面に行う115～117と横位に細かいヘラミガキを行う114がある。色調は橙色～浅黄橙色。非生駒西麓産。118は球形の体部に複合口縁が付く壺である。口縁端部の成形はやや雑で波状口縁を呈する。図上で完形に復元が可能で口径15.5cm、器高27.8cm、体部最大径23.4cmを測る。体部外面に煤の付着が認められる。色調は灰白色～浅黄橙色。胎土中に2mm以下の長石・石英・チャートを多量に含む。119は壺底部である。120～153はV様式系甕である。120～131は器高が16cm以下の小形品である。全容が明らかな125～131では、体部最大径が中位にあるものが125～129、上位にあるものが130・131である。口縁端部の形状は丸く終わるもののが大半を占めるが129については、外傾する端面を形成している。底部は突出平底のもの125～130と突出しない平底の131がある。底部裏面は平らなもの125・128～131とドーナツ底のもの126・127がある。体部外面のタタキ調整は二分割ないしは三分割でタタキの後、左上がりのハケを施す127・131があ

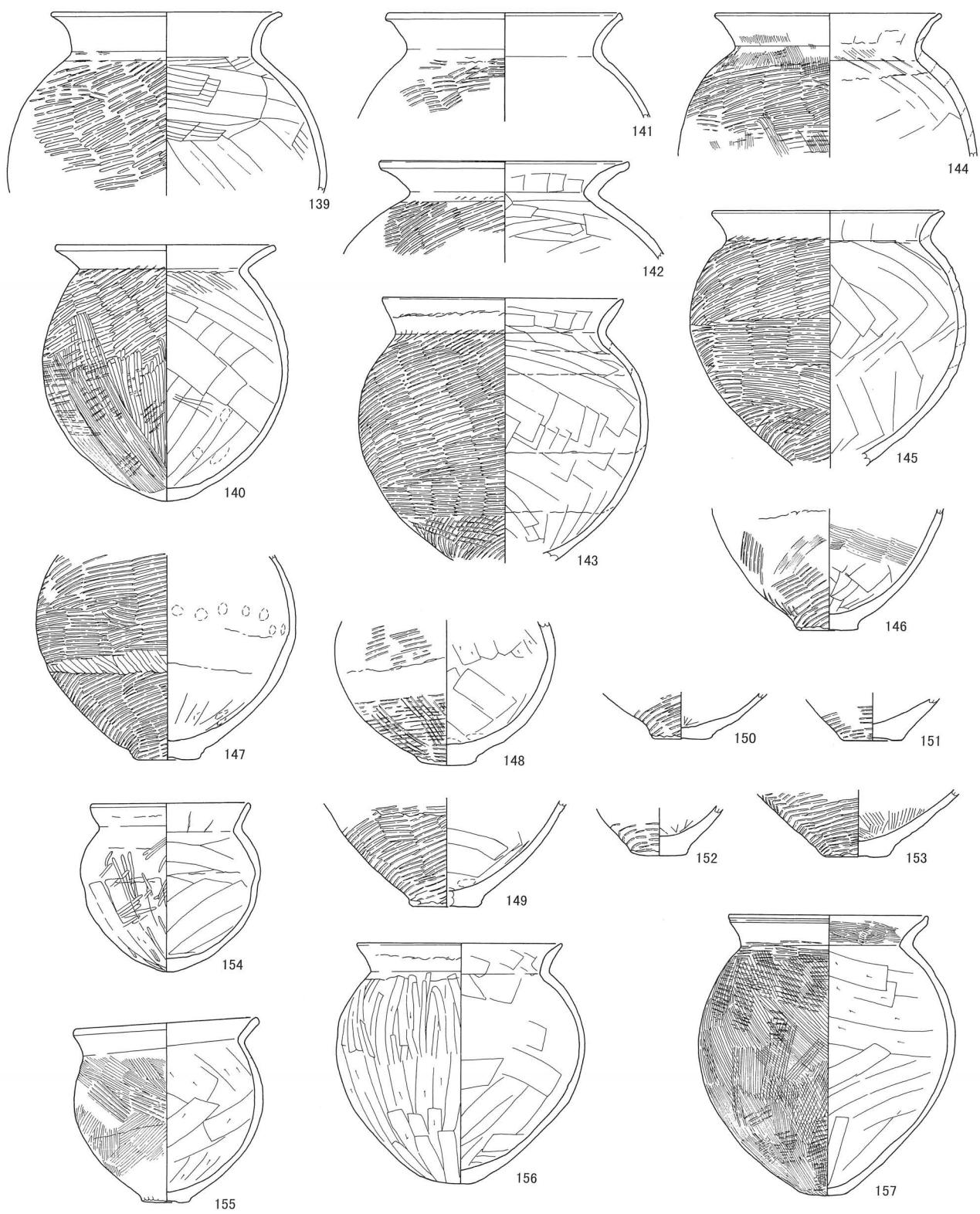
る。体部内面はナデ、板ナデ、ハケ状の条痕を残す板ナデの他、131のようにヘラケズリを行うものがある。生駒西麓産のものは123・131である。132～145は概ね器高が22cm以下の中形品と考えられる。全容を知りえたものは140のみであるが、小形品に比して口縁端部の形状はバラエティーがあり、丸く終わるもの、尖り気味で終わるもの、外傾する小端面作るもの、垂直方向に小端面を作るものがある。体部外面のタタキ調整は三分割でタタキの後、ハケによりタタキ調整を消すものが133・134・136・144の他、140のようにミガキによりタタキ調整を消すものがある。体部内面の調整は板ナデが主であるが、一部ハケのほかハケと指ナデを行う134がある。生駒西麓産のものは137・142～144である。146～153は体部上位～底部が残存するものである。底部の形状ではやや突出するものが146～150、突出しないものが151～153で、底部裏面の形状はドーナツ底のもの147・151、上げ底のもの146・150、平底のもの152・153がある。生駒西麓産のものは146～149である。154～156は体部外面調整にミガキ、ヘラケズリ、ハケを使用する甕である。そのうち、155については体部外面にハケ調整、体部内面にヘラケズリを行うもので、当該期の吉備系甕の影響により成立した(甕I)にあたり中河内地域では庄内式古相段階に存在する。生駒西麓産。154・156については、154が尖り底、156が平底を呈する。154が生駒西麓産。共に系譜を引く器種は無く、1型式として成立するものではないが、本例のように庄内式古相段階に体部外面にハケおよびタタキを施さないタイプのものが微量存在している。157～180は庄内式甕で169を除けばすべて河内型庄内式甕にあたる。157～169は器高が20cm以下の小形品である。体部の形態では、体部最大径を上位に持ち、体部外面のタタキ調整が三分割でタタキの後、縦位方向のハケを行う(甕B<sub>1</sub>)に分類されるものが157の1点のみで158～168は体部最大径を中位に持ち、体部外面は右上がりの連続ラセンタタキを行う(甕B<sub>2</sub>)に分類される。口縁端部の形状は端部が上方に拡張されて外傾ないしは垂直方向に小さな端面を形成する157～159・161～166・169、丸く終わるもの160・167がある。底部形態は突出しない平底でやや幅広の157を除けば、概ね小さな平底が中心である。体部外面のタタキ単位は太目で3本/cmを測る158・159の他は、中細の4～5本/cmのものが大半を占める。体部内面のヘラケズリは、概して単位が明瞭で深く削られたものが多く、中位ないしは上位でケズリの方向を変えるものが大半である。これらのヘラケズリにより「く」の字状に鋭い屈曲部を形成するものが一般的であるが、164・166・167のように屈曲部のやや下方で終わるため、やや丸みを帯びた屈曲部を形成するものがある。157以外は生駒西麓産である。169は体部外面のタタキ方向が左上がりである他、口縁屈曲部に丸味があり、体部内面のヘラケズリが屈曲部に及ばない等の特徴を持つもので、大和型庄内式甕(甕C)に分類される。生駒西麓産。170～180の庄内式甕は器高が20cm以上の中形品である。全て(甕B<sub>2</sub>)に分類される。口縁端部の形状は、端部が上方に拡張されて、外傾ないしは垂直方向に小さな端面を形成する171・172・175・176・179と丸味を持って終わる173・174・177・178がある。底部形態は突出しない平底で、丸味を持つ170・174・175、やや幅広の176、小さな平底を持つ178～180がある。体部外面のタタキは右上がりのラセン状タタキで、タタキの単位は176・177が3本/cmの他は4本/cmである。体部内面のヘラケズリは、底部から上位にかけて一気に行われるものと、中位ないしは上位でケズリの方向を変えるものがある。そのうち、屈曲部までヘラケズリが及ばないものは172・173・177で、172についてはヘラケズリの及ばない部分にハケメが残るため、ヘラケズリの前に1次調整としてハケ調整が行われていたことが推定される。全て生駒西麓産。181は北陸系甕(甕L)である。完形品で口径16.0cm、器高24.0cm、体部最大径21.8cmを測る。球形で



第32図 SK 502出土遺物実測図－1

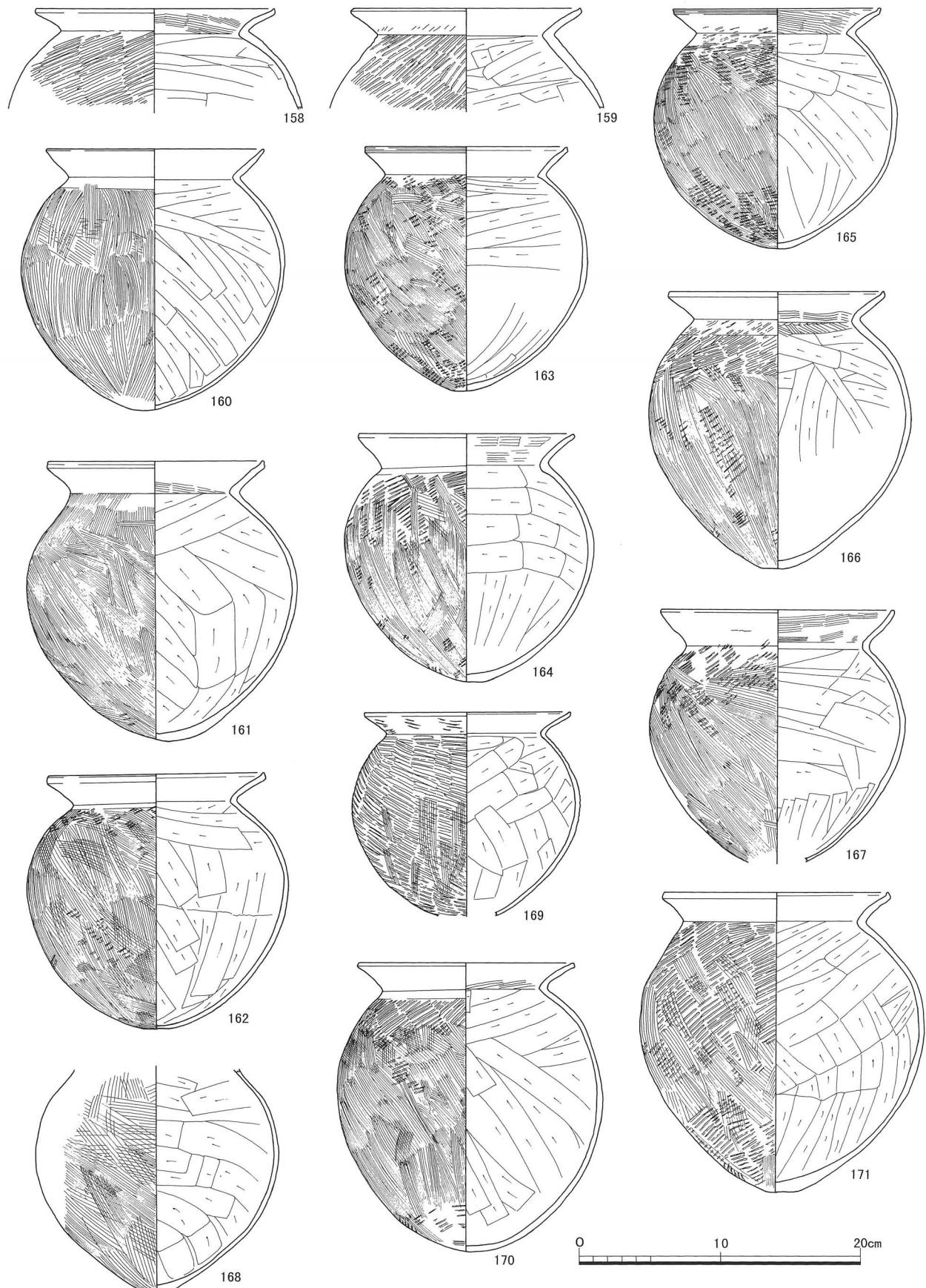


第33図 S K502出土遺物実測図－2

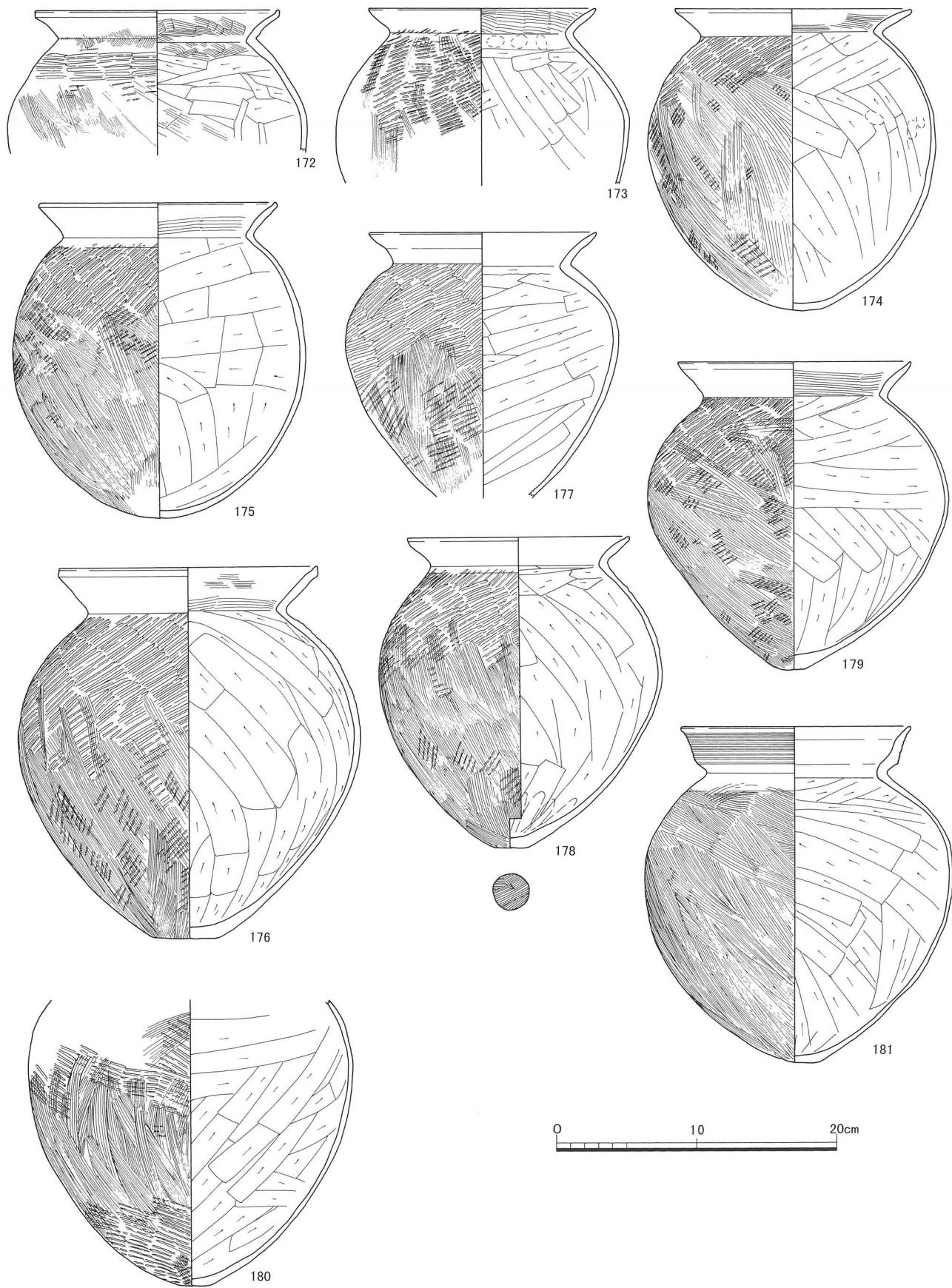


0 10 20cm

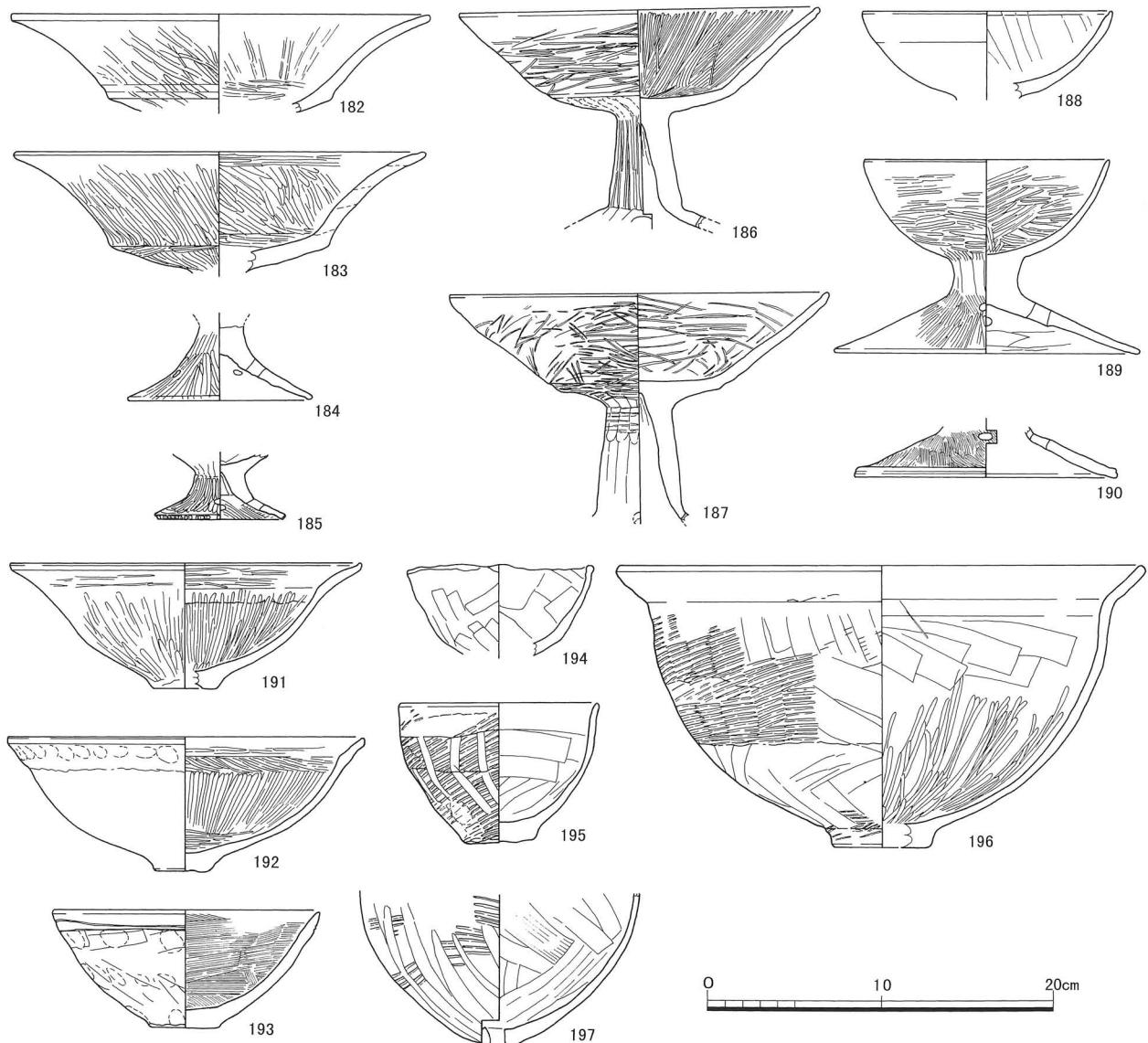
第34図 SK502出土遺物実測図-3



第35図 SK502出土遺物実測図－4



第36図 S K 502出土遺物実測図－5



第37図 S K502出土遺物実測図－6

体部上位に最大径をもつ体部に有段口縁が付く甕で口縁部外面に擬凹線を施す。底部は突出しない小さな平底である。体部外面の器面調整は左上がりのハケ、内面は底部から上位にかけてヘラケズリを行う。色調は浅灰褐色。胎土は良好で2mm大の長石粒が散見される程度である。石川県の漆町遺跡I(田島1986)による器種分類では、「月影式」系在地甕形土器の甕A<sub>1</sub>類に分類されるもので、時期的には漆町5・6群土器に盛行する器種とされている。河内地域の土器編年との対比では、庄内I期が漆町5群土器と併行するものとされており、編年的にも矛盾しない。河内地方での同時期の類例としては、成法寺遺跡SE-2(嶋村1986)があるが、口縁部外面に擬凹線を施すタイプの甕は類例が乏しい。なお、本調査地に北接し、同一集落を構成したと推定される竜華東西線1～5区の調査(西村2004)においても、当該期に比定される531井戸から北陸系の複合口縁甕が1点出土している。

高杯は9点(182～190)を図化した。182～187は有稜高杯である。口縁部が大きく外反して伸びる182・183が弥生系高杯で(高杯A<sub>1</sub>)に分類される。186・187は庄内系高杯の(高杯A<sub>2</sub>)に分類さ

れる。精製品で水平な杯底部から口縁部が外反気味に伸びる。杯部の器面調整は182・183が内外面共に縦位のヘラミガキ、186・187は外面が横位のヘラミガキ、内面は放射状に密なヘラミガキを行う186と、外面と同様横位のヘラミガキを行う187がある。柱状部は共に中空で、外面の調整は縦位にヘラミガキを行う186と、縦方向にナデにより平滑にした後、上部に横位のヘラミガキを行う187がある。色調は182が灰白色、183が淡褐灰色、186が浅黄橙色、187が赤褐色である。184・185は共に小形高杯の脚部である。スカシ孔は184が5方、185が4方に穿たれている。188～190は楕円形の杯部を持つ高杯(高杯C<sub>2</sub>)である。189は図上で完形に復元が可能で、口径14.2cm、器高11.2cm、裾部径17.6cmを測る。191～197は鉢である。191・192・196がV様式系鉢の系譜を引くもので(鉢A<sub>1</sub>)に分類される。191・192が口径20.0cm前後を測る中形品、196が口径30.0cmを測る大形品である。193～195は直口の口縁部に平底の底部が付く小形の鉢で(鉢B)に比定される。194は手づくね品。197は底部有孔鉢で口縁部を欠く。孔は径8～10mmで、焼成前に内から外に向かって穿たれている。出土土器類は器種組成が豊富で量的にも多く庄内II期の良好な資料である。

#### S K504

第5区西部の5G地区で検出した。SD501を切っている。円形を呈するもので、東西径1.23m、南北径1.05m、深さ0.28mを測る。この土坑は第4区で検出したSK420と類似した構造を持つもので、炭化した藁が灰白色粘土を挟んで2層確認できた。炉あるいは何らかの焼成に用いられた焼土坑と推定される。古式土師器に混じて少量のV様式系土器が出土している。

#### S K505

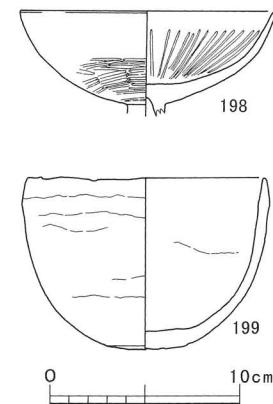
第5区西部の5G地区検出した。南部は調査区外に伸びるが楕円形を呈すると推定される。検出部分で東西幅2.5m、南北幅0.55m、深さ0.14mを測る。埋土は7.5Y5/2灰オリーブ色粘土質シルトである。古式土師器片が出土している。

#### S K506(第38・39図、図版三四)

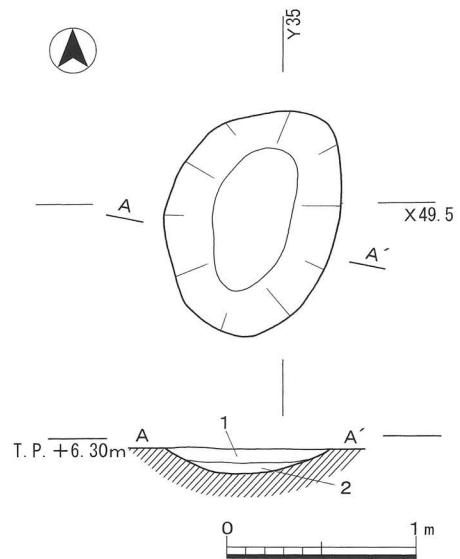
第5区中央部の5D地区で検出した。南北に長い楕円形を呈するもので、東西径0.91m、南北径1.24m、深さ0.12mを測る。埋土は2層で上層が5GY4/1明オリーブ灰色シルト、下層が10Y3/1オリーブ黒色シルトである。遺物は古式土師器が極少量出土している。1点(199)を図化した。199はやや深めの楕円形を呈する小形の鉢である。口径12.5cm、器高9.2cmを測る。全体に雑な成形で、波状口縁を呈する他、粘土紐の接合痕や器面にクラックが散見される。外面に煤の付着が認められる。色調は淡赤褐色。非生駒西麓産。

#### S K509(第40図、図版三四)

第5区東部の5A・B地区にかけて検出した。大半が調査区の南側に広がるが検出部分では、隅丸方形を呈すると推定される。検出部分で東西幅6.41m、南北幅1.6m、深さ

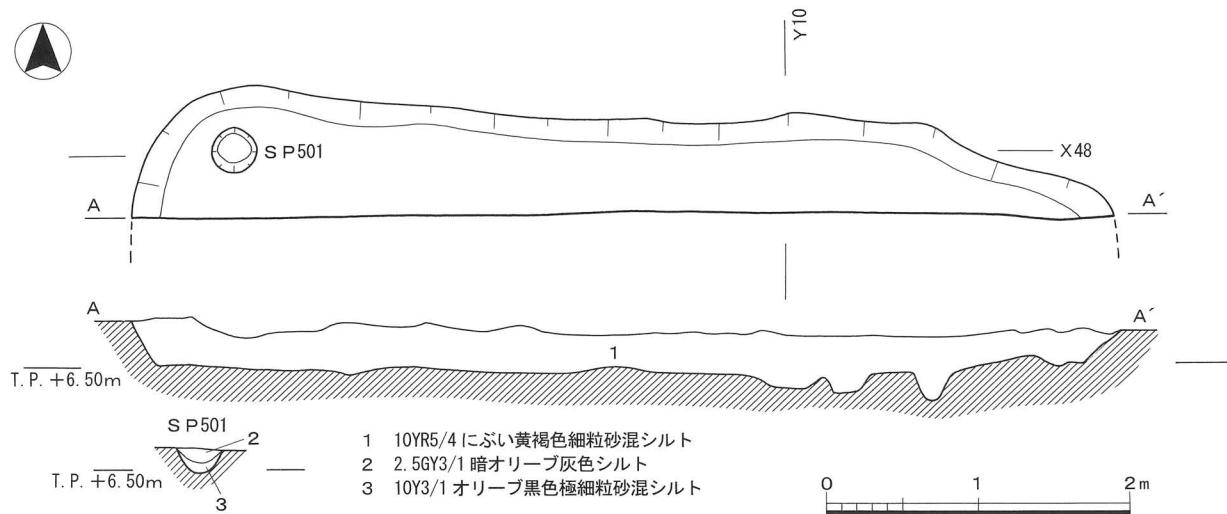


第38図 SK506(199)、SK509(198)出土遺物実測図



1 5GY4/1 暗オリーブ灰色シルト  
2 10Y3/1 オリーブ黒色シルト

第39図 SK506平面断面図

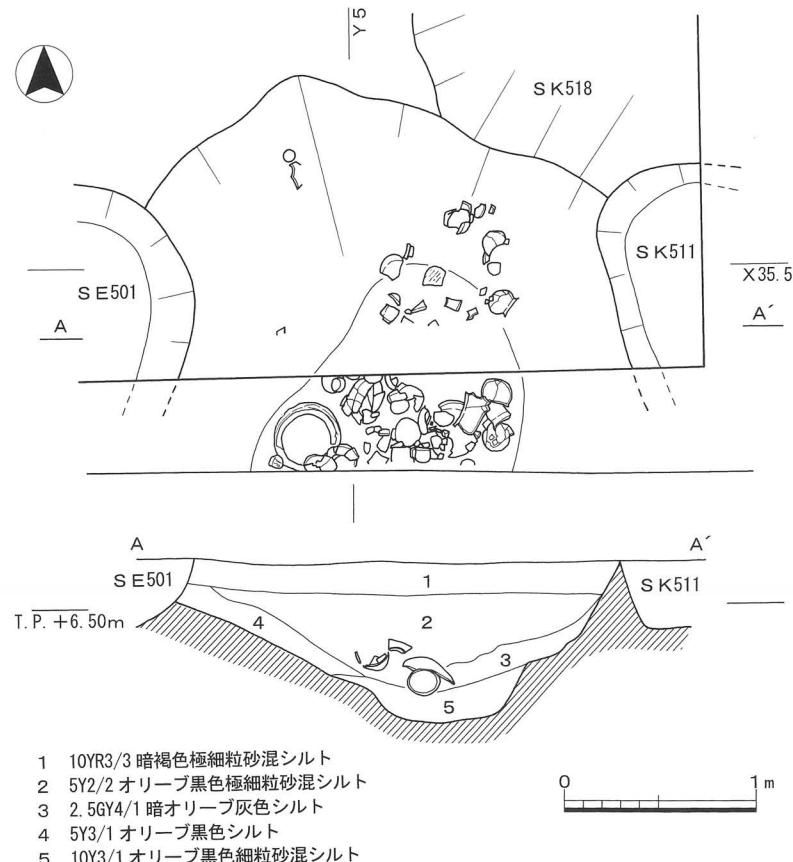


第40図 S K 509平面断面図

0.25mを測る。埋土は10YR5/4にぶい黄褐色細粒砂混シルトである。この土坑内にはSP 501があり、柱穴と想定すれば住居跡となる可能性がある。遺物は古式土師器が極少量出土している。楕形高杯1点(198)を図化した。198は楕形高杯(高杯C<sub>2</sub>)で、脚部を欠く。口径13.4cm、杯部高5.0cmを測る。杯部内面に放射状ヘラミガキが施文されている。色調は赤褐色。口縁部外面に煤の付着が認められ、蓋として使用されたことを示している。庄内式新相前後のものと推定される。

#### S K 510(第41図、図版一六・三四~三八)

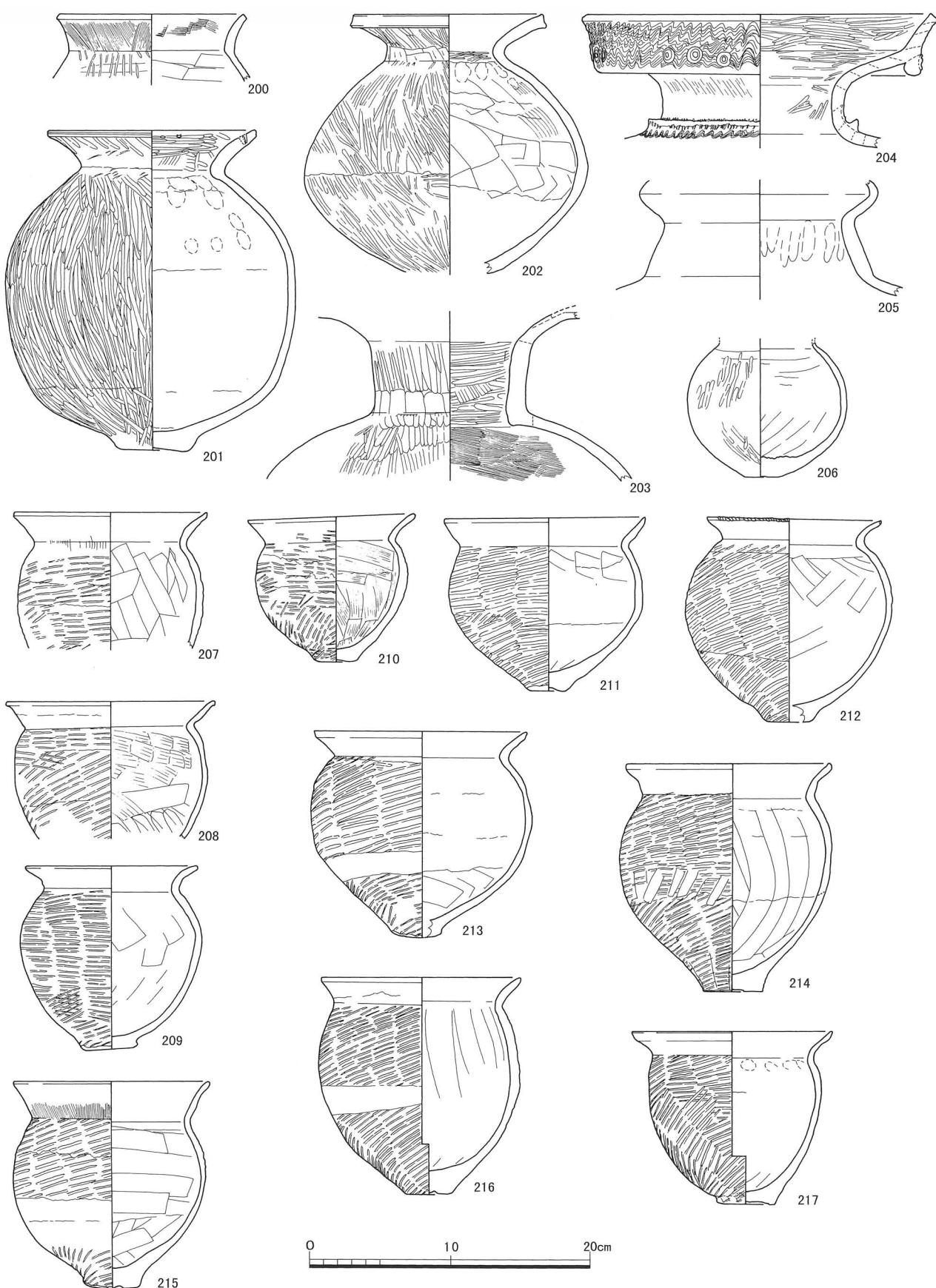
第5区東端の5A地区で検出した。南部が調査区外に至る他、SK 511と近世の井戸SE 501に切られている。検出部分で東西幅2.4m、南北長2.1m、深さ0.85mを測る。埋土は1層10YR3/3暗褐色極細粒砂混シルト、2層5Y2/2オリーブ黒色極細粒砂混シルト、3層2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルト、4層5Y3/1オリーブ黒色シルト、5層10Y3/1オリーブ黒色細砂混シルトである。このうち2層、3層中から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の完形品を含む土器類が多量に出土している。64点(200~263)を図化した。200



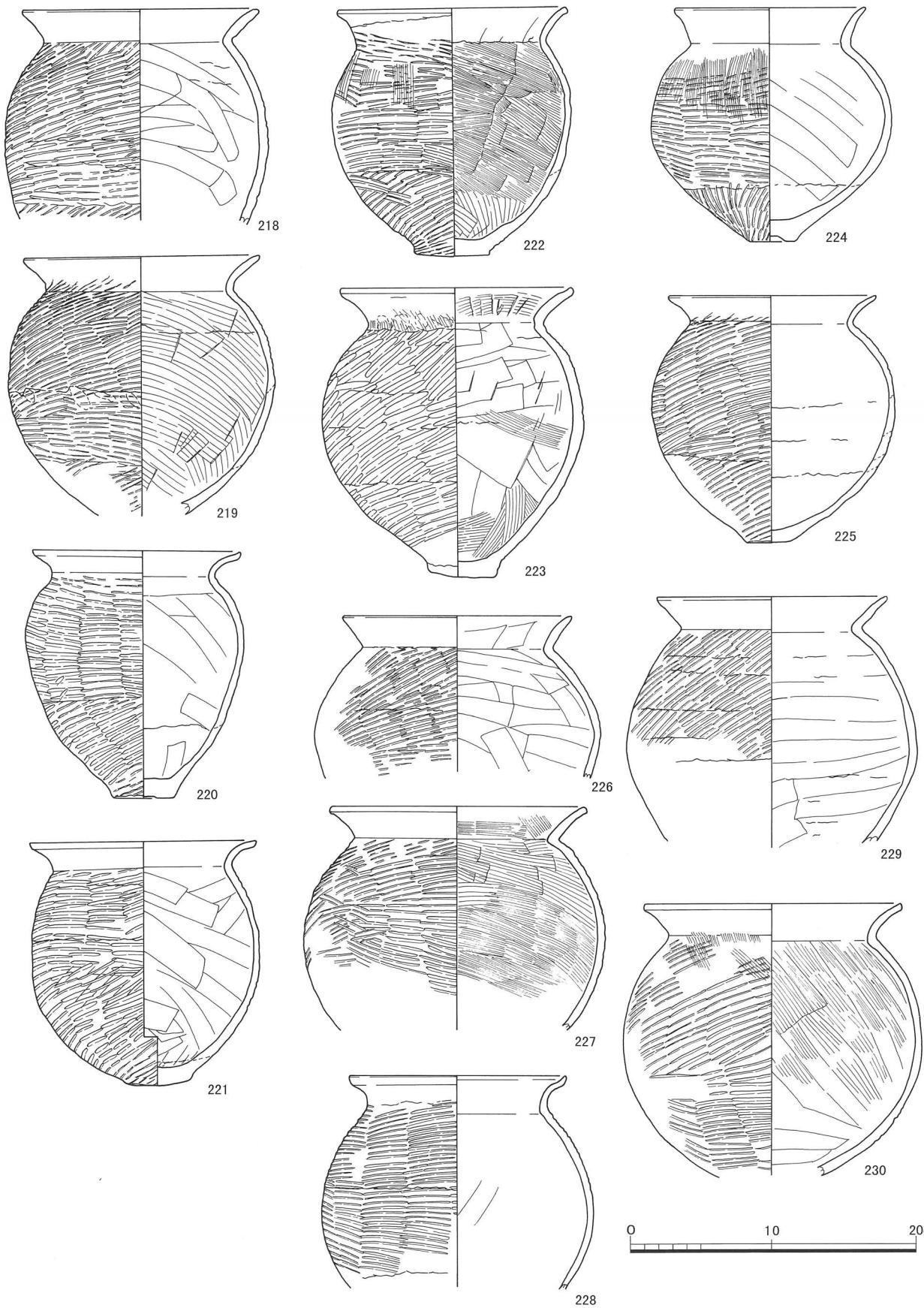
第41図 S K 510平面断面図

～206は壺類である。200～202は(広口壺A)である。体部が残存している201・202の体部形態は201が胴部の張らない球形、202が玉葱状を呈する。口縁端部の形状は外傾して小さな端面を形成する200、幅広の端面を作る202と丸く終わる201がある。201が完形品で口径14.8cm、器高22.8cm、体部最大径20.4cmを測る。外面の器面調整は縦位のヘラミガキが多用されている。201の口縁部上半には二個一对の紐孔が穿たれている。200・201が生駒西麓産。203は頸部が直上に伸びた後、口縁部が大きく開く(広口壺B)にあたる。色調は灰白色。胎土中に2mm以下の長石・石英・チャートを多量に含む。204は加飾二重口縁壺である。口径24.5cmを測る。垂下口縁部の側面に波状文と下位に3個で1単位とする竹管押圧円形浮文が施文されている他、体部と口縁部の境に上部と下部に刻目を持つ貼付け凸帯、体部上半に波状文が施文されている。頸部内面中位から口縁部内面にかけて黒色顔料が塗布されている。色調は褐灰色。生駒西麓産。205は体部上位から頸部が外傾した後に二段に屈曲する口縁部を形成する壺で、吉備地方産の壺と考えられる。色調は赤褐色。胎土中に2mm以下の長石・角閃石・雲母が散見される。206は小形壺の体部である。口縁部を欠くがおそらく斜上方に口縁部が伸びる短頸壺が想定される。色調は淡灰褐色。生駒西麓産。V様式系甕は35点(207～241)図化した。207～217は器高が16cm以下の小形品である。形状が明らかな209～217については、体部最大径が中位にあり球形を呈するもの209～215、体部最大径が中位にあるが体部が張らないもの216、体部最大径が上位にあるもの217がある。口縁部の形状は端部が丸く終わるもの207～210・212・215、口縁端部が垂直ないしは外傾するもの211・214・216、摘み上げられて内傾する小端面を形成するもの213・217がある。底部は平底で、突出が顕著なものが209・212・215の他は突出しない底部である。底部裏面はドーナツ底が211・214～217、平底が209、くぼみ底が210である。体部外面には二分割ないしは三分割成形に沿ってタタキ調整が行われているが、213・215・216については分割の繋ぎ目のタタキ目が消されている。213が生駒西麓産の他は非生駒西麓産。218～225は、器高が16～20cmを測る中形品である。体部の形状では、体部最大径が上位にある220、体部最大径が中位にあるが体部が張らないもの221・222、体部最大径が中位にあり球形を呈するもの223～225がある。口縁部の形状は端部が丸く終わるもの218・219・223～225、口縁端部が外傾するもの222、摘み上げられて内傾する小端面を形成するもの220・221がある。底部は平底で、突出が顕著なものが222・224の他は突出しない。底部裏面はドーナツ底が220・224、平底が221～223・225である。体部外面には三分割成形に沿ってタタキ調整が行われており、222・224については、タタキ調整の後、上位ないしは中位の一部にハケメを散発的に施す行為がみられる。全て生駒西麓産。226～238は器高が20～24cmを測る大形品である。体部形状は234を除けば球形のものが大半を占める。口縁部の形状は端部が丸く終わるもの226・229・232・233・235、口縁端部が垂直ないしは外傾するもの227・230・234、摘み上げられて内傾する小端面を形成するもの228・231がある。底部は平底で、突出が顕著なものが235～237、突出しないものが234・238である。底部裏面はドーナツ底が234～236、平底が237・238である。体部が完存している234～238については三分割成形に沿ってタタキ調整が行われており、234・238については、タタキ調整の後、中位の一部にハケメを散発的に施す行為がみられる。231が生駒西麓産の他は非生駒西麓産。239～241は器高が26cm以上を測る大形品である。3点ともに体部最大径が中位付近にある球形の体部を呈する。口縁部は端部が垂直方向に小端面を作る239、外傾する面を持つ240、丸味を持って終わる241がある。体部外面は三分割成形に沿ってタタキが行われており、239の体部上半から口縁

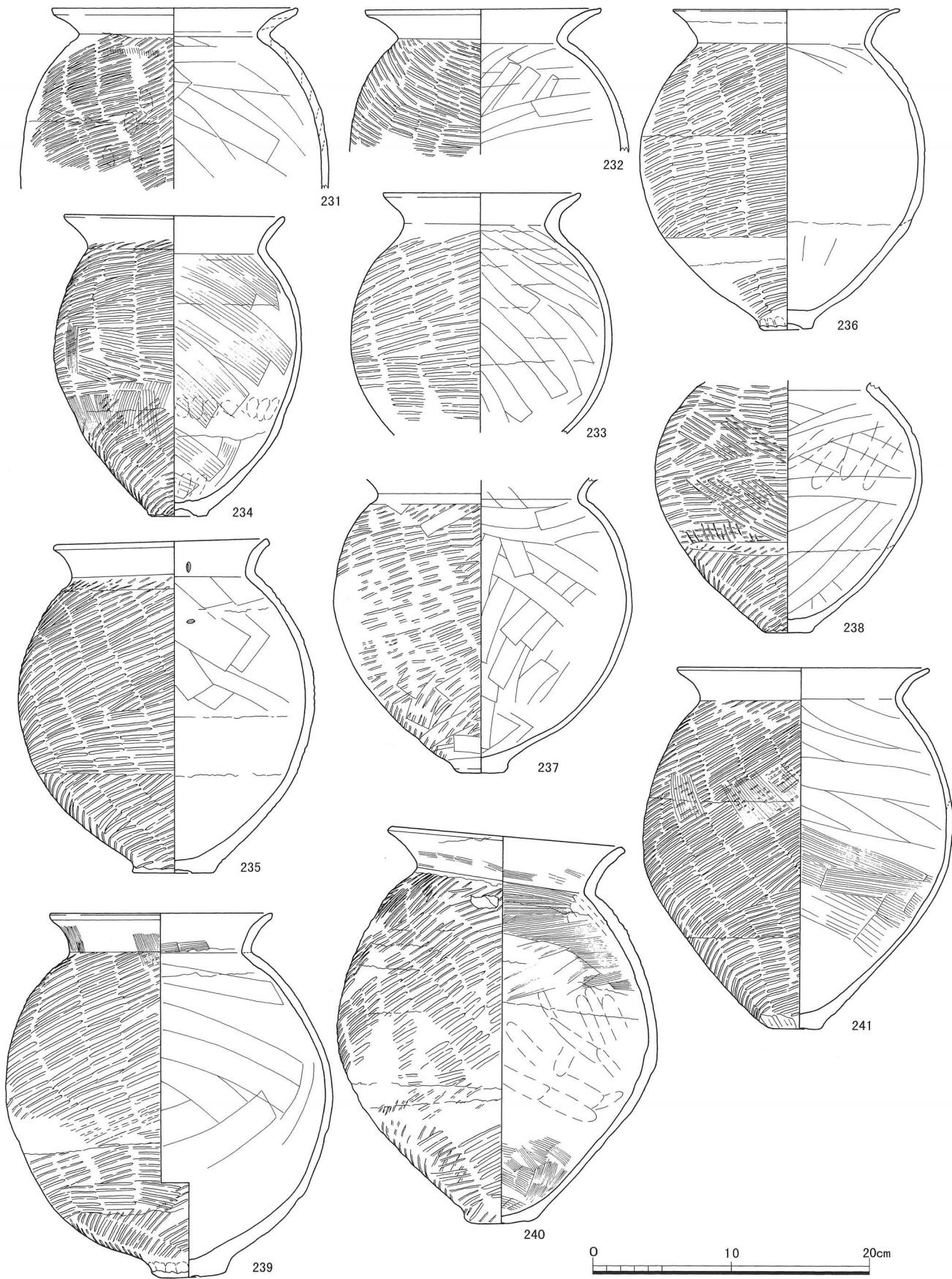
部にかけて縦位方向にハケが散発的に行われている。底部は突出する239、やや突出する240、突出しない241がある。裏面は239・241が平底、240がくぼみ底である。241の底部外側面にヘラケズリが認められる。3点共に非生駒西麓産。242～244は体部外面の器面調整に縦位のハケを多用する甕で、吉備地方からの搬入品ないしはその影響下で成立した甕(甕I)にあたる。243は完形で口径15.4cm、器高21.0cm、体部最大径18.5cmを測る。体部の上位に最大径を持つもので、底部は平底である。色調は242が淡灰褐色、243・244が赤褐色である。胎土は242が生駒西麓産、243・244は3mm以下の長石・石英を多量に含んでいる。245～249は庄内式甕で、全て在地産である。完形ないしは図上で完形に復元できる。体部形状は最大径がやや上位にある球形で、体部外面のタタキ調整は三分割成形に沿って行われる(甕B<sub>1</sub>)に分類される245・246と右上がりの連続ラセンタタキを行う(甕B<sub>2</sub>)に分類される247～249がある。口縁端部は丸味を持って終わる245・247と、上方に摘み上げられて垂直な小端面を形成する246・248・249があり、246については小端面に擬凹線を巡らす。底部が残存しているものの中では平底が245・248・249、尖り底が247である。5点共にタタキ調整後、縦位にハケ調整を施しタタキメを消す調整技法が取られている。体部内面のヘラケズリは左上がり方向を主体とする245・247・248と中位以下を縦位、中位以上を横位に行う246・249があるが、全てにおいて、同時期の生駒西麓産胎土の甕に比して、ケズリが浅く単位が不明瞭である特徴がある。色調は赤褐色系で249については外面に煤の付着が無い。(甕B<sub>1</sub>)に分類した245・246は河内型庄内式甕の最古型式にあたる他、(甕B<sub>2</sub>)に分類した247～249については、庄内II期以降に盛行する(甕B<sub>2</sub>)に比して体部最大径が上位にあるもので、(甕B<sub>2</sub>)型式の中でも古い様相を呈している。鉢は8点(250～257)図化した。250・251は平底で椀形の体部に小さく外反する口縁部が付く(鉢A<sub>1</sub>)である。250の底部外側面はヘラケズリによる面取りが行なわれている。色調は250が淡橙色、251が灰白色。共に非生駒西麓産。252～254は250・251に比して小形の体部を有するもので、口縁部が上外方に伸びる252・253と直上に伸びる254がある。底部形状は突出する254と突出しない253・254がある。底部裏面は平底の254とドーナツ底の252、くぼみ底の253がある。体部外面の器面調整はタタキが主体で、253・254については口縁部におよぶ。色調は灰白色～淡灰色。非生駒西麓産。255は平底で上面形状が橢円形を呈する体部上位に大きく張り出す流し口が付く小形の鉢である。色調は灰白色～黒灰色。胎土中に4mm以下の長石・チャートが散見される他、実体鏡(30倍)で角閃石の含有を認める。搬入品と推定されるもので、管見では類例を見ない。256・257は(有孔鉢A)である。器面調整は256がタタキ、257が板状工具のあたりが明瞭に残る。色調は淡灰褐色。非生駒西麓産。258～263は高杯類である。258～260は有稜高杯である。258は杯部の約1/6が残存している。復元口径22.8cmを測る。259は杯部口縁を欠く。脚部は小さく屈折して開くもので柱状部は中空である。柱状部の形態から〔有稜高杯D<sub>2</sub>〕に分類される。260は杯部を欠く、脚部は完存しており裾径12.0cmを測る。中実で4方にスカシ孔を穿つが均等に分割されていない。色調は淡赤褐色。261は拡張垂下させた口縁端部に波状文と竹管押圧円形文、口縁部内面に波状文を加飾する高杯である。脚部を欠く。復元口径18.8cmを測る。色調は淡赤褐色。262・263は椀形高杯(高杯C<sub>2</sub>)である。262が杯部、263が完形品で口径11.9cm、器高9.5cm、裾径18.5cmを測る。庄内I期の良好な資料である。



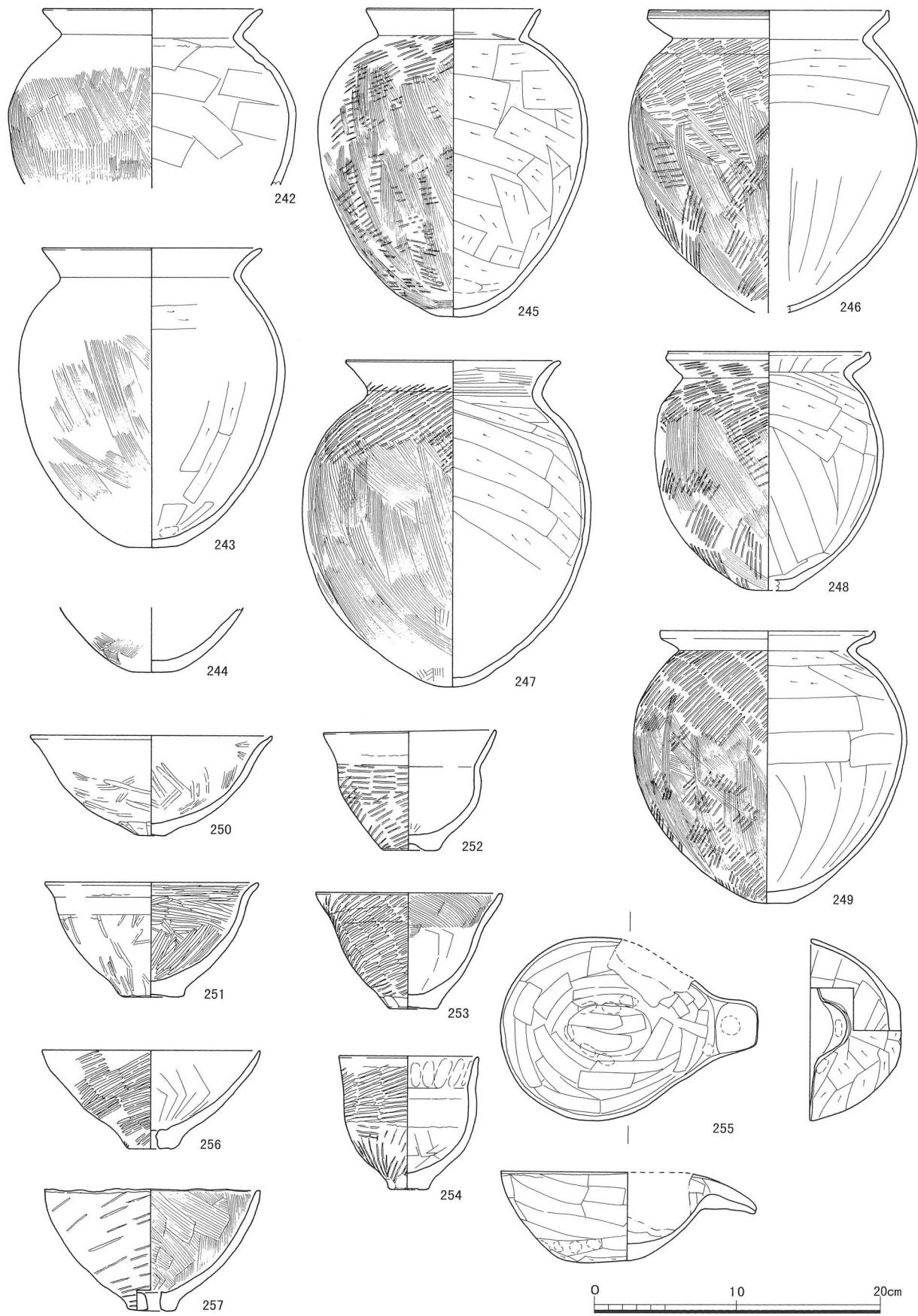
第42図 S K510出土遺物実測図－1



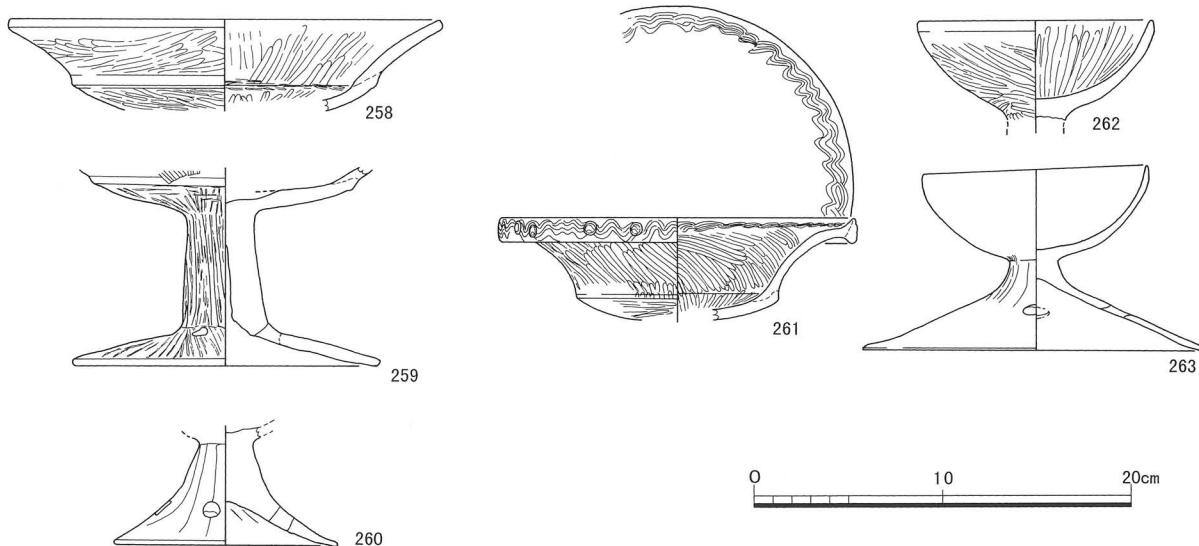
第43図 S K510出土遺物実測図－2



第44図 SK510出土遺物実測図-3



第45図 SK 510出土遺物実測図－4



第46図 S K510出土遺物実測図－5

#### S K518(第47・48図、図版三九)

第5区東端の5A地区で検出した。北部および東部が調査区外に至る他、S K511、S K512に切られている。検出部分で東西幅1.4m、南北幅1.15m、深さ0.7mを測る。埋土は6層から成り、1層2.5Y4/1黄灰色極細粒砂混シルト、2層5Y5/1灰色シルト、3層7.5Y4/1灰色シルト、4層7.5Y3/1オリーブ灰色シルト、5層2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルト、6層10Y4/1灰色シルトである。遺物は3層～6層にかけて古墳時代初頭前半(庄内式古相)の古式土師器類が折り重なるような状態で出土している。すぐ南にあるS K510と同一遺構の可能性もあるが、埋土の状態がことなることから別遺構とした。19点(264～282)を図化した。264～270は壺類である。264～266は(広口壺A)である。264の口縁端面には貼り付けによる凸帯が存在している。266は大形品で復元口径13.6cm、体部最大径24.6cmを測る。264・265が非生駒西麓産、266が生駒西麓産である。267は口縁部内外面と体部上位に波状文を主体とする加飾を加えた二重口縁壺である。口縁部は擬口縁部分より先を欠く。色調は赤橙色。268～270は壺底部である。268・269が突出しない平底、270が突出する平底である。268・270が非生駒西麓産、269が生駒西麓産である。269の外面には煤、内面には炭化物の付着が認められ、煮炊具として使用されている。271・272は庄内系の有稜高杯〔高杯E<sub>1</sub>〕の杯部である。271は小形品である。復元口径は271が16.0cm、272が21.0cmを測る。口稜比と口縁比の数値は、271が口稜比52.1、口縁比32.5、272が口稜比59.5、口縁比30.0である。色調は271が赤褐色、272が淡灰褐色である。273は(鉢J)である。大形鉢で体部中位以下を欠く。復元口径36.0cmを測る。色調は淡橙黄色～黒灰色。非生駒西麓産。274～282はV様式系甕で、全容が明らかなものは280～282の3点である。残存部分から推定して274・275が器高16cm未満の中形品、276～279が器高16～22cm未満の中形品、280～282が器高22cm以上の大型品である。

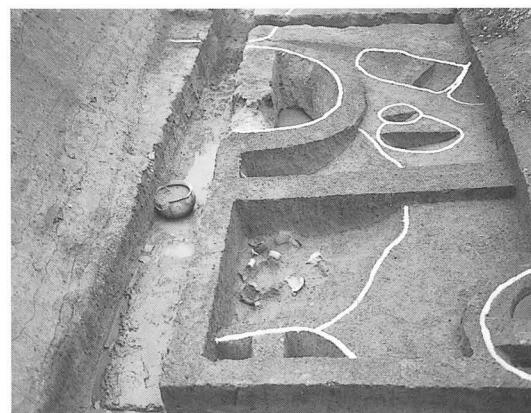
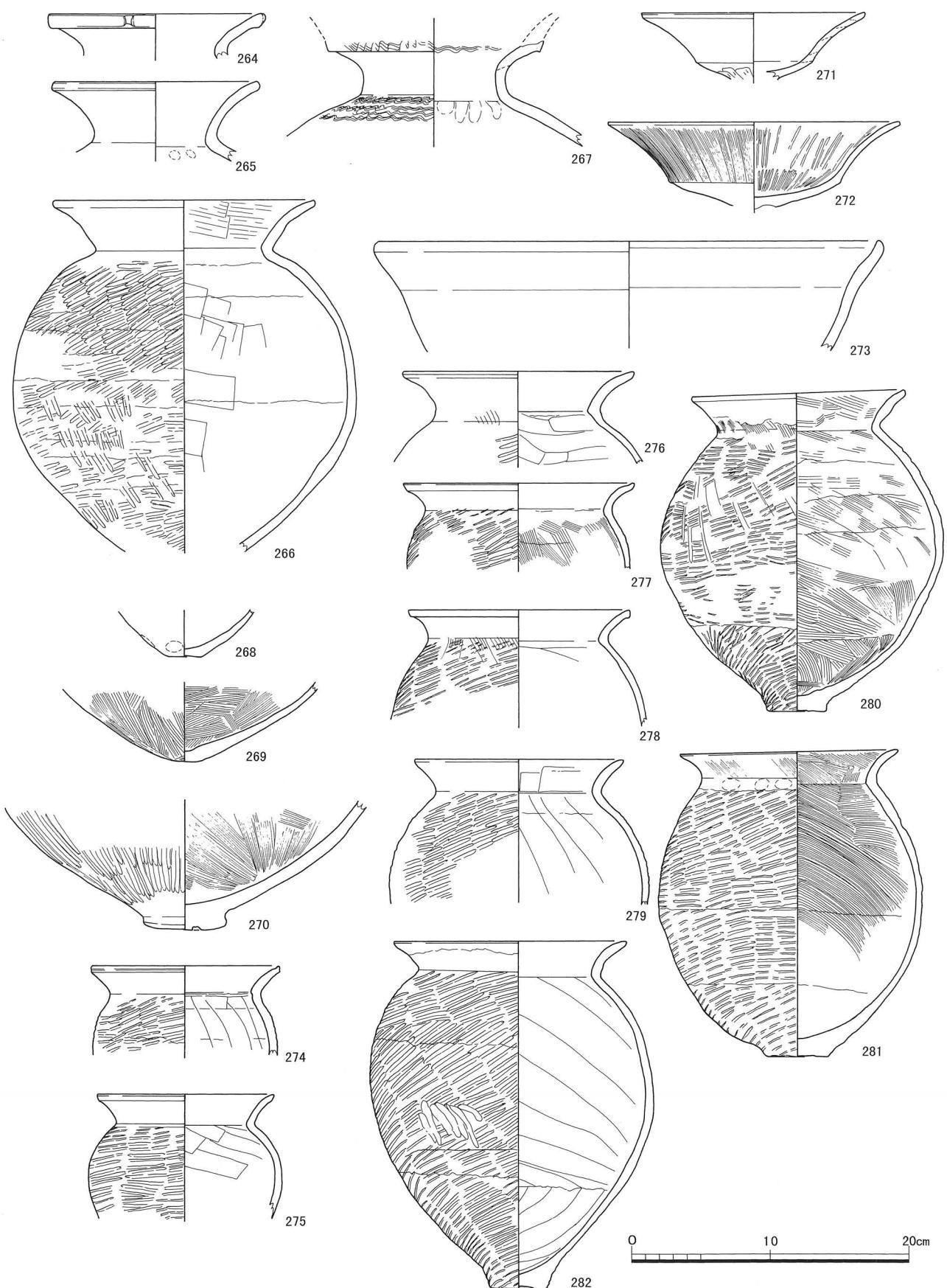


写真6 5区 S K518検出状況(東から)  
S K511とS K512の間の部分がS K518で、白線は入れていない。



第47図 SK518出土遺物実測図

～282が器高22cm以上の大形品に分類される。口縁部は「く」の字ないしは口縁部が外反して伸びるもので、端部は丸味持つもの276・280～282、上部に摘み上げられるもの274・275・277、垂直方向に小端面を作るもの278がある。底部は確認できた3点共にやや突出した平底を呈するもので、裏面は平底のものと280・281とドーナツ底の282がある。体部形態はほぼ全形が明らかな280～282の内、体部最大径が上位にある282、中位にある280～282がある。全て生駒西麓産である。庄内式甕は出土していないが272の有稜高杯〔高杯E<sub>1</sub>〕の存在から庄内I期が推定される。

#### S K519(第48図、図版三九)

第5区中東部の5C地区で検出した。東西端が調査区外に至る他、西部がS O501に切られている。検出部分で東西幅4.9m、南北幅2.2m、深さ0.22mを測る。埋土は10Y4/1灰色粘質シルトである。埋土およびS O501の埋土を除去した段階でS P504およびS P505が確認でき、また炉の可能性をもつ炭化物が充填している浅い掘り込みがあることから、S K509と同様に堅穴住居である可能性がある。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器片が少量出土している。5点(283～287)を図化した。283～285は庄内式甕の小片である。3点共に生駒西麓産。286は椀形高杯で脚部を欠く。口径11.7cmを測る。287は椀形の体部に二段に屈曲する口縁部が付く精製の小形鉢(鉢H<sub>2</sub>)である。体部内外面は横位の密なヘラミガキが行われている。口径18.0cm、器高7.4cmを測る。286のようにやや時期幅のある遺物が含まれる。

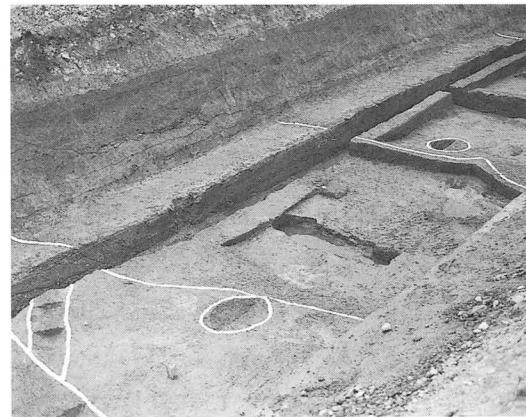
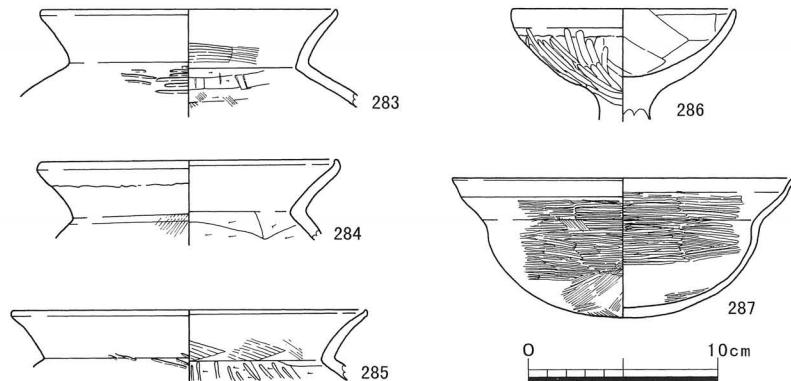


写真7 第5区 S K519検出状況(北東から)



第48図 S K519出土遺物実測図

第13表 第5区 土坑(S K)法量表(単位m)

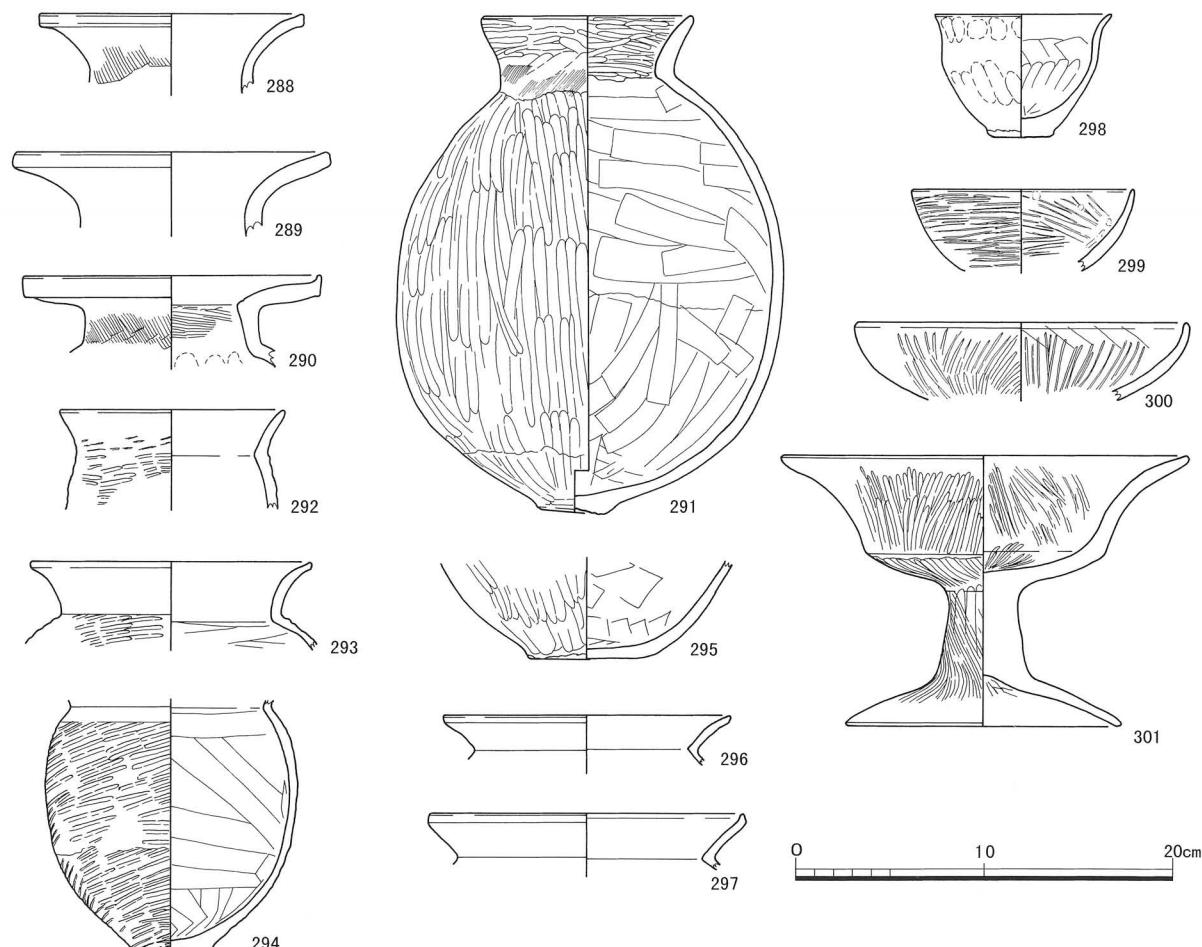
遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S K503	5 F	不明	1.30	0.68	0.14	S K501に切られる。
S K507	5 C	不定形	1.62	0.80	0.10	S O501を切る。
S K508	5 B	楕円形	0.70	0.25	0.18	古墳時代以降の土坑
S K511	5 A	”	0.83	0.32	0.26	
S K512	”	不明	0.96	0.37	0.12	弥生土器片、庄内式甕片
S K513	”	楕円形	0.68	0.57	0.14	S P502に切られる。V様式系土器片、庄内式甕片
S K514	”	”	1.03	0.52	0.09	S K515に切られる。V様式系土器片、庄内式甕片
S K515	”	不明	0.55	0.22	0.06	S K514を切る。
S K516	5 AB	”	2.72	0.52	0.12	
S K517	5 C	方形	0.47	0.42	0.15	
S K520	5 H	楕円形	0.28	0.81	0.13	
S K521	”	”	0.27	0.22	0.05	

れているが、287の小形鉢の存在から布留Ⅰ期が想定される。

#### 溝(S D)

##### S D 501(第49図、図版三九)

第5区中央部から西部にかけて東—西方向に伸びるもので、北肩の大半は調査区外に至る。検出部分で東西長24.0m、南北1.2m、深さ0.12mを測る。埋土は5Y4/1灰色極細粒砂混シルトである。遺物は古墳時代初頭前半(庄内式古相)の古式土師器片が少量出土している。14点(288~301)を図化した。288~291は壺類である。288・289は(広口壺B)の口縁部小片である。2点共に生駒西麓産。290は頸部が直上方に短く伸びた後、口縁部が外折するもので端部は摘み上げられて幅広の端面を形成している。東四国系の土器と考えられる。291は(短頸壺A)に分類される。約1/2が残存しており口径11.0cm、器高26.4cm、体部最大径20.4cmを測る。器面調整は口縁部が内外面ともにヨコナデ、体部は外面が縦位のナデ、内面は板ナデを行う。生駒西麓産。292~294はV様式系甕である。292・294が小形品、293が中形品である。292・293が非生駒西麓産。294が生駒西麓産である。295は甕の底部と推定される。体部外面には縦位のヘラミガキが施されている。胎土中に実体鏡で角閃石の含有を認める。296・297は庄内式甕の口縁部の小片である。生駒西麓産。298は小形の鉢(鉢A<sub>2</sub>)である。完形品で口径9.3cm、器高6.4cm、底部径3.0cmを測る。非生駒西麓産。299・300は椀形高杯(高杯C<sub>2</sub>)の杯部片である。299は精製品である。色調は淡赤橙色。301は有稜高杯



第49図 S D 501出土遺物実測図

(高杯A<sub>2</sub>)にあたる。杯部口縁部は大きく外反するもので、柱状部は中実で裾部は屈折して開く。図上で完形に復元が可能である。口径21.4cm、器高14.2cm、裾部径14.6cmを測る。口縁比58.8、口稜比32.7である。遺構の帰属時期は庄内Ⅱ期に比定される。

#### S D 502

第5区東部の5B地区で検出した。南北に伸びる溝で、S D 507を切っている。検出長3.21m、幅1.3~2.37mで幅は南側で広くなる。深さは南側が0.12m、北側が0.52mと北側が深くなっている。埋土は3層に分けられ、上部から5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト、7.5Y2/2オリーブ黒色極細粒砂混粘土質シルト、7.5Y3/2オリーブ黒色シルトである。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器等が出土しているが、図化し得たものはない。

#### S D 508

第5区中央部の5D E地区にかけて検出した。東~西に伸びる溝で、南肩が調査区外に至る他、S K 502・S D 504を切り、S O 501に切られている。検出長12.35m、幅0.65m、深さ0.22mを測る。埋土は植物遺体を含む2.5GY3/1暗オリーブ灰色シルトである。古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される古式土師器片が少量出土しているが、図化し得たものはない。

第14表 第5区 溝(S D)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S D 503	5 B	北東~南西	1.67	0.42	0.11	古式土師器片
S D 504	5 D	東南~西北	1.08	0.50	0.10	S D 508に切られる。
S D 505	5 E	北東~南西	2.20	0.23	0.23	S D 501に切られる。古式土師器片
S D 506	5 A	"	1.00	0.70	0.05	V様式系土器、古式土師器
S D 507	5 B	"	4.56	0.42	0.08	S D 502に切られる。古式土師器
S D 509	5 E	"	2.67	1.40	0.06	S D 501に切られる。
S D 510	5 E F	北西~南東	3.54	0.34	0.14	古式土師器
S D 511	5 H I	東~西	4.30	1.05	0.11	古式土師器

#### 小穴(S P)

6基(S P 501~S P 506)を検出した。S P 504・S P 505を除けば、散発的な分布である。平面形状はS P 504の楕円形以外は円形を呈する。法量は径0.16~0.44m、深さ0.09~0.22mを測る。なお、S P 505については、炉跡と考えられる炭化物を充填した土坑を伴うS K 519内で検出されており、この遺構が竪穴住居であったとすれば、建物を構成した柱穴であった可能性がある。また、西に隣接するS O 501内で検出されたS P 504も同様の可能性がある。

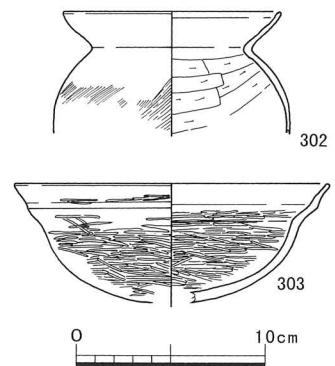
第15表 第5区 小穴(S P)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S P 501	5 B	円形	0.31	0.29	0.16	S K 509内で検出。柱穴の可能性あり。
S P 502	5 A	"	0.43	0.33	0.06	S K 513を切る。
S P 503	5 B	"	0.22	0.16	0.09	
S P 504	5 C	楕円形	0.50	0.37	0.22	S O 501内で検出。
S P 505	"	円形	0.46	0.44	0.20	S K 519内で検出。柱穴の可能性あり。
S P 506	5 H	"	0.25	0.24	0.22	庄内式甕

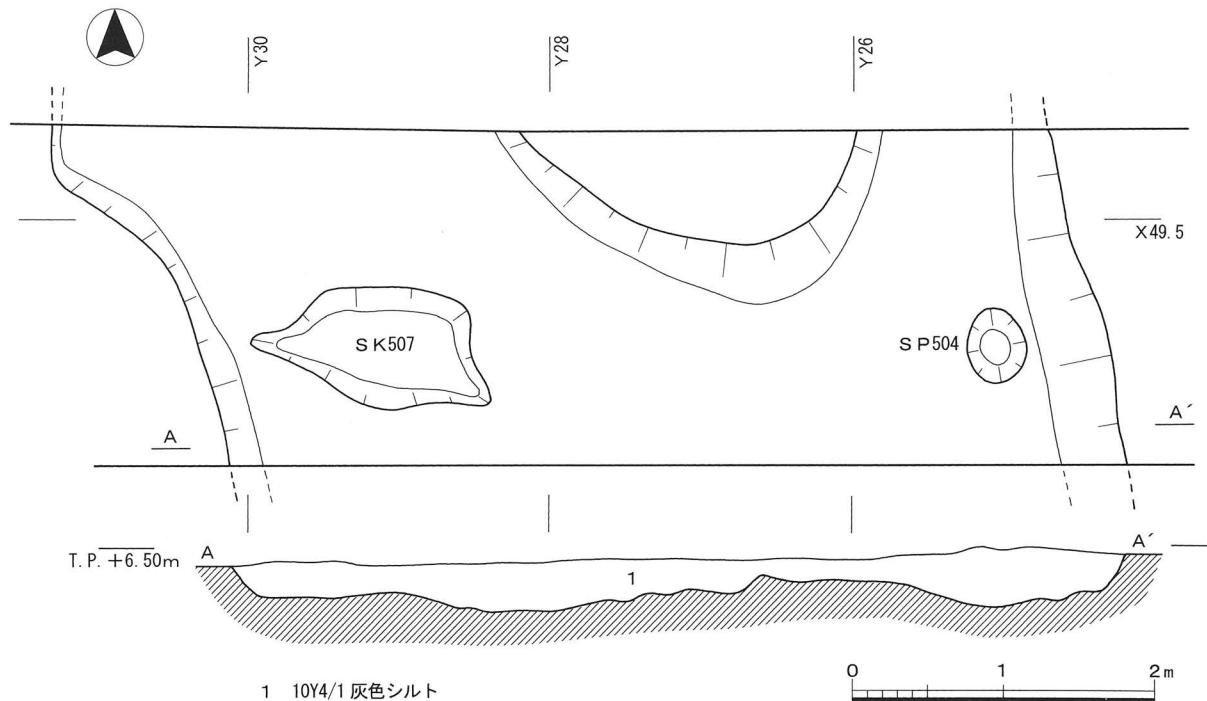
## 落ち込み(S O)

### S O 501(第50・51図)

第5区中央部の5CD地区で検出した。南北方向に伸びるもので、東部でSK519、西部でSD508を切っている他、底部からはSK507、SP504が検出されている。検出部分で東西幅6.0m、南北幅2.23m、深さ0.2mを測る。埋土は10Y4/1灰色シルトの単一層である。古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器片が少量出土している。2点(302・303)を図化した。302は布留式甕(甕F<sub>1</sub>)の小片である。復元口径11.3cmを測る。303は二段に屈曲する口縁部を持つ精製の小形鉢(鉢H<sub>2</sub>)である。復元口径16.5cm、復元器高6.0mを測る。器面調整は丁寧で、体部内外面共に横位の密なヘラミガキが施されている。色調は浅黄橙色である。遺構の帰属時期は布留I期に比定される。



第50図 S O 501出土遺物実測図



第51図 S O 501平面断面図

## 井戸(S E)

### S E 501(図版一六)

第5区東部の5A地区で検出した。南部は調査区外に至る他、東部でSK510を切っている。検出部分で東西幅1.82m、南北幅0.95m、深さ0.65mを測る。遺物は出土していないが、砂層のブロックを多く含む灰色粘土を埋土とし、明らかに他の遺構と埋土が異なっており、古墳時代以降の井戸と考えられる。遺物は出土していない。

## 第6区(第5図、図版一七・一八)

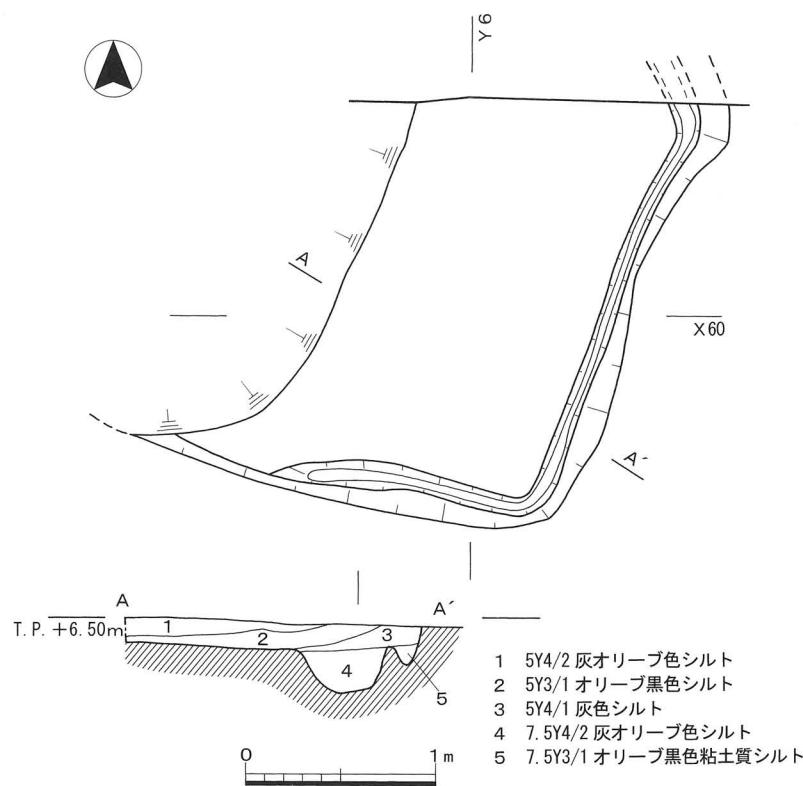
遺構構築面は現地表下1.4~1.7m(T.P.+6.3~6.7m)付近に存在する第IX層上面で、竪穴住居2棟(S I 601・S I 602)、土坑31基(S K 601~S K 631)、小穴3個(S P 601~S P 603)、溝19条(S D 601~S D 619)を検出した。西拡張区については第6・7区として後述する。

本調査区においては第4区調査区で確認した弥生時代後期初頭以前に埋没した河川は7D地区~7G地区付近に顕著に確認される。また、既存建物の基礎による攪乱は7A~7E地区において顕著で大きく遺構が破壊されている。

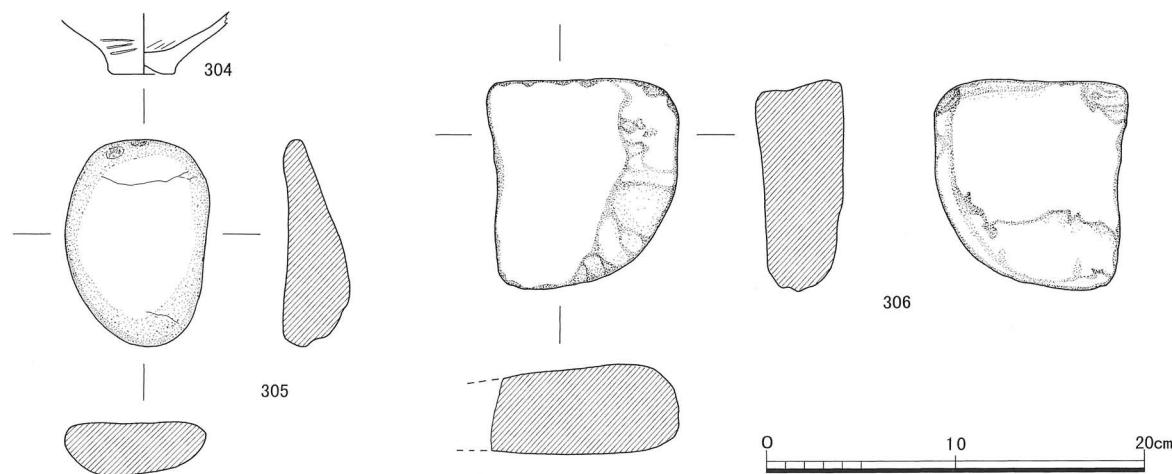
### 竪穴住居(S I)

S I 601(第52・53図、図版一九・四〇)

第6区東部の6・7A地区で検出した。北部が調査区外に広がり、西部が攪乱により削平されていたため、一部を検出するに留まった。検出部分で東西幅1.5m、南北幅2.5m、深さ0.15mを測る。埋土はシルトを主体とする1~3層が堆積している。壁溝は幅0.13m、深さ0.1mで、埋土は5層7.5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルトである。南東隅に直径0.6mを測る土



第52図 S I 601平面面図



第53図 S I 601出土遺物実測図

坑があり、埋土である7.5Y4/1灰色シルトに炭化物や焼土が顕著にみられた。遺物は埋土内および周溝から古式土師器が出土している。古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器片や石材等が少量出土している。3点(304~306)を図化した。304はV様式系甕の底部である。やや突出した平底で裏面はドーナツ底である。生駒西麓産。305は河原石である。長さ11.0cm、幅7.4cm、厚さ2.8cmを測る。306は台石の一部と推定される。長さ10.8cm、幅9.6cm、厚さ4.6cmを測る。上下面に研磨され平滑された面がある。石材は共に砂岩。図化し得なかった遺物の中に布留式甕を含むことから、遺構の帰属時期は布留Ⅰ期が考えられる。

#### S I 602

第6区東部の6・7BC地区にかけて検出した。南北共に調査区外に至る他、SD607・SD608、SK609および搅乱により削平を受けている。全体の破損状況は著しいが、検出部分で東西幅8.3m、南北幅2.32m、深さ0.27mを測る。貼床は炭化物の堆積状況から3面あったと考えられる。周溝は確認できなかった。遺物は古式土師器片、砥石等が出土している。

#### 土坑(SK)

##### SK605(第54・55図、図版二〇)

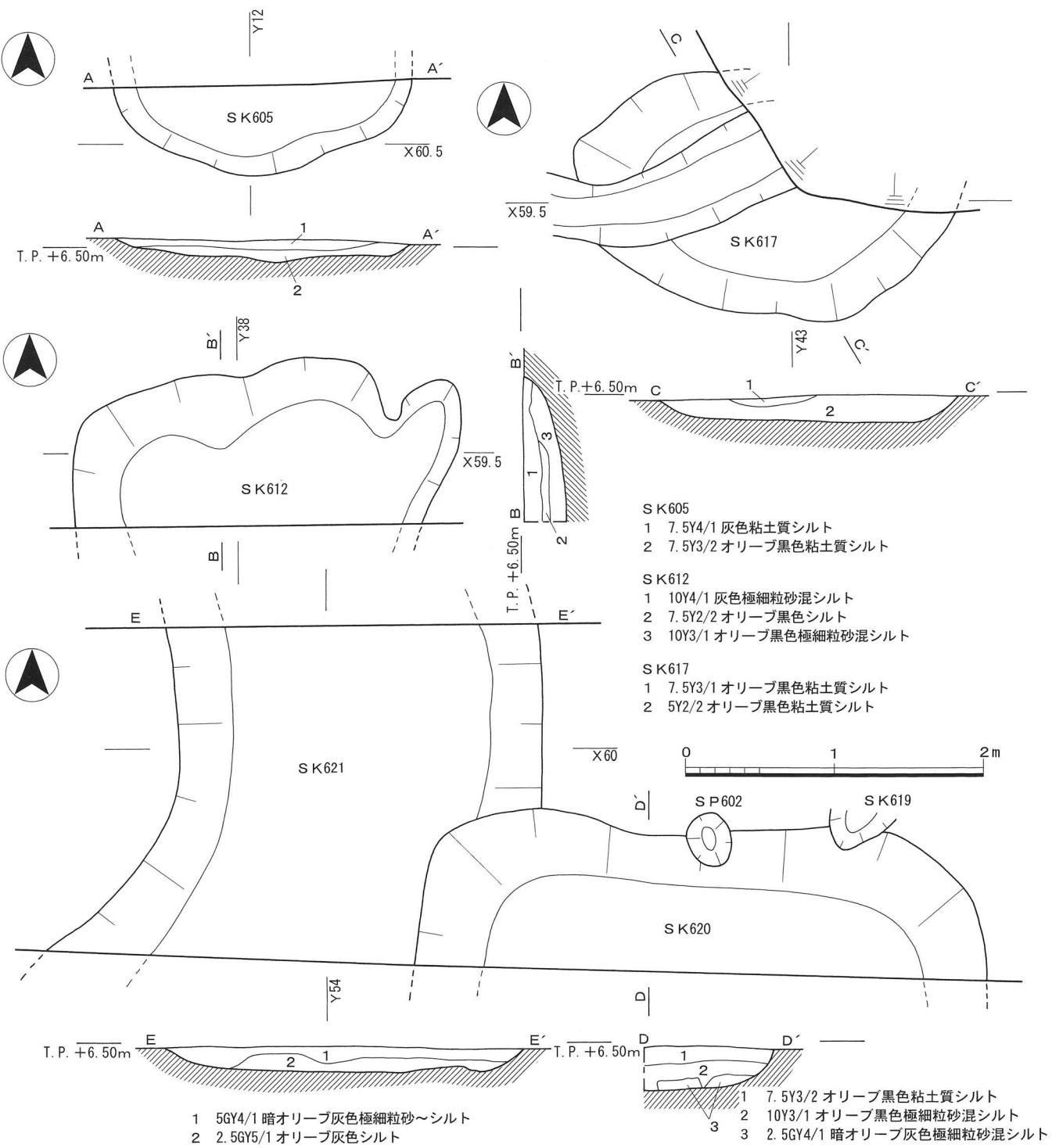
第6区東部の6・7B地区で検出した。北側が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西長2.0m、南北長0.62m、深さ0.15mを測る。埋土は2層に分けられ、上部は7.5Y4/1灰色微砂混粘土質シルト、下部は7.5Y2/2オリーブ黒色粘土質シルトが10Y4/1灰色シルトを挟んで2層堆積する。これと類似した遺構はSK420・SK504がある。炉あるいは何らかのものを焼成した遺構と推定される。遺物は古式土師器片が極少量出土している。2点(307・308)を図化した。307は短頸直口壺の口頸部である。復元口径17.0cmを測る。色調は灰白色。非生駒西麓産。308は小形鉢の底部である。色調は淡褐色。非生駒西麓産。時期的には庄内式新相のものか。

##### SK612(第54・55図)

第6区中央部の6D地区で検出した。南部が調査区外に至る他、西部でSK614を切っている。検出部分で東西幅2.6m、南北幅1.12m、深さ0.26mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古式土師器の小破片が少量出土している。4点(309~312)を図化した。309~311はV様式系甕の小片である。口縁端部が丸く終わる309、摘み上げられる310、垂直方向に端面を作る311がある。全て生駒西麓産。312は匙形土製品である。球形袋状の体部に水平に伸びる柄部が付く。底部および柄部を破損している。法量は長さ15.6cm、幅約6.8cm、器高約5.8cmを測る。色調は灰褐色。生駒西麓産。大野薰氏分類(大野1989)のⅢA類に分類される。市内での類例としては、太子堂遺跡第2次調査(坪田1993)の2区SD201下層からⅡB類に分類される匙形土製品(布留Ⅰ期)1点が出土している。庄内式甕片が含まれており、遺構の帰属時期は古墳時代初頭が推定される。

##### SK617(第54・55図)

第6区西部の6E地区で検出した。北東部が搅乱により破壊されているが、平面形態は梢円形を呈するとみられる。周辺は遺構が密集しており、SD611に切られ、SK627を切る関係にある。東西幅2.43m、南北幅1.96m、深さ0.19mを測る。埋土は2層に分層でき、上部は炭化物が混じる5Y2/2オリーブ黒色粘土質シルト、下部は2.5GY5/2灰オリーブ色シルトである。遺物は古式土師器片が出土している。2点(313・314)を図化した。313は小形器台の杯部である。復元口径9.6cm



第54図 SK605、SK612、SK617、SK620、SK621平断面図

を測る。314は大きく外反して開く口頸部を持つもので、端部は摘み上げられ外傾する面を作る東部四国系の広口壺(広口壺D<sub>3</sub>)である。色調は淡灰褐色。胎土に角閃石を含んでおり、讃岐地方からの搬入品と考えられる。遺構の帰属時期は庄内Ⅲ期に比定される。

#### SK620(第54・55図、図版二〇・三九)

第6区東部の6E F地区で検出した。南部が調査区外に至る他、西部でSK621を切っている。検出部分で東西幅3.86m、南北幅1.18m、深さ0.29mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古式土

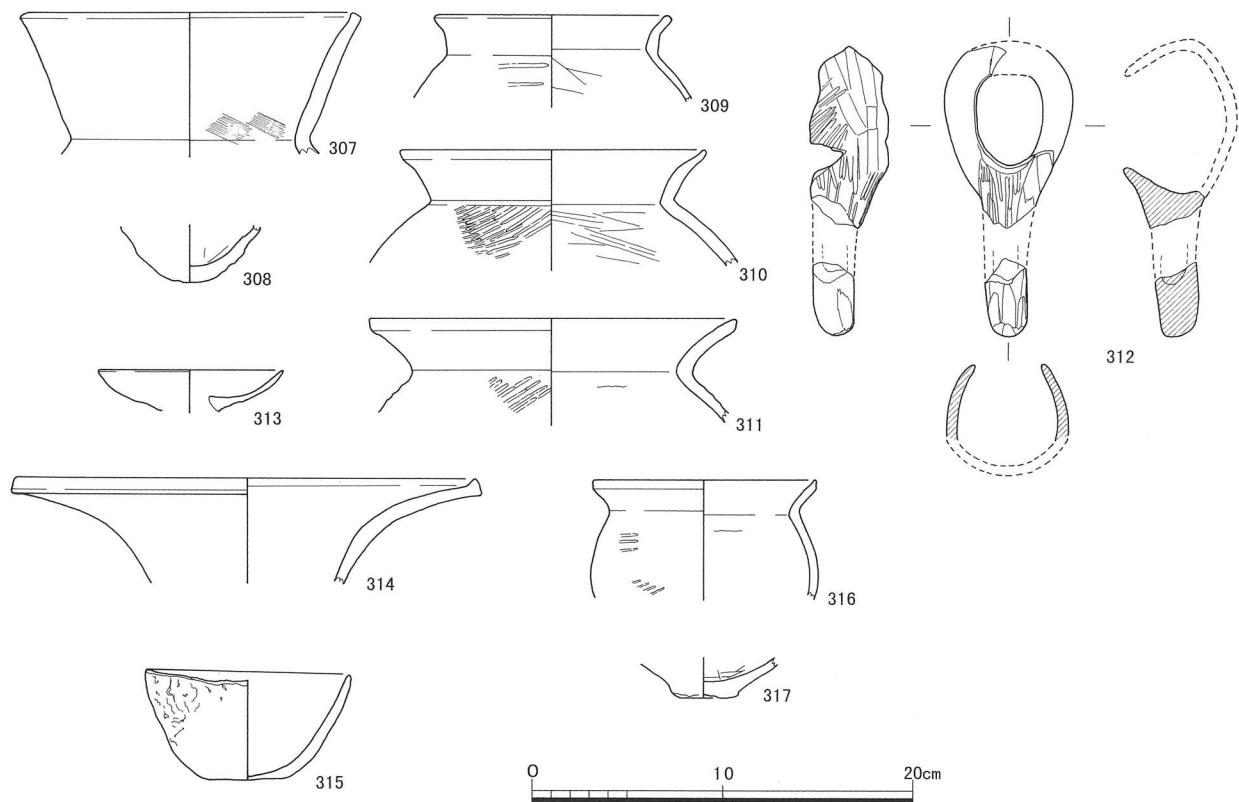
師器の小破片が少量出土している。鉢1点(315)を図化した。315は平底の底部から斜上方に直口の口縁部が伸びる手づくねの小形鉢(鉢E<sub>1</sub>)である。波状口縁を呈する他、体部外面を中心にクラックが認められる。色調は灰白～黒色。胎土は粗く、2mm以下の長石・石英を多量に含む。時期的には庄内式古相が考えられる。

#### S K621(第54・55図)

第6区西部の6・7F地区で検出した。南北方向に伸びる土坑で、南北両端共に調査区外に至る他、南東部分はS K620に切られている。検出部分で東西幅2.43m、南北幅2.3m、深さ0.17mを測る。埋土は2層で、上層が5GY4/1暗オリーブ極細粒砂混シルト、下層が2.5GY5/1オリーブ灰色シルトである。遺物は古式土師器の小破片が少量出土している。2点(316・317)を図化した。316はV様式系甕の小片である。小形品で復元口径11.6cmを測る。317は鉢の底部と推定される。底部は突出した平底で裏面はドーナツ底である。共に非生駒西麓産。図化した遺物以外に庄内式甕片が共伴しており、時期的には古墳時代初頭が考えられる。

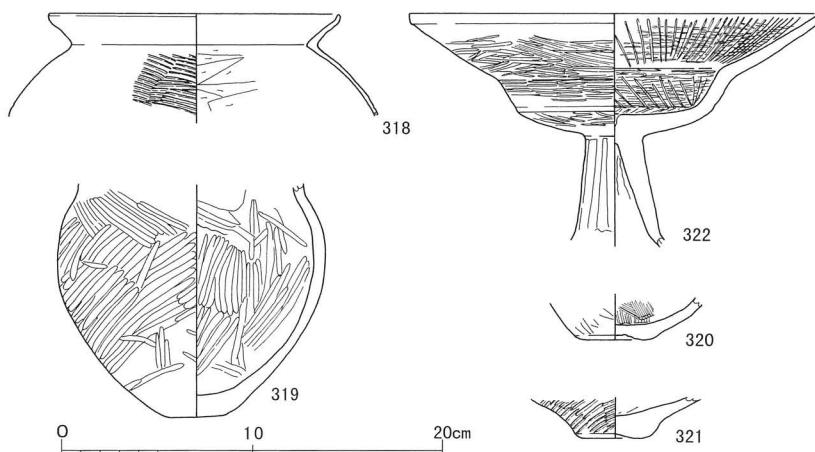
#### S K623(第56・57図、図版三九)

第6区西端の6・7FG区で検出した。西部および南部が調査区外に伸びる他、SD618に切られるため全容は不明である。検出部分で東西幅4.20m、南北幅1.12m、深さ0.26mを測る。埋土は3層に分けられ、上部から1層10Y3/1オリーブ黒色シルト質粘土、2層5GY5/1オリーブ灰色シルト、3層2.5GY4/1暗オリーブ灰色シルトである。2層には多くの炭化物が混じっており、遺構の中心を占めている。遺物は2層から古墳時代初頭前半(庄内式古相)の古式土師器類が出土している。5点(318～321)を図化した。318は庄内式甕(甕B<sub>3</sub>)の小片である。体部外面のタタキ調整は左上がりで4本/cmである。内面体部はやや単位の細かいヘラケズリが行われている。生駒西



第55図 S K605(307・308)、S K612(309～312)、S K617(313・314)、S K620(315)、S K621(316・317)出土遺物実測図

麓産。319は小形甕で口縁部を欠く。残存部分の器高は12.2cmを測る。体部の内外面共にヘラミガキを多用するもので吉備地方からの搬入品と考えられる。胎土中にスコープで角閃石の含有を認める。320は甕の底部である。突出しない平底で裏面はドーナツ底である。非生駒西麓産。321はV様式系甕の底部である。底部は



第56図 S K 623出土遺物実測図

やや突出した平底で裏面はドーナツ底である。生駒西麓産。322は二段に屈曲する杯部を持つ有段高杯で(高杯B<sub>2</sub>)に分類される。裾部を欠損する以外は完存している。口径21.6cmを測る。杯部内外面の器面調整は外面が横位の密なヘラミガキ、内面は横位のヘラミガキの後、放射状にヘラミガキを施している。柱状部外面は縦位のナデを施す。色調は淡橙色。遺構の帰属時期は庄内II期である。

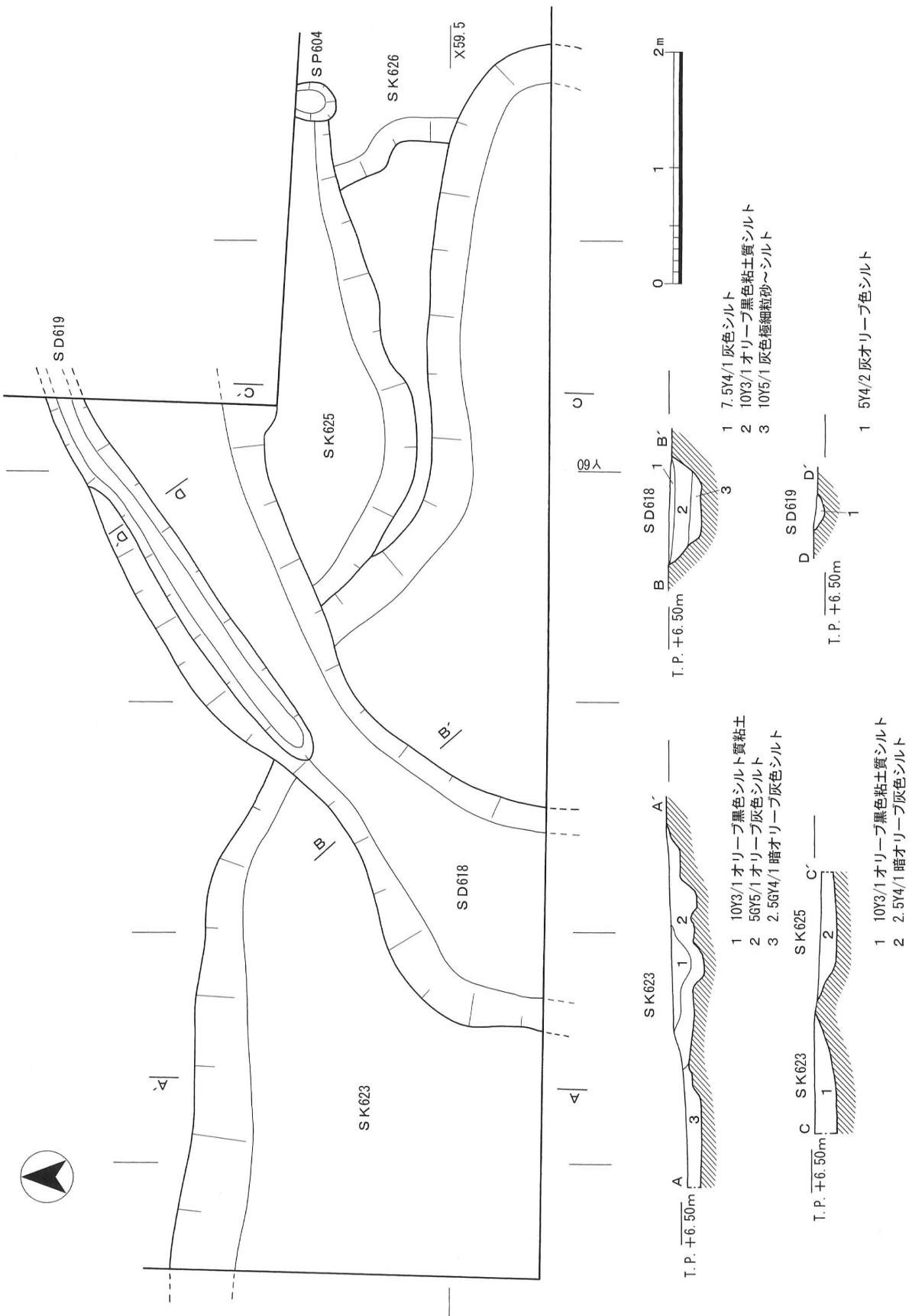
第16表 第6区 土坑(S K)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S K 601	7 B	不明	0.60	0.27	0.15	攪乱により削平されている。
S K 602	6・7 A B	楕円形	1.74	2.01	0.27	S K 604、S D 601に切られる。古式土師器片
S K 603	6 B	"	0.76	0.95	0.17	S K 604に切られる。古式土師器片
S K 604	"	"	1.10	0.80	0.14	S D 604に切られる。古式土師器片
S K 606	"	不明	2.10	0.40	0.18	攪乱により削平されている。S D 603を切る。
S K 607	6・7 B	円形	0.48	0.82	0.28	攪乱により削平されている。
S K 608	7 B	隅丸方形	0.73	1.00	0.14	S K 607に切られる。古式土師器片
S K 609	6 B	楕円形	1.42	1.95	0.35	古式土師器片
S K 610		不明	1.47	1.23	0.11	上部遺構(布留式期以降)
S K 611		不定形	4.13	1.50	0.12	上部遺構(布留式期以降)
S K 613	6・7 D	円形	0.53	0.60	0.07	古式土師器片
S K 614	6 D E	楕円形	1.95	1.62	0.26	S K 612に切られる。古式土師器片
S K 615	6 E	不明	1.14	1.18	0.11	S K 617に切られる。古式土師器片
S K 616	"	円形	0.82	0.35	0.10	S D 611に切られる。
S K 618	6・7 F	不明	2.06	1.08	0.17	S K 619に切られる。古式土師器片
S K 619	6 F	楕円形	0.55	0.95	0.13	S K 618を切る。
S K 622	"	円形	0.90	0.70	0.17	S D 617を切る。古式土師器片
S K 624	7 F	"	0.32	0.34	0.08	S K 624を切る。
S K 625	6・7 F G	不明	1.30	1.00	0.11	S K 623に切られる。古式土師器片
S K 626	6・7 F	"	1.20	0.40	0.19	S K 625、S D 617に切られる。古式土師器片
S K 627	7 E	"	1.56	0.62	0.12	S K 617に切られる。古式土師器片
S K 628	6 E	円形	2.20	0.48	0.10	古式土師器片
S K 629	"	不明	0.82	0.35	0.09	S D 611に切られる。古式土師器片
S K 630	6 D	"	0.75	0.75	0.12	古式土師器片
S K 631	"	"	0.40	0.45	0.12	古式土師器片

### 溝(S D)

#### S D 611

第6区中西部の6E地区で検出した。北東-南西にやや蛇行して伸びる溝である。検出長3.8m、

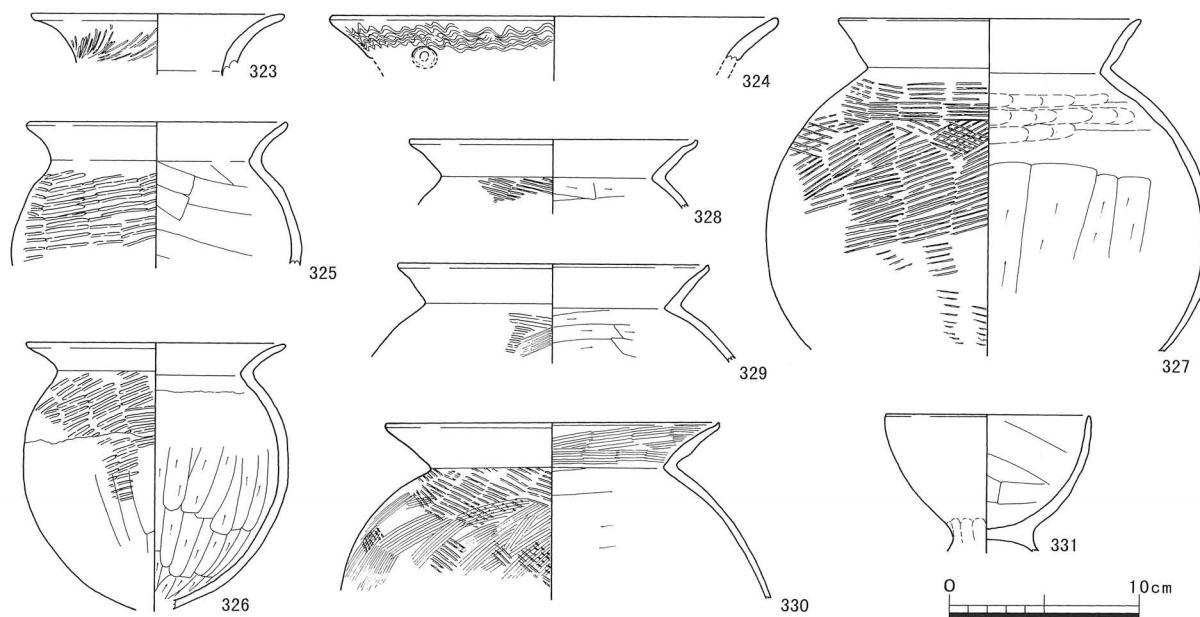


第57図 SK623、SK625、SD618、SD619平断面図

幅0.4m、深さ0.29mで、断面形状は深い皿状を呈する。SK617・SK629、SD612を切る関係にある。埋土は5Y2/1黒色粘土質シルトで多量の炭化物が混じる。古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器が少量出土している。図化し得なかったが、小形二段屈曲鉢の小破片が出土していることから、時期的には布留Ⅰ期が考えられる。

#### SD618(第57・58図、図版四〇)

第6区西部の6・7FG地区で検出した。北東-南西に伸びる溝で、SK623を切っている。検出長6.2m、幅0.85m、深さ0.25mを測る。断面形状はレンズ状を呈し、埋土は3層に分かれ、7.5Y4/1灰色細砂混シルト、10Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト、10Y5/1灰色極細粒砂混シルトである。南端は溜まり状になっており、ここから多くの古式土師器片が出土している。溝の方向からSD707と同一の溝とみられるが、埋土の状況がやや異なっている。また、遺物量もSD707は少ない。9点(323~331)を図化した。323・324は壺類である。323は(広口壺A)の口縁部の小片である。復元口径13.3cmを測る。口縁部外面の右上りの雑な直線文はヘラ先によるもので装飾的でない。生駒西麓産。324は口縁部外面に波状文と竹管押圧円形浮文の装飾が加えられた壺口縁の小片である。器種としては、二重口縁壺が想定される。復元口径23.6cmを測る。生駒西麓産。325はV様式系甕である。復元口径13.5cmを測る。生駒西麓産。326・327はV様式甕と河内庄内式甕の最古型式である(甕B<sub>1</sub>)との折衷的な様相を備えたもので、共に体部内面のヘラケズリが屈曲部に及ばない特徴を示している。326は底部を欠くが器高15cm以下の小形品である。体部のタタキ幅はやや太く3本/cmである。327は大形品で、体部中位が大きく張る球形の体部を持つ。体部外面はタタキの後、一部をハケで消す。共に非生駒西麓産。328~330は庄内式甕で(甕B<sub>2</sub>)に分類される。3点ともに体部上位から口縁部にかけての小片である。口縁部の形状は「く」の字状で端部は小さく摘み上げられ、垂直ないしは外傾する小端面を形成している。体部外面のタタキは左上がりで、329・330についてはタタキの後、右上がりのハケを施している。3点共に生駒西麓産。331は脚台が付く鉢(台付き鉢A<sub>2</sub>)である。脚部は上げ底である。復元口径10.8cm、器高7.2cm、脚部径5.0cmを測る。



第58図 SD618出土遺物実測図

色調は淡灰色。生駒西麓産。庄内Ⅱ期に比定される。

第17表 第6区 溝(S D)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S D 601	6 A	南一北	0.45	1.80	0.23	S K 602を切っている。
S D 602	6 B	"	0.60	2.02	0.06	S D 603・604を切り、S K 605に切られる。
S D 603	"	東南一西北	1.74	0.25	0.06	S K 606、S D 602に切られる。古式土師器片
S D 604	"	"	0.70	0.28	0.07	S D 602に切られる。古式土師器片
S D 605	"	"	2.50	0.55	0.06	古式土師器片
S D 606	"	"	1.52	0.50	0.07	
S D 607	6 C	南一北	1.02	1.40	0.22	
S D 608	6・7 C	"	2.28	0.62	0.70	庄内式甕
S D 609	6 D	"	0.96	0.32	0.06	
S D 610	"	"	0.74	0.25	0.07	S D 701・702・705と同じ庄内期以降の溝
S D 612	6・7 E	"	1.92	0.50	0.11	S K 627を切り、S D 611に切られる。古式土師器片
S D 613	6 E	"	1.10	0.30	0.06	
S D 614	"	"	0.65	0.34	0.07	古式土師器片
S D 615	"	"	0.54	0.41	0.08	古式土師器片
S D 616	"	"	2.25	0.28	0.05	庄内式甕、古式土師器片
S D 617	7 F	"	1.00	0.47	0.08	S K 622に切られる。布留式甕
S D 619	7 F G	北東一南西	3.83	0.31	0.10	古式土師器片

### 小穴(S P)

総数で3個(S P 601～S P 603)を検出した。S P 601を除けば7F地区に集中している。平面形状はS P 602が楕円形の他は、円形である。規模は径0.22～0.36m、深さ0.12～0.14mを測る。埋土はシルトを主体としている、柱穴を示すものはない。遺物は出土していない。法量等の詳細については第18表に示した。

第18表 第6区 小穴(S P)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S P 601	6 B	円形	0.22	0.22	0.14	
S P 602	6 F	楕円形	0.36	0.28	0.14	S K 620を切る。
S P 603	"	円形	0.25	0.23	0.12	S K 622を切る。

### 第7区(第5図、図版一七・一八)

遺構構築面は現地表下1.5～1.7m(T. P. +6.5～6.7m)付近に存在する第IX層上面で、竪穴住居2棟(S I 701・S I 702)、土坑19基(S K 701～S K 719)、小穴3個(S P 701～S P 703)、溝11条(S D 701～S D 711)を検出した。西拡張区については第6・7区として後述する。

本調査区においても第6区同様に、弥生時代後期初頭以前の河川が調査区全体を占めている。また既存建物による攪乱による遺構面の削平がみられる。特に8E区では攪乱により遺構面が大きく抉られていた。

### 竪穴住居(S I)

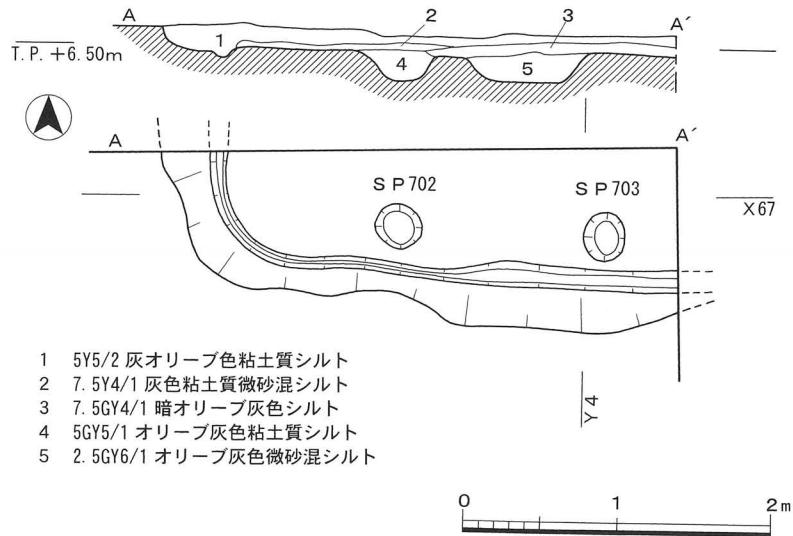
#### S I 701(第59図、図版一九)

第7区東端の7A地区で検出した。隅丸方形を呈するとみられる竪穴住居であるが、北部および東部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅4.7m、南北幅1.75m、深さは0.36mを測る。床面には、2層7.5Y4/1灰色粘土質微砂混シルト及び3層7.5Y4/1暗オリーブ灰色

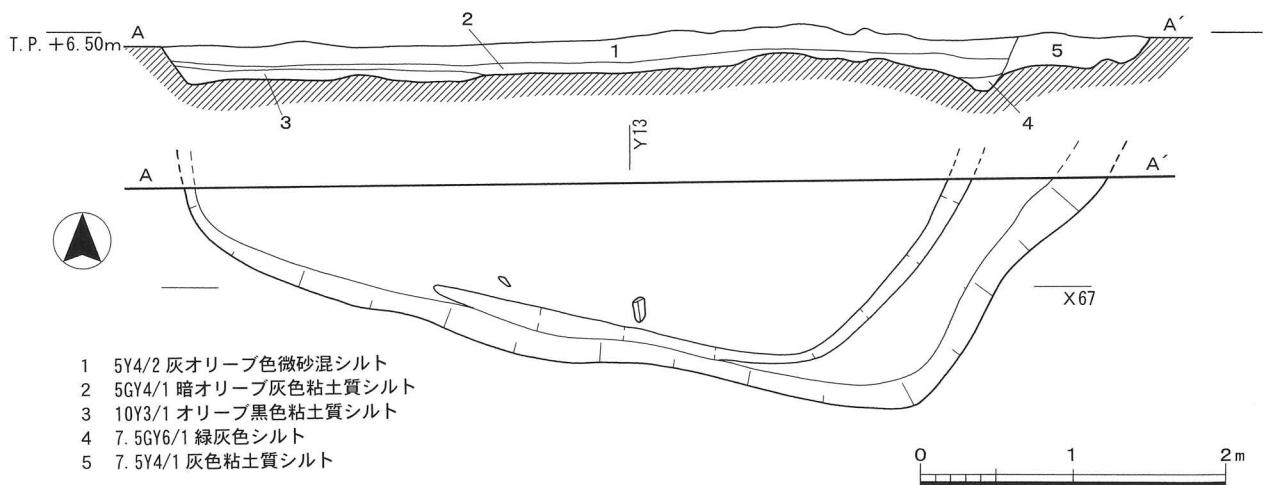
シルトを用いて0.12mを測る張床を作っている。小穴2個(S P 702・S P 703)を検出しているが、壁面に近い位置のため、柱穴以外の可能性がある。壁溝は壁面に沿って設けられており、幅0.16m、深さ0.07mを測る。壁溝内の埋土は1層と同じである。貼り床中の2・3層から古式土師器の細片が少量出土しているが時期を明確に出来たものはない。

#### S I 702(第60・61図、図版一九・四〇)

S I 701の西約3mで検出した。北部が調査区外に至るが検出部分からみて、隅丸方形を呈するものと推定される。検出部分で東西幅3.3m、南北幅1.27m、深さ0.29mを測る。床面は砂層をベースとしており、凹凸のある砂層上面に砂混じりのシルトを敷くことによって床面を作っている。壁溝は幅0.25m、深さ0.16mで、南部では壁面に沿うが、東部では壁面から約0.3m内側に廻らされている。埋土には焼土や炭化物が混じっている。柱穴は確認できなかったが、本遺構の東辺は掘方の切り合いが確認でき、建替えが行われたことが推定される。埋土は5層から成る。遺物は古式土師器片の他、砥石が出土している。5点(332～336)を図化した。332は口径が体部径を凌駕する精製の小形丸底壺(小形壺B<sub>2</sub>)である。復元口径10.8cmを測る。外面の器面調整は横位の密なヘラミガキを施す。内面に漆膜が確認でき、漆を入れる容器として使用されたものと推定される。333は二段に屈曲する口縁部を持つ鉢(鉢H<sub>2</sub>)である。約1/2が残存している。本例は復元口径が10.8cmを測るもので、同器種の中でも小形品に分類される。334はV様式系甕の小片である。小形品で復元口径13.0cmを測る。非生駒西麓産。335は布留式甕の属性の一つである口縁端部の内傾肥厚を欠くもので、布留式傾向甕(甕E)に分類される。336は布留式甕に分類されるが、口縁端部の



第59図 S I 701平面面図



第60図 S I 702平面面図

内傾肥厚は通有のものに比してやや小さい。底部を欠く以外は完存しており、口径14.2cm、体部最大径20.6cmを測る。器面調整は体部外面が右上がりを主とするハケ、体部内面は上位がヘラケズリ、上位以下には指ナデが行われている。色調は灰褐色。遺構の帰属時期については、332の小形丸底壺の形態からみて布留Ⅱ期に比定される。

#### 土坑(S K)

##### S K 704(第63・64図)

第7区東部の7C地区で検出した。北部は調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で、東西幅2.12m、南北幅1.37m、深さ0.16mを測る。埋土は2層から成る。遺物は古式土師器片が極少量出土している。1点(337)図化した。337は広口壺の口縁部片である。復元口径14.7cmを測る。非生駒西麓産。庄内式期のものであるが、小片のため時期は限定できない。

##### S K 709(第62・63図、図版四〇)

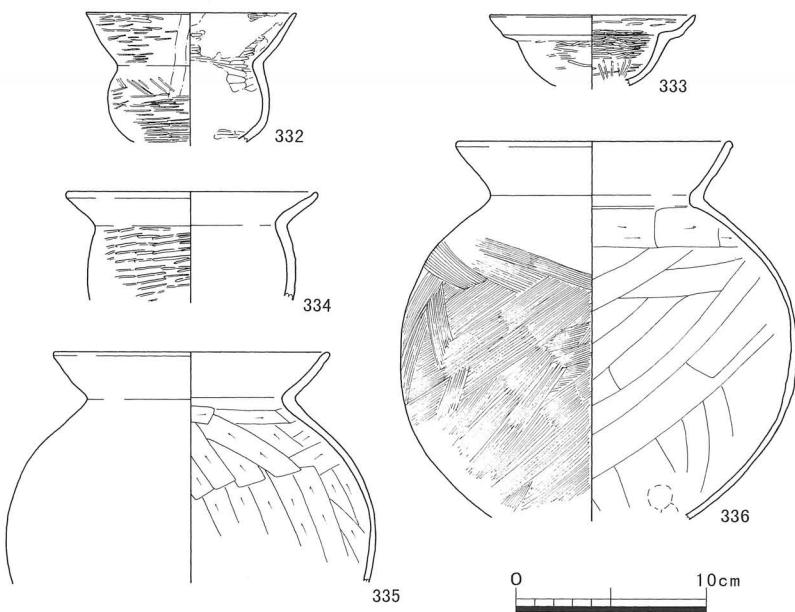
第7区中央部の7D地区で検出した。南東—北西方向に蛇行して伸びる。南北両端が調査区外に伸びるため全容は不明である。検出部分で東西幅1.75m、南北幅1.14m、深さ0.16mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される古式土師器の小破片が極少量出土している。鉢1点(341)を図化した。341は小さな平底の底部に楕形を呈する体部が付く小形鉢(鉢E<sub>1</sub>)である。ほぼ完形品で口径13.3cm、器高6.3cmを測る。口縁部外面はヨコナデ、体部外面はヘラケズリ、内面は一部ハケ調整を行う。図化した遺物以外では庄内式新相に比定される庄内式甕の小片が出土しており、遺構の帰属時期は庄内Ⅲ期が推定される。

##### S K 710(第62・63図)

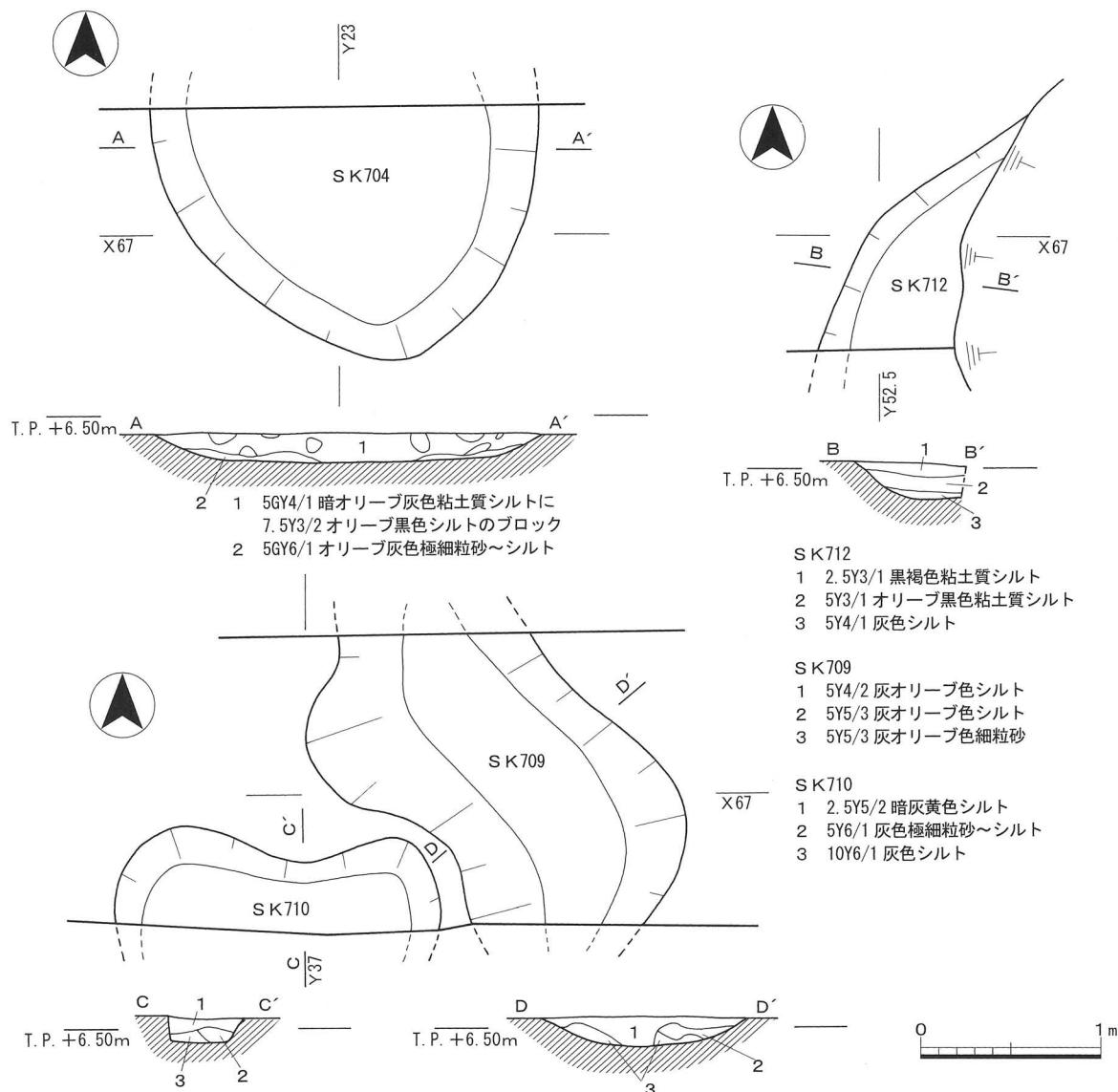
第7区中央部の7D地区で検出した。S K 709の西側に隣接する。南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅1.8m、南北幅0.55m、深さ0.12mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代初頭後半(庄内式新相)に比定される古式土師器類が極少量出土している。2点(338・340)を図化した。338は大形壺の底部である。底部は突出しない平底で底部径5.8cmを測る。色調は灰白色～淡橙色。非生駒西麓産。340は庄内式甕の小片である。口縁端部は外傾する小端面を作る。復元口径16.4cmを測る。生駒西麓産。遺構の帰属時期は庄内Ⅲ期。

##### S K 712(第62・63図)

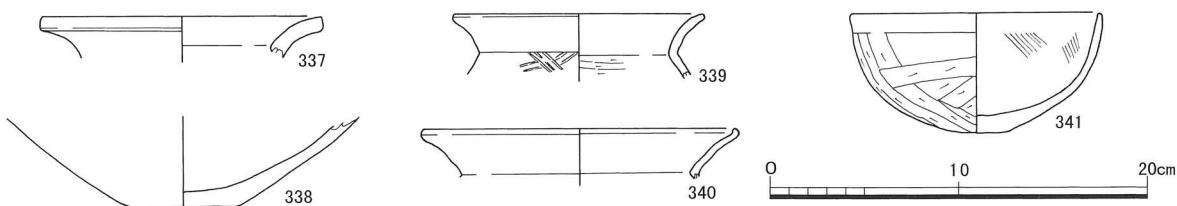
第7区西部の7F地区で検出した。東部が搅乱、南部が調査区外に至るため全容は不明である。検出部分で東西幅0.63m、南北幅1.5m、深さ0.2mを測る。埋土は3層から成る。遺物は古墳時代前期前半(布留式古相)の古式土師器片が極少量出土している。甕1点(339)を図化した。V様式系



第61図 S I 702出土遺物実測図



第62図 SK704、SK709、SK710、SK712平面面図



第63図 SK704(337)、SK709(341)、SK710(338・340)、SK712(339)出土遺物実測図

甕の小片である。復元口径13.2cmを測る。非生駒西麓産。共伴した遺物の中に布留式甕の小片が含まれていることから、遺構の帰属時期は布留Ⅰ期が推定される。

### S K718

第7区西部の7・8F地区で検出した。北部および東部は調査区外に至り、南側はS D707を切っている。検出部分で東西幅2.05m、南北幅2.4m、深さ0.21mを測る。埋土は5Y2/2オリーブ黒

色粘土質シルトで炭化物を含み、灰色粘土質シルトのブロックが混じっている。出土遺物は古式土師器が出土している。図化し得なかったが、二段屈曲の小形鉢の小片が出土していることから、遺構の帰属時期は、古墳時代前期前半(布留式古相)が推定される。

第19表 第7区 土坑(S K)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			東西幅	南北幅	深さ	
S K701	7 B	不明	1.10	1.90	0.12	S D701に切られる。
S K702	7 B C	"	1.65	1.24	0.12	S D701に切られる。V様式系甕
S K703	7 C	"	0.68	0.70	0.16	S D702に切られる。古式土師器片
S K705	"	"	2.30	1.35	0.25	S K706に切られる。
S K706	"	"	0.76	0.23	0.15	S K705・707を切る。
S K707	"	"	1.10	0.57	0.07	S K706、S D706に切られる。
S K708	7 D	楕円形	1.14	0.74	0.07	
S K711	"	不明	1.54	2.34	0.21	庄内式甕、古式土師器
S K713	7 F	"	0.64	0.23	0.09	
S K714	"	楕円形	0.76	0.30	0.11	
S K715	"	"	0.70	0.55	0.10	搅乱により削平。
S K716	"	"	0.53	0.45	0.16	S D710を切る。庄内式甕
S K717	"	"	0.53	0.45	0.13	
S K719	"	不明	0.85	0.67	0.19	古式土師器

### 溝(S D)

第7区では総数で11条(S D701～S D711)を検出した。S D701～S D705は上部の遺構面から切り込まれた遺構である。しかし、遺物は出土しておらず、時期を明確にはできないが古墳時代中期以降の溝と推定される。先述しているようにS D707はS D618と同一の溝である可能性がある。

第20表 第7区 溝(S D)法量表(単位m)

遺構番号	地区	方向	法量			出土遺物・備考
			長さ	幅(最大)	深さ	
S D701	7 B	北-南	1.52	0.70	0.10	中世以降の溝 S K701を切る。
S D702	7 C	"	1.54	0.40	0.05	" S K703を切る。
S D703	"	"	0.90	0.42	0.05	"
S D704	"	"	0.67	0.18	0.95	"
S D705	"	"	1.58	0.47	0.23	"
S D706	"	北東-南西	0.83	0.33	0.12	S K707を切り、S D6・701に切られる。庄内式甕
S D707	7 F	"	6.70	1.30	0.21	庄内式甕
S D708	"	北西-南東	1.50	0.43	0.09	S D707を切る。
S D709	"	東-西	3.00	0.30	0.08	S D710と合流。
S D710	"	"	4.50	0.35	0.09	S D709と合流。
S D711	"	北東-南西	2.00	0.35	0.10	

### 小穴(S P)

小穴は3個(S P701～S P703)検出したが、そのうち2個(S P702・S P703)はS B701の柱穴を構成するものである。埋土はいずれも7.5Y3/2暗オリーブ灰色粘土質シルトで炭化物が混じっていた。断面形状はU字状を呈するが、柱痕は明確にできなかった。

第21表 第7区 小穴(S P)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
S P701	7 F	楕円形	0.41	0.3	0.05	
S P702	7 A	円形	0.3	0.28	0.12	S B701内柱穴
S P703	"	"	2.4	2.5	0.13	"

## 第6・7区(第5図、図版一七・一八)

第6区と第7区において中継用水槽をつくるため両方の調査区を繋げる形で調査を行った6・7G地区( $8 \times 11m$ )と、消化用水槽のため繋がった6・7H I地区( $9 \times 10m$ )を第6・7区とした。また、6・7地区中央部において大量の土器が出土した溝を1条(S D6・701)検出したが、これも両方の調査区にまたがるため、第6・7区での取り扱いとした。

遺構構築面は地表下1.6~1.8m(T. P. +6.5~6.7m)付近に存在する第IX層上面で、土坑6基(S K6・701~S K6・706)、小穴1個(S P6・701)、溝4条(S D6・701~S D6・704)を検出した。

### 土坑(S K)

#### S K6・701(第64・65図、図版四一~四四)

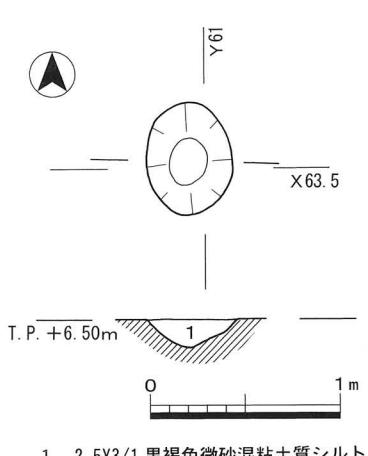
7G地区で検出した。南北方向に長い橢円形を呈するもので、東西径0.45m、南北径0.56m、深さ0.15mを測る。埋土は2.5Y3/1黒褐色微砂混粘土質シルトの単一層である。古墳時代前期前半(布留式古相)に比定される甕等が出土している。甕1点(342)を図化した。342は布留式影響の庄内式甕に分類される(甕D)である。体部下位以下を欠く。復元口径15.3cmを測る。器面調整は体部外側が縦位のハケ、内面は上位がナデ、中位以下はヘラケズリを行う。色調は灰白~淡橙色。胎土は粗く4mm以下の長石・石英・花崗岩を多量に含む。布留I期に比定される。

#### S K6・702(図版二〇)

7F地区で検出した。不定形を呈する土坑で、東西幅1.16m、南北幅0.9m、深さ0.37mを測る。埋土は大きく3層に分けられ上部より5Y3/1オリーブ黒色極細粒砂混シルト、5Y4/2灰オリーブ色極細粒砂混シルト、7.5Y2/1オリーブ黒色細砂混シルトである。掘方は細砂混じりのシルト層まで掘削されていたが、現状では豊富な湧水は認められず井戸と判断できなかった。古式土師器片が少量出土しているが時期を明確に出来たものはない。

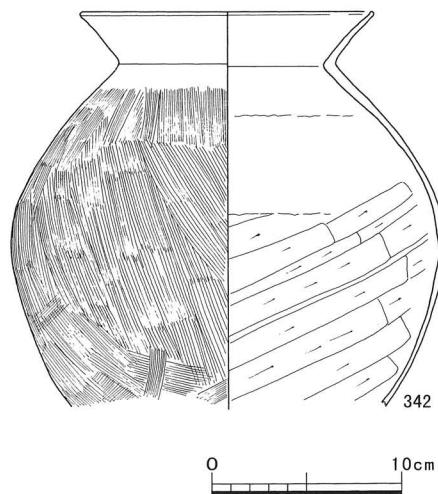
#### S K6・703(図版二〇)

S K6・702の南側に隣接している。南北に長い橢円形を呈する土坑で、東西長1.14m、南北長1.1m、深さ0.59mを測る。埋土は4層に分けられる。上部より2.5GY5/4黄褐色シルト、2.5Y4/オリーブ褐色シルト、7.5Y2/2オリーブ黒色粘土質シルト、2.5GY2/1黒色粘土質シルト。S K6・



1 2.5Y3/1 黒褐色微砂混粘土質シルト

第64図 S K6・701平面面図



第65図 S K6・701出土遺物実測図

702と比較して埋土に炭化物が含まれている点が異なっている。上部に炭化物を含む薄層が数枚堆積していることから炉の可能性を持つ。古式土師器が極少量出土しているが時期は明確でない。

第22表 第6・7区 土坑(SK)法量表(単位m)

遺構番号	地区	平面形状	法量			出土遺物・備考
			長径	短径	深さ	
SK6.704	7 G	楕円形	0.77	1.22	0.49	庄内式甕
SK6.705	"	円形	0.33	0.32	0.20	古式土師器片
SK6.706	7 I	不明	3.85	0.76	0.18	SD6・704に切られる。庄内式甕

### 小穴(SP)

#### SP6・701

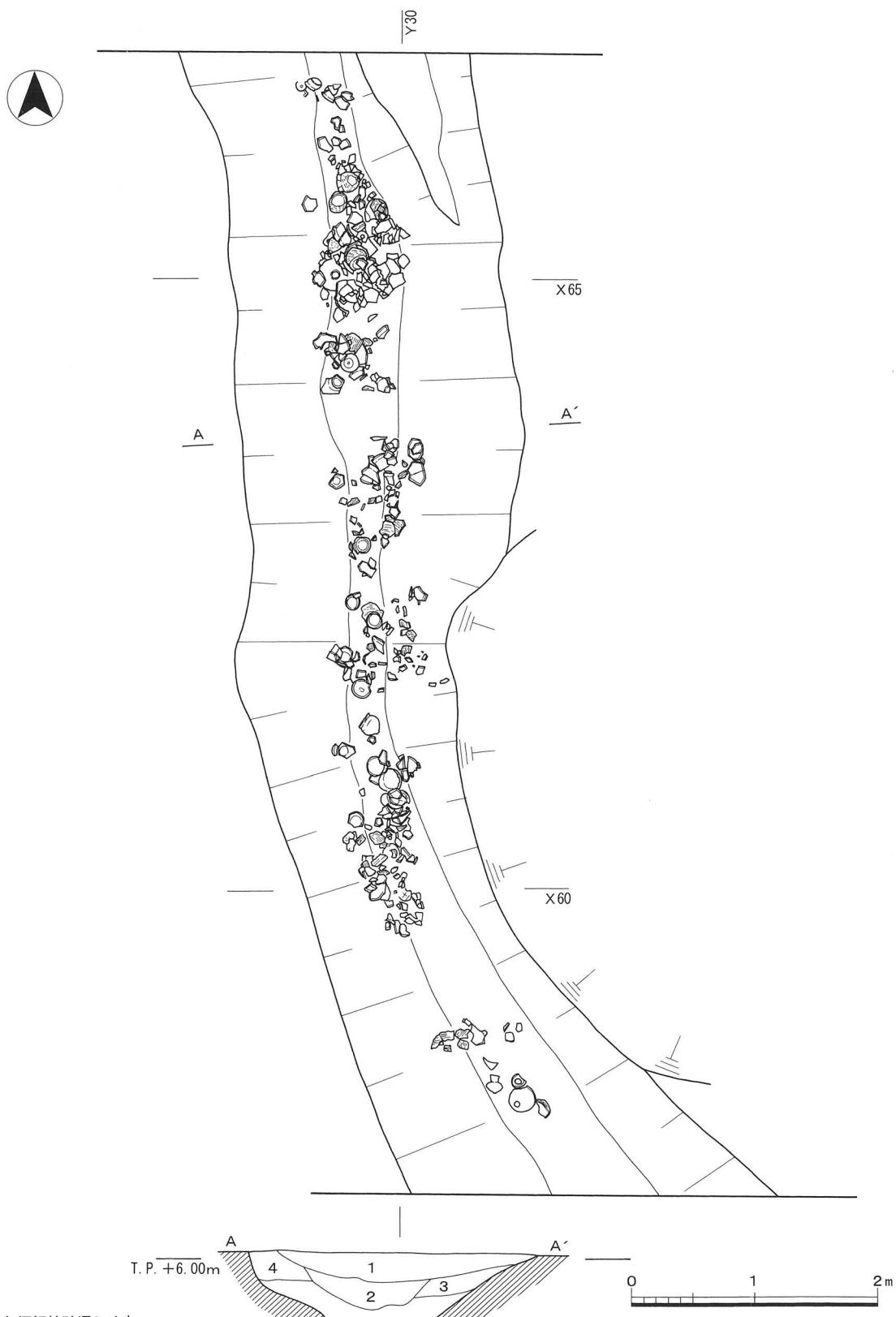
7F地区で検出した。円形を呈するもので、東西径0.32m、南北径0.2m、深さ0.14mを測る。埋土は5Y4/2灰オリーブ色粘土質シルトの单一層である。遺物は出土していない。

### 溝(SD)

#### SD6・701(第66~70図、図版二一・四一~四五)

第6・7区中央部の6・7CD地区で検出した。南北方向に伸びる断面形状V字を呈する溝である。検出長9.35m、幅2.35m、深さ0.8mを測る。埋土は5層に分けられ、上部から1層5Y4/1灰色極細粒砂混シルト、2層5Y2/1黒色極細粒砂混粘土質シルト、3層7.5Y5/2灰オリーブ色極細粒砂混シルト、4層5Y3/1オリーブ黒色粘土質シルト、5層5GY4/1暗オリーブ灰色極細粒砂混粘土質シルトである。このうち2層を中心として弥生時代後期末~古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される完形品を多数含む弥生土器、古式土師器が多量に出土しており、一時期に大量廃棄が実施されたことが窺われる。溝の機能としては居住域などを区画する溝であることが考えられるが、南側の第5区では検出されていない。なお、本遺構の構築段階である弥生時代後期末に比定される遺構は、本調査区内では検出されておらず、当該期においては本調査地一帯が集落域の縁辺に位置していたことが推定される。遺物は2層・5層を中心とした下層から弥生時代後期末、1層を中心とした上層から古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定される土器類が出土しており、その大半を2層出土遺物が占めている。75点(343~418)を図化した。

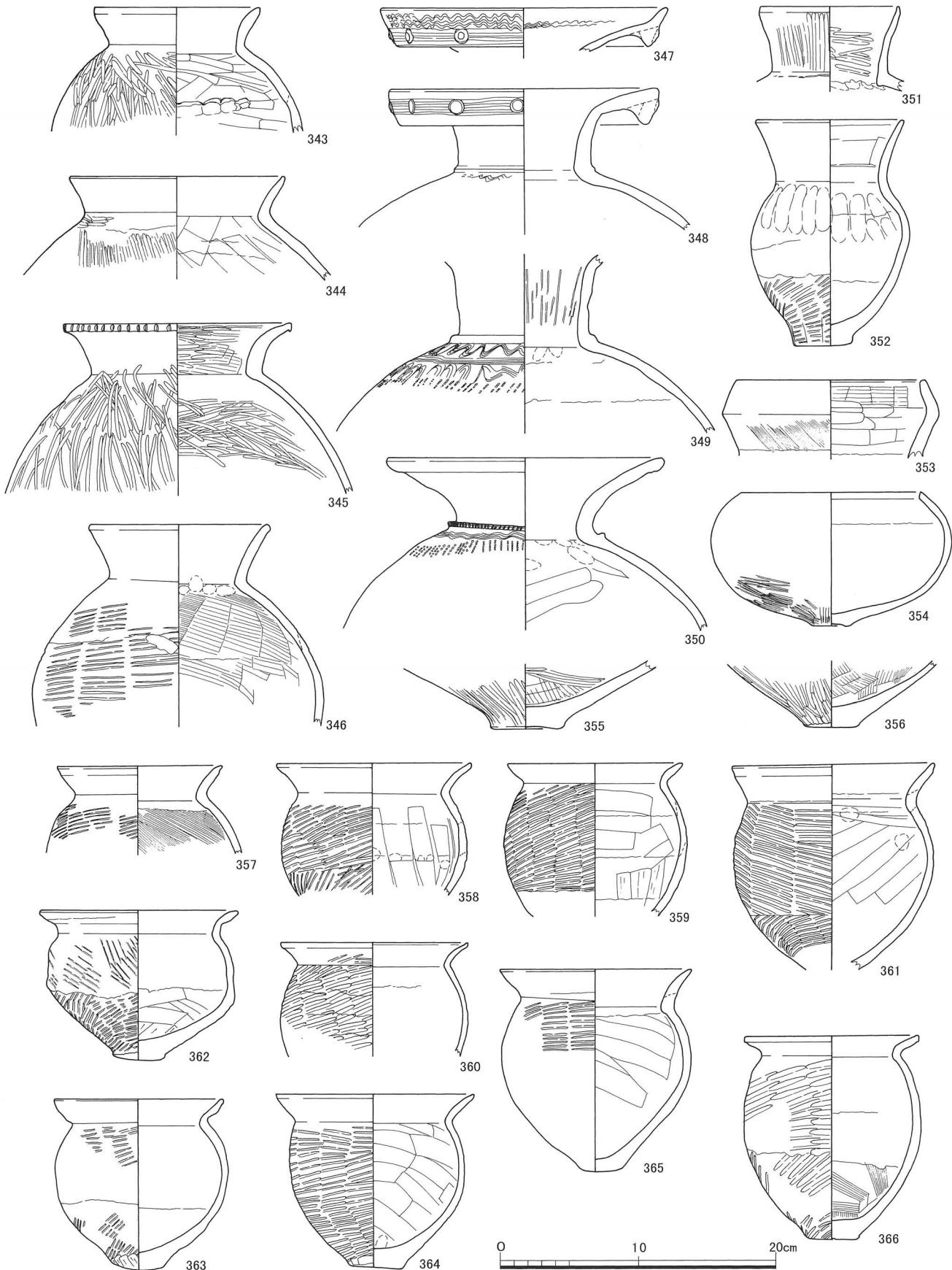
壺類は14点(343~356)である。343~345・350は広口壺で口縁部の形態から343~345〔広口壺A〕、350が〔広口壺A<sub>3</sub>〕に分類される。343~345は口縁部~体部上半が残存している。口径は343が11.8cm、344が14.3cm、345が16.4cmを測る。口縁端面は丸味を持つ343・344と垂直方向に端面を持ちその部分に刻み目を入れる345がある。体部外面の器面調整は縦位のヘラミガキを多用する。343・345が非生駒西麓産。344が生駒西麓産。350は口頸部がラッパ状に開くもので、口縁部は下方に肥厚させて幅広の端部を形成している。体部の上位には、刻み目が上面に施された凸帶とその下方に波状文と刺突文で構成される文様が施文されている。口径19.7cmを測る。生駒西麓産。346は口縁部が斜上方に伸びる広口壺〔広口壺C〕である。復元口径12.8cmを測る。体部外面はタタキ調整が行われている。非生駒西麓産。347~349は上下に肥厚する口縁部外側面および体部外面上位、さらに347については口縁部内面に加飾を行う〔広口壺D<sub>3</sub>〕に分類される。349は口縁部を欠く。347は口縁部外側面の上位に波状文、下位に直線文と竹管押圧円形浮文、口縁部内面上位に波



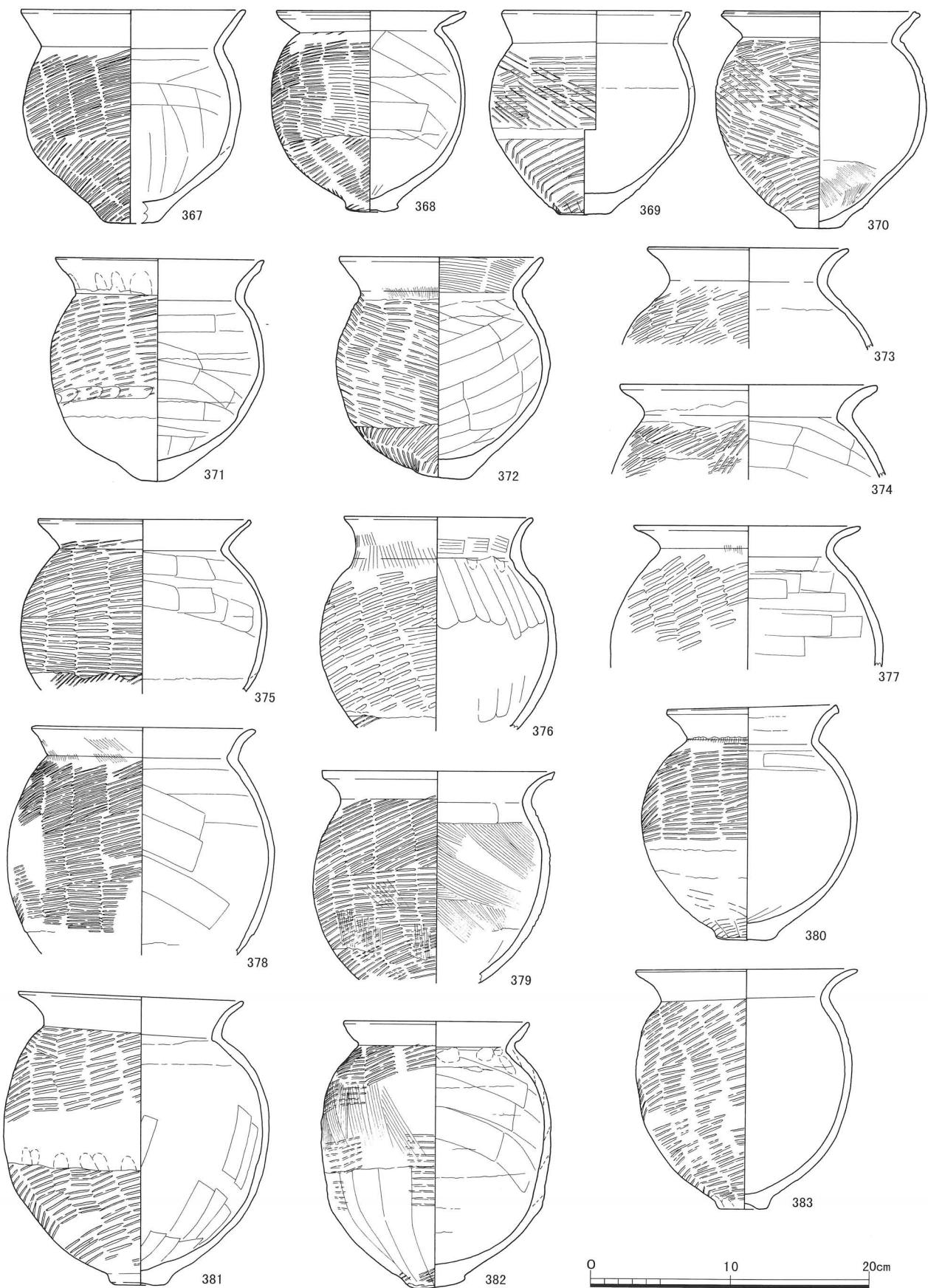
第66図 SD6・701平面面図

状文を飾る。348は口縁部外側面の中位に直線文と竹管押圧円形浮文を飾る。348・349は共に体部上位に凸帯と加飾が行われており、348が波状文、349が上部から波状文、直線文、波状文、刺突文の順で施文されている。3点共に色調は赤褐色。生駒西麓産。351・352は長頸壺〔長頸壺A<sub>2</sub>〕である。352は図上で完形に復元が可能で口径10.5cm、器高16.4cm、底径4.0cmを測る。共に生駒西麓産。353は頸部が斜上方に伸びた後、口縁部が内側に屈曲する複合口縁壺である。復元口径13.4cmを測る。色調は淡灰褐色。胎土中に3mm以下の長石・石英が散見される。小片のため不明な点が多いが、他地域において当該時期で類例を求めれば、愛媛県中部(伊予中部地域)および広島県西部(安芸地域)を中心に分布する西部瀬戸内系の複合口縁壺に類似するものがある。畿内における当該期の西部瀬戸内系複合口縁壺の出土例としては、河内地域においては類例が少なく、大和地域では纏向遺跡からの5例(纏向1式～2式)が知られている程度(梅木2003)である。354は無頸壺である。扁球形の体部に小さな平底で裏面が窪む底部が付く。口径12.8cm、器高9.8cm、底径2.4cmを測る。色調は赤褐～浅黄橙色。非生駒西麓産。355・356は壺の底部で、小さく突出する355と突出しない356がある。裏面は平底の356と窪み底の355がある。2点共に生駒西麓産。

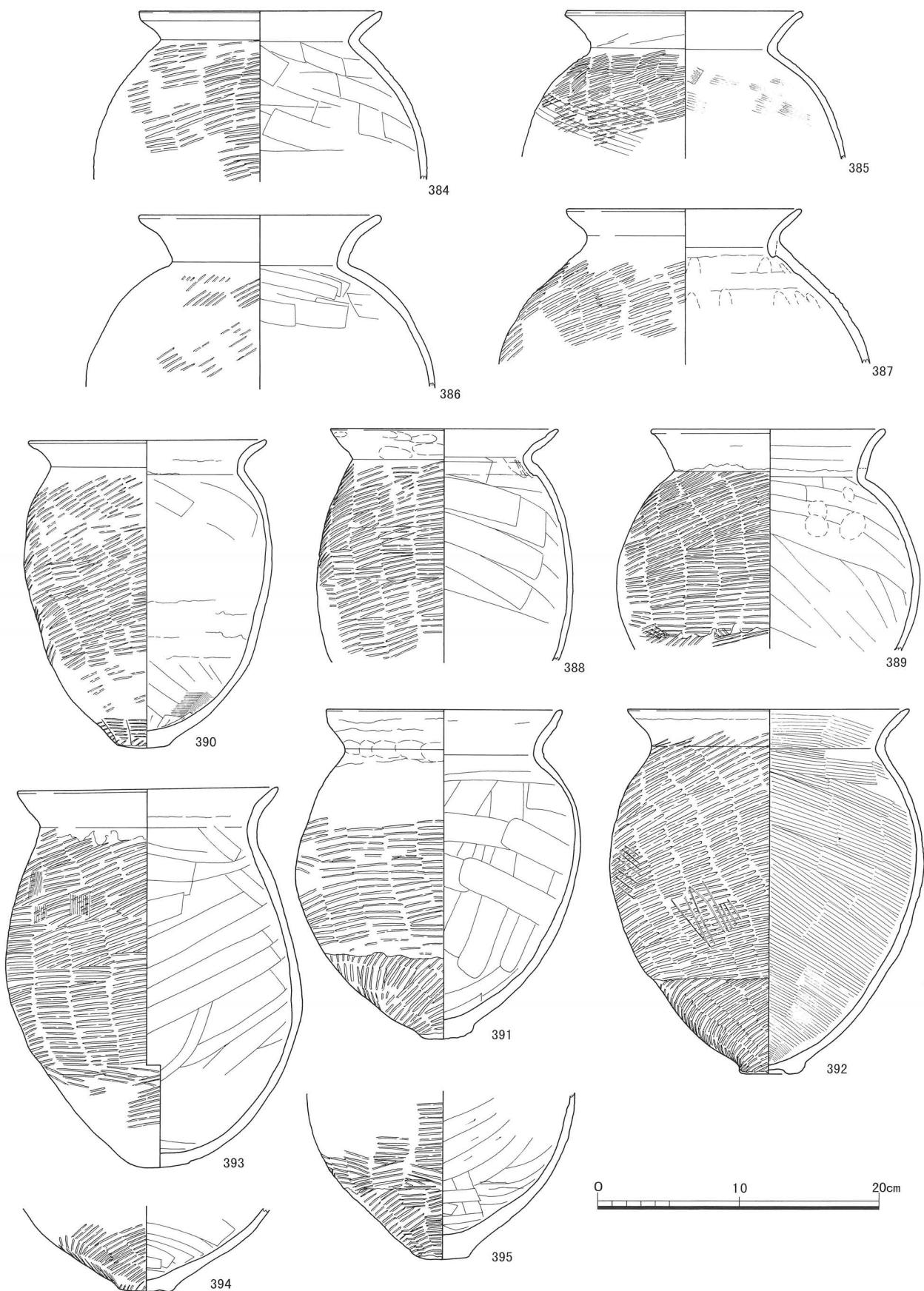
甕類は39点(357～395)を図化した。357～395はV様式甕ないしはV様式系甕に分類される。357～372は器高が16cm未満の小形品である。体部の形態では体部の中位以下が残存する358～372の内、体部の最大径が上位にある364以外は中位に最大径を持つ。口縁部の形態は「く」の字ないしは外反するもので、口縁端部の形態は、丸く終わるもの357・359・362・363～365・367・368・371・372、摘み上げられるもの360、外傾する平坦面をもつもの369・370、端部が垂直なもの358・361・366がある。底部は突出するもの362・368、少し突出するもの363～367・370～372、突出しないもの369がある。底部裏面は368がドーナツ底の他は平底である。体部外面は二分割成形に沿ってタタキ調整が行われている。体部内面の器面調整は板ナデが主で一部ハケやナデにより平滑にされるものがある。362については体部形状が異形であり、手焙り土器の覆部が無い形態の[小形鉢G]になる可能性がある。胎土は生駒西麓産が359・360・362・363・366・367で他は非生駒西麓産である。373～382は器高が16～22cm未満の中形品である。体部の形態では体部中位に最大径を持つものが大半で、382以外は球形を呈する。口縁部の形態は「く」の字ないしは外反するもので、口縁端部の形態は、丸く終わるもの375～378・381～383、外傾する平坦面を持つもの380、内傾する平坦面を持つもの379がある。底部は突出するもの381、少し突出するもの380・382・383がある。底部裏面は平底のもの380・382、ドーナツ底のもの381・382がある。体部外面は三分割成形に沿ってタタキ調整が行われている。体部内面の器面調整は板ナデが主であるが、ハケ調整を多用する381やナデにより平滑にされる380・383がある。生駒西麓産が376・378・381で他は非生駒西麓産である。384～393は器高が22～27cm未満の大形品である。全形ないしは体部の中位迄残存しているもののなかで、体部最大径が上位にある390以外は、中位に最大径を持つ。口縁部の形態は「く」の字ないしは外反するもので、口縁端部の形態は、丸く終わるもの386～393、外傾する平坦面を持つもの385、内傾する平坦面を持つもの384がある。底部は少し突出するもの390～392、突出しないもの393がある。底部裏面は平坦なもの390・391・393、ドーナツ底の392がある。体部外面は三分割ないしは四分割成形に沿ってタタキ調整が行われている。体部内面の器面調整は板ナデが主で、392のようにハケ調整を多用するものがある。384・387は生駒西麓産、他は非生駒西麓産である。394・395は甕底部である。共に突出しない平底で、裏面は平底である。395の体部内面の一部にへ



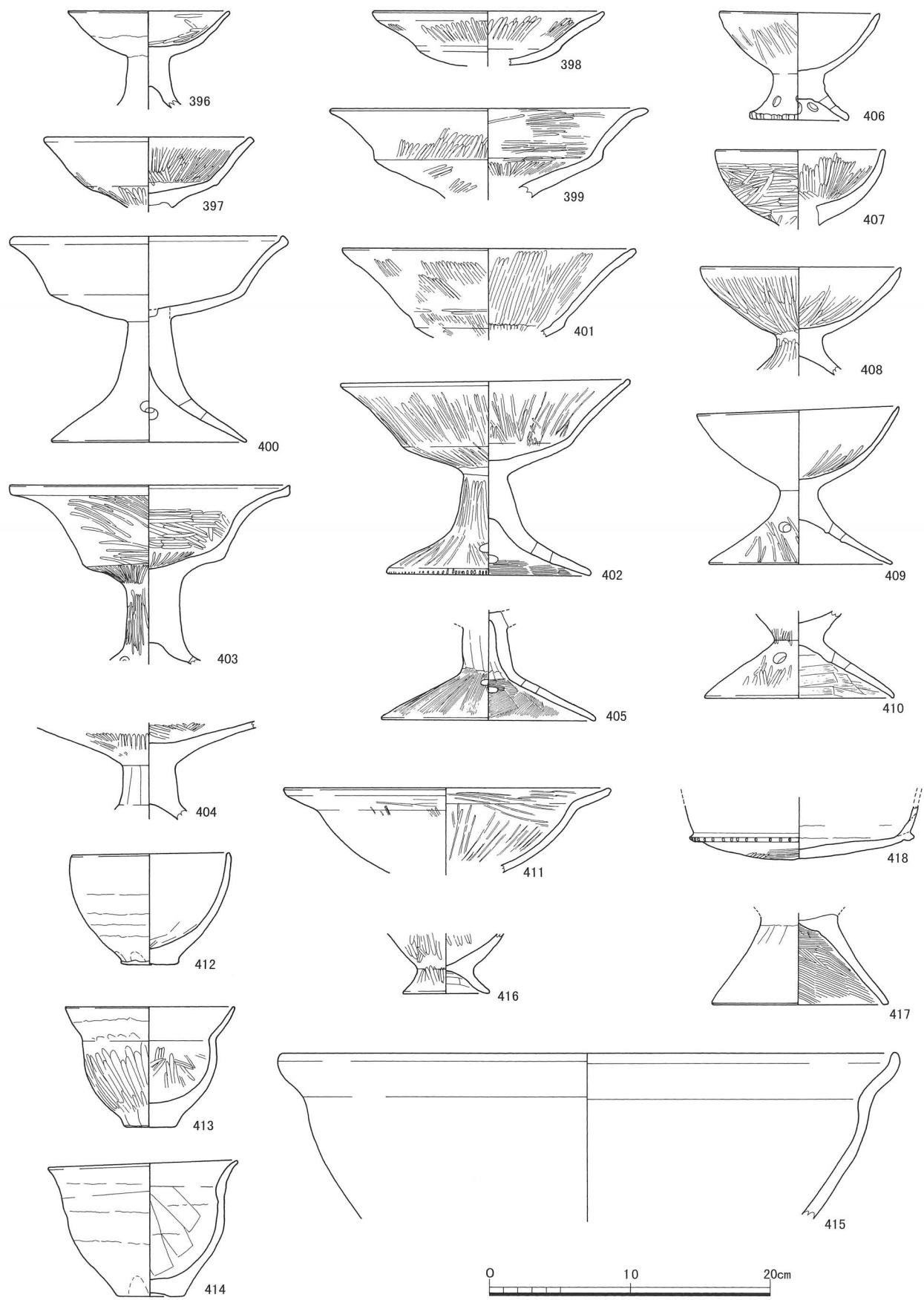
第67図 S D6・701出土遺物実測図－1



第68図 S D 6・701出土遺物実測図－2



第69図 SD6・701出土遺物実測図－3



第70図 S D 6 · 701出土遺物実測図－4

ラケズリが認められる。共に生駒西麓産。

高杯類は15点(396～410)である。396～405は有稜高杯である。396～398は小形品である。口縁部が直線的に伸びる396・397と明瞭な稜を境に外反気味に伸びる398がある。口径は396が10.2cm、397が14.5cm、398が16.2cmを測る。色調は396が淡赤褐色、397・398が灰白色。胎土は396・397が粗く4mm以下の長石・石英・チャートを多く含む。398は実体鏡で角閃石の含有が認められる。399～403は口径が19.0～22.5cmを測る。稜を境として口縁部は外反ないしは直線的に伸びるもので、口縁端部が丸く終わる399・401・402、外傾する400、垂直方向に幅広の端面形成する403がある。脚部は中実の400・402・403と中空の405がある。杯部の形状や口縁比、口縁比の数値から396～400が〔高杯D<sub>1</sub>〕、401・402が〔高杯E<sub>1</sub>〕、403はやや異形であるが柱状部の形態から〔高杯D<sub>2</sub>〕に分類される。401・402については庄内系の高杯で庄内I期に盛行する器種である。色調は399が灰褐色、400・401・403が浅黄橙色、402が赤褐色である。399が生駒西麓産、他は非生駒西麓産。404は中実の短い柱状部を持つもので、口縁部と裾部を欠く。405は杯部を欠く。406は深めで椀形の杯部に「ハ」の字に開く脚部が付く小形の椀形高杯〔椀形高杯B<sub>1</sub>〕である。スカシ孔は7方に穿たれている。色調は淡黄橙色。407～409は〔椀形高杯B<sub>2</sub>〕である。409が図上で完形に復元が可能で、口径14.2cm、器高11.0cm、裾部径12.8cmを測る。色調は407が灰白色、408・409が淡褐灰色。407が非生駒西麓産。408・409が生駒西麓産。410は杯部を欠く。脚部は「ハ」の字に開くもので、〔椀形高杯C〕に分類される。色調は橙色。胎土は粗く4mm以下の長石・石英・チャートを多量に含む。

411～417は鉢である。411は弥生系の中形鉢〔中形鉢A〕である。復元口径23.0cmを測る。色調は灰白色。実体鏡で角閃石の含有を認める。412は〔小形鉢C〕である。ほぼ完形で口径11.0cm、器高7.9cm、底部径4.0cmを測る。色調は灰白～淡赤褐色。413・414は小さく外反する口縁部が付く〔小形鉢A〕で、特に413については庄内式最古段階に盛行する器種である。底部は僅かに突出するもので、裏面は413が平底、414がドーナツ底である。共にほぼ完形で413が口径11.8cm、器高8.8cm、底径3.5cm、414が口径13.3cm、器高9.5cm、底径4.6cmを測る。色調は413が淡赤褐色、414が灰白色である。共に非生駒西麓産。415は大形鉢である。復元口径43.2cm。色調は赤橙色。胎土に3mm以下の長石・石英を多量に含む。416は脚部が「ハ」の字状に開く小形鉢〔小形鉢B<sub>2</sub>〕である。色調は赤褐色。非生駒西麓産。417は大形の台付鉢の脚部と推定される。脚部外面はナデ、内面はハケを施す。色調は褐灰色。生駒西麓産。

418は手焙形土器である。体部中位以下が完存している。底部は突出部を作らない。底部と体部の境に上面に刻目を持つ凸帯が廻る。色調は灰白色～淡橙色。土器組成からみて、弥生時代後期後半(様相2)～古墳時代初頭前半(様相4=庄内I期)にかけての時期幅のある資料と考えられる。掲載した個々の土器の出土層位については、厳密に上層、下層に峻別することが出来なかったが、古墳時代初頭のものについては上層(1層)、その他については下層(2層・5層)からの出土遺物であったと推定される。従って、遺構埋没時期の最終段階(1層形成時期)は古墳時代初頭前半(庄内式古相)が想定されるが、本遺構内からは庄内式甕の出土は皆無であった。

#### S D6・702(第71図)

西拡張区の6・7H I地区で検出した。東一西方向に伸びる。東西端共に搅乱を受けており、全容は不明である。検出部分で検出長1.48m、幅2.4m、深さ0.37mを測る。埋土は7.5Y3/2オーリーズ黒色シルトである。古墳時代初頭後半(庄内式新相)～前期前半(布留式古相)の古式土師器片が

少量化出土している。4点(419～422)を図化した。419～421はV様式系甕である。419は復元口径14.0cmを測る。419・420共に生駒西麓産。421は小形品で復元口径10.4cmを測る。生駒西麓産。422は高杯の脚部である。スカシ孔は3方に穿たれている。色調は淡灰褐色。胎土は精良であるが、実体鏡で角閃石の含有が認められる。

図化した遺物は庄内式期の範疇のものであるが、図化した以外に小形丸底壺が含まれていることから、遺構の廃絶時期は布留I期が推定される。

#### S D6・703(第71図)

西拡張区の7H地区で検出した。南一北方向に伸びる。南部が搅乱、東部が調査区外に至る。検出部分で検出長3.25m、南北幅1.76m、深さ0.43mを測る。埋土は2層で上層が2.5GY3/1オリーブ黒色粘土質シルト、下層が10Y4/1灰色シルトである。古墳時代初頭後半(庄内式新相)を中心とする古式土師器片が少量化出土している。2点(423・424)を図化した。2点共に弥生系の有稜高杯である。共に杯部の1/2以上が残存している。口径は423が19.4cm、424が17.0cmを測る。423については、稜部に小さく垂下する凸帯が貼り付けられている。共に色調は共に灰白色で非生駒西麓産である。図化した遺物は共に弥生時代後期末に比定されるが、図化し得なかつた遺物の中に庄内式新相に比定される庄内甕片が含まれているため、遺構の廃絶時期は庄内式新相が考えられる。

#### S D6・704

西拡張区の7H I地区で検出した。南東一北西方向に伸びる。東端は搅乱、西端は調査区外に至る。検出部分で検出長0.82m、幅0.62m、深さ0.13mを測る。埋土は7.5Y3/2オリーブ黒色シルトである。遺物は出土していない。

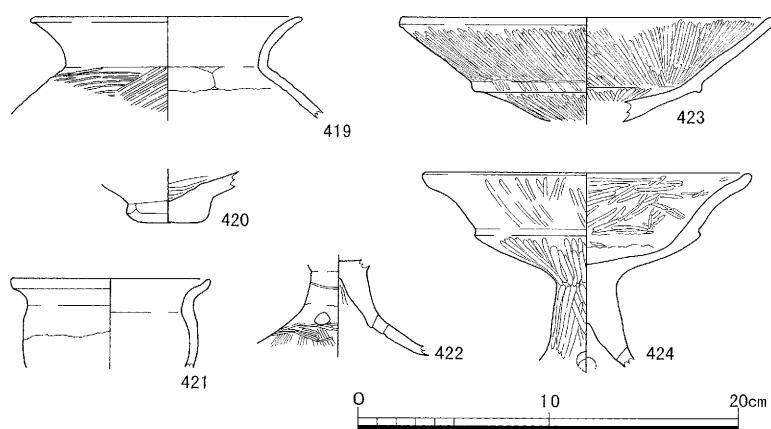
#### 註記

註1 353の西部瀬戸内系複合口縁壺については、武正良浩((財)松山市生涯学習振興財團埋蔵文化財センター(松山市考古館))、山田繁樹((財)広島県教育事業団)の両氏に実見していただきご教示を受けた。

なお、中河内地域出土のなかで西部瀬戸内系の可能性があるものとしては、以下の2例がある。

①八尾市の中田遺跡第50次調査の第2層出土遺物(第5図-35)。弥生時代中期～後期の遺物と供伴。岡田清一 2005「I 中田遺跡第50次調査(N T 2003-50)」『(財)八尾市文化財調査研究会報告84』(財)八尾市文化財調査研究会

②柏原市の船橋遺跡の96-1-1-5トレチ第4面遺構1(流路)出土遺物(図19-12)。弥生～中世遺物と供伴。寺川史郎他 1998「船橋遺跡－建設省河川事業侵入路建設及び府営美陵住宅建替に伴う調査報告書－」『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書 第29集』(財)大阪府文化財調査研究センター



第71図 S D6・702(419～422)、S D6・703(423・424)出土遺物実測図

## 参考文献

### 弥生土器

- ・原田昌則 2003「第5章 遺構・遺物の検討 第1節 中・南河内地域における弥生時代後期後半～古墳時代初頭前半(庄内式古相)の土器の細分試案について」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書－大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う－』(財)八尾市文化財調査研究会報告74 (財)八尾市文化財調査研究会 本文中の土器分類で〔 〕で示したものがそれにあたる。

### 古式土師器

- ・原田昌則 1993「第5章 まとめ 3)中河内地域における庄内式から布留式土器の編年試案」『II 久宝寺遺跡(第1次調査)』(財)八尾市文化財調査研究会報告37 本文中の土器分類で( )で示したものがそれにあたる。

### 北陸系土器

- ・田島明人 1986「土師器よりみた古墳時代土器群の変遷」『漆町遺跡I』石川県立埋蔵文化財センター西部瀬戸内系土器

- ・梅木謙一 2003「3 近畿の西部瀬戸内系土器－複合口縁壺を中心に－」『初期古墳と大和の考古学』学生社匙形土製品

- ・大野 薫 1989「匙形土製品小考」『大阪文化財論集－財団法人大阪文化財センター設立15周年記念論集－』(財)大阪文化財センター

- ・坪田真一 1993「II 第2次調査(TS 90-2)」『太子堂遺跡<第1次調査・第2次調査報告>』(財)八尾市文化財調査研究会報告36 (財)八尾市文化財調査研究会

### 各遺跡報告書

- ・成海佳子 1992「13. 久宝寺遺跡第9次調査(KH91-09)」『平成3年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

- ・石野博信・関川尚功 1977『纏向』桜井市教育委員会

- ・嶋村友子他 1986『成法寺遺跡発掘調査概要I』大阪府教育委員会

- ・西村 歩・奥村茂輝 2004「八尾市 久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI 一大阪竜華都市拠点地区竜華東西線建設に伴う発掘調査－」『(財)大阪府文化財センター調査報告書 第118集』(財)大阪府文化財センター

## 第3章　まとめ

今回の調査では弥生時代後期末から古墳時代初頭までの遺構を検出し、多くの遺物が出土した。検出した遺構には、居住域を形成した竪穴住居、土坑、溝等がある。とくに第4区～7区にかけては、河川氾濫による堆積層が作り出した微高地で竪穴住居や土坑、炉と推定される土坑が見つかるなど当該期の生活を復元する資料が得られた。なかでも庄内式期の土器を多量に含む土坑群の存在は居住域の中心であることを物語っているものといえよう。また、弥生時代後期末から古墳時代初頭前半(庄内式古相)に比定されるSD6・701からは完形品を含み、穿孔などを施していない土器が多数出土していることから、破損あるいは祭祀による廃棄とは別の土器使用サイクルが存在していたことが窺われる。こうした居住関連遺構を構築している微高地を境界として南側の後背湿地は生活域からはずれ、取排水に関連すると推定される溝群を検出している。

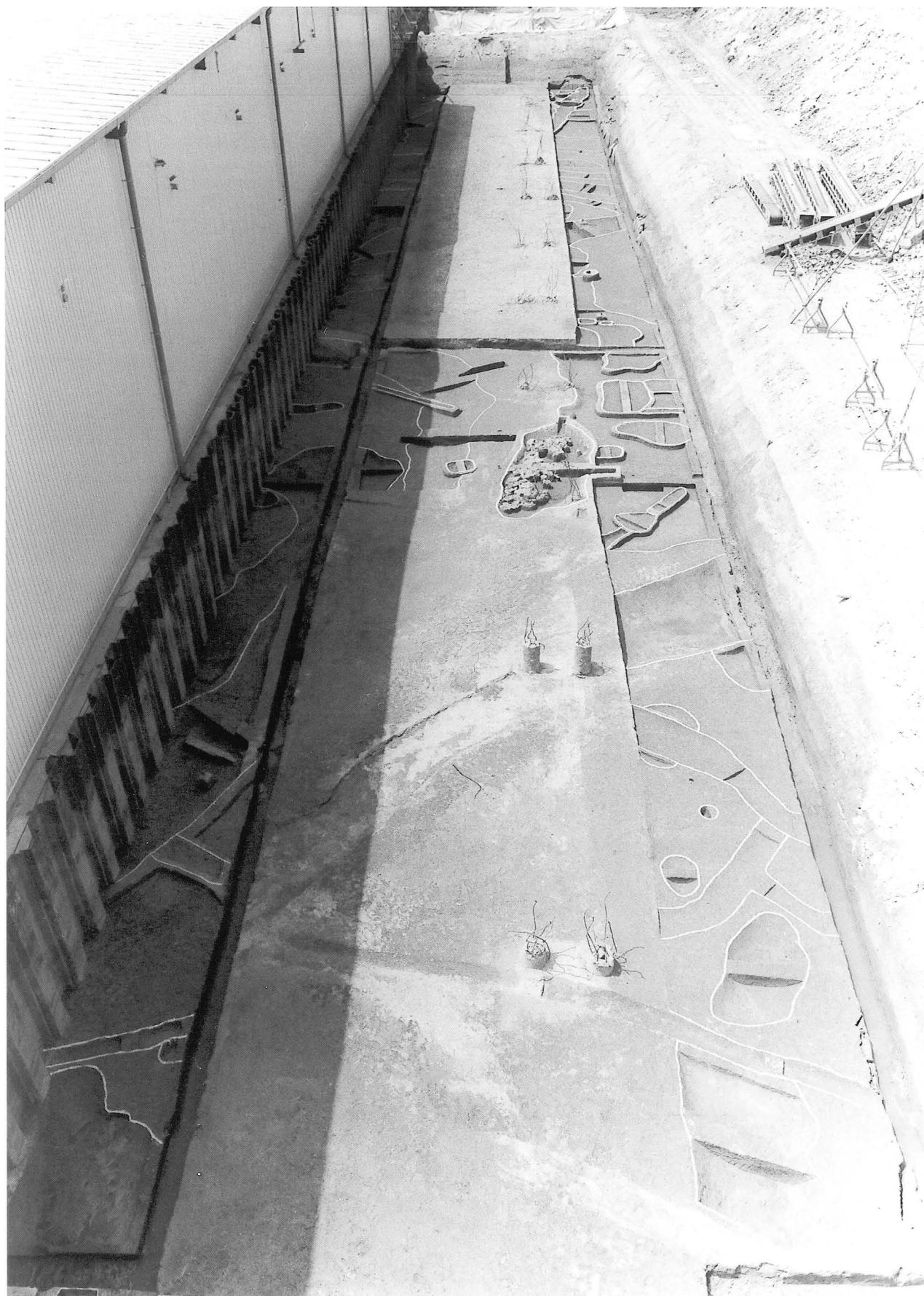
周辺の調査では本調査区の北約70mで(財)大阪府文化財調査研究センター(以下、センター)が行った竜華東西線に伴う調査[2-1工区(7区)、2-2工区(2～5区)]と南約150mで当研究会が行った第27次調査(KH99-27)がある。センター調査では、幅約15mのトレンチを東西約250mの長さで調査している。そして、本調査地と最も近い2-2工区(5区)ではやはり微高地になっており、竪穴住居7棟と一辺約4.5mの方形の掘方をもつ井戸が検出されている。そしてこの居住域を画する河道と溝の間には墓域、そして溝より東には畑を主体とする耕作地が広がっていた。本調査地の第4～7区の状況は、センターの調査と対照すれば、その居住域と有機的な関連をもつことは明らかであり、集落の南限を示唆しているものである。また、当研究会が行った第27次調査では遺構が希薄であり、第1～3区の調査状況と合致する。このように今回の調査地は弥生時代後期末から古墳時代初頭における集落の縁辺にあたると推定される。

以上のように、今回の調査では弥生時代後期末から古墳時代前期前半(布留式古相)の遺構・遺物を検出した。また、出土遺物から6世紀代の遺構が遺存していた可能性がある。今回はこれらを同一レベルで検出せざるを得なかったが、久宝寺遺跡はこのように複合的な遺跡であり、それが密に遺存しているため、今後精緻な調査が望まれる。

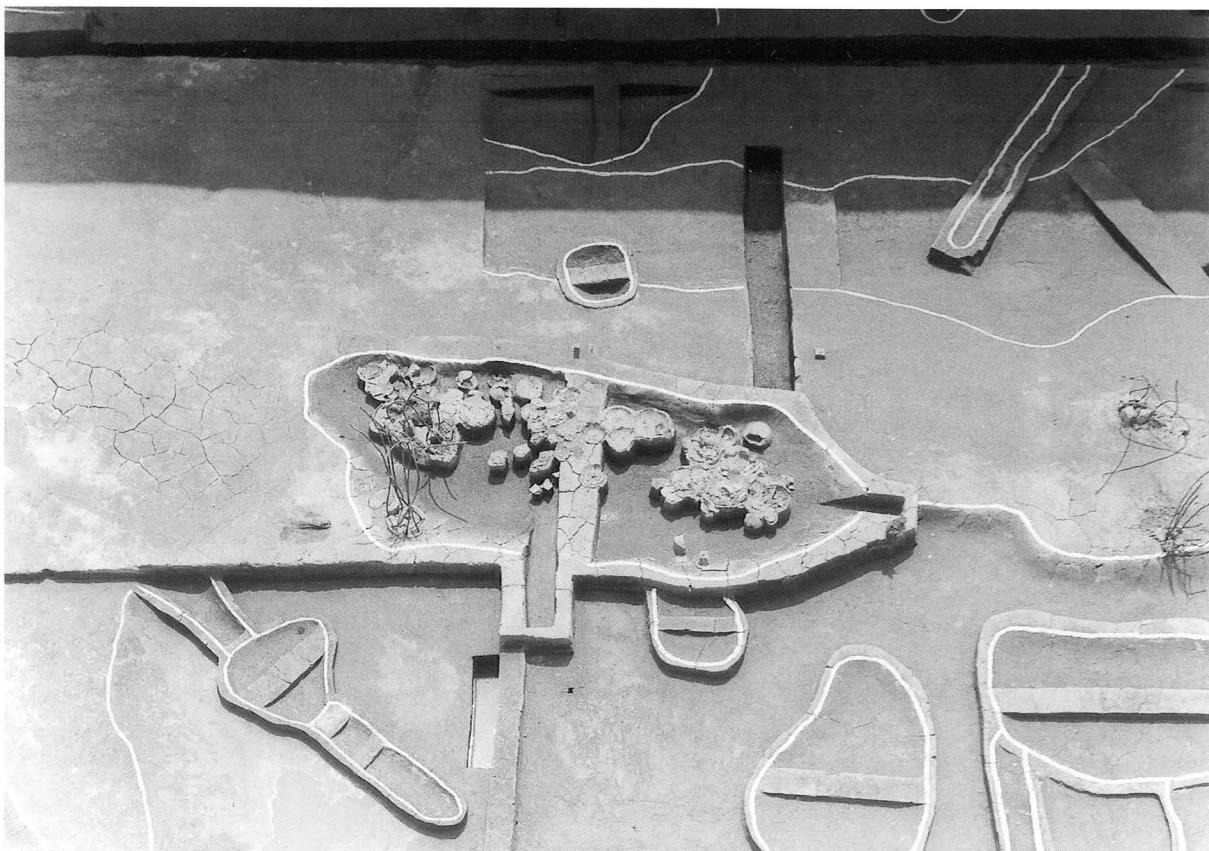
### 参考文献

- ・ 清 斎 2003「第2節 河内の弥生時代後期土器に現れる2・3の現象—溝へ廃棄される土器が語るもの—」『久宝寺遺跡第29次発掘調査報告書—大阪竜華都市拠点地区竜華東西線4工区に伴う—』(財)八尾市文化財調査研究会報告74 (財)八尾市文化財調査研究会
- ・ 西村 歩・奥村茂輝 2004「久宝寺遺跡・竜華地区発掘調査報告書VI」『(財)大阪府文化財センター調査報告書第118集』(財)大阪府文化財センター
- ・ 西村公助 2000「10.久宝寺遺跡第27次調査(KH99-27)」『平成11年度(財)八尾市文化財調査研究会事業報告』(財)八尾市文化財調査研究会

# 図 版



第1・2区 全景(東から)



第1・2区 拡張区遺構検出状況(北から)



第1・2区 SK1・202検出状況(西から)



第1区 SD 112検出状況(南から)



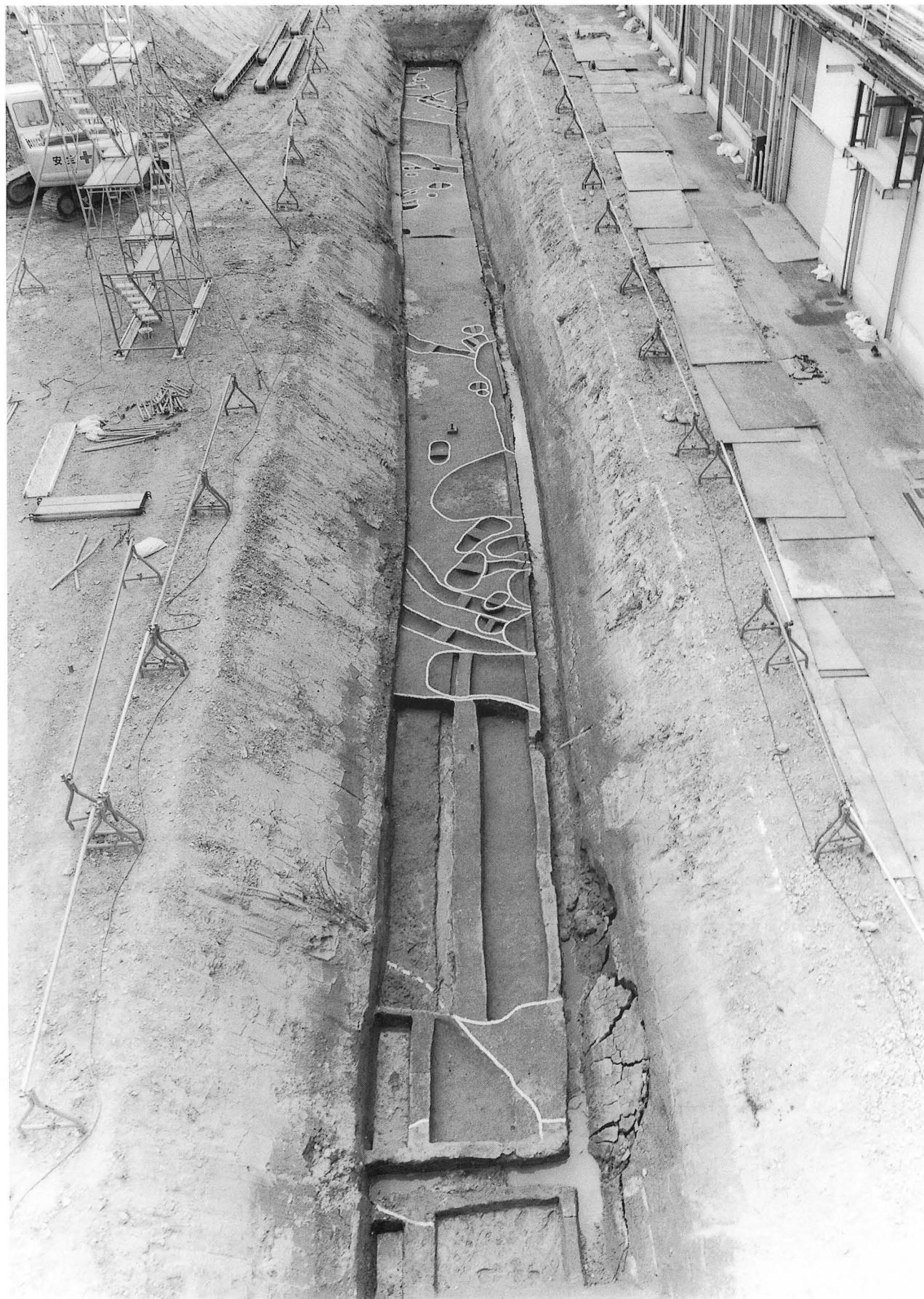
第2区 SK 216、SK 217、SD 218、SD 219検出状況(北から)



第2区 SK 216検出状況(南から)



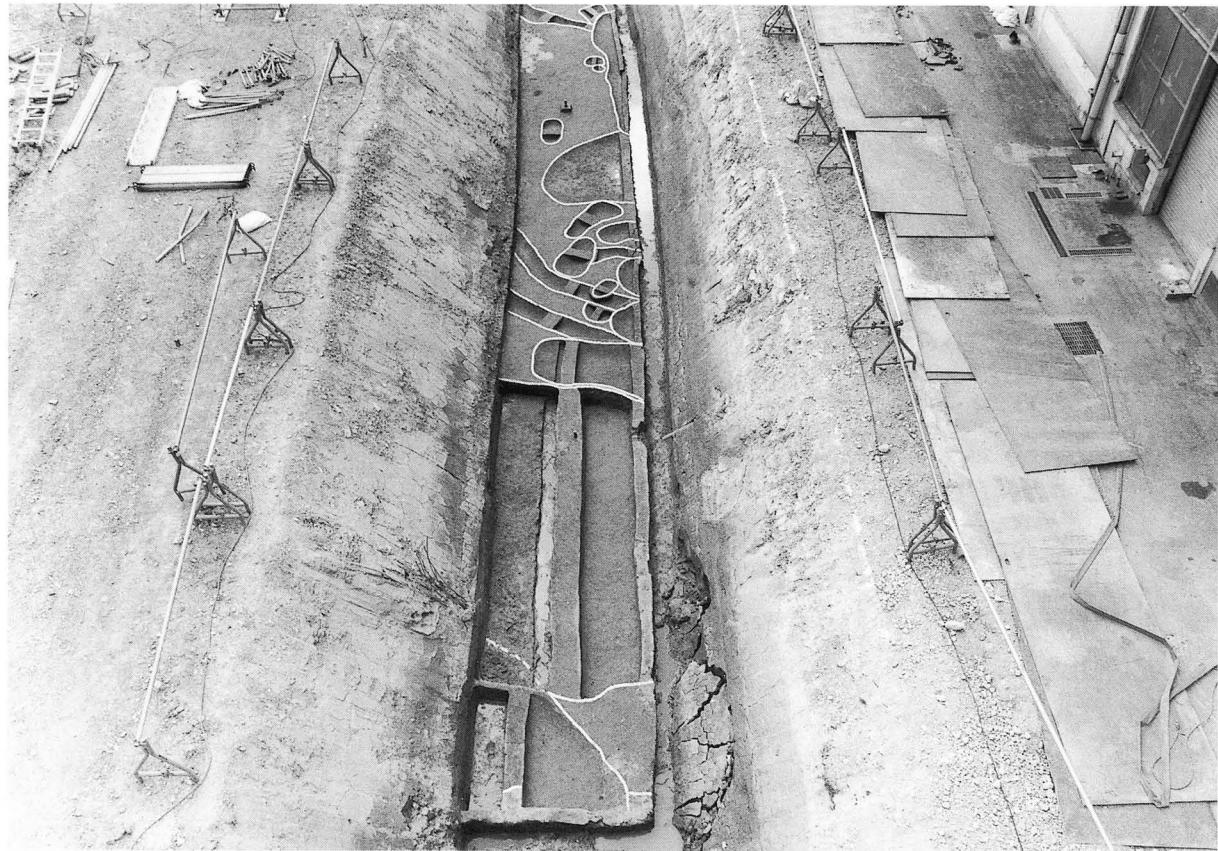
第2区 SD 217検出状況(東から)



第3区 全景(東から)



第3区 西部遺構検出状況(東から)



第3区 東部遺構検出状況(東から)



第3区 SD312~314検出状況(北から)



第3区 SE301、SO303検出状況(南から)

図版八(第4区)



第4区 全景(西から)



第4区 西部遺構検出状況(東から)



第4区 中央部遺構検出状況(南から)

図版一〇(第4区)



第4区 SK 420遺構検出状況(北から)



第4区 SK 424遺構検出状況(南東から)



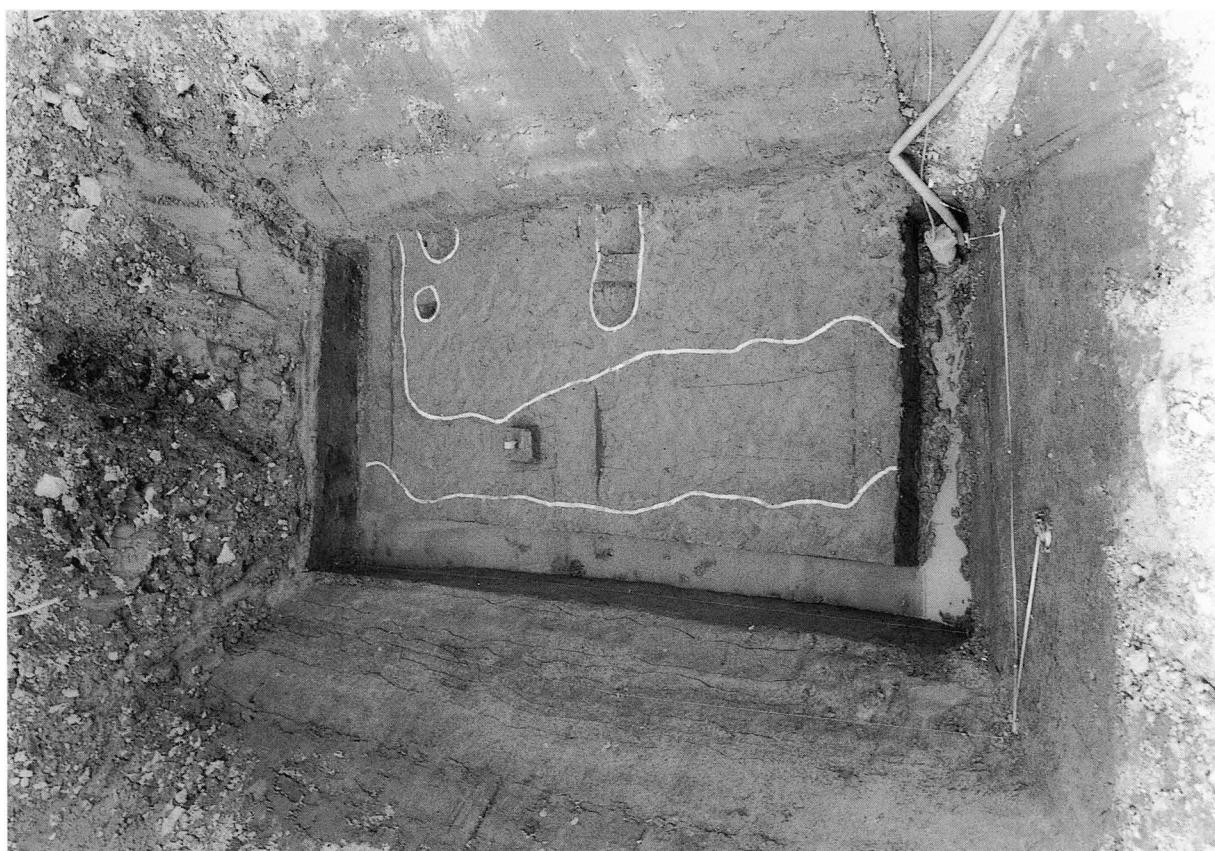
第5区 全景(西から)



第5区 西部遺構検出状況(西から)



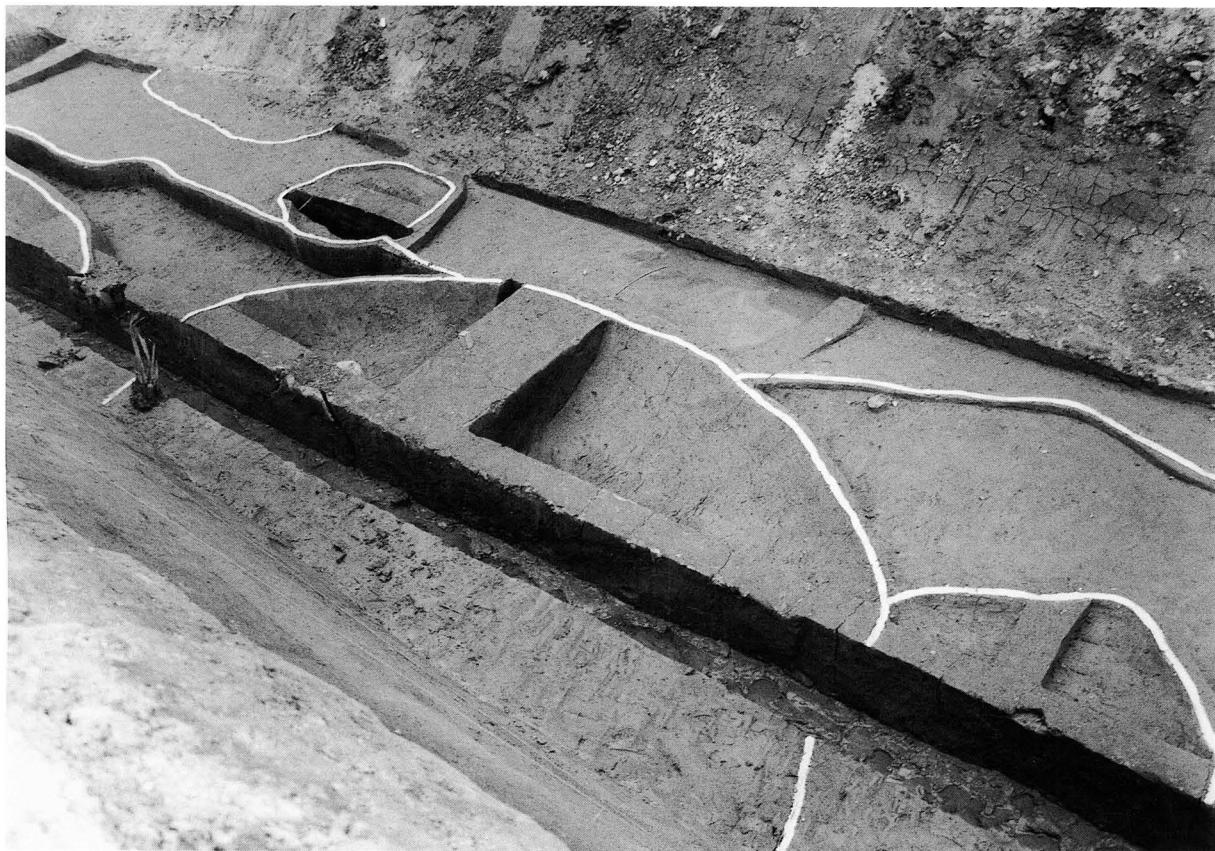
第5区 東部遺構検出状況(東から)



第5区 遺構検出状況(東から)



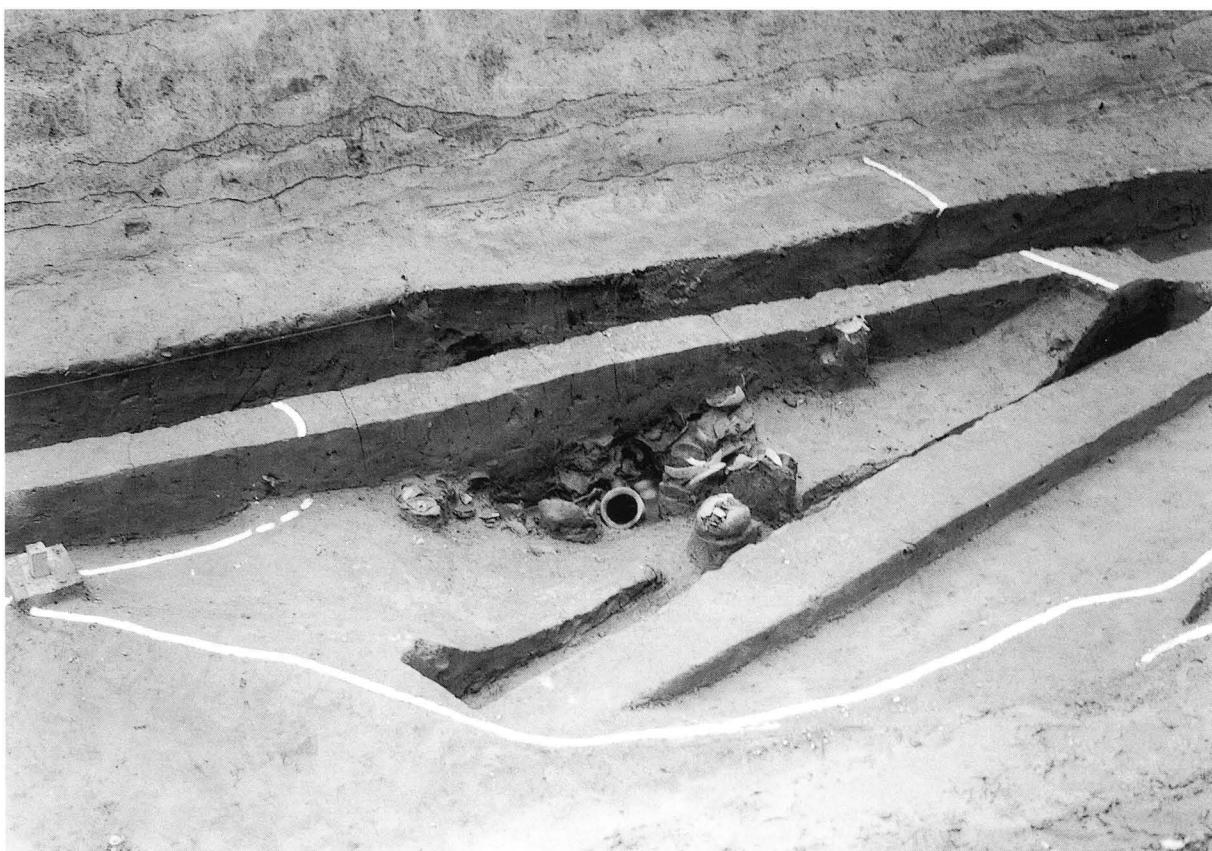
第5区 西部遺構検出状況(北東から)



第5区 S K501他検出状況(南東から)



第5区 S K502他検出状況(南東から)



第5区 SK 502検出状況(北東から)



第5区 SK 502遺物出土状況(北東から)

図版一六(第5区)



第5区 S E501、S K510、S K511他検出状況(北西から)

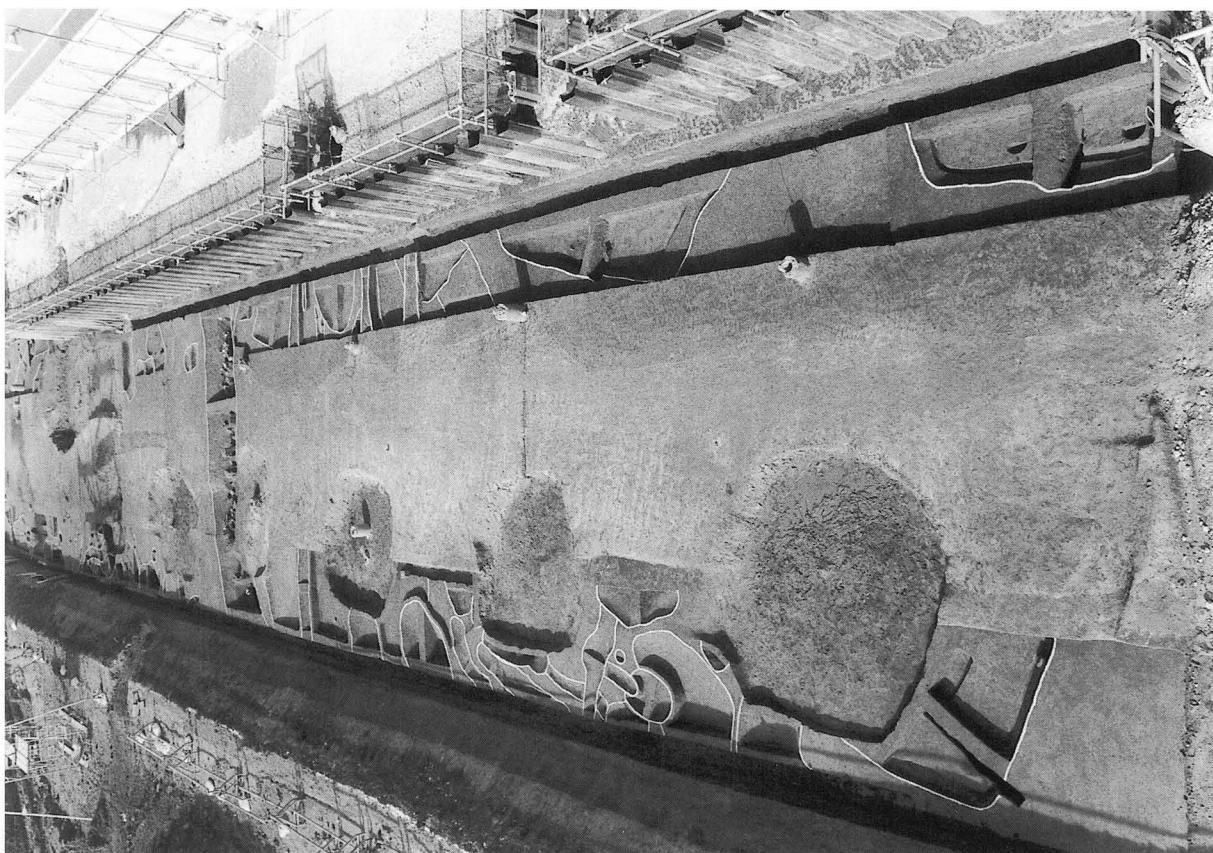


第5区 S K510、S E501検出状況(北東から)



第6・7区 全景(西から)

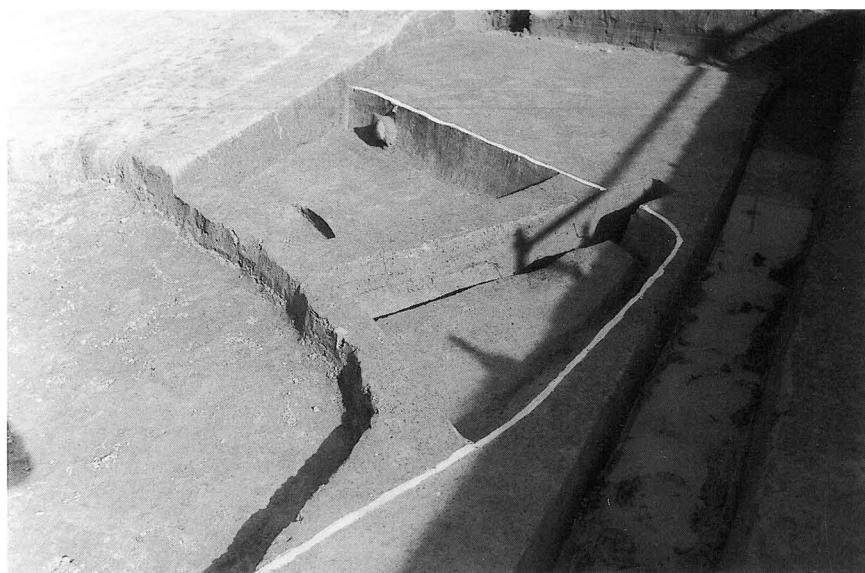
図版一八(第6・7区)



第6・7区 東部遺構検出状況(東から)



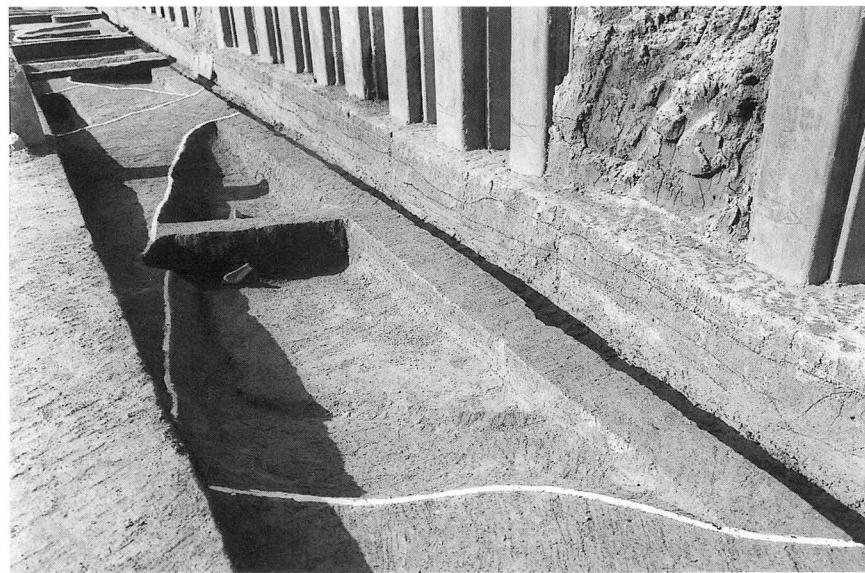
第6・7区 拡張区全景(西から)



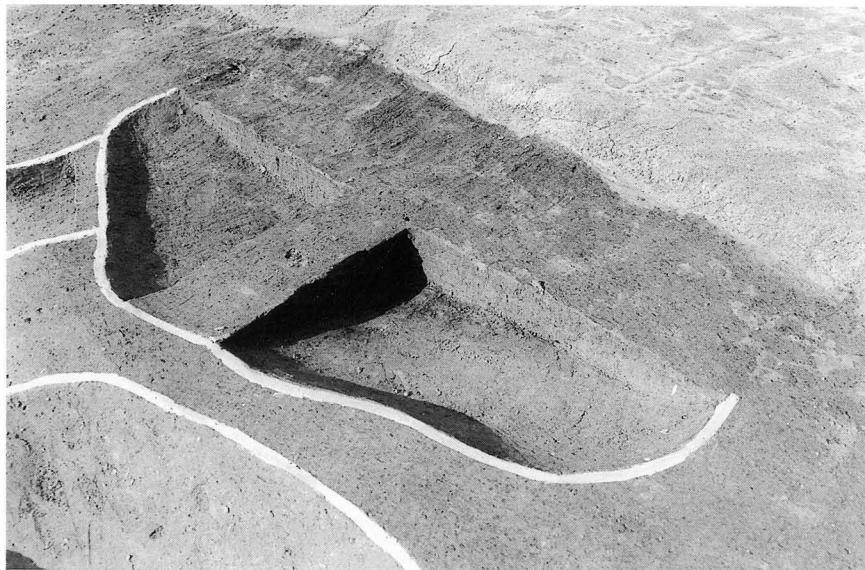
第6区 SI 601検出状況  
(北西から)



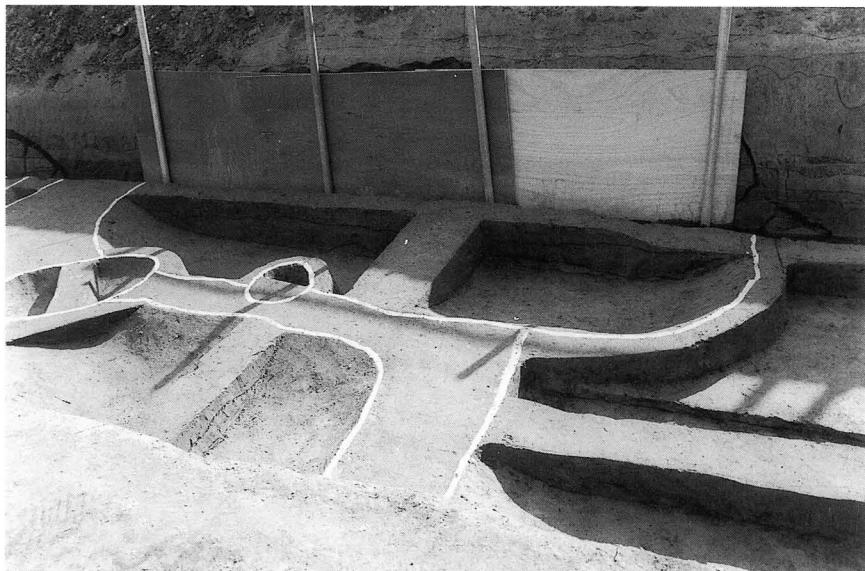
第7区 SI 701検出状況  
(西から)



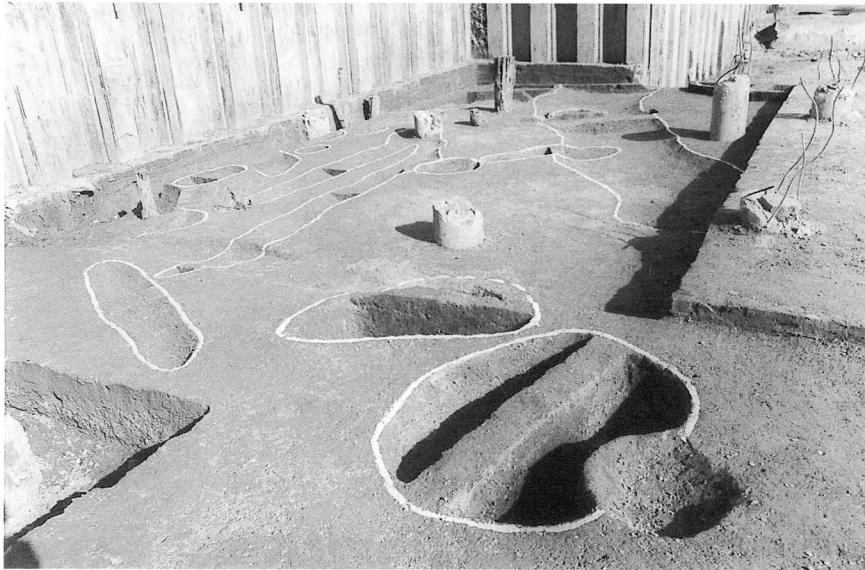
第7区 SI 702検出状況  
(東から)



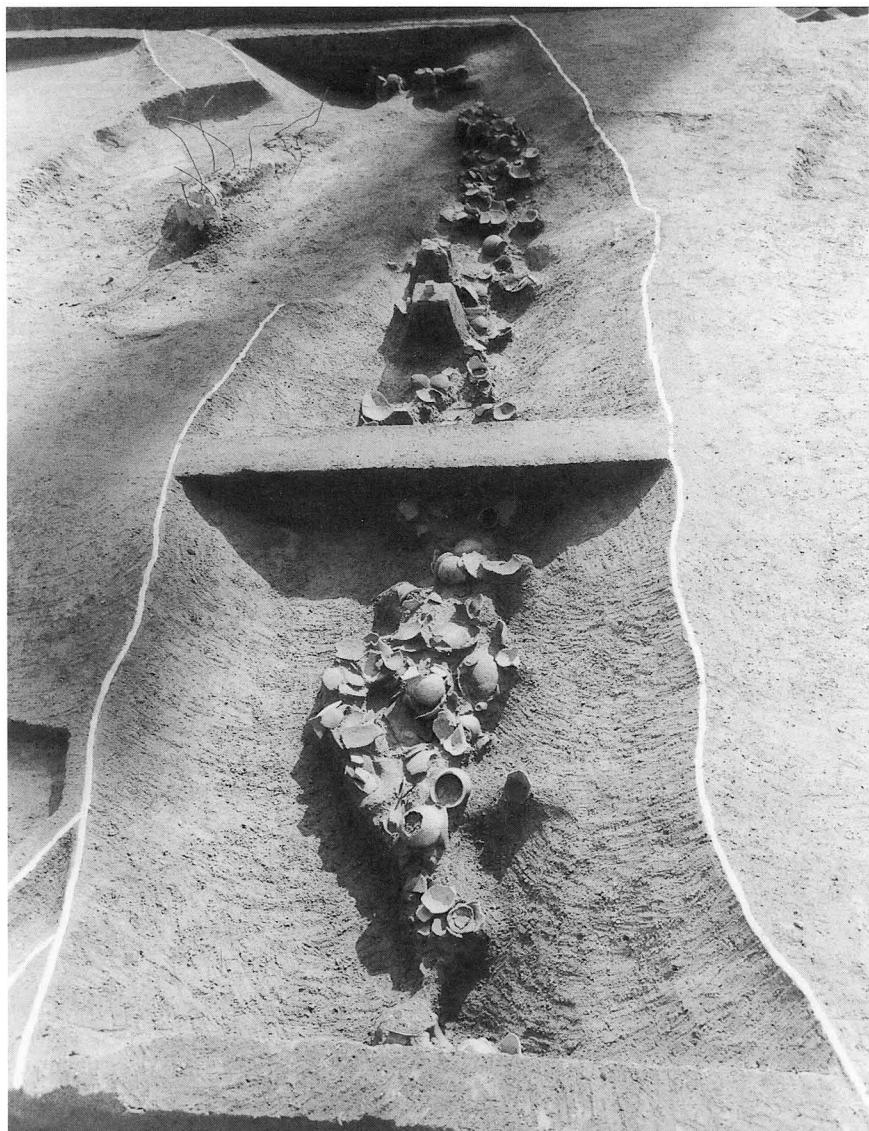
第6区 SK605検出状況  
(南東から)



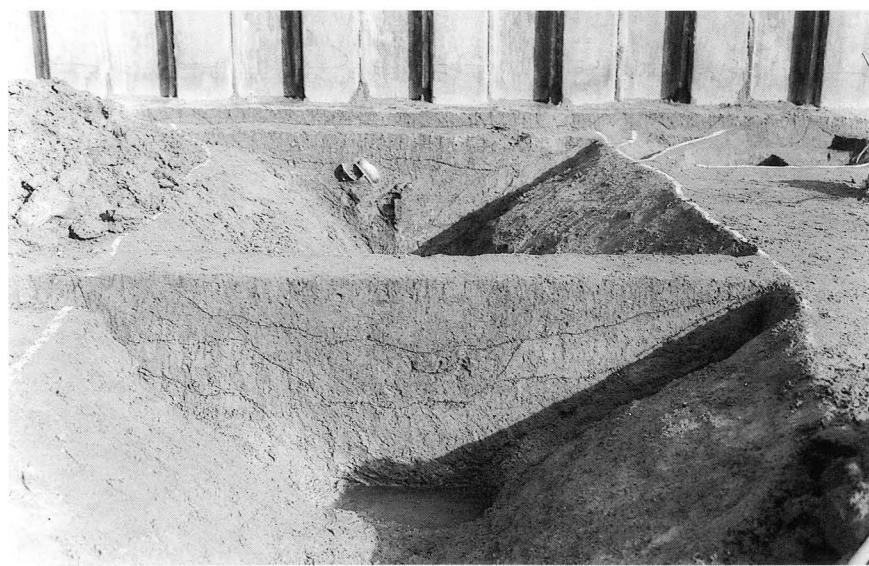
第6区 SK620検出状況  
(北西から)



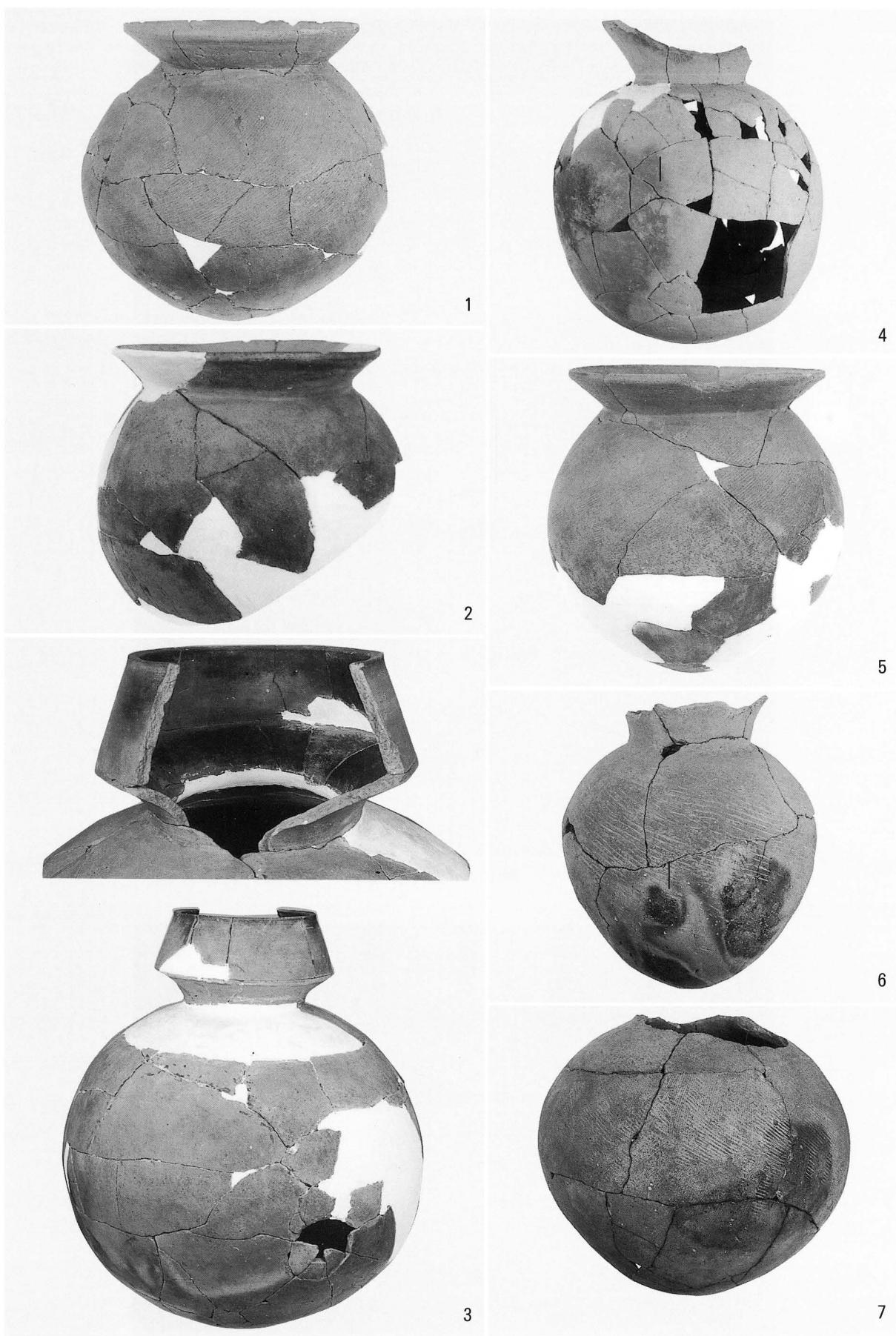
第6・7区 SK6・702、  
SK6・703他検出状況(西  
から)



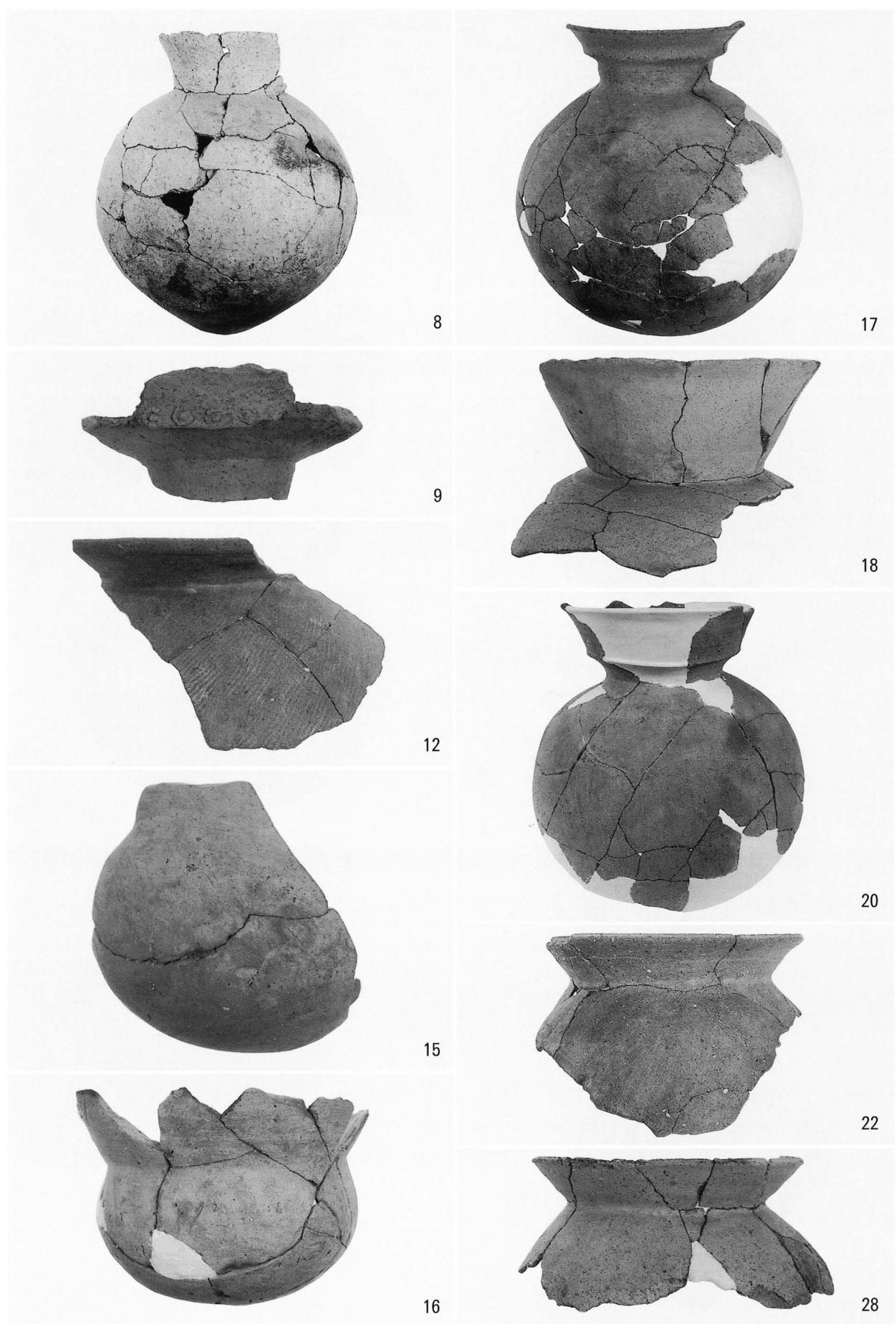
第6・7区 SD6・701検出状況(北から)



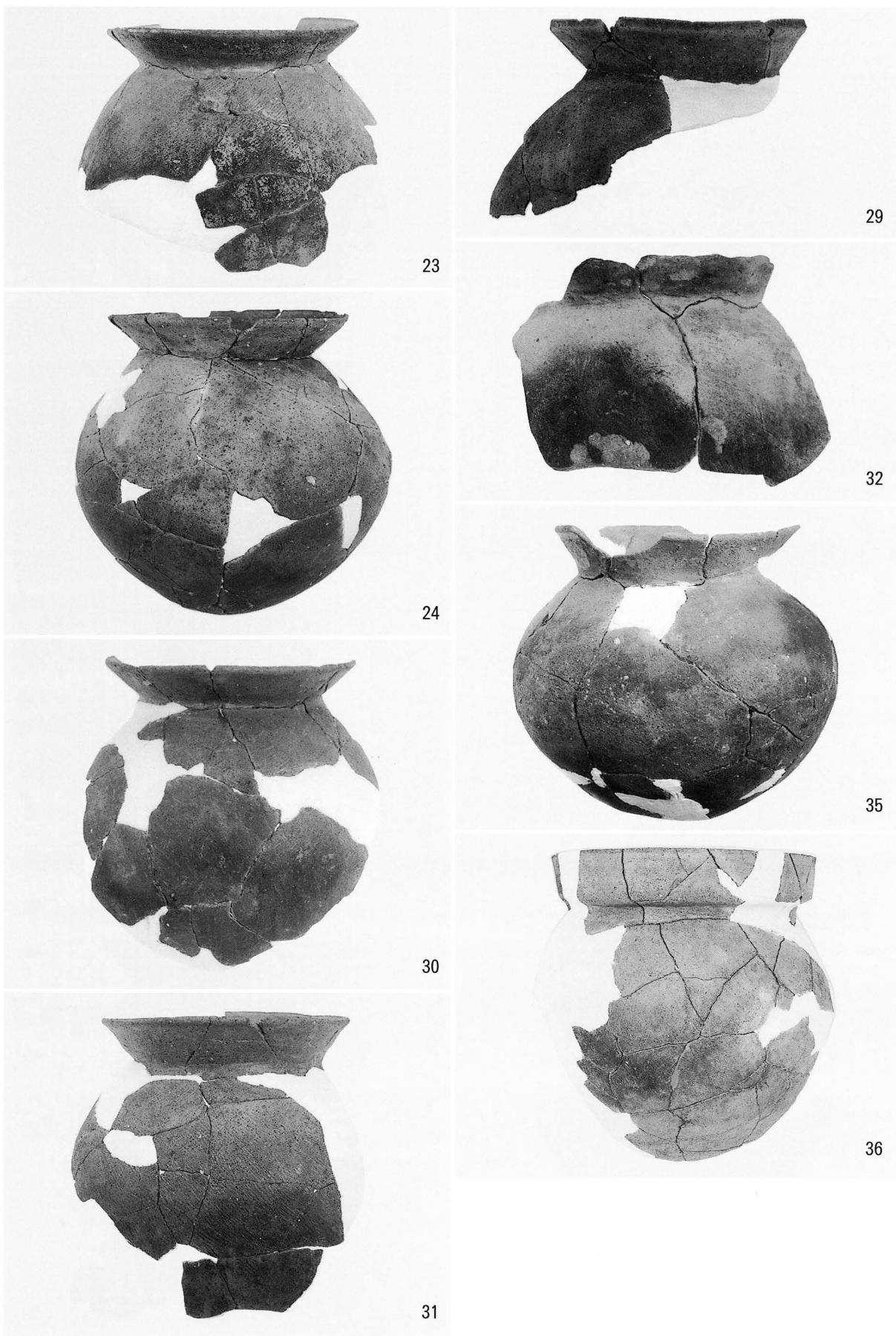
同上 断面(南から)



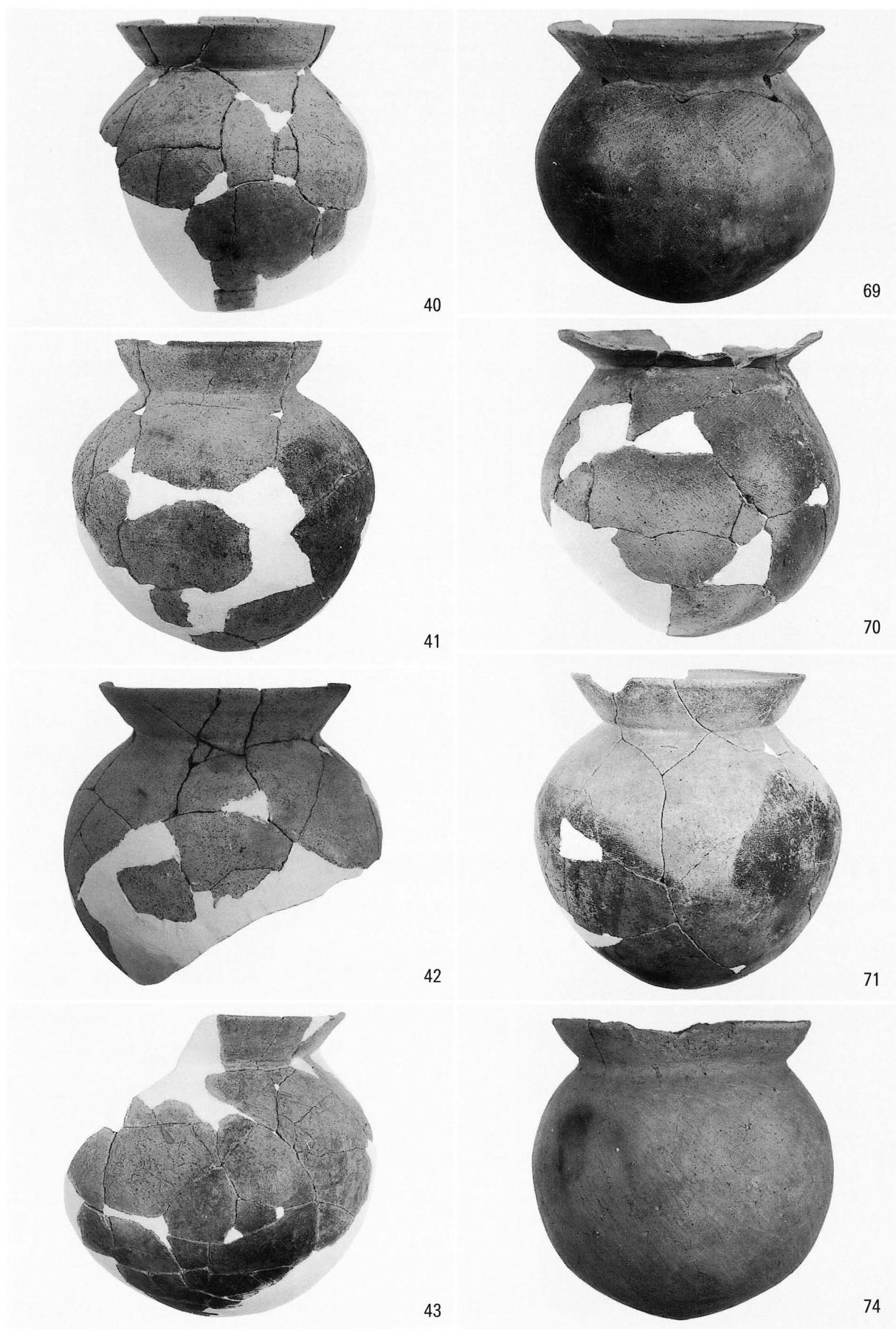
S K214(1・2)、S K216(3)、S K218(4・5)、S D217(6・7)出土遺物



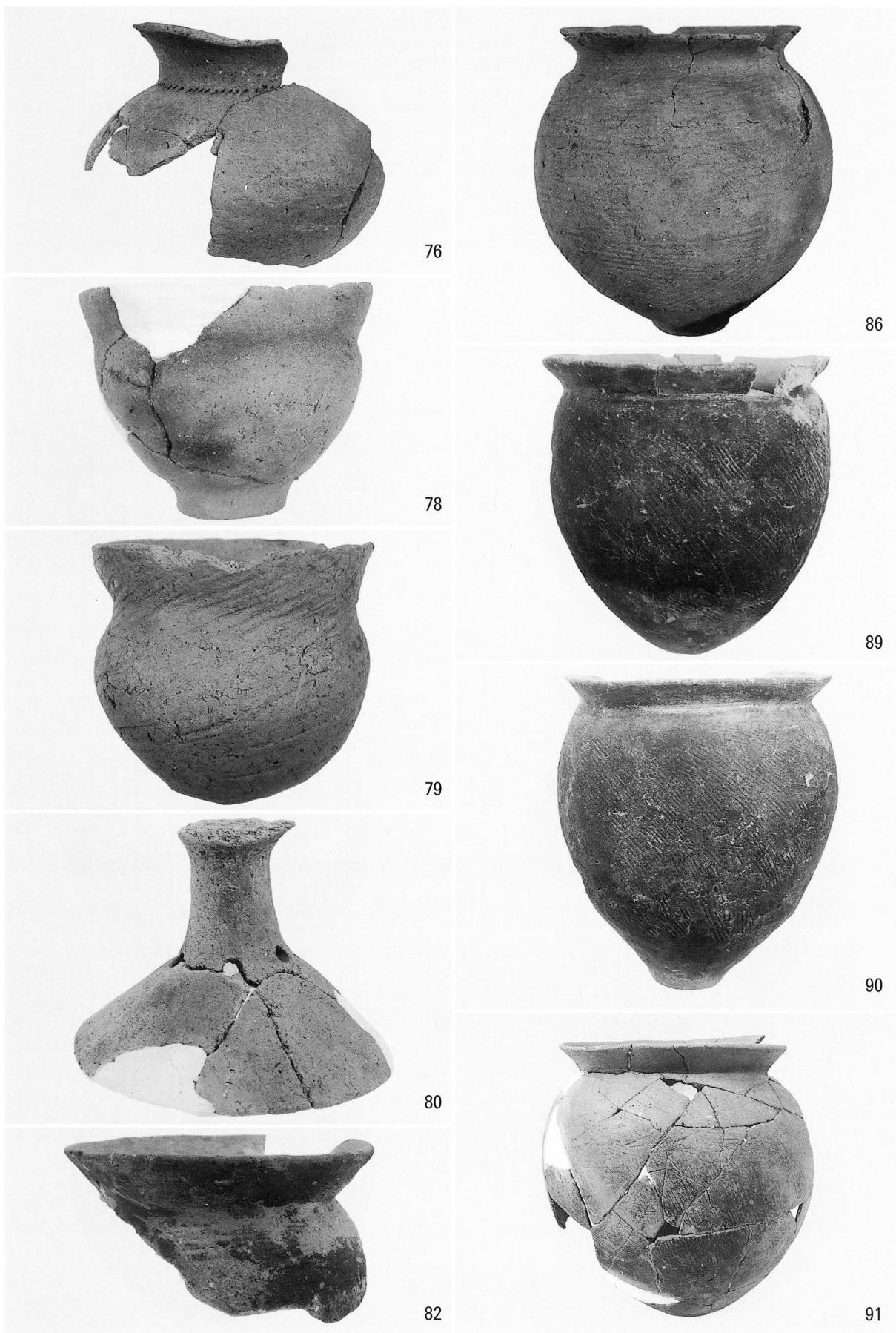
S D217(8・9・12)、SK1・202(15~18・20・22・28)出土遺物



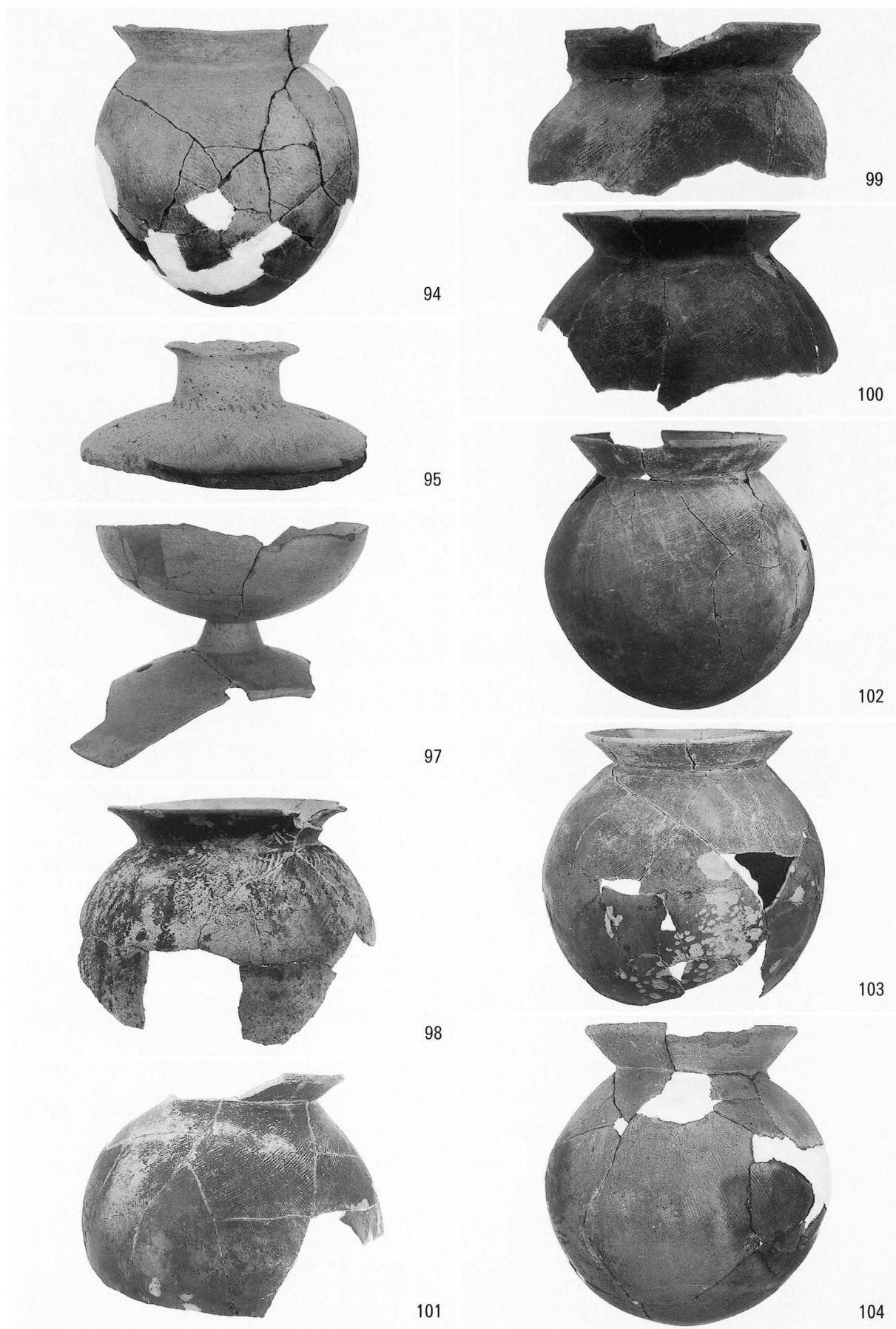
S K1・202(23・24・29~32・35・36)出土遺物



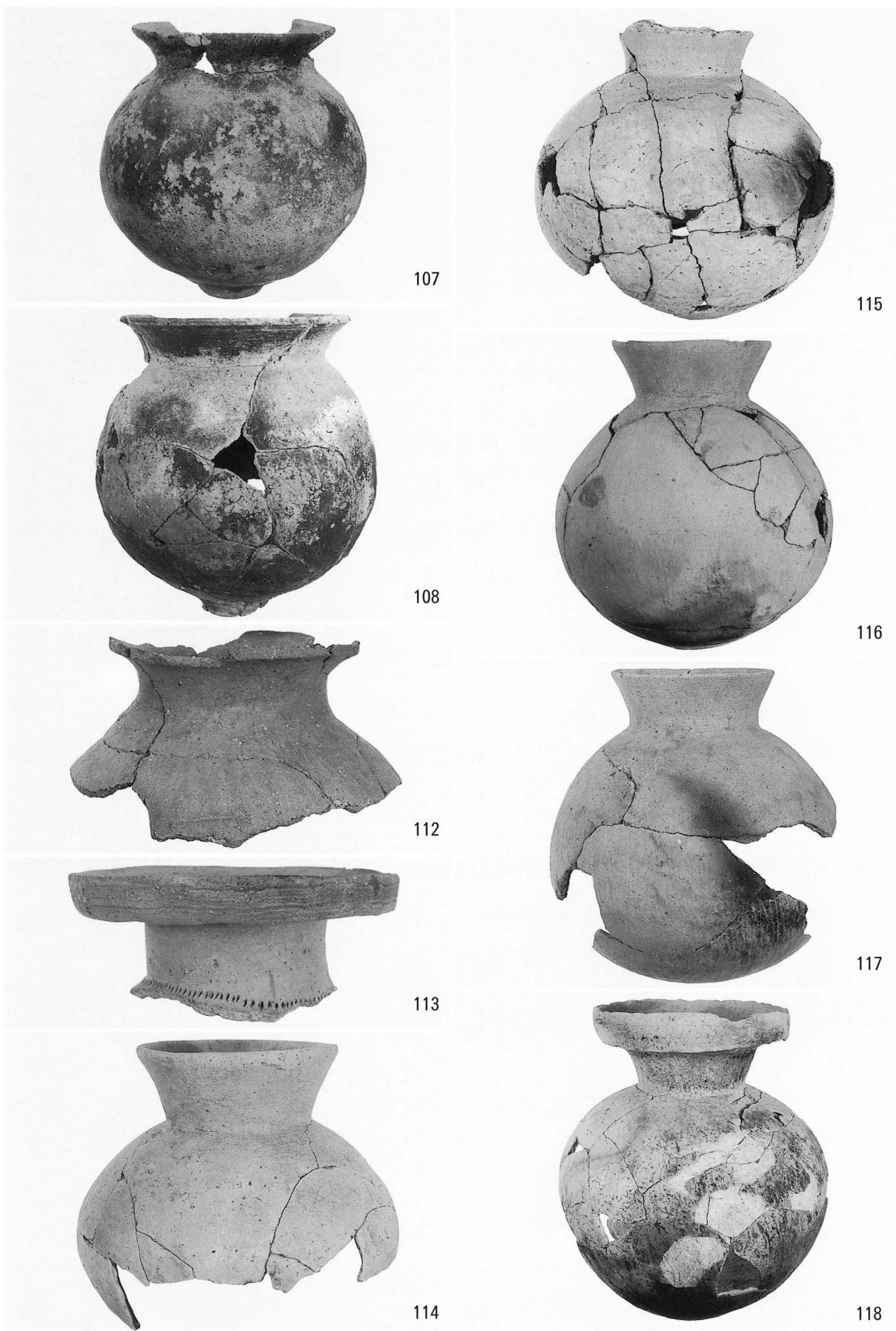
S K1・202(40~43)、S K420(69~71)、S K424(74)出土遺物



S K424(76・78~80・82・86・89~91)出土遺物



SK424(94)、SK501(95・97~104)出土遺物



S K502(107・108・112~118)出土遺物



124



127



125



128



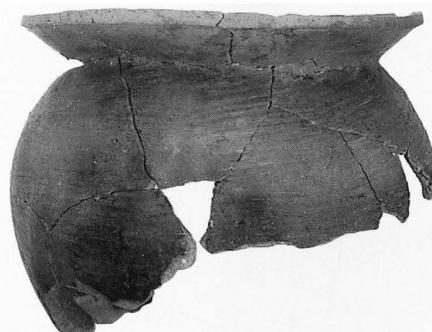
126



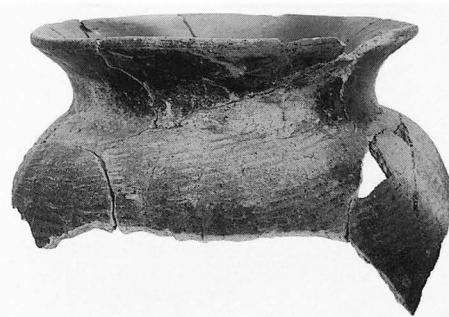
129



130

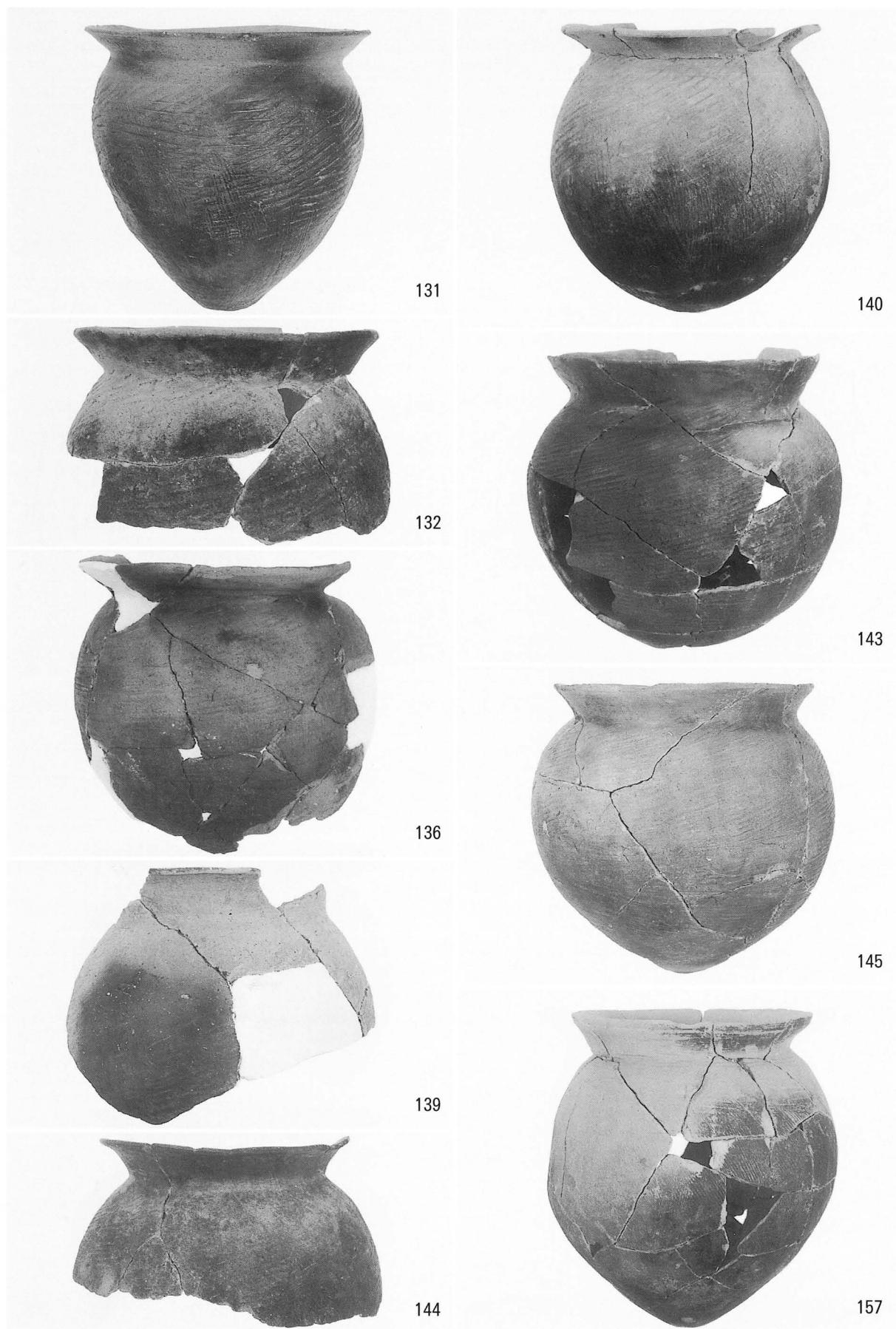


135

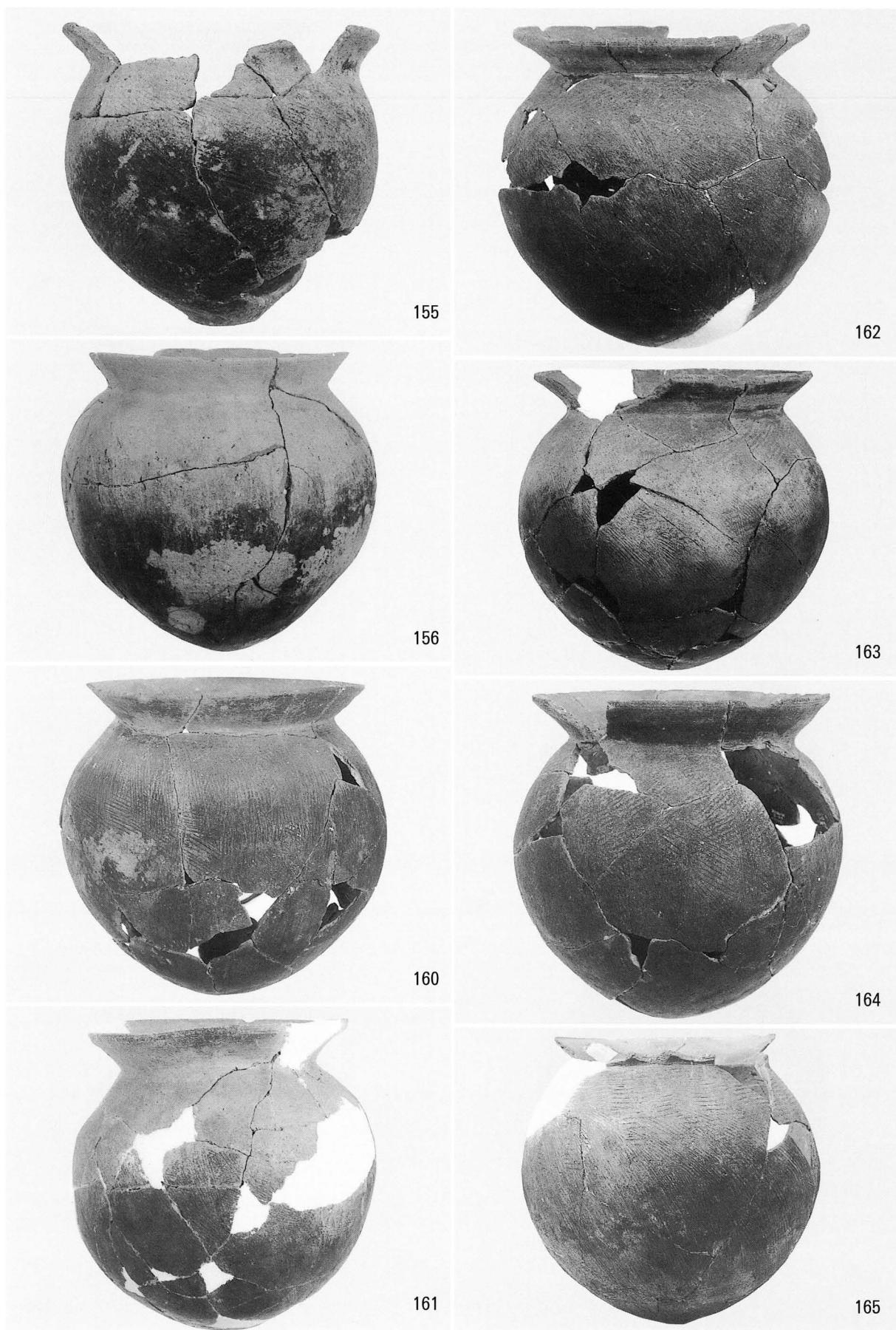


137

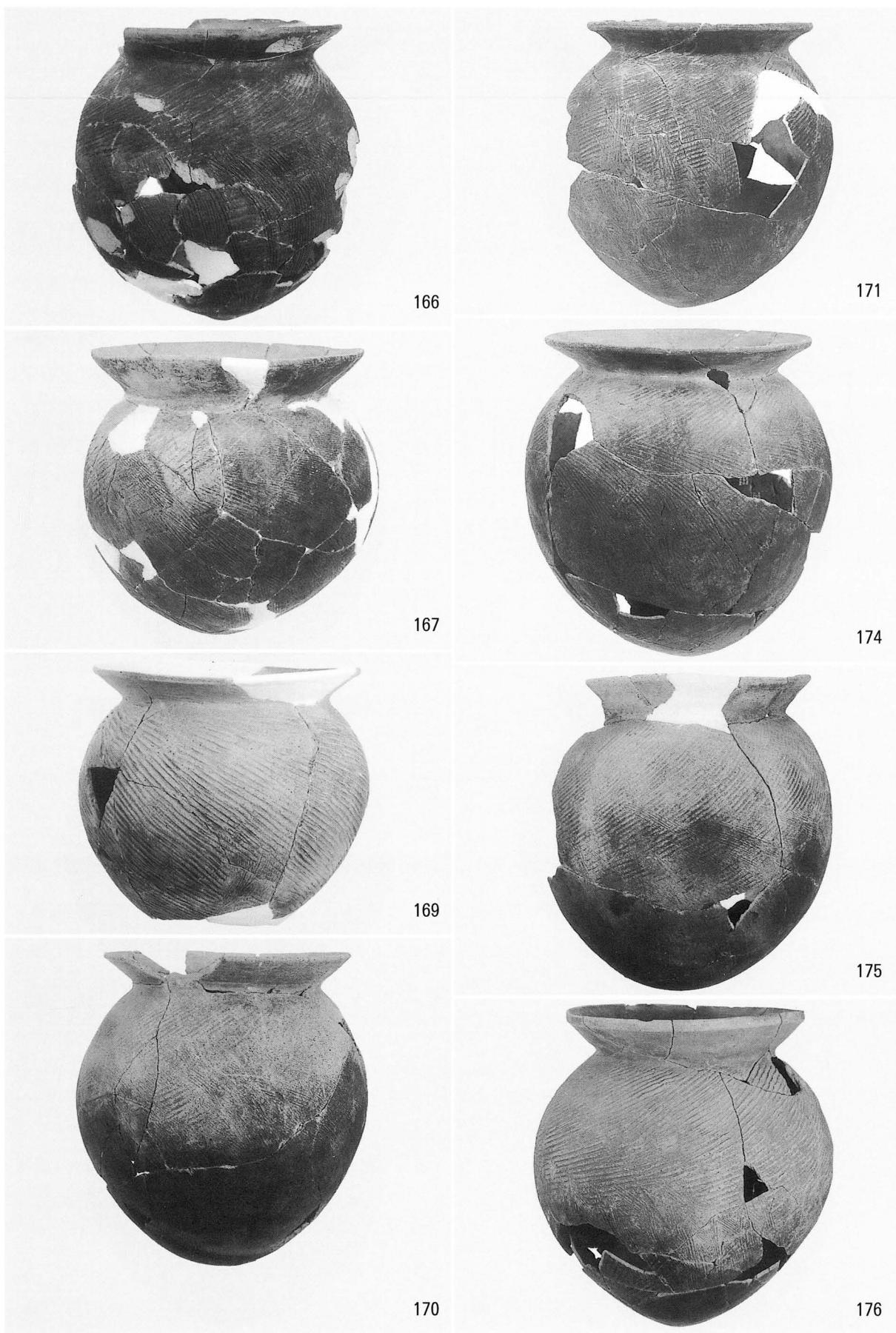
S K 502(124~130、135・137)出土遺物



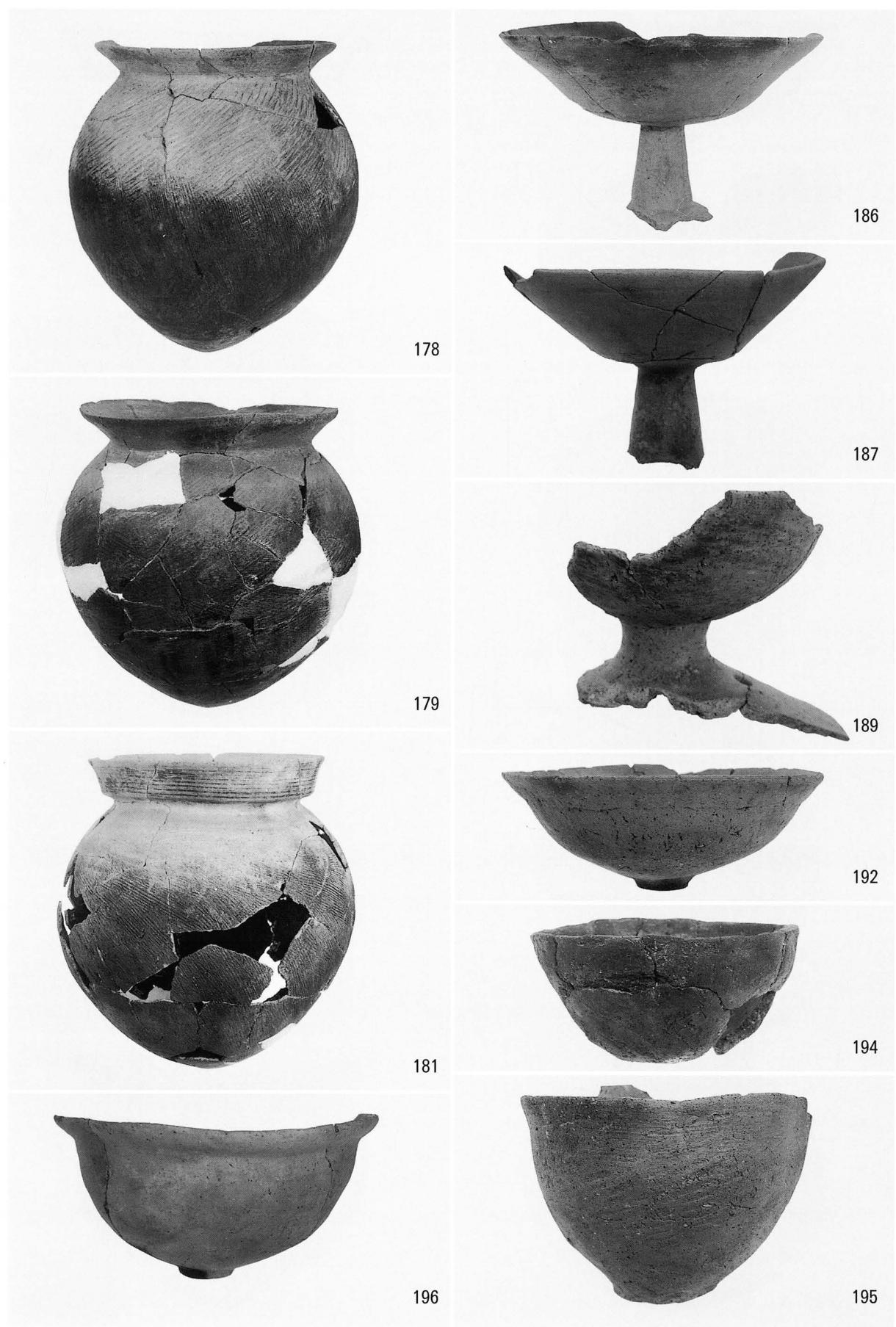
SK 502(131・132・136・139・140・143～145・157)出土遺物



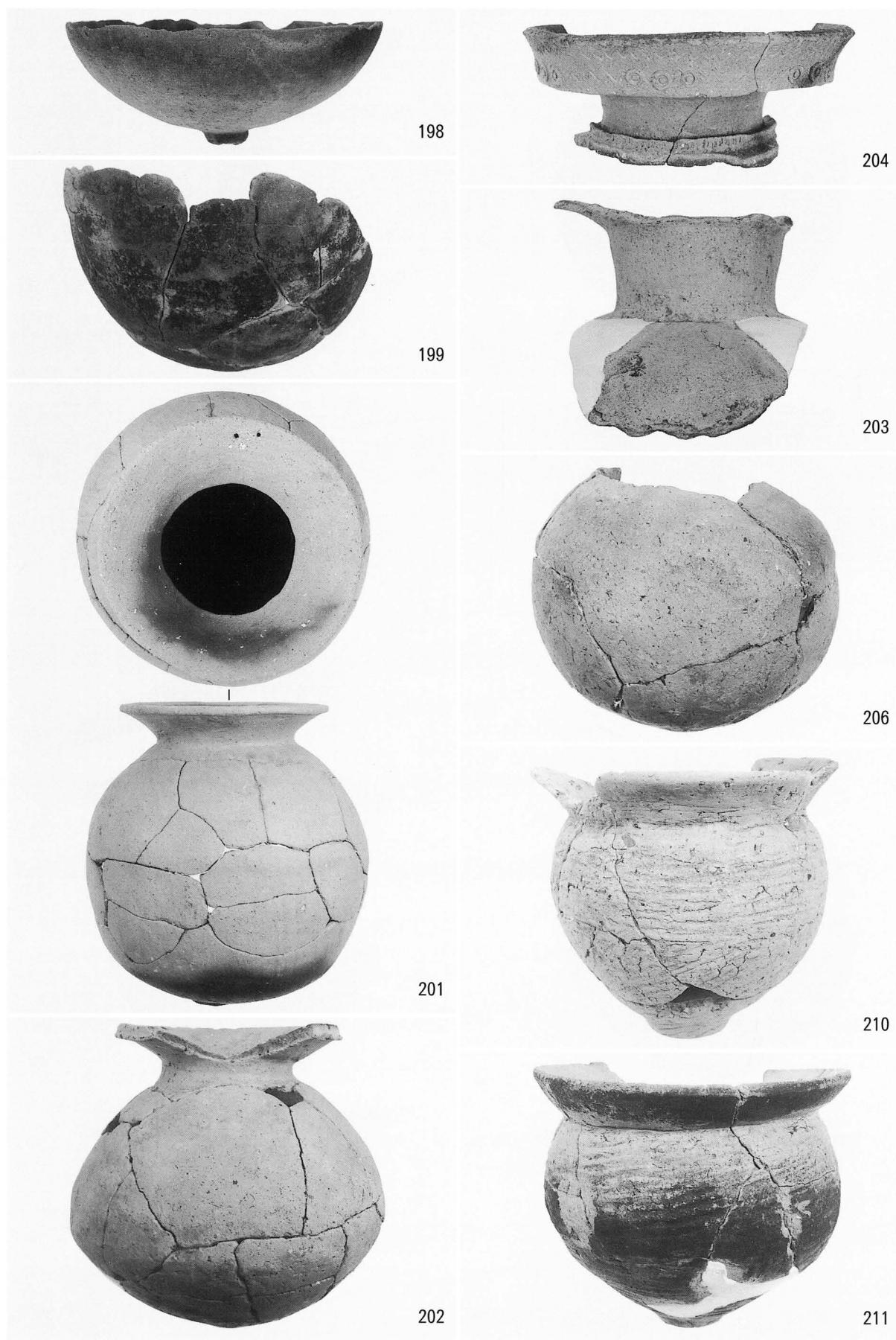
S K 502(155・156・160～165)出土遺物



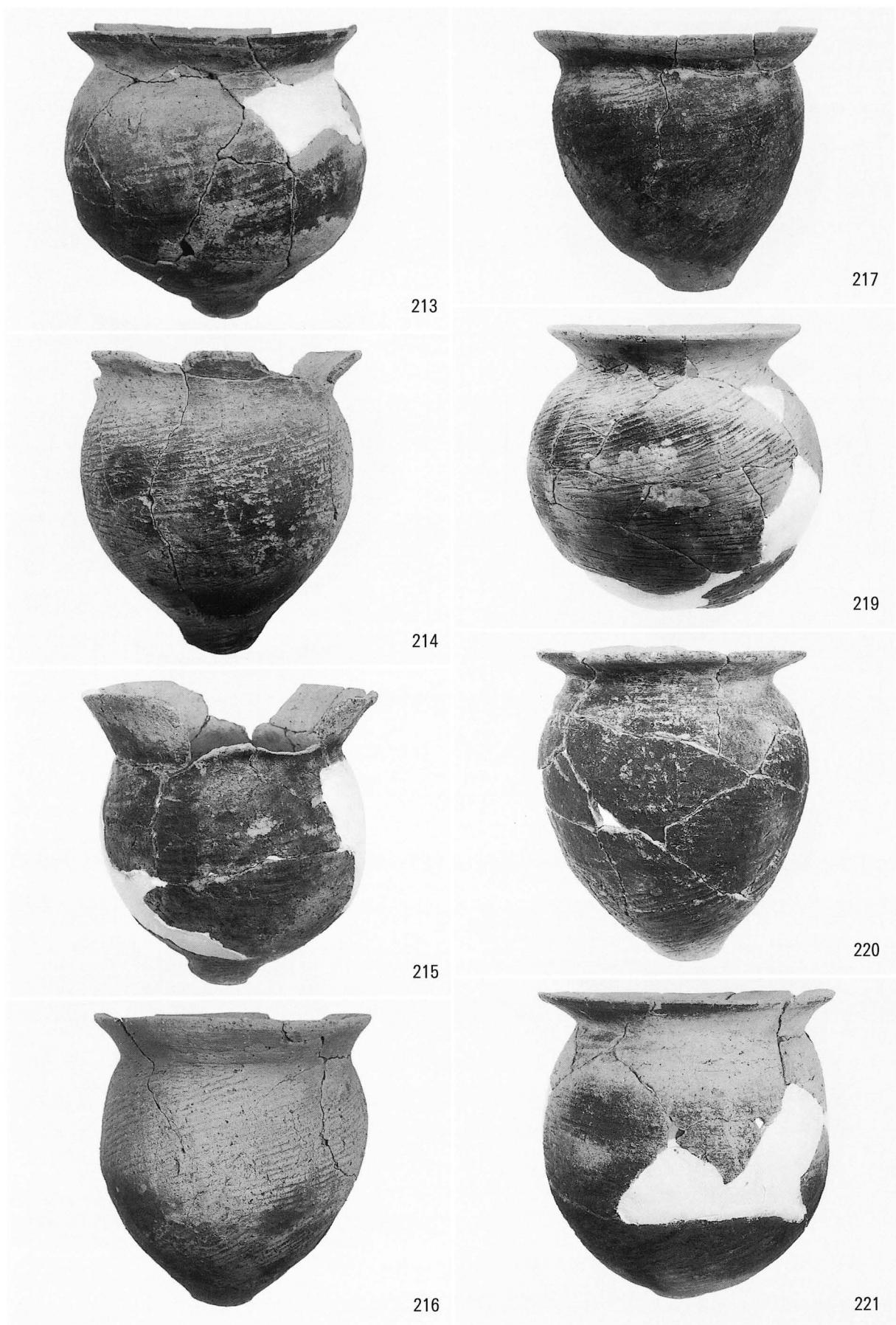
S K502(166・167・169~171・174~176)出土遺物



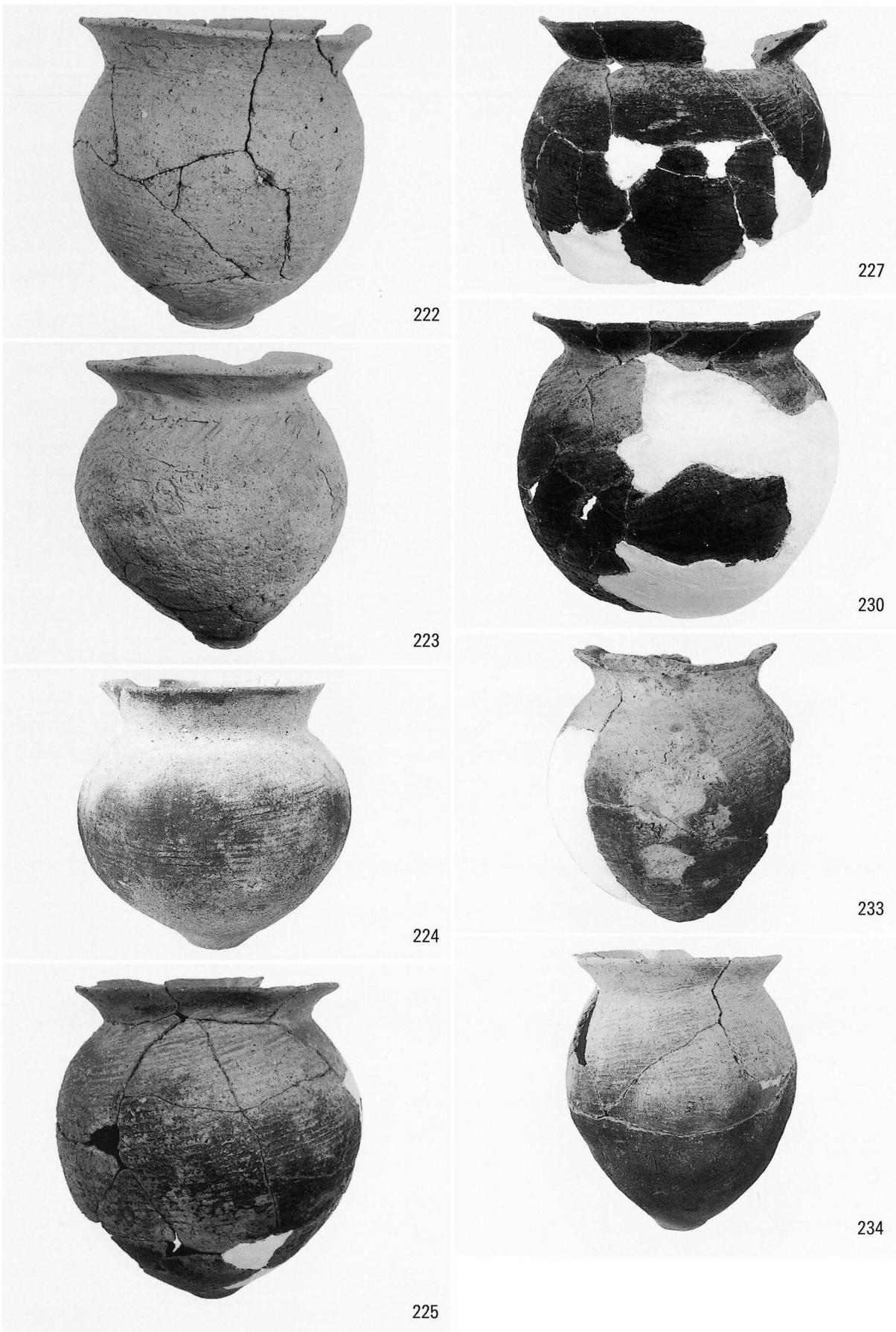
S K 502(178・179・181・186・187・189・192・194～196)出土遺物



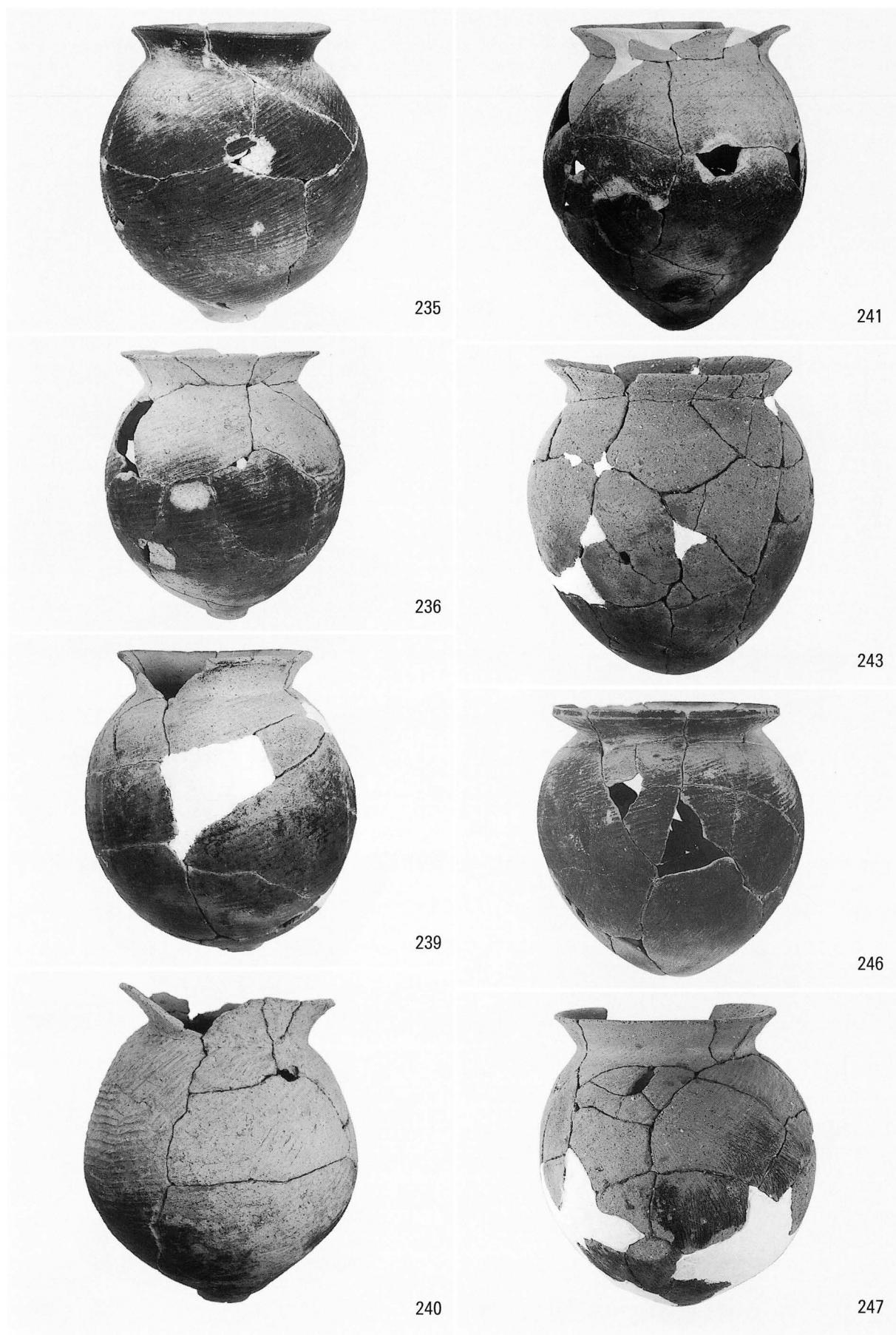
S K506(199)、S K509(198)、S K510(201~204・206・210・211)出土遺物



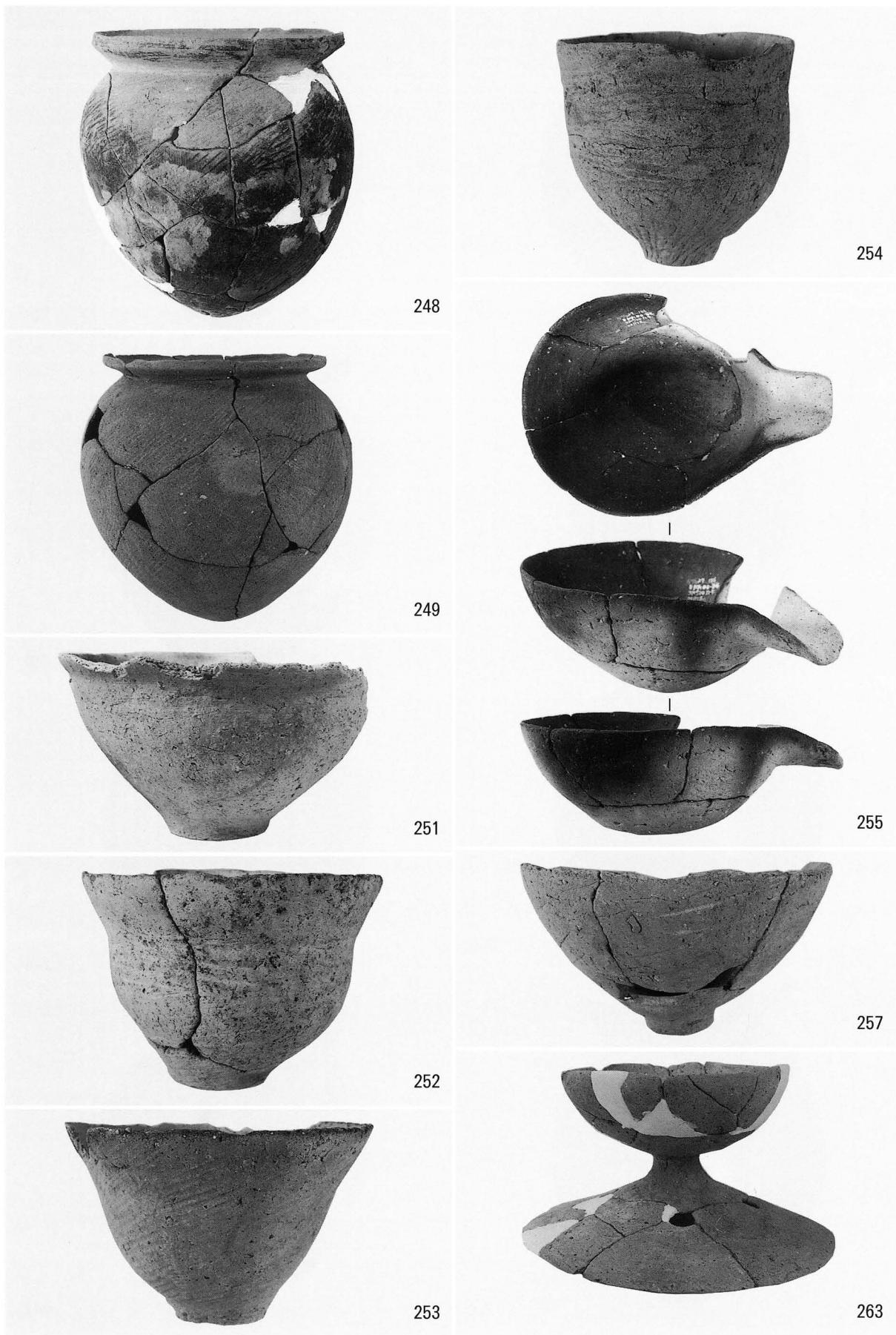
S K510(213~217・219~221)出土遺物



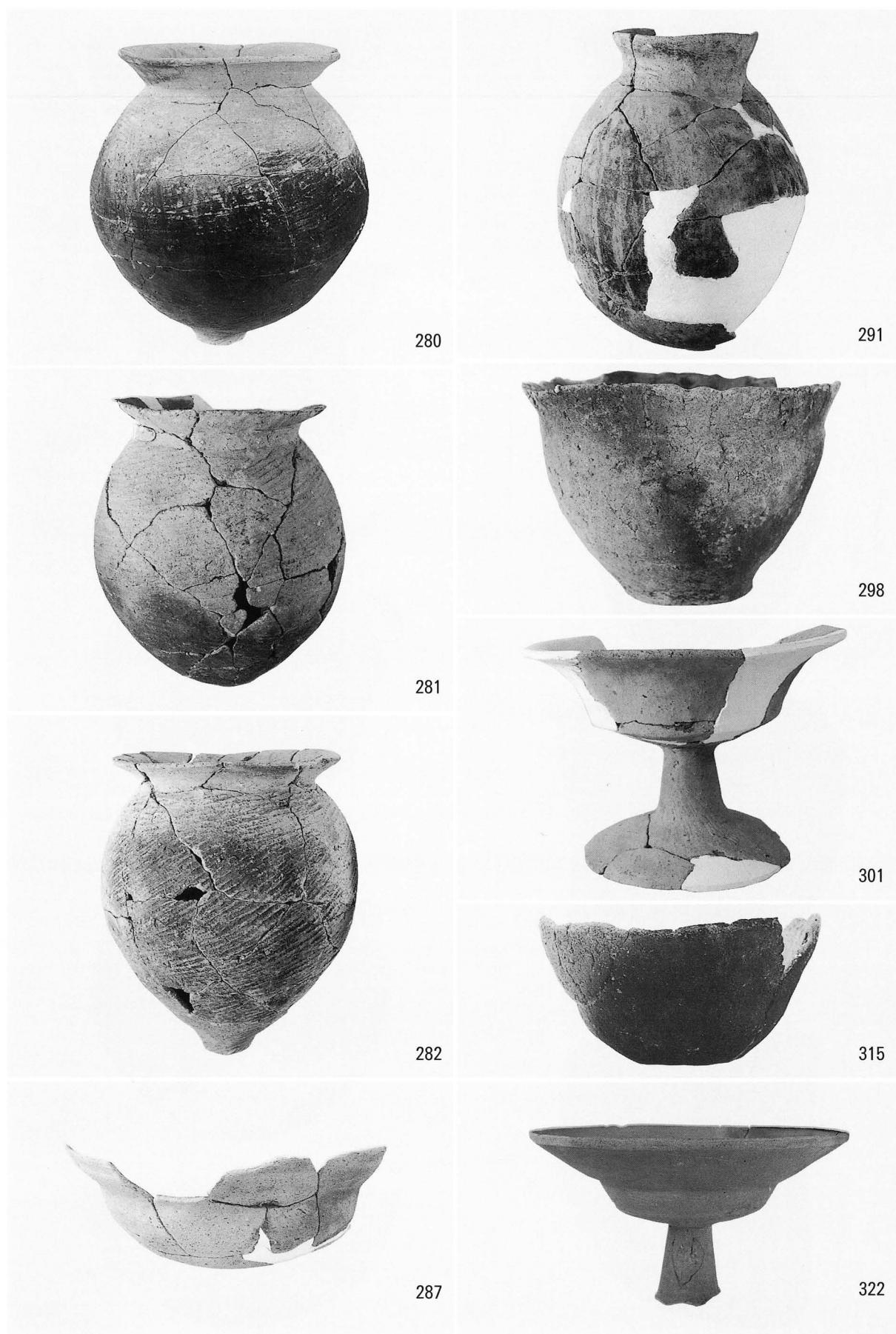
S K510(222~225・227・230・233・234)出土遺物



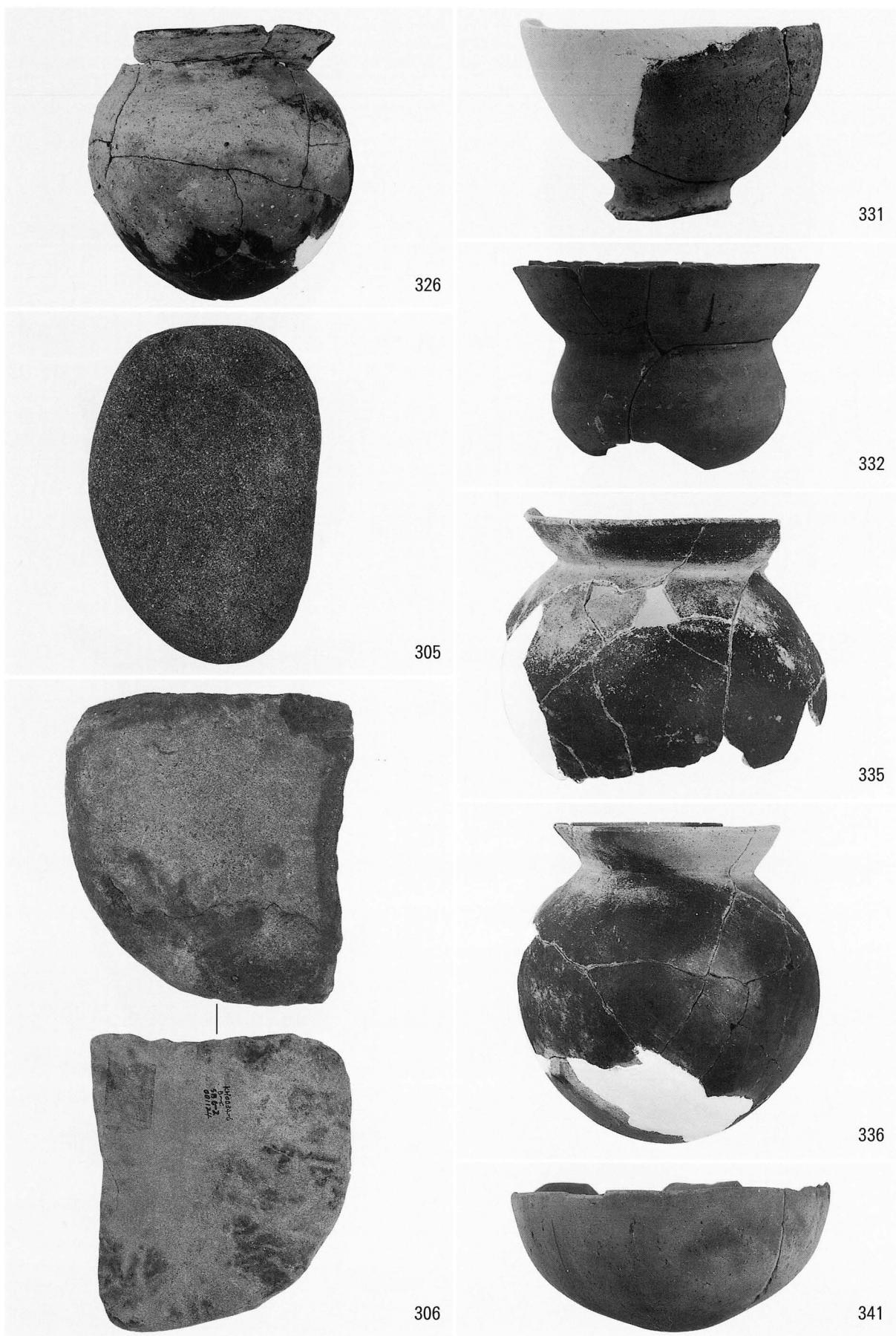
S K510(235・236・239～241・243・246・247)出土遺物



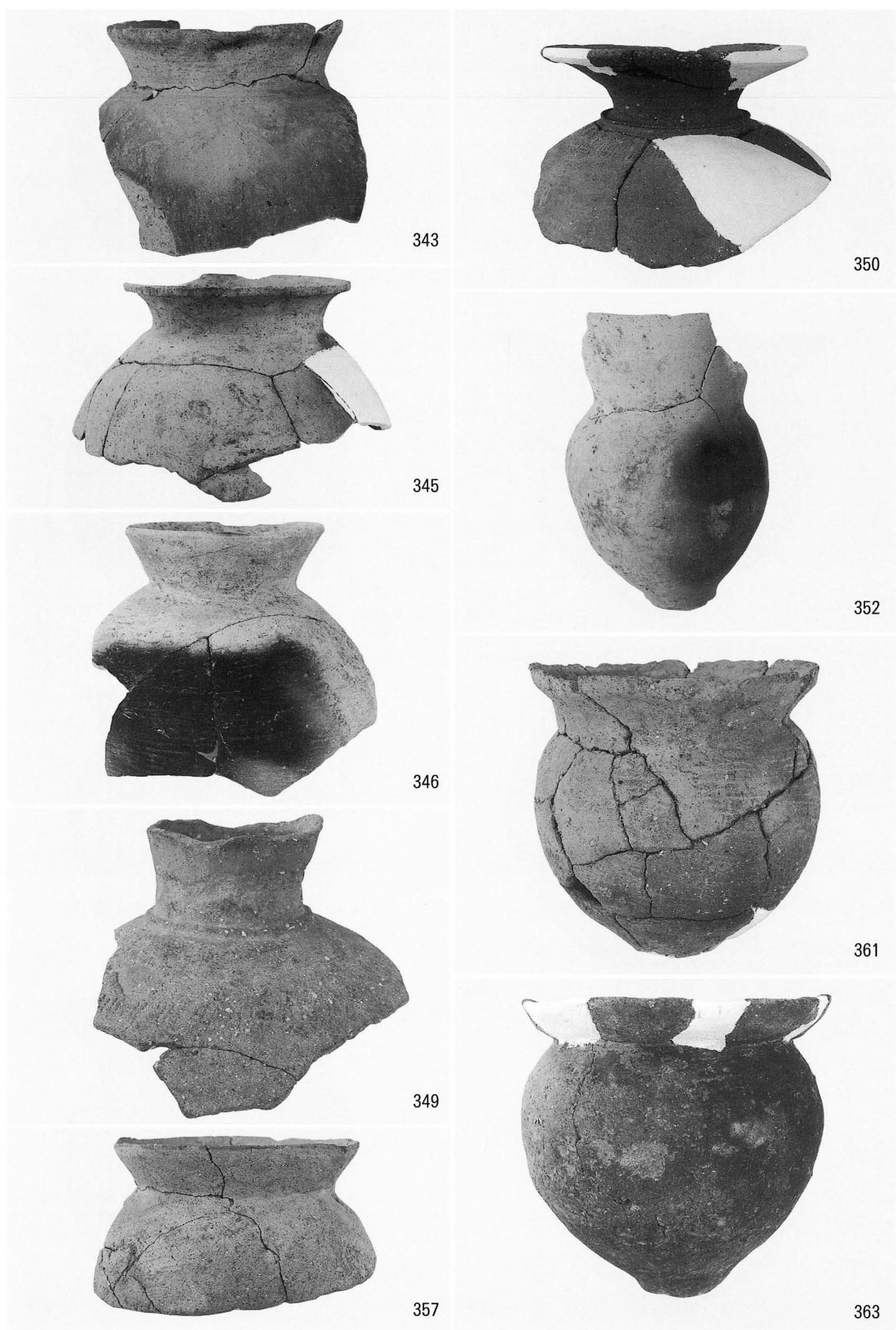
S K510(248・249・251～255・257・263)出土遺物



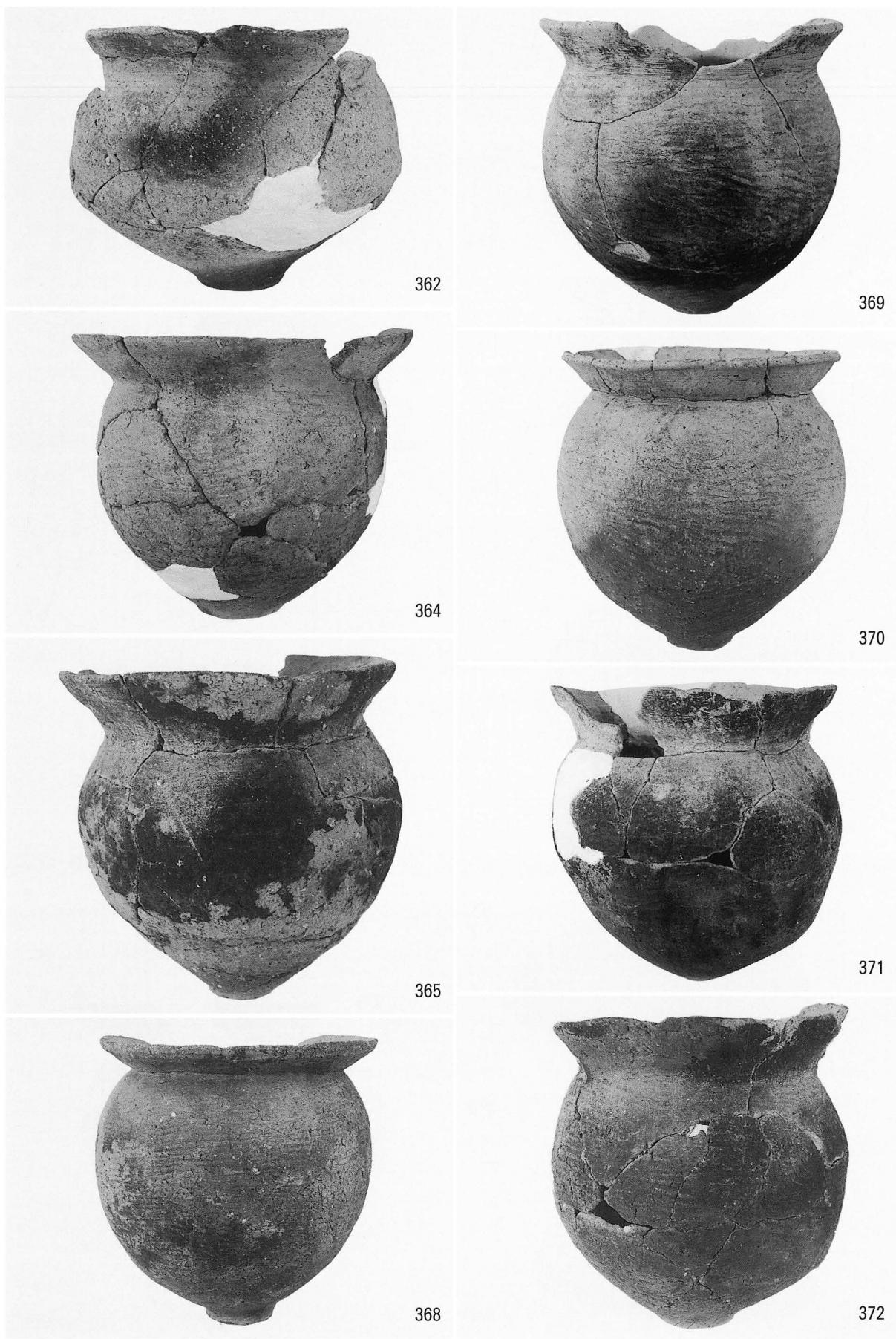
S K518(280~282)、S K519(287)、S D501(291・298・301)、S K620(315)、S K623(322)出土遺物



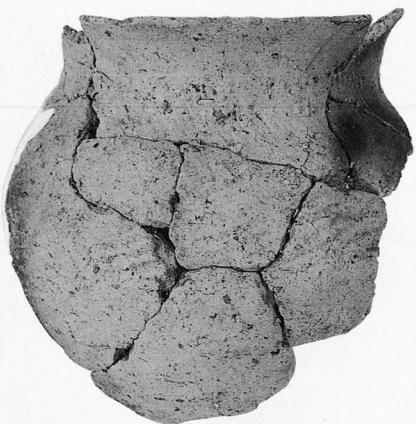
S I 601(305・306)、S D618(326・331)、S I 702(332・335・336)、S K709(341)出土遺物



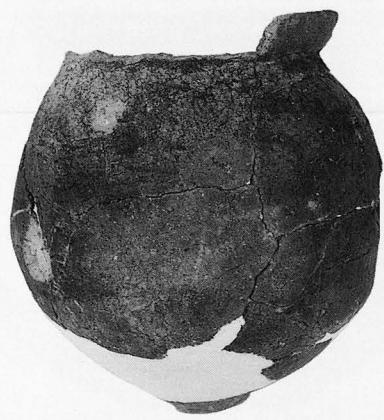
S D 6・701(343・345・346・349・350・352・357・361・363)出土遺物



S D 6・701(362・364・365・368～372)出土遺物



376



382



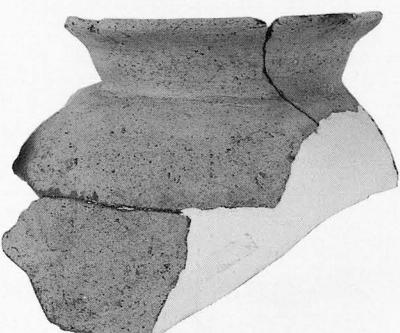
378



383



379



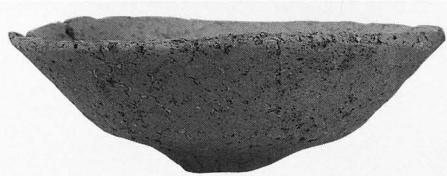
386



380

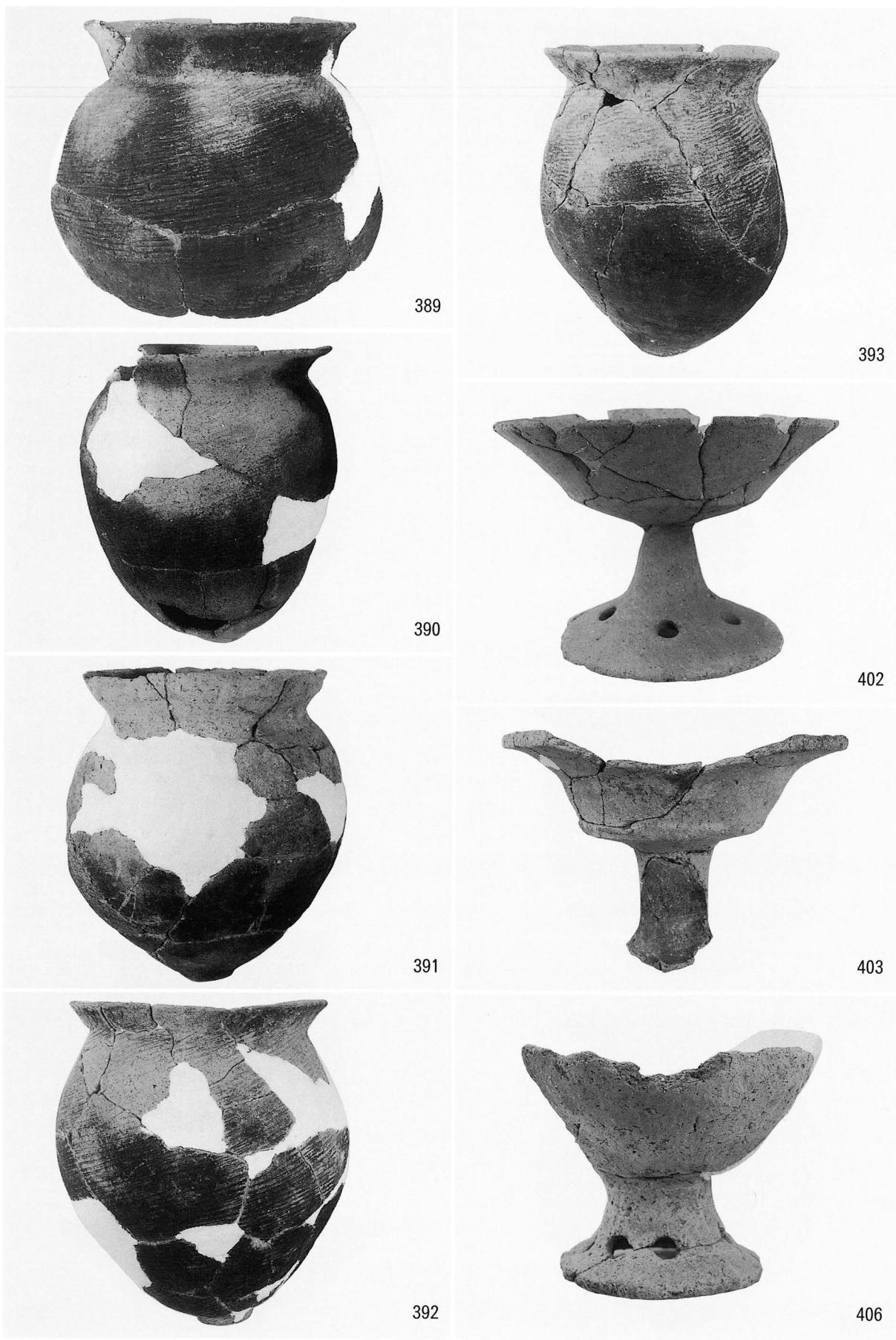


388

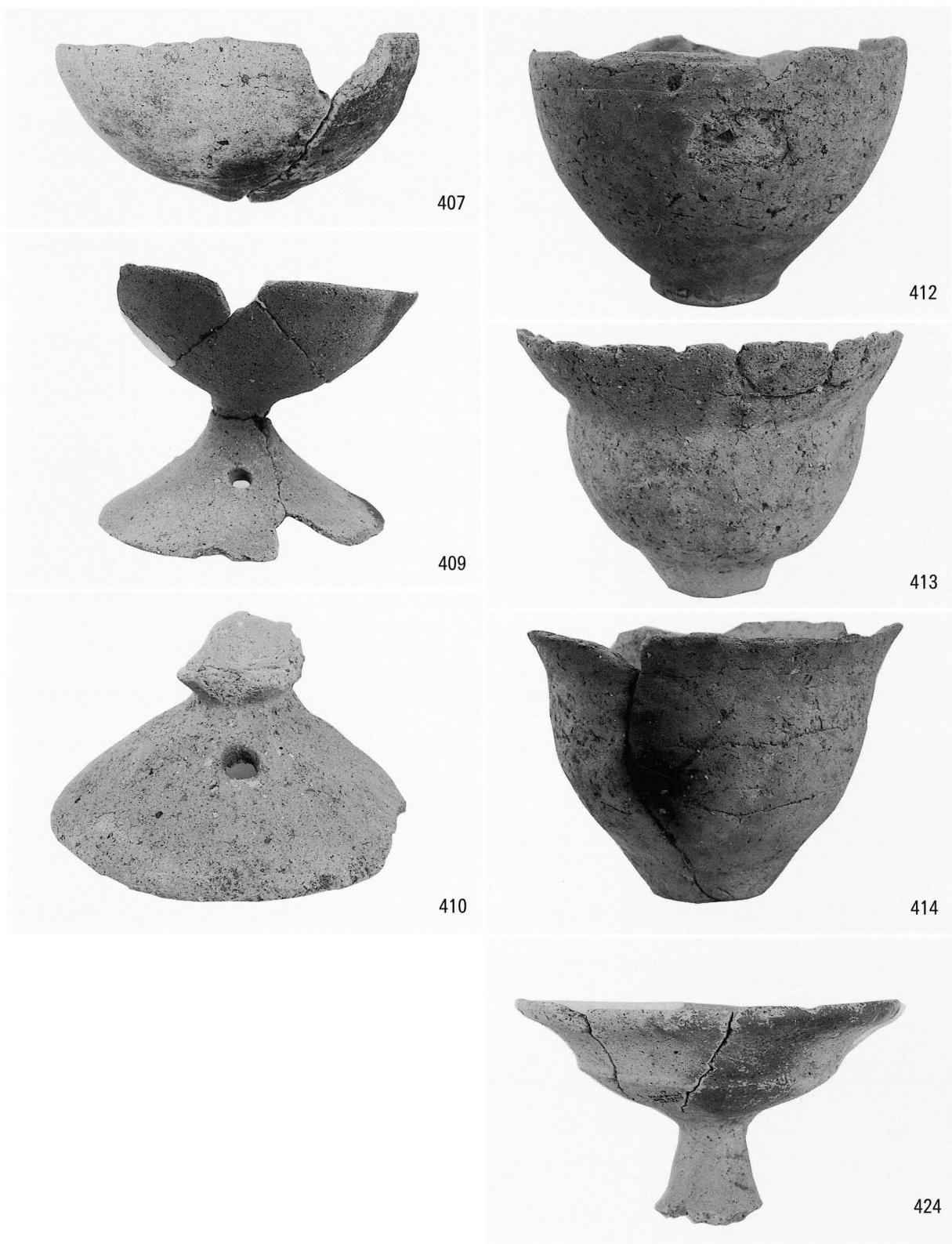


397

S D6・701(376・378～380・382・383・386・388・397)出土遺物



S D 6・701(389~393・402・403・406)出土遺物



S D6・701(407・409・410・412～414)、S D6・703(424)出土遺物

## 報 告 書 抄 錄

ふりがな	ざいだんほうじん やおしぶんかざいちょうさけんきゅうかいほうこく96
書名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告96
副書名	久宝寺遺跡第34次発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	財団法人 八尾市文化財調査研究会報告
シリーズ番号	96
編著者名	原田昌則・荒川和哉・清 斎
編集機関	財団法人 八尾市文化財調査研究会
所在地	〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58-2 TEL・FAX 072-994-4700
発行年月日	西暦2007年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ′ / ″	東経 ° / ′ / ″	調査期間	調査面積 (m <sup>2</sup> )	調査原因
		市町村	遺跡番号					
きゅうほううじいせき 久宝寺遺跡 (第34次調査)	おおさかふ やおし 大阪府 八尾市 きたかめい 北龜井3丁目	27212	23	34° 37' 05"	135° 35' 01"	20000718 ～ 20001125	約1501	工場建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
久宝寺遺跡 (第34次調査)	集落	弥生時代後期末～ 古墳時代前期前半 (布留式古相)	堅穴住居・井戸 土坑・溝・落ち込み	弥生土器・古式土師器	

要約	弥生時代末期から古墳時代前期前半(布留式古相)にかけて継続して営まれた居住域を確認。出土した古式土師器の中には、北陸系のものや中河内では類例が少ない西部瀬戸内系等の外来系土器が出土している。
----	---

財団法人八尾市文化財調査研究会報告96

久宝寺遺跡第34次発掘調査報告書

発行 平成19年3月

編集 財団法人 八尾市文化財調査研究会

〒581-0821 大阪府八尾市幸町4丁目58番地の2

TEL・FAX 072(994)-4700

印刷 服部印刷株式会社

〒578-0903 東大阪市今米1-16-1

TEL 072(961)-1634

表紙 レザック66<260kg>

本文 ニューエイジ<70kg>

図版 マットアート<110kg>

